き した (2) 木の下遺跡 (陸奥国分寺跡北東部)

目 次

1	はじめに	116
Π	調査の経過	116
Ш	調査の成果	118
IV	まとめ	124

調査要項

所 在 地:宮城県仙台市木の下三丁目4-1

遺跡記号: GB (宮城県遺跡地名表登載番号: 01019)

調査期間:昭和54年11月26日~12月2日

調査面積:約1,000m²

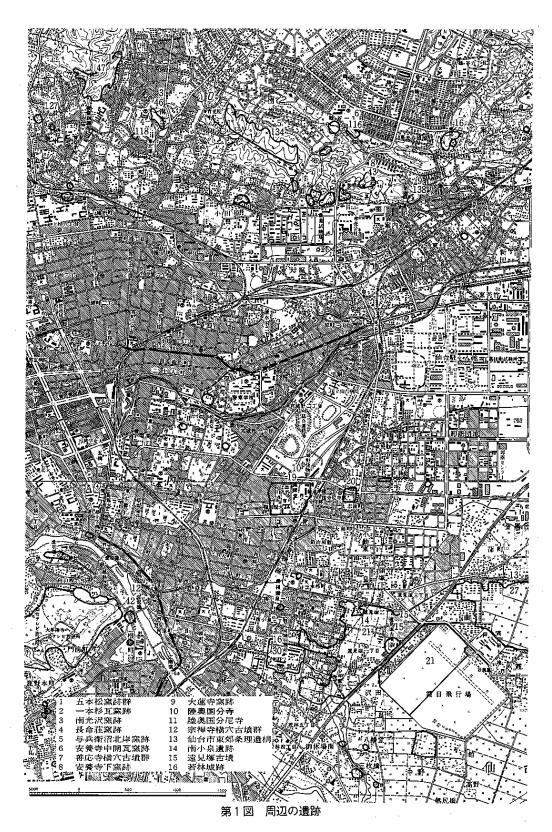
発掘面積:約400m²

調 查 員:宮城県教育庁文化財保護課

加藤道男、阿部博志

仙台市教育委員会社会教育課

結城慎一



115

I はじめに

陸奥国分寺跡は仙台市木ノ下にあり、仙台平野西北端の自然提防上に立地している。陸奥国 府がおかれた多賀城跡は北東9.5kmの位置に、国分尼寺跡は東方550mに、国分寺の瓦を生産し た遺跡である台ノ原古釜跡群は北方約3.5kmにある。

陸奥国分寺跡の発掘調査は陸奥国分寺発掘調査委員会によって昭和30年から34年までの5ヶ年にわたって行なわれ、その結果規模は約242m(唐尺で800尺)四方であり、周囲に築地をめぐらし、南北中軸線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊が置かれ、金堂と中門を廻廊で結び、金堂、講堂間の東西には鐘楼、経楼を、さらに金堂の東方には廻廊のめぐる七重塔を配置し、また東辺外郭線中央部には東門の存在が確認された(伊東信雄編:1961)。

そしてその年代は創建期が天平十三年(741年)~天平神護三年(767)の間にあり、その後 奈良時代未から平安時代の初めにかけて数度の大修理が行なわれたものとしている。

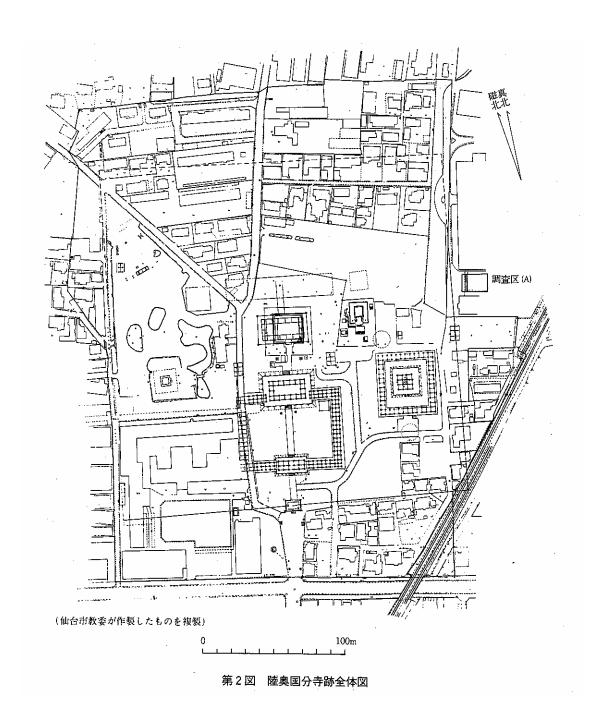
その後昭和42年には伊東信雄氏によって遺跡の北東に接する仙台鉄道教習所の工事に先立 つ調査が(伊東・工藤:1967)、さらに近年には聖和学園の増築に伴う調査、また史跡環境整 備に伴う調査が仙台市教委によって行なわれている。

今回東北鉄道学園(旧仙台鉄道教習所)の寄宿舎が建設されるにあたり、事前の確認調査を 実施することになった。調査対象地はすでにその一部が昭和42年に発掘調査が行なわれている。

Ⅱ 調査の経過

調査の対象となったのは東門の北約30mの地点(A)とさらにその北東2地点(B、C)計3地点である。

調査は昭和54年11月26日から12月2日までの間に実施した。なお、A地点はすでに仙台市教 委によって西半分の粗掘が行なわれていた。発掘はA地点の西半の精査と、B、C地点の粗掘 りとを並行した。その結果、B、C地点は攪乱が激しく遺構、遺物が発見されなかった。A地 点西半では溝と土壙状の落ち込みが検出されていたが、精査の結果その多くに現代の遺物が混 入しているところから学園建設等に関連した攪乱であり、溝1本(溝1)のみが遺構と考えられ た。また東半も西半と同様の状況とであろうと判断し、調査は行わなかった。



Ⅲ 調査の成果

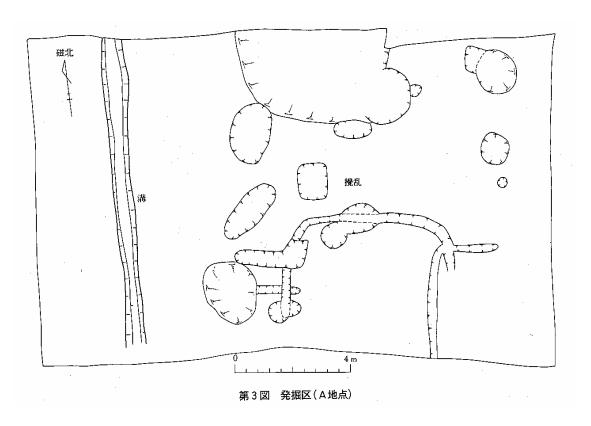
今回の調査の結果、遺構は溝1本、遺物は瓦、土師器、須恵器が発見された。

1. 遺構

溝 幅 $60\sim85$ cm、深さ $35\sim50$ cmで、断面形は逆台形を呈し、調査区内では長さ約10.6mまで検出された。その方向は磁北から約 1° 西に偏しているが、磁北の測定には平板用アリダードに付属した磁石を使用しているため相当の誤差が考えられる。溝内堆積土は2層に分かれ、自然堆積の状況を示す。遺物は瓦が上層からのみ出土しており、軒瓦はなく時期を限定し得ない。

この溝は、昭和42年の発掘で検出され「伽藍地東端の溝」として記されているものと同一であり、その性格については伽藍中軸線をはさんでほぼ対称となる西側の溝と同様に「伽藍地とその外側を区画する溝」と推定されている(伊東・工藤: 1967)。

この際、伽藍中軸線から西側掘立柱列の中心までの距離は396尺、その外側の溝までが411尺、また北東部溝までが424尺である。今回の調査でも北東部溝までの距離は略一致しているが、昭和55年8月に行なわれた仙台市教委による環境整備予備調査としての東門跡の発掘では東門基壇とその中央から南北にのびる築地と、その外側に平行する溝が検出された(仙台市教委: 1980)。



この溝は築地とともに東辺外郭を区画するとともに東門の雨落ち溝としても機能したものと考えられている。そして、東門基壇の中心と伽藍中軸線との距離は昭和36年の調査結果とほぼ一致するとしているから約396尺、東門基壇の中心から東側の溝の中心までの距離が約15尺と測れることから、伽藍中軸線から東側溝までは411尺となり、西側の溝までと一致する。この事実からすると、北東部の溝は、東門東側の溝よりさらに約13尺外側ということになり、両方の溝が同一の性格で、接続するにはどこかで曲折しなければならない。したがって北東部の溝は、曲折して東門東側の溝と接続するものか、または異る溝の可能性もある。今回はそのいずれかの性格を有するものであるかを検討する材料に乏しく、今後の調査検討に期待する。

2. 出土遺物

瓦、土師器、須恵器、赤焼土器が出土している。溝1から出土したものは丸瓦、平瓦片少量 のみで他はすべて攪乱層から出土している。ここでは図示したものを中心に述べる。他の破片 については集計表を作成した。

瓦

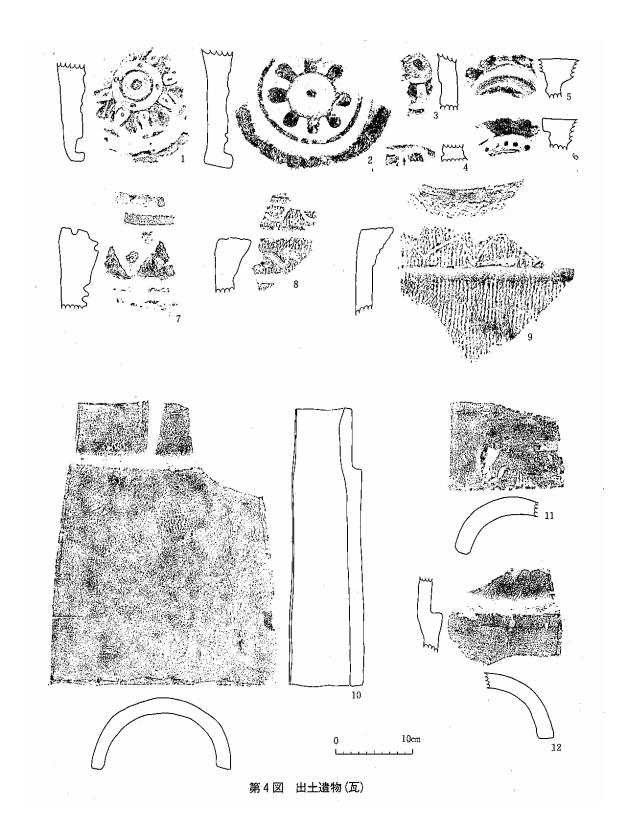
軒丸瓦-1は宝相花文軒丸瓦である。径は堆定で19cm、内区は中央に大きな蓬子が1個あり、 それを一条の隆線で囲み、その外側に4個の珠文を配する。さらにそのまわりに宝相花文を8個ならべている。外区には推定8個の珠文を有し、周縁は素文である。

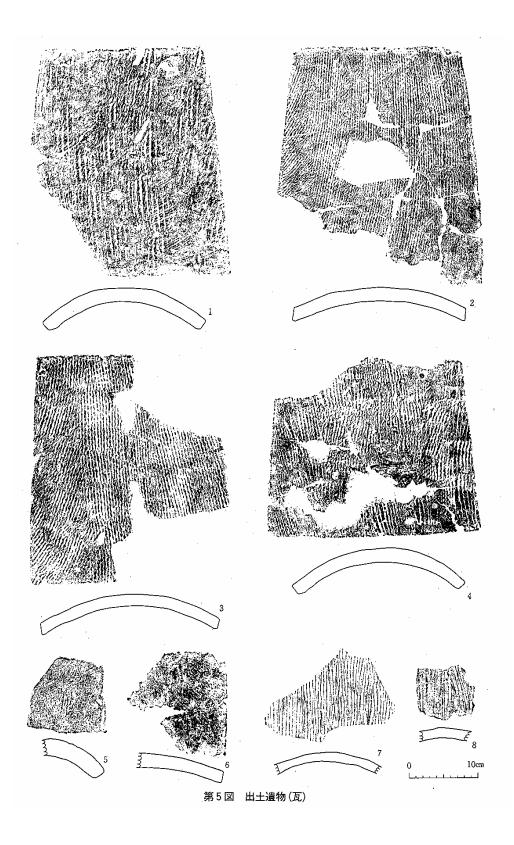
2は歯車文軒丸瓦である。径は推定で20cm、中央に大きな蓮子が1個あり、その外側に8個の 舌状の文様が歯車状に並ぶ。そのまわりを隆線がめぐる。3、4は小片であるが3は2と、4は1と 同様である。5、6は巴文をもつ軒丸瓦である。5は巴文のみが、6は巴文の外側に珠文が配され ている。

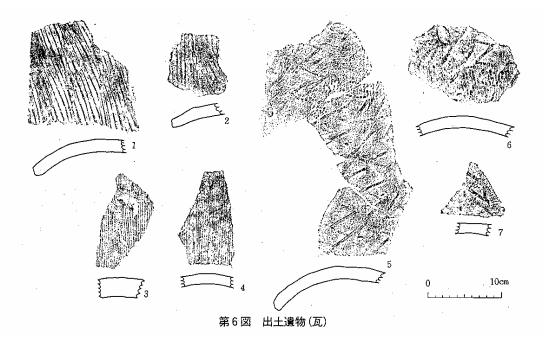
軒平瓦-7は重弧文軒平瓦である。瓦当面に二重の太い沈線を引き、顎に連続山形文とその下を画する二条の沈線がある。8、9は篦描文軒丸瓦である。8は瓦当面と顎に珠文が、9は瓦当面に格子目文、顎に波文が描かれている。8、9とも瓦当面、顎に縄叩き目がみられる。

丸瓦-10~12は凸面の一部に縄叩き目を残してすり消されている。凹面には布目がみられる。 10、12は玉縁を有する。なお、図示していない破片については表に示したが、そのうち、凸面 すり消、凹面布目のものは小片のため縄叩き目の残らない部分のものとも考えられる。また、 上端部分の形態が判明したものは、すべて玉縁を有するものであった。

平瓦-第5図1~4は凸面縄叩き目、凹面布目のものである。5、6は凸面の縄叩き目が一部を残してすり消されている。凹面は布目である。7、8、第6図1~4は凸面平行叩き目、凹面布目のものである。5~7は凸面に格子叩き目がみられ、さらにその前段階の布目、縄叩き目が観察される。布目と縄叩き目の前後関係は判別できない







瓦の年代

軒瓦は陸奥国分寺の発掘調査報告での分類に当てはめると1・4は宝相花文鐙瓦第一類に、2・3は歯車文鐙瓦、7は重弧文宇瓦第1類に該当し、その年代は前二者が平安時代初期後者が創建期されている。宝相花文鐙瓦についてはその後、貞観11年(869)5月の陸奥国大地震による被害を修復するために製作されたものとする見解(工藤:1965)が示されている。8・9は篦描文宇瓦として一括されているものに類似しており、補修用でおそらく平安時代に作られたものと考えられている。

なお、巴文のつく軒丸瓦は薬師堂の瓦に例がある。このほかの瓦は時代を限定できない。

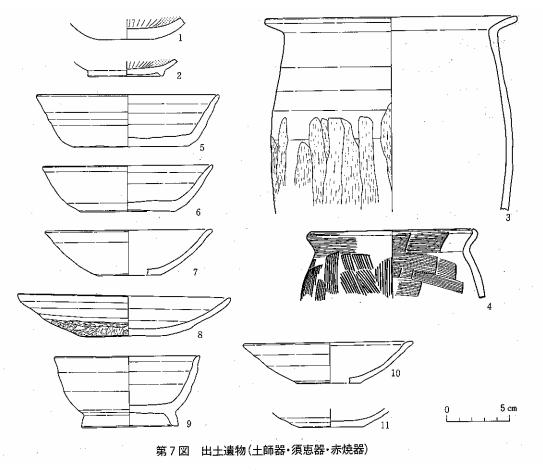
土師器 (第7図1~4)

坏(1) 底部は回転糸切り技法で切り離され、外面に再調整はみられない。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

高台付坏(2) 底部は糸切り技法で切り離され、外面に再調整はみられない。低い高台がつく。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

甕(3・4) 3は製作にロクロを使用している。口縁部は強く外傾し、体部はわずかにふくらむ。内外面ともロクロ調整されているが、外面体部下半にヘラケズリが加えられている。4はロクロを使用していない。口縁部は外傾して端部が内側に折れ曲がる。体部はふくらみをもつ。外面口縁部に横ナデ、体部に刷毛目、内面にヘラナデが施されている。

これらの土師器は、坏・高台付坏・甕3が製作にロクロを使用していることから表杉ノ入式



(平安時代) に属するものと考えられる。甕4は時期を限定できない。

須恵器(第7図5~9)

坏(5~9) 5.6は底部がヘラ切り技法で切り離されている。5は再調整がなく、6は底部に 手持ヘラケズリが加えられている。底部が大きく、体・口縁部は直線的に外傾する。

7は底部が回転糸切り技法で切り離されている。再調整はみられない。底部は小さく、体・口縁部はわずかにふくらみをもって外傾し、端部で外反気味となる。8は再調整のため底部の切り離し技法が不明である。口径が大きく、低い皿状を呈する。体部下半から底部にかけて手持ヘラケズリが加えられ、そのため体部と底部の境が不明瞭となっている。

高台付坏(9) 底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみられない。体下部が丸味をもち、その上はふくらみをもって立ち上がり、口縁端部で外反気味となる。高台はわずかに開く。

これら須恵器の年代は坏5・6が土師器の国分寺下層式・表杉ノ入式のいずれにも共伴する例があり、また坏7、高台付坏は表杉ノ入式に共伴する例が多い。坏8は類例に乏しく時期を

限定できない。

赤焼土器 (第7図10.11)

10は浅く、底部が小さい。口縁部は外反気味で、体部はわずかにふくらみをもつ。11は体下部から底部の破片である。いずれも底部は回転糸切り技法で切り離され、再調整はみられない。 赤焼土器は、表杉ノ入式の土師器と共伴するものが多く、同時期に属すると考えられる。

IV ま と め

今回の調査では遺構として溝が1本と瓦・土師器・須恵器等の遺物が出土した。

調査地点は新しい時代の攪乱が遺構の確認される面にまで及んでおり、そのため昭和42年に行なわれた同地点の調査結果に付け加えられるべき発見はなかった。

ただ、溝の長さは前回より増し、それによって溝の方向が東辺外郭線の方向に沿うことが、より明らかとなった。この溝の性格については前回に推定されたように東辺を画するものである可能性とともに、他の性格であることも考えられる。

〈引用・参考文献〉

伊東信雄編(1961): 「陸奥国分寺跡発掘調査報告書」宮城県教育委員会

伊東信雄・工藤雅樹(1967):「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書-陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告-」宮城県

文化財調查報告書第14集

伊東信雄他(1970) : 「多賀城跡調査報告 I 多賀城廃寺跡」

宮城県多賀城跡調査研究所(1970):「多賀城跡-昭和44年度発掘調査概報-」

(1971):「多賀城跡―昭和45年度発掘調査概報―」

工藤雅樹 (1965) : 「陸奥国分寺出土の宝相華文鐙瓦の製作年代について」歴史考古№13

早坂春一、篠原信彦(1980) : 「史跡陸奥国分寺跡発掘調査報告」年報1昭和54年度仙台市文化財調査報

告書第23集

仙台市教育委員会(1980):陸奥国分寺跡現地説明会資料

瓦破片集計表

		潽	1	挽乱	層 一 括
凸 面	凹面	平瓦	丸瓦	平瓦	丸瓦
組叩き目	一布目	29		175	4
縄叩き目	ーすり消			20	
縄叩き目→すり消	一布目	2	16	40	110(16)
すり消	-布目	3		35	49(2)
すり消	ーすり消			7	3
平行叩き目	-布目	6		22	
縄叩き目・布目→格子	叩き目一布目	4			

丸瓦中 () 内は玉縁付

土師器

器形	部位	調 整	
		ロ ク ローミガキ・黒	11
1	口縁部	ロクローミガキーミガキ黒	5
		不明ミガキ・黒	1
		ロ ク ローミガキ・黒	23
坏	体 部	ケ ズ リーミガキ・黒	3
		不 明 ーミガキ・黒	5
1		回転系切 ーミガキ・黒	16
	底 部	手持ケズリーミガキ・黒	1
		不明 ーミガキ・黒	5
	口線部	0 0 0-0 0 0	1
	64. A1	ケ ズ リー不 明	1
鑁	体 部	不明 不明	3
	the All	木 葉 痕	1
	底部	不 明	2

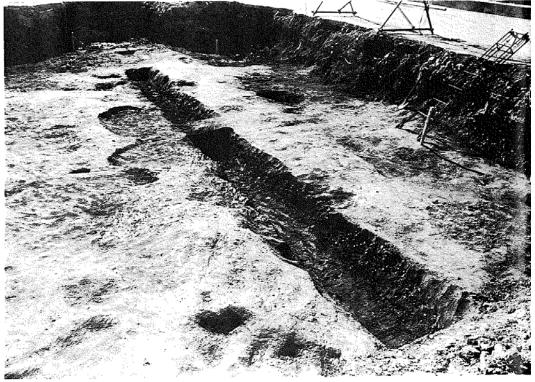
須恵器

部	位	調	整	点数
口縁部		ロクロー	ロクロ	4
体	部	ロクロー	ロクロ	2
		ヘラ切	ŋ	1
底	部	回転系	切	1
		回転ケ	ズリ	1 ·
口	計	ロクロー	ロクロ	3
頚至	新部	ロクロー	ロクロ	1
_		平行叩き目	一凹あて目	6
体	部	_ , -		5
'		ケズリ	ーナデ	1
	体。	口禄部 体 部 底 部 口縁部 頚頚部	口縁部 ロクロー 体部 ロクロー 本部 回転か 口縁部 ロクロー 頚頚部 ロクロー マ行叩き目 ロクロー 本部 ロクロー	口縁部 ロクローロクロ 体部 ログローロクロ 本ラ切り 回転分ズリ 口縁部 ロクローロクロ 類類部 ロクローロクロ 平行叩き目ー凹あて目

赤焼土器

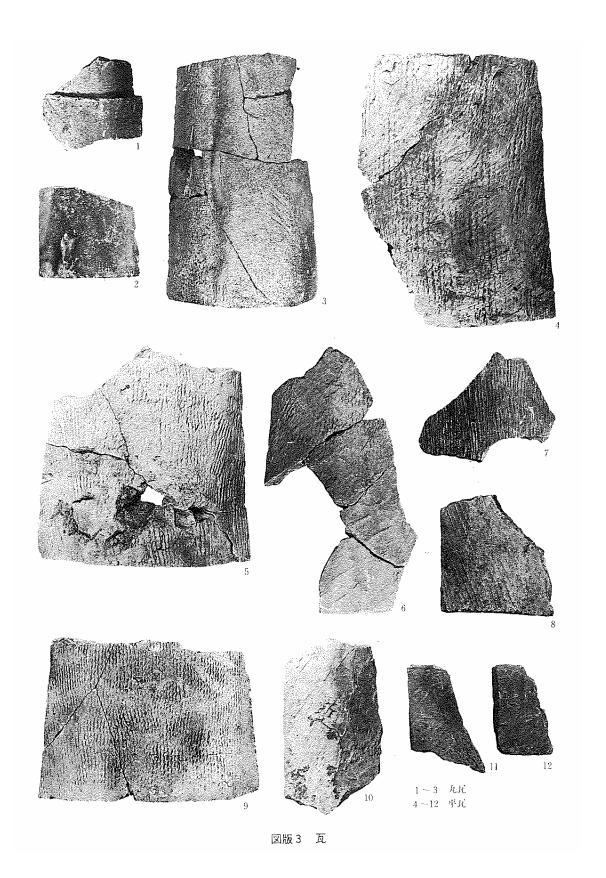
	口縁部	ロクローロクロ	28
坏	体 部	ロクローロクロ	21
	底 部	回転糸切	11





図版1 上A地点 下溝





(3) 観 音 沢 遺 跡

調査要項

所 在 地:栗原郡高清水町字観音沢

遺跡記号:CF(宮城県遺跡地名表登載番号:44019)

調査期間:第一次調査 昭和51年7月22日~12月17日

第二次調査 昭和52年10月26日~12月5日

第三次調査 昭和54年4月9日~5月31日

調査面積:約6,000㎡

発掘面積:約4,250㎡

調 査 員:宮城県教育庁文化財保護課

早坂春一、白鳥良一、佐々木安彦、加藤道男、丹羽 茂、高橋守克、黒川利司 佐藤好一、遊佐五郎、千葉宗久、真山 悟、阿部博志、一条孝夫、小川淳一、

中島 直

調査参加者:佐藤 戊(仙台市上杉山通小学校教諭)

(職名は当時) 鈴木惣之助 (多賀城市立多賀城小学校教諭)

加藤貞子(仙台市立西多賀小学校教諭)

土岐山武(仙台市立北六番丁小学校教諭)

後藤幸雄(気仙沼市立浦島小学校教諭)

森 貢喜(河南町立前谷地小学校教諭)

目 次

I. 遺跡の位置と環境	138
1. 位置と自然環境	
2. 周辺の遺跡	
Ⅲ. 調査の方法と経過	144
11. 例1日、マノノハム C 配地 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	
Ⅲ. 基本層位と遺構の分布	148
1. 基本層位	148
2. 遺構の分布	148
IV. 古代の遺構と遺物	
A. 発見された遺構と遺物	153
1. 竪穴住居跡	
2. その他の遺構出土遺物	
3. 堆積層出土および層位不明の遺物	
B. 考 察	
1. 出土土器の分類	
2. 出土土器の組み合せとその年代	
3. 出土土器の問題点	
4. 竪穴住居跡の年代と問題点	
V. 中世の遺構と遺物	193
A. 発見された遺構と遺物	193
1. 掘立柱建物跡	
2. 竪穴遺構	
3. 井戸跡	
4. 円形周溝	
5. 土壙	
6. 溝	
···· 7. ピット列	
8. ピット	
9. 堆積層出土および層位不明の遺物	278
B. 考 察	
1. 出土遺物	

	() 陶磁器	 288
	(2)腰刀	 297
	(3) 古銭	 297
	() 木製品	 298
	2. 道	構	 298
	() 掘立柱建物跡	 298
	(2) 竪穴遺構	 298
	(3) 井戸跡	 302
	(.) 土壙	 302
	(5) 溝	 303
	(s) 円形周溝	 303
	3.	世遺構の構成	 304
VI.	ま	と め	 306
1.	. 古代		 306
2	中出		306

挿図	目次		第35図	第4竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	201
第1図	周辺の遺跡・・・・・・ 140・	141	第36図	第4竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	202
第2図	調査区位置図 · · · · · · 145 •	146	第37図	第5竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	203
第3図	基本層位 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	149	第38図	第5竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	203
第4図	遺構配置図① · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	150	第39図	第6竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	204
第5図	遺構配置図② · · · · · · · 151 •	152	第40図	第7竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	205
第6図	第1号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	154	第41図	第8竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	206
第7図	第1号住居跡出土遺物 · · · · · · · · · ·	155	第42図	第8竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	206
第8図	第2号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	157	第43図	第9竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	207
第9図	第3号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	158	第44図	第9竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	207
第10図	第3号住居跡出土遺物 · · · · · · · · ·	159	第45図	第10竪穴遺構と出土遺物・・・・・・・	207
第11図	第4号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	161	第46図	第11・12竪穴遺構・・・・・・・・・・・・	208
第12図	第4号住居跡出土遺物 · · · · · · · · ·	162	第47図	第13竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	209
第13図	第5号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	163	第48図	第14竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	210
第14図	第6号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	165	第49図	第14竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	210
第15図	第7号住居跡出土遺物 · · · · · · · · · ·	166	第50図	第15竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	211
第16図	第8号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	168	第51図	第15竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	211
第17図	第8号住居跡出土遺物 · · · · · · · · · ·	169	第52図	第16竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	212
第18図	第9号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	171	第53図	第16竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	213
第19図	第10・11号住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	173	第54図	第17竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	214
第20図	第10号住居跡出土遺物 · · · · · · · ·	174	第55図	第18竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	214
第21図	第11号住居跡出土遺物 · · · · · · · · ·	175	第56図	第18竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	215
第22図	第12号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	176	第57図	第19竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	215
第23図	第12号住居跡出土遺物 · · · · · · · ·	177	第58図	第20竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	215
第24図	第13号住居跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	179	第59図	第21竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	216
第25図	その他の遺構出土遺物・・・・・・・・・	181	第60図	第21竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	216
第26図	堆積層および層位不明の出土遺物・	183	第61図	第22竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	217
第27図	第1~第4号建物跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	194	第62図	第23竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	217
第28図	第5~第7号建物跡 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	195	第63図	第23竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	218
第29図	第1竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	196	第64図	第24竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	219
第30図	第1竪穴遺構出土遺物 · · · · · · · · ·	197	第65図	第24竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	219
第31図	第2竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	198	第66図	第25竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	220
第32図	第2竪穴遺構出土遺物 · · · · · · · · ·	199	第67図	第25竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	221
第33図	第3竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	200	第68図	第26竪穴遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	222
第34図	第3竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・・	200	第69図	第26竪穴遺構出土遺物・・・・・・・・	223

第70図	第27竪穴遺構 · · · · · · · · · · · 2	224	第105図	52~65号土壙・・・・・・・260
第71図	第27竪穴遺構出土遺物・・・・・・・ 2	224	第106図	66~79号土壙・・・・・・・261
第72図	第28竪穴遺構 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	225	第107図	80~92号土壙・・・・・・・ 262
第73図	第28竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	225	第108図	93~102号土壙・・・・・・・ 263
第74図	第29竪穴遺構 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	226	第109図	103~110号土壙······264
第75図	第29竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	227	第110図	土壙の規模・・・・・・・ 266
第76図	第30竪穴遺構 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	227	第111図	土壙出土遺物・・・・・・・267
第77図	第31竪穴遺構 · · · · · · · · · 2	228	第112図	第6・7・12・13・16溝出土遺物・・・・・ 272
第78図	第31竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	229	第113図	第17溝出土遺物 〔 I 〕 · · · · · · · · 274
第79図	第32竪穴遺構 · · · · · · · · · · · 2	230	第114図	第17溝出土遺物〔Ⅲ〕 · · · · · · · 275
第80図	第32竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	230	第115図	第17溝出土遺物〔Ⅲ〕 · · · · · · · 276
第81図	第33竪穴遺構 · · · · · · · · · 2	231	第116図	第17溝出土遺物〔IV〕 · · · · · · · 277
第82図	第33竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	232	第117図	ピット出土遺物・・・・・・ 278
第83図	第34·35竪穴遺構 · · · · · · · · · 2	233	第118図	堆積層出土・層位不明の遺物 [I] 279
第84図	第34竪穴遺構側面図・・・・・・・2	234	第119図	堆積層出土・層位不明の遺物〔Ⅱ〕280
第85図	第34竪穴遺構建築材······ 237 • 2	238	第120図	堆積層出土・層位不明の遺物〔Ⅲ〕282
第86図	第34竪穴遺構建築材······ 239·2	240	第121図	堆積層出土・層位不明の遺物 (IV) 283
第87図	第34竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	241	第122図	堆積層出土・層位不明の遺物 (V) 284
第88図	第34竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	242	第123図	堆積層出土・層位不明の遺物 (VI) 285
第89図	第36竪穴遺構 · · · · · · · · 2	243	第124図	堆積土出土・層位不明の遺物 [VII] 287
第90図	第37竪穴遺構 · · · · · · · · · 2	244	第125図	竪穴遺構の規模・・・・・・ 300
第91図	第37竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	245		
第92図	第37竪穴遺構出土遺物・・・・・・ 2	245	表 目	次
第93図	第1・2・4井戸跡 ・・・・・・・・・・・ 2	247	第1表 说	遺跡地名表·····142 • 143
第94図	第6~9井戸跡 · · · · · · · 2	248	第2表 =	上師器坏の分類・・・・・・・185
第95図	第2井戸跡出土遺物〔Ⅰ〕・・・・・・2	250	第3表 🗵	図示土器集計表・・・・・・ 188
第96図	第2井戸跡出土遺物〔Ⅲ〕・・・・・・2	251	第4表 智	現音沢遺跡竪穴住居跡一覧表····· 192
第97図	第3井戸跡出土遺物・・・・・・・2	253	第5表 _	上壙一覧表・・・・・・・265
第98図	第6・7井戸跡出土遺物・・・・・・ 2	253	第6表 图	
第99図	第8井戸跡出土遺物・・・・・・・2	254	第7表 3	- 造の色調・・・・・・ 290
第100図	第9井戸跡出土遺物・・・・・・・2	255	第8表 指	習鉢の色調・・・・・・・292
第101図	円形周溝 · · · · · · 2			古銭一覧表・・・・・・297
第102図	1~19号土壙 · · · · · · · · · · 2	257		土師器・須恵器破片集計表:311・312
第103図	20~35号土壙 · · · · · · · · · · 2	050		中世陶器破片集計表······ 313 · 314
第104図	36~51号土壙 · · · · · · · · · · 2	259		

遺構番号修正表

竪穴遺構

(整理の過程で遺構名・番号を下記のように修正した)

(原図) (報告書)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)
12 溝 → 第1竪穴遺構	36 号土壙 → 第11 竪穴遺標	第19住居跡 →→ 第21 竪穴 遺 構	② 4 竪穴 → 第31 竪穴遺構
第10住居跡 ── 第2竪穴遺構	57 号土坡 ─→ 第12 竪穴遺構	第21住居跡 →→ 第22 竪穴 遺構	③8号土壙 ─→ 第32竪穴遺構
第15住居跡 ─→ 第3 竪穴遺構	35 号土坡 ── 第13竪穴遺構	第22住居跡 → 第23 竪 穴 遺 構	② 6 竪穴 → 第33竪穴遺構
第14住居跡 ── 第 4 竪穴遺構	59 号土據 ── 第14 竪穴遺構	井 戸 4 ─→ 第24竪穴遺構	② 8 竪穴 ── 第34竪穴遺構
82 号土坡 ── 第 5 竪穴遺構	-55 号土坡 ─→ 第15 竪穴遺構	第2住居跡 ── 第25竪穴遺構	′②35竪穴 → 第35竪穴遺構
第23住居跡 ── 第 6 竪穴遺構	62 号 土壌 → 第16 竪穴遺構	③第1住居跡 第 26 竪穴 遺 構	② 7 竪穴 → 第36竪穴遺構
1号土堠 → 第7竪穴遺構	5 号土城 ── 第17竪穴遺構	② 1 竪穴 → 第27 竪穴遺構	③ 2 号土坡 →→ 第 37 竪 六 遺 構
22 号土坡 ── 第 8 竪穴遺樽	2 号土坡 ─→ 第18竪穴遺構	② 2 竪穴 → 第28竪穴遺構	
21.号土壙→ 第9竪穴遺構	3 号土坡 ── 第19竪穴遺構	② 3 竪穴 → 第29竪穴遺構	
26 号土壤 →→ 第10 竪穴遺構	4 号土壙 ── 第20竪穴遺構	③9号土堠 → 第30竪穴遺構	

十 塘

(原 図)	(報告)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)
115号 土 壙	1 号 土 壙	20 号土坡 → 29 号 土 埃	41 号土坡 → 57 号 土 塘	14 号土坡 → 85 号 土 坡
83 号 土 堠 — > 3	2 号 土 壊	23 号土坡 → 30 号 土 塿	65 号 土 坡 → 58 号 土 坡	113号土坡 → 86 号 土 坡
84 号土坡 — ;	3 号土 坡	47 号土城 → 31 号 土 壊	42 号 土 壙 → 59 号 土 壙	18 号 土 壌 → 87 号 土 塘
85 号土壤 — -	4 号 土 壙	. 33 号土壙 → 32 号 土 壙		13号土壤 → 88 号 土 塘
86 号土坡	5	46 号土壤 →→ 33 号 土 壙	48 号 土 坡 → 61 号 土 塘	12 号土壤 → 89 号 土 壤
90 号 土 堠 (6 号 土 壤	32 号 土 擴 →→ 34 号 土 壙	112号土 接 → 62 号 土 壊	11 号 主 擴 → 90 号 土 擴
104号土城 →→	7 号 土 壤	27 号 土 據 → 35 号 土 壕	78号土壙 → 63 号 土 壉	19 号土坡 →→ 91 号 土 坡
87 号 土 壙 → 8		24 号 土 坡 → 36 号 土 坡	79 号土坡 → 64 号 土 坡	49 号土嶽 → 92 号 土 壙
git 46 9		28 号 土 坡 → 37 号 土 壌	43 号土壙 → 65 号 土 壙	72 号土坡 → 93 号 土 坡
pit 78→ 1		29 号土塘 → 38 号 土 壙	6 号土坡 → 66 号 土 壌	10号土壤 —→ 94 号 土 壤
pit 22 1	1 号 土 坡	52 号土坡 → 39 号 土 壌	63 号土坡→ 67 号 土 坡	pit 201 → 95 号 土 塘
pit 159 → 1	2 号 土 壤	53 号土坡 → 40 号 土 坡	54 a 号土據 68 号 土 壤	73号土壤 → 96 号 土 壤
110号土 坡 1	3 号 土 壊	50 号土城 → 41 号 土 坡	54 b 号土據 → 69 号 土 據	③14号土樓 → 97 号 土 壊
81 号土 壊 → 1	4 号 土 壤	30 号 土 擴 → 42 号 土 擴	98 号 土 據 → 70 号 土 壙	③12号土壙 → 98 号 土 塘
15 号土坡 → 1	5 号 土 壙	31 号土壤 → 43 号 土 壤	7 号土坡 → 71 号 土 坡	③11号土壤 → 99 号 土 壤
96 号土壤 → 1	6 号 土 壙	34 号 土 坡 → 44 号 土 坡	9 号土據 → 72 号 土 壙	③10号土坡 → 100 号 土 壊
pit $_{156} \longrightarrow 1$	7 号 土 壤 .	66 号土擴 →→ 45 号 土 壙	8 号土壤 → 73 号 土 壌	②12号土據 → 101 号 土 據
pit 155 -→ 1		67 号 土 坡 → 46 号 土 坡	pit 163 → 74 号 土 壙	③19号土城 → 102 号 土 城
16 号 土 壙→ 1	9 号 土 壌	68 号 土 堠 → 47 号 土 堠	pit 162→ 75 号 土 壙	②15号土壌 103 号 土 坡
17 号土 接 → 2	0 号 土 坡	40 月 土 坡 → 48 号 土 坡	16 号土壙 → 76 号 土 壌	②14号土壙 → 104 号 土 壙
111号土 壙 → 2	1 号 土 坡	100号土坡 → 49 号 土 坡	pit 160 → 77 号 土 堠	②16号土壤 105 号 土 壤
101号土 壤 2	2 号 土 壙	58 号 土 壙 → 50 号 土 壊	pit 164→ 78 号 土 壤	③16号土接 → 106 号 土 接
97 号土坡→ 2	3 号 土 壤	45 号土壙 → 51 号 土 壙	pit 165 → 79 另 土 塘	③15号土壙 → 107 号 土 壙
103号 土 埃 2	4 号 土 壌	37 号土壤 → 52 号 土 壊	77号土壤 → 80 号 土 壙	③13号土據 → 108 号 土 壙
102号土坡 →→ 2	5 号 土 壌	38 号 土 嬢→ 53 号 土 壌	75 号土坡 → 81 号 土 坡	③17号土装 → 109 号 土 壊
94 号 土 槭 → 2	6 号 土 壤	39 号土壤 → 54 号 土 壙	76 号土壤 → 82 号 土 壊	③1号土壙 -→ 110 号 土 坡
91 号 土 壙 →→ 2	7 号 土 埃	64 号土坡 →→ 55 号 土 坡	74 号土壙 → 83 号 土 壙	
92 号 土 坡 2		44 号土坡 → 56 号 土 坡	114号土坡 → 84 号 土 坡	

井 戸

(原	(IXI)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	ı
_ / /	= 1 -	→ 井 戸 1	井戸 5 →	井戸 3	井戸 6-	→ 井 戸 5	② 非戸 2 ―		③ 井戸 2 ―	→ 井 戸 9	
# 1	芦 2	→ 井 戸 2	# 百 3	##	の共世1 -	→ # = 6	③#日: —	. # = 0		I	

掘立柱建物跡

		-						
	(原 図)	(報告書)	(原 図)	(報告書)	(原 図)	(報告書)	(原 図)	(報告書)
1	号 掘	立→ 1 号掘立	3 号 揺 :	立 → 3 号掘立	② 1 号掘立~	→ 5 号掘'立	③ 1 号 握 立 -	→ 7 号 掘 立
2	号 掘	ウ → 2 号 揺 ウ	4 号 掘	立	(2) 2 号 掲 サ -	→6長根立	į	

竪穴住居跡

		·	· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
(原図) (報告書)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)	(原図) (報告書)
第8号住居跡 →→ 第1号住居跡	第20号住居跡→ 第5号住居跡	第17号住居跡 →→ 第9号住居跡	第1号住居跡 → 第13号住居跡
第5号住居跡 ── 第2号住居跡	第3号住居跡 →→ 第6号住居跡	第12号住居跡 ── 第10号住居跡	
第7号住居跡 ─→ 第3号住居跡	第30号住居跡 ── 第7号住居跡	第13号住居跡 → 第11号住居跡	i l
- 第6号住居跡→ 第4号住居跡	第11号住居跡 → 第8号住居跡	第16号住居跡 → 第12号住居跡	í

溝

(原	(図)	(報告書)	(原	図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原 図)	(報告書)	(原 図)	(報告書)
16	溝 —	→ 1 溝	1	溝 —	6 溝	21 🍂	→ 11 海	② 1 濞	→ 16 海	② 7 溝一	→ 21 海
5	–	→ 2 溝	4 .	8 🗯 —	7 溝	. ③ 5 溝		② 4 🗯	17 溝	② 8 溝:—	→ 22 海
2	海 —	→ 3 海	9 .	10 溝	8 🇯	② 5 🗯	→ 13 海	③ 1 溝	─ 18 ##		
3	溝 —	→ 4 溝	13	溝. —	9 海	② 3 🗯	→ 14 海	③ 2 溝	─→ 19 溝		
- 6	# -	→ 5 海	11	*	10 海	② 2 溝	→ 15 溝	② 6 🗯	→ 20 溝		

pit

(原図)	(報告書)	(原図)	(報告書)	(原図) (報告	(原図)		(原図)
pit 58 pit 56	\longrightarrow pit 1 \longrightarrow pit 2	pit 28 pit 87	→ pit 7 → pit 8	.② pit 2 → pit ③ pit 2 → pit	1 3 pit 34 1 4 * 36		pit 304 60 住
pit 99 pit 1	→ pit 3 → pit 4	pit 199 pit 221	→ pit 9 → pit 10	③ 滞4 土 擴 88 → ×	7 37 7 40	} → x – x	土 嬢 61 4 住 → × ×
pit 38 pit 29	— pit 5 — pit 6	pit 203 ② pit1	— pit 1 1 — pit 1 2	/ 93 pit 30	* 161 * 301		55 住 95 住

※②は第二次調査分、③は第三次調査分、他は第一次調査分である。

I. 遺跡の位置と環境

1. 位置と自然環境

観音沢遺跡は栗原郡の南端高清水町字観音沢に所在し、同町の中心部から直線距離にして南東へ約1.5kmの地点、国道4号線沿いに位置している。

宮城県北部の地形をみると、西側に奥羽山地帯、東側に北上山地帯があり、それらの間には 奥羽山地麓と中部低地帯が広がっている。奥羽山麓の裾部からは大起伏丘陵・小起伏丘陵が東 へ長く延び、次第に高度を減じながら、県北に広がる登米耕土の西辺に没する。この丘陵は築 館丘陵と呼ばれ、北側の磐井丘陵・南側の玉造丘陵にはさまれ、県北最大の丘陵となっている。

本遺跡の所在する高清水町の地形をみると、築館丘陵は本町付近では高度を感じながら低平で広い平坦面をもつなだらかな丘陵を形成し、同町のほぼ中央を西から東へ貫流する小山田川とその支流である善光寺川及び透川などの河川や沢によって複雑に開析され、いくつかの樹枝状の地形を形成している。このような丘陵は善光寺川・小山田川・透川を境にして、北部・西部・南部の3つの丘陵地帯に大別される。北部の丘陵地帯は善光寺川の北岸に接し、築館町蟹沢から瀬峰町藤沢地区にかけてと一迫町南沢から高清水町東館・大寺方面・南東に延びる丘陵とがある。西部の丘陵地帯は小山田川の南岸に沿って古川市沼田地区から高清水町手取・勝負ヶ町へ延びている。南部の丘陵地帯は透川の南岸にあって、古川市宮沢地区から高清水町台町・瀬峰町四ツ壇へ延びている。さらに、これらの丘陵地帯を開析した河川の流域には扇状地性低地が発達している。

観音沢遺跡は高清水町の南に位置しており、築館丘陵が枝分かれした標高40~20mほどのなだらかな起伏をもつ南部丘陵地帯にある。本遺跡はその中でも標高約20m前後のやや東側に張り出す丘陵の東端部に位置し、その丘陵の平坦面と南向き斜面、さらにその南側の沢地に立地している。

東北新幹線の路線は本遺跡の中央を南北に通っている。

遺跡の現状は畑地・水田で、広い範囲にわたり土師器、中世陶器などが散布している。

2. 周辺の遺跡

現在、高清水町内には36ヶ所の遺跡が確認されている(宮城県教委:1979)。ほとんどの遺跡は扇状地性低地をのぞれなだらかな丘陵上に立地している。

町内では、旧石器時代の遺跡はまだ確認されていない。以下、時代別に見ると次のような遺跡が知られている。

縄文時代の遺跡としては、本遺跡の北東約1.5kmに大寺遺跡があり、昭和30年の東北大学の発掘調査によって沈線文・貝殻腹縁文が施文された早期の尖底土器が多数発見された。 (伊東:1957)

この他に、縄文時代の遺跡としては西手取遺跡(早・晩期)、萩田遺跡(晩期)などがある。 弥生時代の遺跡としては、弥生時代特有の石器である蛤刀石斧が発見された萩田遺跡や、ア メリカ式石鏃が出土した大寺遺跡などがある。

しかし、縄文・弥生時代の遺跡でその性格が明らかにされたものは少ない。

古墳時代の遺跡としては、本遺跡から北約1kmに東館遺跡があり、昭和51年の調査によって 古墳時代前期の方形周溝墓1基・南小泉式期の竪穴住居跡が1軒発見され、集落跡と考えられ ている(加藤:1980)。さらに、大寺・筒ノ池遺跡は古墳時代中期の遺跡である。高塚古墳は まだ発見されていない。

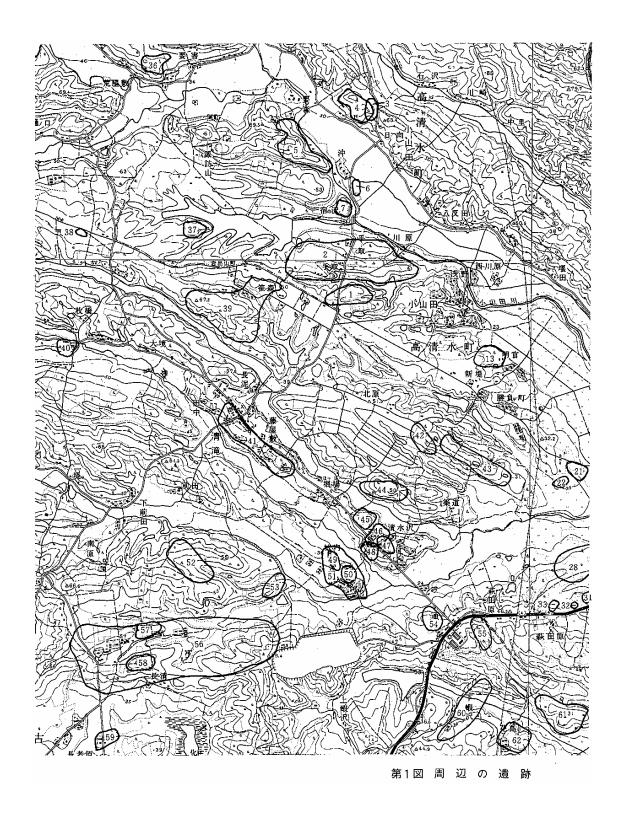
次の奈良・平安時代になると遺跡数は増加する。観音沢遺跡をはじめ北約2kmにある五輪C 遺跡、北面約3kmにある手取・西手取遺跡、北東約1.7kmにある下折木遺跡からはそれぞれ竪穴 住居跡が検出され、集落跡と考えられている。この他、奈良・平安時代の遺跡には松ノ木沢遺 跡・下田遺跡などの包含地とされている遺跡があり、集落跡がかなり含まれている可能性もあ る。

中・近世以降には奥州街道が町の中央を南北に通ることが知られ、その周辺には本遺跡から 北西約2kmに善光寺、北約3kmに極楽寺印出土の折木山遺跡、南東約1kmに覚満寺があり、城館 跡では北東には昭和49年に調査された新庄館跡、西に陣館跡がある。また、北西約3.5kmに昭 和48年に発掘調査されて、宗教遺跡とみられる塚や土壙が発見された宮ノ脇遺跡がある。

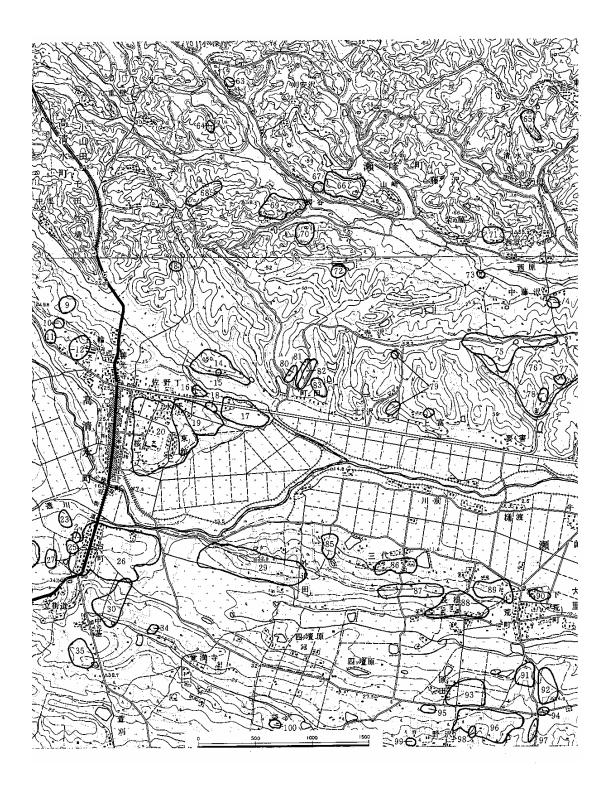
古碑としては、覚満寺の逆修供養碑などの中世遺跡が分布している。

さらには、近年、製産遺跡としての中世窯跡も近隣の築館町の熊狩窯跡や迫町の品ノ浦窯跡が発見されている。昭和52年には熊狩A窯跡が調査され、中世陶器の組成や供給先も明らかになった。しかし、当時の集落跡についてはまだ不明な点が多い。

観音沢遺跡の地域に於いてはこれらの遺跡が、歴史的環境を形づくっているといえる。



140



第1表 遺跡地名表①

高清水町 26 観音沢道跡 集落跡 調 文 4 4 0 1 9 1 四手取道跡 集落跡 縄文・平安 4 4 0 1 1 27 向野 A 遺跡 包含地 織文・平安 4 4 0 1 1 28 合町四道路 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 2 9 外沢田道跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 1 3 3 百 / 四道路 域館 中 世 4 4 0 3 5 30 如腹 頭 遊 路 一次良・平安 4 4 0 0 7 31 萩田 遊 宮合地 奈良・平安 4 4 0 0 7 31 萩田 遊 宮合地 森文・平安 4 4 0 0 7 31 萩田 遊 宮合地 森文・平安 4 4 0 0 7 31 萩田 遊 宮合地 森文・平安 4 4 0 0 7 31 萩田 遊 宮合地 瀬文・平安 4 4 0 0 7 32 松/木沢田遺跡 2 公舎地 瀬文・平安 4 4 0 0 7 32 松/木沢田遺跡 2 公舎地 瀬文・平安 4 4 0 0 7 32 松/木沢田遺跡 2 公舎地 縄文・平安 4 4 0 0 7 32 松/木沢田遺跡 2 公舎地 縄文・平安 4 4 0 0 7 33 松/木沢田遺跡 2 公舎地 縄文・平安 4 4 0 0 7 34 25 33 松/木沢田遺跡 2 公舎地 縄文・平安 4 4 0 2 7 39 44 11 11 五輪 区 図合地 奈良・平安 4 4 0 3 8 35 中 / 포 遺跡 集落跡 平安 4 4 0 1 8 4 4					275 I 24 AB		1200			
1 四手取避鮴 集落跡 縄文・平安 44011 27 向野 A 遺跡 包含地 縄文・平安 44013 27 向野 A 遺跡 包含地 森文・平安 44013 28 合町 四道跡 色念地 奈良・平安 44003 4 神 郎 郎 跡 城 郎 中 世 4403 5 30 排 蔵 函	番号	遺跡名	種 別	時 代	宮城県遺跡 地名表番号	番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡 地名表番号
2 手 取 避 節 維務跡 縄文・平安 4 4 0 1 1 28 合 町 西 遺 跡 包含地 奈 良 4 4 0 0 3 4 時 館 館 跡 城 館 中 世 4 4 0 3 6 3 0 即 成 前 資 2 6 2 2 9 外 沢田 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 5 5 運 雅 館 跡 城 館 中 世 4 4 0 3 7 3 1 聚 田 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 7 6 下 田 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 7 3 1 聚 田 遺 跡 包含地 楓文・来生 4 4 0 0 7 6 下 田 遺 跡 包含地 祭良・平安 4 4 0 3 7 3 2 松/木沢田遺跡 包含地 楓文・来生 4 4 0 2 8 7 宿 / 沢遺 跡 日含地 祭良・平安 4 4 0 3 7 3 2 松/木沢田遺跡 2 0 0 2 地 楓文・平安 4 4 0 2 8 9 地 山 遺 跡 空 2 2 4 4 0 2 7 3 2 松/木沢田遺跡 2 0 2 2 地 楓文・平安 4 4 0 2 8 9 地 山 遺 跡 空 2 2 4 4 0 3 8 3 5 中 / 포 遺 跡 集務跡 平安・企 2 4 4 0 1 8 2 2 1 1 1 1 1 五 輪 B 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 4 岩 山 町 3 5 0 2 2 地 奈良・平安 4 4 0 3 8 3 5 中 / 포 遺 跡 集務跡 平安・企 2 4 4 0 1 8 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	高清水町						観音沢遺跡	集落跡	繩 文	4 4 0 1 9
3 宮 / 脇 遺跡 包含地塚 奈良・光安 4 4 0 2 2 29 外 沢田 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 8 4 輝館館跡 城館所 中世 4 4 0 3 6 30 知 廠 所 股 資 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 7 5 運搬館 跡 城館 所 江 戸 4 4 0 3 7 31 萩田 遺跡 包含地 棚文・ ※生 4 4 0 0 7 31 萩田 遺跡 包含地 棚文・ ※生 4 4 0 0 2 8 6 下田 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 2 5 32 松/木沢田遺跡 包含地 棚文・ ※生 4 4 0 2 8 7 宿 / 沢 遺跡 寺院跡 章 4 4 0 0 6 34 第 書 跡 世域 棚文・ ※生 4 4 0 2 8 8 折 木 山 寺跡 寺院跡 章 4 4 0 0 8 35 中 / 室 遺跡 独交・ ※世 4 4 0 1 8 10 五輪 C 遺跡 会地 奈良・平安 4 4 0 3 8 35 中 / 室 遺跡 独交・ ※世 4 4 0 1 8 11 五輪 B 遺跡 図舎地 奈良・平安 4 4 0 0 3 36 真山 館跡 城館 中 世 3 5 0 85 12 五輪 遺跡 (A) 公舎地 奈良・平安 4 4 0 1 0 3 7億の 沢崎 跡 城館 中 世 3 5 0 85 <tr< td=""><td>1</td><td>西手取遺跡</td><td>集落跡</td><td>縄文・平安</td><td>4 4 0 1 1</td><td>27</td><td>向野A遺跡</td><td>包含地</td><td>縄文・平安</td><td>44029</td></tr<>	1	西手取遺跡	集落跡	縄文・平安	4 4 0 1 1	27	向野A遺跡	包含地	縄文・平安	44029
4 陣 館 館 跡 城 館 中 世 4 4 0 3 6 30 型 酸 図 波	2	手 取 遺 跡	集落跡	縄文・平安	44011	28	台町西遺跡	包含地	奈 良	4 4 0 1 3
□ ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●	3	宮ノ脇遺跡	包含地塚	奈良・平安 中世・近世	44022	29	外沢田遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 0 8
6 下田遊 節 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 5 32 松/木沢田遺跡 8 包含地 縄文・平安 4 4 0 2 7 3 8 折木山寺跡 号院跡 錄 倉 4 4 0 0 6 3 4 覚 満 寺 跡 寺院跡 中世・近世 4 4 0 2 3 8 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	4	陣 館 館 跡	城館	护 世	4 4 0 3 6	30	仰 返 り 地蔵前遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 0 5
7 宿ノ沢道跡 包含地 紫泉・平安 44025 33 松/木沢田遺跡A 包含地 楓文・平安 44027 8 折木山寺跡 寺院跡 鎌 倉 44006 34 覚 満 寺 跡 寺院跡 中世・近世 44023 9 柚 山 遺 跡 包含地 奈良・平安 44038 35 中ノ茎遺跡 集落跡 柳安・市世 44018 10 五輪 C 遺跡 包含地 奈良・平安 44033 36 真山館跡群 城 館 室 町 35058 12 五輪退跡(A) 包含地 积文・古墳 44010 37 宿の沢館跡 城 館 中 世 35085 13 明 宮 遺 跡 包含地 奈 良 44009 古 川 市 14 新 庄 館 跡 城 館 中 世 44002 38 清 水 側 遺跡 塚 館 中 世 27139 15 下折木遺跡 集落跡 平 安 44014 39 笹 森 遺 跡 包含地 楓 文 27028 16 下 佐 野 遺 跡 包含地 奈良・平安 44015 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 27102 17 大 寺 遺 跡 包含地 紫泉・平安 44015 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 27102 17 大 寺 遺 跡 包含地 紫泉・平安 44015 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 27102 18 文 の 心 池	5	運 難 館 跡	城館	江 戸	4 4 0 3 7	31	萩田遺跡	包含地	縄文・弥生	4 4 0 0 7
8 折木山寺跡 寺院跡 鎌 倉 4 4 0 0 6 34 覚 満 寺 跡 寺院跡 中世・近世 4 4 0 2 3 9 袖 山 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 4 岩 出 山 町 10 五輪 C 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 4 岩 出 山 町 11 五輪 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 3 36 真山 頭 跡 財 城 館 空 町 3 5 0 5 8 12 五輪 遺跡(A) 包含地 郷文・古墳 4 4 0 1 0 3 7 宿の 沢 頭 跡 城 館 中 世 3 5 0 8 5 13 明 宮 遺跡 城 館 中 世 4 4 0 0 2 3 8 清 水 側 遺跡 塚 第 2 2 7 1 3 9 15 下 折 木 遺跡 築落跡 平 安 4 4 0 1 4 39 笹 森 遺 跡 包含地 郷文・古墳 5 4 0 1 5 40 明 神 節 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 8 16 下 佐 野 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 節 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 8 16 下 佐 野 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 節 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 8 16 下 佐 野 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 6 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 2 7 0 6 6 18 業 60 心 池 沙 会地 古 垻・奈良 4 4 0 1 6 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 2 7 0 7 7 2 0 高清 水 城 跡 中 世 4 4 0 2 4 4 北 山 囲 遺跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 12 経 ケ 崎 遺跡 五輪塔 平 安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 3 透 川 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 3 透 川 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 3 透 川 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 3 透 川 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 4 6 6 5 5 5 5 6 6 2 5 5 6 5 6 2 5 6 5 6 2 5 7 7 7 8 2 6 6 6 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 8 3 7 7 7 7	6	下田遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 3 5	32	松ノ木沢田遺跡 B	包含地	縄 文	44028
9 他 山 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 8 35 中 / 室 遺 跡 樂落跡 準安・ 帝也 4 4 0 1 8 10 五輪 C 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 4 岩 出 山 町 11 五輪 B 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 3 36 真山 館 跡 城 館 中 世 3 5 0 8 5 12 五輪 遺跡(A) 包含地 無文・古墳 4 4 0 1 0 37 宿の沢 館 跡 城 館 中 世 3 5 0 8 5 13 明 宮 遺 跡 切 館 中 世 4 4 0 0 2 38 清水側 遺 跡 塚 2 7 1 3 9 15 下 折 木 遺 跡 経窓跡 平 安 4 4 0 1 4 39 笹 森 遺 跡 包含地 統 館 中 世 2 7 1 0 2 8 16 下 佐 野 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 17 大 寺 遺 跡 包含地 高泉・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 17 大 寺 遺 跡 包含地 高泉・平安 4 4 0 1 6 42 外 沢 窯 跡 窓 跡 平 安 2 7 0 8 2 19 東 館 遺 跡 城 館 中 世 4 4 0 2 4 4 北 山 田 遺 跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 12 経 ケ 崎 遺 跡 短 倉 地 郷 文・ 平安 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	7	宿ノ沢遺跡	包含地	縄 文 奈良・平安	4 4 0 2 5	33	松ノ木沢田遺跡A	包含地	縄文・平安	4 4 0 2 7
五輪 C 遺跡 包含地 奈良・平安 44034 岩 出 山 町 出 面	8	折木山寺跡	寺院跡	鎌倉	44006	34	覚 満 寺 跡	寺院跡	中世・近世	4 4 0 2 3
11 五輪 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 3 36 真山館跡群 城館 室 町 3 5 0 5 8 12 五輪遺跡(A) 包含地 縄文・古墳 4 4 0 1 0 37 宿の沢館跡 城館 中 世 3 5 0 8 5 13 明 宮 遺跡 包含地 奈 良 4 4 0 0 9 古川市 14 新(井田館) 城館 中 世 4 4 0 0 2 38 清水側遺跡 塚 27139 15 下折木遺跡 集落跡 平 安 4 4 0 1 4 39 笹 森 遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 2 8 16 下佐野遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 館 跡 城館 中 世 2 7 1 0 2 17 大 寺 遺跡 包含地 海泉・平安 4 4 0 0 1 41 藤屋敷遺跡 集落跡 平 安 2 7 0 6 6 18 堂(の) 池遺跡 包含地 古墳・奈良 4 4 0 0 1 41 藤屋敷遺跡 集落跡 平 安 2 7 0 8 2 19 東 館 遺跡 集落跡 奈 良 4 4 0 1 7 43 生深町遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 7 20 (御 要 書) 城館 中 世 4 4 0 2 4 4 北山田遺跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 21 経ケ崎遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城館 正 世 2 7 0 8 3 22 上経ケ崎遺跡 日含地 奈良・平安 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城館 中 世 2 7 1 3 0 23 透川 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 4 46 市ケ坂館跡 城館 中 世 2 7 1 3 0 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 0 3 48 据 崎 遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 8	. 9	袖山遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 3 8	35	中ノ茎遺跡	集落跡	縄文・奈良 平安・中世	44018
12 五輪遊跡(A) 包含地 縄文・古墳 44010 37 宿の沢館跡 城館 中 世 35085 13 明 宮 遺跡 包含地 奈 良 44009 古 川 市 一	10	五輪C遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 3 4	岩出山町				
13 明 宮 遺 跡 包含地 奈 良 4 4 0 0 9 古 川 市 14 新 庄 館 部 城 館 中 世 4 4 0 0 2 38 清 水 側 遺 跡 塚 2 7 1 3 9 15 下 折 木 遺 跡 集落跡 平 安 4 4 0 1 4 39 笹 森 遺 跡 包含地 楓 文 2 7 0 2 8 16 下 佐 野 遺 跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 1 5 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 0 2 8 17 大 寺 遺 跡 包含地 燕良・平安 4 4 0 0 1 41 藤 屋 敷 遺 跡 集落跡 平 安 2 7 0 6 6 18 堂 の 池 池 包含地 古墳・奈良 4 4 0 1 6 42 外 升 業 跡 窓 跡 平 安 2 7 0 8 2 19 東 館 遺 跡 集落跡 奈良 4 4 0 1 7 43 生 深 町 遺 跡 西 地 文 2 7 0 7 7 20 高 清 水 城 跡 城 館 中 世 4 4 0 2 4 44 北 山 囲 遺 跡 古 墳 2 7 0 7 6 21 経 ケ 崎 遺 跡 包含地 郷文・ 古 坂 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城 館 近 世 2 7 0 8 3 22 上経 ケ 崎 遺 跡 包含地 平 安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂 館 跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 23 透 川 遺 跡 包含地 奈良・ 平安 4 4 0 3 2 47 梅 安 遺 跡 包含地 五 代 2 7 0 7 9 24 向 野 B 遺 跡 包含地 奈良・ 平安 4 4 0 3 1 48 掘 崎 遺 跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	11	五輪B遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 3 3	36	真山館跡群	城館	室 町	35058
14 新 正 館 跡 城 館 中 世 4 4 0 0 2 38 清 水 側 遺跡 塚 2 7 1 3 9 15 下 折 木 遺跡 集落跡 平 安 4 4 0 1 4 39 笹 森 遺跡 包含地 純 文 2 7 0 2 8	12	五輪遺跡(A)	包含地	縄文・古墳	44010	37	宿の沢館跡	城館	中中	35085
15 下折木遺跡 集落跡 平 安 44014 39 笹 森 遺跡 包含地 郷 文 27028 16 下佐野遺跡 包含地 奈良・平安 44015 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 27102 17 大 寺 遺 跡 包含地 郷文・立墳 奈良・平安 44001 41 藤屋敷遺跡 集落跡 平 安 27066 18 堂の 池 遺跡 包含地 古墳・奈良 44016 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 27082 19 東 館 遺 跡 集落跡 奈 良 44017 43 生深町遺跡 包含地 縄 文 27077 20 高清水城跡 城 館 中 世 44024 44 北山田遺跡 古 墳 古 墳 27076 21 経ケ崎遺跡 包含地 郷文・中安 44003 45 新 寺 館 跡 城 館 正 世 27083 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 44004 46 市ケ 坂館跡 城 館 中 世 27130 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 44032 47 梅 女 遺 跡 包含地 縄 文 27078 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 44031 48 掘 崎 遺 跡 包含地 古 代 27079	13	明宮遺跡	包含地	奈 良	4 4 0 0 9	12	5 川 市。		,	
16 下佐野遺跡 包含地 奈良・平安 44015 40 明 神 館 跡 城 館 中 世 27102 17 大 寺 遺 跡 包含地 探及・ 立墳 44001 41 藤屋敷遺跡 集落跡 平 安 27066 18 堂の 池 遺跡 包含地 古墳・奈良 44016 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 27082 19 東 館 遺 跡 集落跡 奈良 44017 43 生深町遺跡 包含地 英 27077 20 高清水域跡 城 館 中 世 44024 44 北山田遺跡 古 墳 古 墳 27076 21 経ケ崎遺跡 包含地 探及・ 立墳 44003 45 新 寺 館 跡 城 館 正 世 27083 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 44004 46 市ケ坂館跡 城 館 中 世 27130 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 44032 47 梅 安 遺 跡 包含地 縄 文 27078 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 44031 48 堀 崎 遺 跡 包含地 古 代 27079	14	新 庄 館 跡 (新 庄 館)	城館	中,世	44002	38	清水側遺跡	塚		27139
17 大 寺 遺跡 包含地 縄文・ 古墳 4 4 0 0 1 41 藤屋敷遺跡 集落跡 平 安 2 7 0 6 6 18 堂の池遺跡 包含地 古墳・奈良 4 4 0 1 6 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 2 7 0 8 2 19 東 館 遺跡 集落跡 奈 良 4 4 0 1 7 43 生深町遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 7 20 高清水域跡 域 館 中 世 4 4 0 2 4 44 北山田遺跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 21 経ケ崎遺跡 包含地 縄文・ 古墳 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 域 館 近 世 2 7 0 8 3 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 4 4 0 0 4 46 市ケ 坂館跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 4 4 0 3 2 47 梅 安 遺 跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 8 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 1 48 堀 崎 遺 跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	15	下折木遺跡	集落跡	辛 安	44014	39	笹森遺跡	包含地	組 文	27028
18 堂の池遺跡 包含地 古墳・奈良 4 4 0 1 6 42 外 沢 窯 跡 窯 跡 平 安 2 7 0 8 2 19 東 館 遺 跡 集落跡 奈 良 4 4 0 1 7 43 生深町遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 7 20 高清水城跡 城 館 中 世 4 4 0 2 4 44 北山田遺跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 21 経ケ崎遺跡 包含地 奈良・草安 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城 館 中 世 2 7 0 8 3 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 4 4 0 0 4 46 市 ケ 坂館跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 4 4 0 3 2 47 梅 安 遺 跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 9 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 1 48 堀 崎 遺 跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	16	下佐野遺跡	包含地	奈良・平安	44015	40	明神館跡	城館	中世	27102
19 東 館 遺 跡 集落跡 奈 良 4 4 0 1 7 43 生深町遺跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 7 20 高清水域跡 域 館 中 世 4 4 0 2 4 44 北山田遺跡 古 墳 古 墳 2 7 0 7 6 21 経ケ崎遺跡 包含地 森良・草安 4 4 0 0 3 45 新 寺 館 跡 城 館 近 世 2 7 0 8 3 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 4 4 0 0 4 46 市ケ坂館跡 城 館 中 世 2 7 1 3 0 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 4 4 0 3 2 47 梅 安 遺 跡 包含地 縄 文 2 7 0 7 8 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 1 48 堀 崎 遺 跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	17	大 寺 遺 跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	4 4 0 0 1	41	藤屋敷遺跡	集落跡	平 安	27066
20 高清水城跡 域館中 世 44024 44 北山田遺跡 古墳 古 墳 27076 21 経ケ崎遺跡 包含地 奈良・立墳 24003 45 新 寺館跡 城館 近 世 27083 22 上経ケ崎遺跡 五輪塔 平 安 44004 46 市ケ坂館跡 城館中 世 27130 23 透川遺跡 包含地 平 安 44032 47 梅 安 遺跡 包含地 郷 文 270.78 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 44031 48 堀 崎 遺跡 包含地 古 代 27079	18	堂の池遺跡(筒の池)	包含地	古墳・奈良	44016	42	外 沢 窯 跡	蘇	平 安	27082
21 経ケ崎遺跡 包含地 郷文・古墳 奈良・平安 44003 45 新 寺 館 跡 城 館 近 世 27083 22 上経ケ崎遺跡 西輪塔 平 安 44004 46 市ケ坂館跡 城 館 中 世 27130 23 透 川 遺 跡 包含地 平 安 44032 47 梅 安 遺 跡 包含地 郷 文 27078 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 44031 48 堀 崎 遺 跡 包含地 古 代 27079	19	東館遺跡	集落跡	奈 良	44017	43	生深盯遺跡	包含地	縄 文	27077
22 上経ケ崎遺跡 石輪塔 平 安 4 4 0 0 4 46 市ケ坂館跡 城館 中 世 2 7 1 3 0 23 透川 遺跡 包含地 平 安 4 4 0 3 2 47 梅 安 遺跡 包含地 概 文 2 7 0 7 8 24 向野 B 遺跡 包含地 奈良・平安 4 4 0 3 1 48 堀 崎 遺跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	20	高滑水城跡 (御要害)	城館	井 世	4 4 0 2 4	44	北山囲遺跡	古 墳	古 墳	27076
22 (満 海 壇) 五輪谷 平 女 4 4 0 0 4 40 川 9 秋 時	21	経ヶ崎遺跡	包含地	縄文・古墳 奈良・平安	4 4 0 0 3	45	新 寺 館 跡	城館	近 世	27083
24 向野B遺跡 包含地 奈良·平安 4 4 0 3 1 48 掘 崎 遺 跡 包含地 古 代 2 7 0 7 9	22	上経ヶ崎遺跡 (満 海 壇)	五輪塔	平 安	4 4 0 0 4	46	市ケ坂館跡	城 館	中 世	27130
	23	透川遺跡	包含地	平 安	4 4 0 3 2	47	梅女遺跡	包含地	縄 文	2 7 0.7 8
25 松/大沢田港路C 匀合地 亚 安 44030 49 進の 単谱 牀 匀合地 杏良・亚安 27081	24	向野B遺跡	包含地	奈良・平安	4 4 0 3 1	48	掘 崎 遺 跡	包含地	古 代	27079
25 147 小小山區剛也 自己地 丁 女 1 4 0 0 0 1 1 7 7 7 7 2 1 0 0 1	25	松ノ木沢田遺跡C	包含地	平 安	44030	49	鴻の巣遺跡	包含地	奈良・平安	27081

遺跡地名表 ②

退 娜地名衣 ②											
番号	遺跡名	種別	時代	宮城県遺跡 地名表番号	番号	遺跡名	種別	時 代	宮城県遺跡 地名表番号		
50	城内窯跡	紅 窯	奈良・平安	27088	75	岩欠遺跡	集落跡	縄文・古墳 奈良・平安	46017		
51	鴻ノ巣館跡	城館	近 世	27101	76	上富丘陵東部遺跡群			46065		
52	畑谷地古墳群	古 墳	古 墳	27075	77	坂ノ下浦遺跡	集落跡	縄文・平安	46034		
53	十八引沢遺跡	包含地	縄文・奈良 平 安	27063	78	坂ノ下浦Ⅱ遺跡	散布地	奈良・平安	46042		
54	下沢田遺跡	包含地	奈 良	27024	79	北ノ沢遺跡		奈良・平安	46063		
55	一ノ坪遺跡	包含地	奈良・平安	27080	80	薬沢東 II 遺跡	散布地	平 安	46046		
56	長者原遺跡	包含地	縄 文	2 7 0 0 5 2 7 0 2 5	81	薬沢東Ⅲ遺跡			46047		
57	北原遺跡	包含地	奈 良	27023	82	薬沢東Ⅰ遺跡	散布地	平 安	4 6 0 4 5		
58	長 消 遺 跡	包含地	旧 石 器 文	27148	83	町田遺跡	散布地	奈良・平安	4 6 0 4 4		
59	一本杉遺跡	包含地	縄文・平安	27065	84	杉ノ塩塚	塚	古 墳	4 6 0 2 6		
60	下蝦沢遺跡	包含地	弥 生	27010	85	中三代遺跡		奈良・平安	46050		
61	大 窪 遺 跡	包含地	縄 文	27001	86	三代遺跡	包含地	奈良・平安	46019		
62	花島 遺跡	包含地	縄 文	27002	87	王壇古墳	古 墳	古 墳	46001		
凍	傾峰 町		·		88	長 根 遺 跡		奈良・平安	46051		
63	小深沢II遺跡		奈良・平安	45069	89	長 根 遺 跡	包含地	奈良・平安	46020		
64	小深沢遺跡			46058	90 .	旗塚	塚		4 6 0 3 0		
65	館山館跡	包含地 城 館	奈良・平安 近 世	46010	91	伊勢堂館跡	包含地 城 館	縄文・奈良 平安・中世	46005		
66	古 館 館 跡	城館	中 世	46012	92	四ッ壇古墳	包含地 古 墳	古墳・奈良 平 安	46002		
67	大鰐谷北向遺跡	包含地	縄 文	4 6 0 1 3	93	神田遺跡			46066		
68	経壇遺跡	経塚	古 代(?)	4 6 0 0 8	94	諏訪原経塚遺跡		近 世	4 6 0 5 3		
69	殿 上館 跡	城館	中 世	46007	95	野沢遺跡			4 6 0 5 5		
70	寺 山 (極 楽 寺 跡)	寺院跡	平 安	4 6 0 1 5	96	桝 形 館 跡	包含地城 館	奈良・平安 中 世	4 6 0 0 3		
71	的場山遺跡	包含地	縄 文 奈良・平安	4 6 0 1 1	97	四ッ塚遺跡	塚	平 安	4 6 0 0 4		
72	空堤遺跡	包含地	縄 文	46014.	98	無 緣 塚	塚		4 6 0 2 5		
73	古 塚	塚		46031	99	諏訪神社遺跡	·	縄文・奈良 平 安	4 6 0 5 2		
74	砂田遺跡	包含地	奈良・平安	46016	100	袋 沢 遺 跡		奈良・平安	46056		

Ⅱ. 調査の方法と経過

調査の方法

グリット設定は調査区南端の東北新幹線中心杭371km480m(仮称原点A)と、371km500m(仮称原点B)を選び、これを結ぶ線とこれに直交する線を基準線として3m単位にグリッドを組んだ。地区名は南北を数字で、東西をアルファベットで表示し、両者を組み合せて呼ぶことにした。検出された遺構については、種別ごとに発見順に番号を付したが、精査の結果によって種別名称が不適当と判断される遺構が多数あり、名称と番号を変更している。旧名称は表に明示している。実測図の作成は全面発掘した部分に遺り方を設定し、1/20の平面図を作成しレベルを記入した。また、必要に応じて1/20の断面図を作成した。

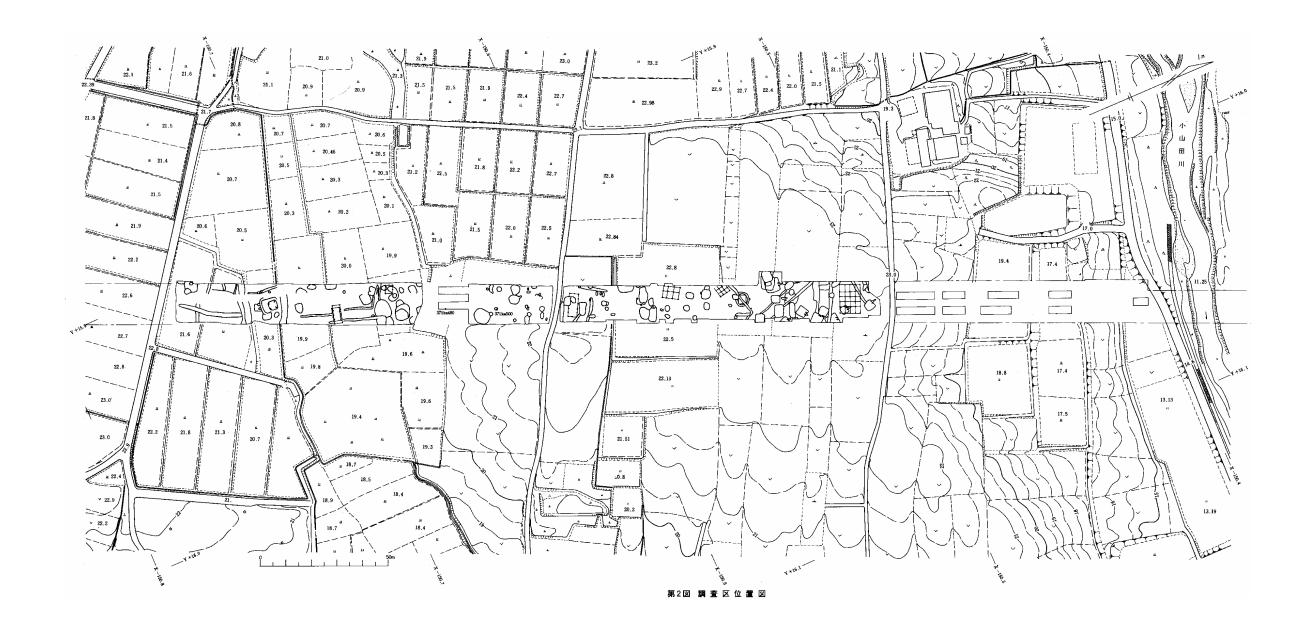
調査の経過

本遺跡は東へ延びるなだらかな丘陵平担面、斜面、及び南側の沢の部分を対象に3次にわたって発掘調査が行なわれた。

第1次調査は昭和51年7月22日に開始し、調査区内の草刈りと併行して、東西16m×南北280mの範囲にグリッドを設定した。その後、4グリッド1単位としたトレンチを設け、調査区南端の丘陵緩斜面のC-10~13区から1列おきに表土剥離を行ない順次北側へと掘り進めていった。しかし、調査区の丘陵平担面の中央より南側の水田に稲が植えられていたため丘陵北斜面に移行して調査区を設定し、丘陵平担部に向って順次進んでいった。その結果、調査区全域が水田、畑地の耕作による削平を受けていたため、大部分の地域では20cmの厚さの耕作土及び表土層で直下が地山となっており、丘陵平担部の南半にのみ表土下に黒褐色土層が認められた。遺構は地山面で検出された。丘陵平担面、南緩斜面に遺構が分布することが明らかになったため、この区域を全面発掘することにした。この区域では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴遺構、土壙、井戸跡などの遺構や土師器、須恵器、中世陶器、古銭、木製品などの遺物が発見され、古代、中世の集落跡であることが明らかになった。

ほぼ全域の遺構の検出が終了した9月下旬以降に遺り方設定を行ない、実測図作成を行なった。 調査の途中であったが11月13日に現地説明会を開催した。その後、調査を継続し、遺構の精査、 平面図、断面図等の作成、写真撮影を行なった。さらに、12月上旬には調査区南端の水田部分(沢) にトレンチを設定し調査したところ溝状の凹みを確認したが、冬寒期を迎えたため12月17日で調査を中断した。発掘面積は2650m²であった。

第2次調査は昭和52年10月26日から開始した。昨年度の第1次調査の結果、遺構がさらに南



側の沢の部分に及ぶことが確認されたため、沢地に調査区を設定し、本線敷の東西12m×南北100mを対象に発掘調査を実施した。はじめにユンボを使用し遺構確認面まで堆積層を除去しながら北側から南側へと進んでいった。表土から遺構面までの堆積層は最も厚いところで約1.5mあり、6枚の層が認められた。堆積層除去と併行しながら調査区内にグリッドを組んで遺構の確認につとめた。その結果、調査区全域に掘立柱建物跡、土壙、井戸跡などの遺構が検出されたが、本線敷と側道の境にシートパイルが打ち込まれていたため破壊されていたものもあった。ほぼ全域で遺構の検出が終了した11月上旬に、遺り方設定を行ない平面図、断面図等の実測図作成を行なった。調査の途中であったが2次調査の成果を地域住民に公開するため11月26日に現地説明会を開催した。その後、遺構の精査、平面図、レベリング等の作成、写真撮影を行ない12月5日で今回の調査を終了した。発掘面積は1200m²である。

第3次調査は昭和54年4月9日に開始し、2次調査の際調査できなかった西側の東西4m×南北100mの側道部分を対象に発掘調査を実施した。2次調査と同様にユンボを使用して、北側から遺構面までの堆積層を除去した。その後、調査区内全域で遺構確認を始めた。その結果掘立柱建物跡、土壙跡、井戸跡などを検出し、中世陶器、古銭、木製品などの遺物が発見された。5月上旬以降には遺り方設定を行ない実測に入った。5月31日には発掘調査のすべてを終了し、今回の発掘面積は400m²であった。

三次にわたる調査の結果発見された遺構は竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡7棟、竪穴遺構37基、井戸跡9基、円形周溝1基、土壙110基、溝・ピット多数などである。

Ⅲ. 基本層位と遺構の分布

1. 基本層位

本遺跡は東に延びるなだらかな丘陵の平坦部、南斜面、および沢の部分に立地している。東北新幹線の路線敷は遺跡の中央部を南北に横断している。

(イ) 丘陵平坦部、斜面

丘陵平坦部、斜面は基本的に2層認められた。第1層は表土、耕作土の褐色および暗褐色土層で調査区全域に分布し、層の厚さは20cm前後である。第2層は黒褐色土層で、丘陵平坦部の南半に分布し10~15cmの厚さで堆積している。出土遺物は第1・2層とも縄文土器、土師器、須恵器、中世陶器などで、縄文時代から中世までの各時期の遺物を含んでいるが、主なものは土師器、須恵器、中世陶器である。遺物の出土状況をみると、ほとんどの遺物は67区以南からのものである。

遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴遺構、土壙跡、井戸跡などが地山面で確認された。 (ロ) 沢の部分

沢の部分の基本層位は大別すると6層認められた。第1層は耕作土の暗褐色土層で、調査区全域に20~30cmの厚さで堆積している。第2層は灰黄褐色土層で調査区全域に堆積している。層は最も厚い沢の部分で約60cmである。第3層は黒褐色土層でほぼ全域に堆積し、層の厚さは約40cmで一定している。土色は地区によって多少異なっており、さらに混入物によって細別される。第4層は黒色土層で沢の中央部に10cm前後の厚さで堆積している。第5層は灰白色土層で沢の中央部より北側に部分的に2~5cmの厚さで堆積している。第6層は黒褐色土層で沢の中央部に約20cmの厚さで堆積している。これ以下は地山である。

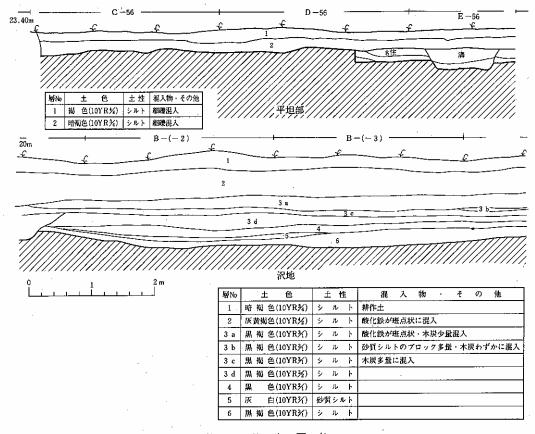
層中から中世陶器が出土している。遺構は地山面で掘立柱建物跡、竪穴遺構、土壙跡、井戸 跡などが検出された。

2. 遺構の分布

3次にわたる調査で発見された遺構は、竪穴住居跡13軒、掘立柱建物跡7棟、竪穴遺構37基、 土壙跡110基、井戸跡9基、円形周溝1基、溝状遺構・ピット多数などである。

本遺跡では、標高22m前後を境にして丘陵平坦部と斜面に分けることができる。北端の東北 新幹線中心杭371km660m付近では、丘陵平坦部から北斜面へ、南端の中心杭371km520mでは丘 陵平坦部から南斜面へと移行している。さらに、南端の標高20m以下を沢の部分として区別す ることができる。

1. 竪穴住居跡は丘陵平坦部の中央部から北側と、南斜面とに分布しているが、特に前者の地

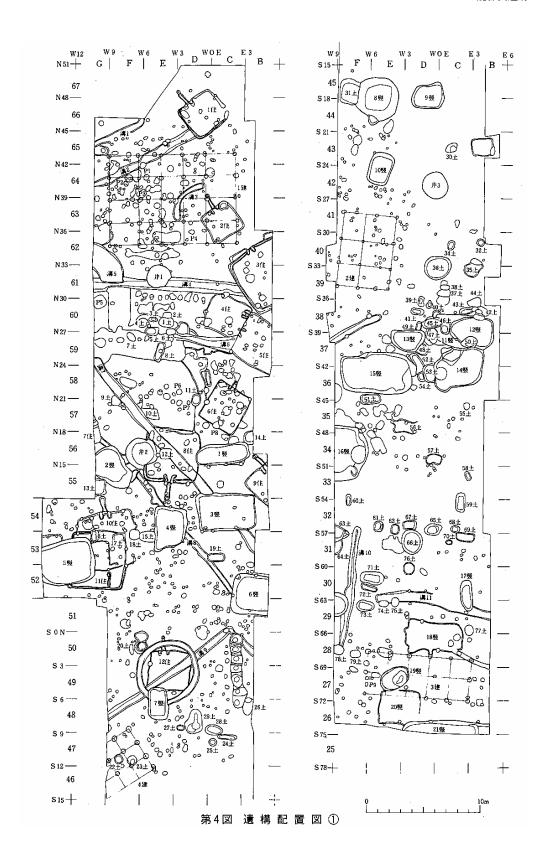


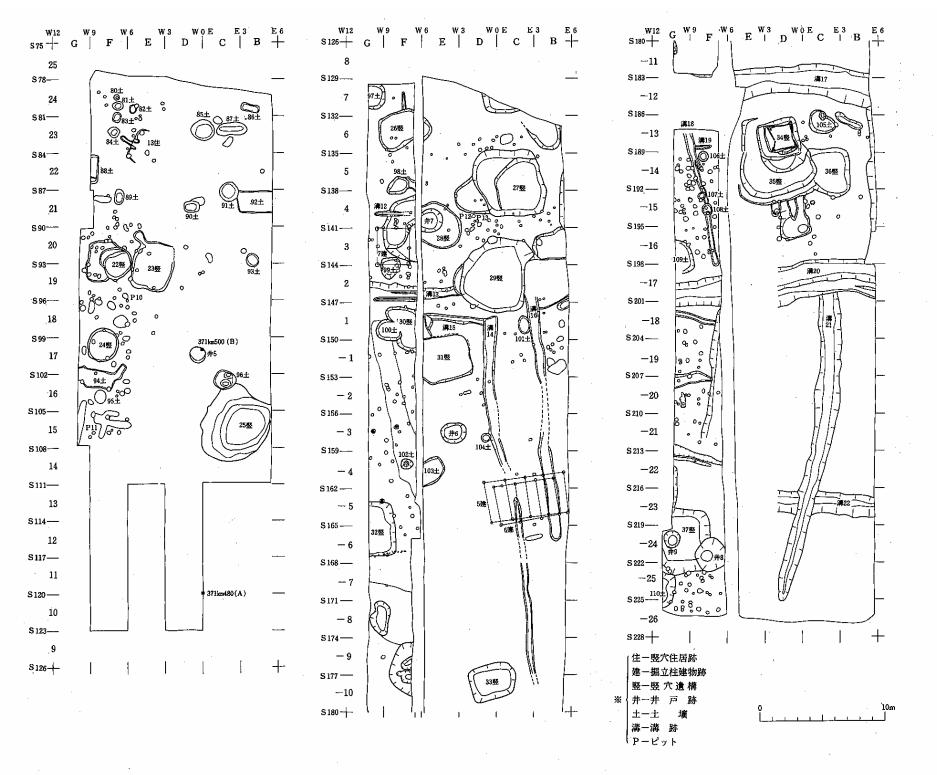
第3図 基 本 層 位

区に集中している。

- 2. 掘立柱建物跡は丘陵平坦部と沢の部分に分布している。
- 3. 土壙跡、竪穴遺構、井戸跡は丘陵平坦部、南斜面、沢の部分に分布している。
- 4. 溝状遺構は丘陵平坦部、沢の部分に分布している。
- 5. 円形周溝は丘陵平坦部の中央部に位置している。
- **6.** ピット群は北斜面を除いた調査区全域に分布しているが、特に丘陵平坦部の中央部から北側の地区に集中している。

これらをまとめるみると、竪穴住居跡はほとんどが丘陵平坦部、掘立柱建物跡・土壙跡・井戸跡などは、北斜面を除き調査区全域に分布している。





第5図 遺構配置図②

Ⅳ. 古代の遺構と遺物

A. 発見された遺構と遺物

古代の遺構としては竪穴住居跡が13軒発見されている。そのうち12軒は丘陵平坦面に近接して分布し、他の1軒は南斜面に位置している。すべて地山面で確認された。遺物は土師器・須恵器などがあり、住居跡内、堆積層やその他の遺構から出土している。

1. 竪穴住居跡

第1号住居跡

〔位置〕 C・D−66・67区に位置する。

[重複] 溝に切られている。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は長軸3.7m、短軸3.4mである。

〔堆積土〕3層確認された。第3層が第1次の堆積土で、壁沿いに分布し周溝内に及ぶ。次いで第2層が全体に分布して床面に達し、第1層は東南部に分布している。全体としては将棋倒し状を呈する。

[壁] 東壁は削平されている。他の壁は地山を壁としている。立ち上がりはほぼ垂直である。 壁高は西壁では床面から30cmあり、東側にいくほど低くなる。壁面はほとんど平坦である。

〔床面〕 大部分は地山を床としているが、貯蔵穴状ピットの部分は同ピットよりいくぶん広い範囲に炭化物が分布し、焼土と粘土によって貼り床を行なっている。床面は細かな凹凸があり、部分的に黒色土でよごれている。

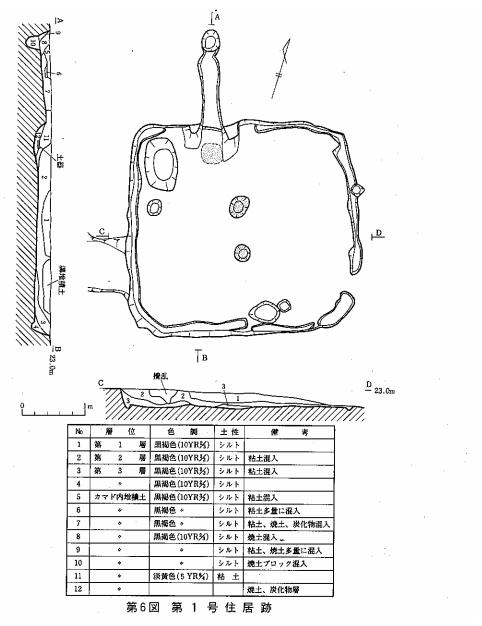
〔柱穴〕 南壁際に2個、西壁際に1個のピットが検出された。いずれも柱痕跡は認められず配置に規則性もみられないことから、柱穴がどうか不明である。

ピットNo. 1 2 3

深さ (cm) 30 42 21

[周溝] カマド部分を除いて、壁際に断続的に巡る。幅は5~20cmと一定しない。底面は凹凸が多く、深さは床面から2~5cmで浅い。

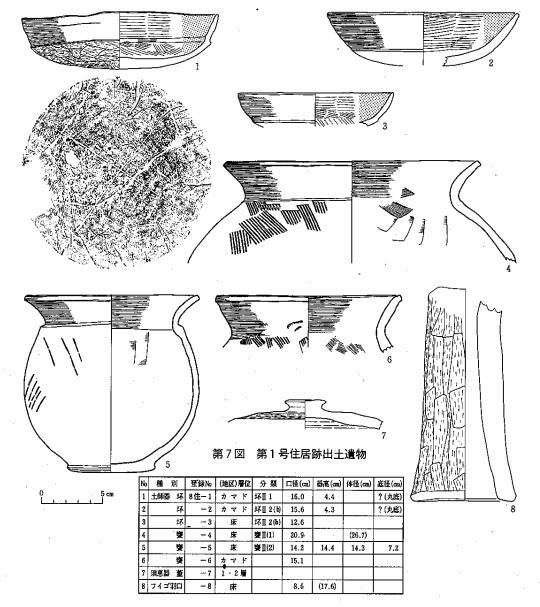
〔カマド〕 北壁の西寄りに付設されている。燃焼部、煙道部からなる。燃焼部は幅90cm、奥行60cmで側壁は粘土で構築されている。底面は周囲の床面よりわずかに凹み皿状を呈し、30×30cmの範囲に焼け面がみられる。奥壁は底面より10cm程立ち上がり、煙道部へ続く。煙道部は幅30cm、長さ152cmで底面は先端に向って下る。先端には煙出しピットがとりついている。壁



面は、部分的に焼けた痕跡が認められる。カマドの軸方向ばN-15°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマドの左側に位置する。82×52cmの楕円形で堆積土は焼土、炭化物を 多量に含む黒褐色の単層である。

〔その他の施設〕 床面中央部に2個のピットが検出された。径20~30cmの円形を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。底面の表面は黒色化しているが、その下部は赤変し非常に硬い。周囲からフイゴの羽口、鉄滓が出土している。



〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内から土師器(坏、甕)、須恵器(甕、蓋)、フイゴの羽口が出土している。このうち、図示できたのは土師器坏3点・甕3点、須恵器蓋1点、フイゴの羽口1点である。

土師器

坏(1~3) いずれも外面に段のつく坏である。1は段が中位につく。段は明瞭な稜線を形成し、対応する内面にも屈曲を生じている。段から上は外傾する。底部は丸底である。2・3は下位に段がつき、段差はわずかで内面に変化はみられない。段から上は内弯気味に立ち上

がる。底部は丸底と思われる。調整はすべて同様で、外面の段から上に横ナデ、段以下がヘラケズリ、内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

甕(4~6) 4・5は体部が球形に近い形態をした甕である。口縁部が外反し、端部は角ばる ものと丸くおさまるものがある。頚部は「く」字に屈曲して段がつく。体部の調整は4・5とも 同様で外面に刷毛目、内面にヘラナデが観察される。6は口縁部破片である。口縁部は外傾し端 部が角ばる。頚部に段はみられない。

須恵器

蓋(7) 口縁部を欠く。つまみは低平で周縁が張り出し中央がくぼむ。天井部に回転ヘラケズリが施されている。

フイゴの羽口(8) 基部を欠損しているが円筒状を呈し、先端がわずかに開く。外面にケズリ痕が観察される。熱をうけてもろい。

第2号住居跡

〔位置〕 C・D−62・63区に位置する。

「重複」 第1号建物跡によって切られている。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は長軸3m×短軸2.8mである。

〔堆積土〕 確認面から床面までが薄く、堆積土は1層のみ認められた。

〔壁〕 四壁が残存L地山を壁としている。壁面は平坦である。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、壁高は5~10cmで北側ほど保存が良い。

[床面] 地山を床としている。床面は細かな凹凸があるがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 ピットは6個検出された (pit1~6) 。いずれのピットも柱痕跡は認められない。位置も不規則なため柱穴がどうか不明である。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6

深さ (cm) 6 10 5 4 20 3

〔周溝〕 検出されなかった。

[カマド] 北壁中央に付設されている。燃焼部、煙道部からなる。燃焼部は幅80cm、奥行50 cmで両側壁は粘土で構築され、左側壁先端には土師器甕を倒立させて、補強している。両側壁内面は赤褐色に焼けている。底面はわずかに周囲の床面より凹み全体に焼け面が認められた。 奥壁は約5cm立ち上がり煙道部へ続く。煙道部は幅22cm、長さ134cmで一部天井が残存する。底面は先端に向かってわずかに下り、先端に煙出しピットがみられる。カマドの軸方向はN-4°-Wである。

[貯蔵穴状ピット] カマドの右側に位置する。90×80cmの不整形で、堆積土に焼土、炭化物

を含む。

〔出土遺物〕 堆積土中、カマド 内、pit1・5内から土師器(坏・ 甕)が出土している。このうち図 示できたのは土師器甕1点である。

土師器甕(1) 口縁部から体部上端までの破片である。長胴形を呈するものと思われる。口縁部は外反し、端部がわずかにつまみ出されている。体部内外面に刷毛目が施されている。

第3号住居跡

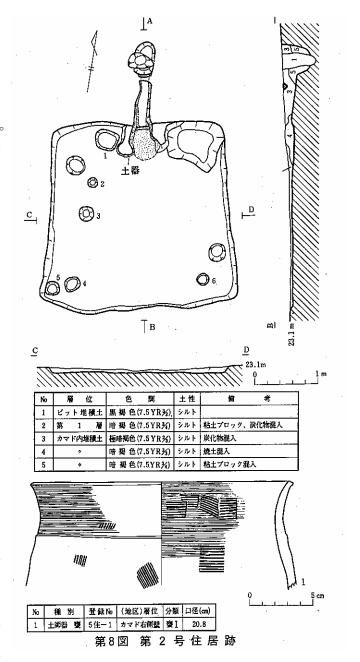
〔位置〕 B・C−60・62区に位置する。

〔重複〕 溝、ピットに切られて いる。

〔平面形・規模〕 東側は調査区 外に延びるため調査できなかっ たが、平面形は隅丸方形を呈する と推定される。規模は西辺で約5 mある。

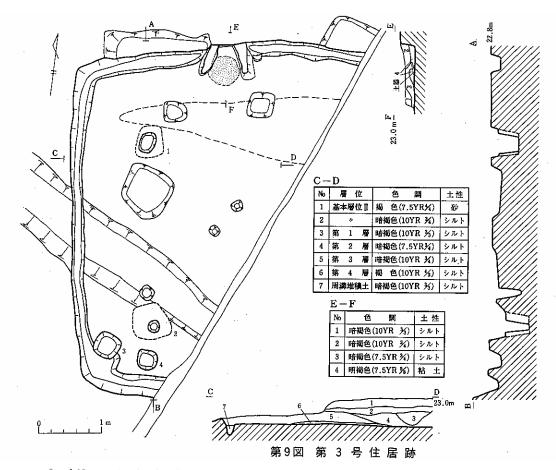
〔堆積土〕 4層確認された。将 棋倒し状に堆積している。

〔壁〕 地山を壁とし、西壁、北壁の大部分が残存している。ほぼ 垂直に立ち上がり、壁高は床面か



ら20~30cmでほぼ一定している。壁面は平坦である。

〔床面〕 北半の一部に貼り床が行なわれており、他は地山を床とし、南西隅付近やカマド右側は周囲の床面より10cmほど凹んでいる。貼り床の部分はその下に溝状の落ち込みがみられた。 〔柱穴〕 床面からピットが4個検出された。この内、pit1、pit2には柱痕跡が認められ、位置からみても柱穴と考えられる。



ピットNo. 1 2 3 4 深さ (cm) 43 63 23 19

[周溝] 調査区内でカマドの部分を除いて壁際に巡る。幅は25~26cmと一定している。底面は多少凹凸があり床面から8~15cmである。断面は比較的深い「U」字形を呈している。

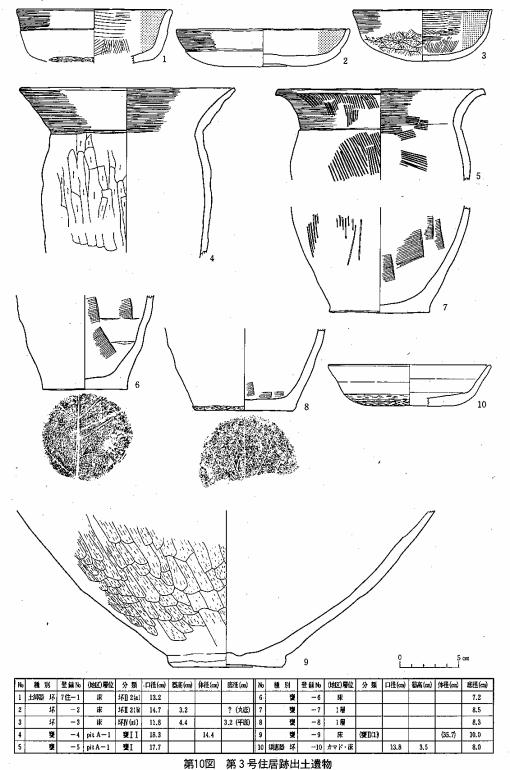
〔カマド〕 北壁に付設されている。燃焼部が残存している。燃焼部は幅90cm、奥行55cmで側壁は粘土で構築されており、「八」字形に開く。底面に45×45cmの範囲で焼け面が認められた。 底面は周囲の床面とほぼ同じ高さである。軸方向はN-6°-Wである。

[貯蔵穴状ピット] 検出されなかった。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内、pit3から土師器(坏・甕)、須恵器(坏・壺)が出土している。この内、図示できたのは土師器坏3点、甕6点、須恵器坏1点である。

土師器

坏(1~3) 外面に段のつくもの(1、2) とつかないもの(3) とがある。前者のうち、1は 段が上位につき、段から上は外反気味となり、外面段から上に横ナデ、段から下にヘラミガキ、 ヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。2は段が下位につき、段から上



は内弯気味で、底部は丸底であるが、中央部がわずかにくぼむ。外面段から上に横ナデ、段から下にヘラケズリ、内面はヘラミガキ、黒色処理されている。後者は、口縁部が外反気味、体部が内弯気味に外傾する。底部は小さい平底である。外面の口縁部に横ナデ、体部以下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕(4~9) 4は長胴形を成すものと思われる。口縁部は外反気味で端部が角ばる。頚部に沈線がみられ、体部はわずかにふくらむ。体部外面に軽いヘラケズリが施され、内面の調整は不明である。5は口縁部が外反し、端部はわずかに下方につまみ出されている。頚部に段がつく。体部内外面に刷毛目が施され、刷毛目は一部、口縁部までおよぶ。6~9は体下部以下の破片である。底部に木葉痕がみとめられる。なお、9は現存径が体部で36cmと他の甕に比して著しく大形で、体下部の傾きからみて体部は球形を呈するものと推定される。

須恵器

坏(10) 再調整が加えられ、底部の切り離し技法の不明な坏である。口縁部から体部は直線的に外傾する。底部は平底であるが、体部下端から底部に施された回転へラケズリによって、体部との境が丸味をもつ。

第4号住居跡

[位置] B~D-59~61区に位置する。

〔重複〕 溝によって南東隅が、ピットによって西、北辺の一部が切られている。東辺では第5 号住居跡を切っている。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、北東隅が丸味をもつ。規模は長軸約3.5m、短軸約3.2 mである。

〔堆積土〕 3層に大別される。第3層が第1次の堆積土で北東部の壁際から中央部にかけて分布する。次いで、第2層が北東を除く部分に分布して床面に達し、第1層は中央部に堆積している。 全体としては将棋倒し状を呈する。

[壁] 南壁は第20号住居跡堆積土、他は地山を壁としている。壁の立ち上がりはほぼ垂直で、壁高は南壁で約25cmある。壁面はほぼ平坦である。

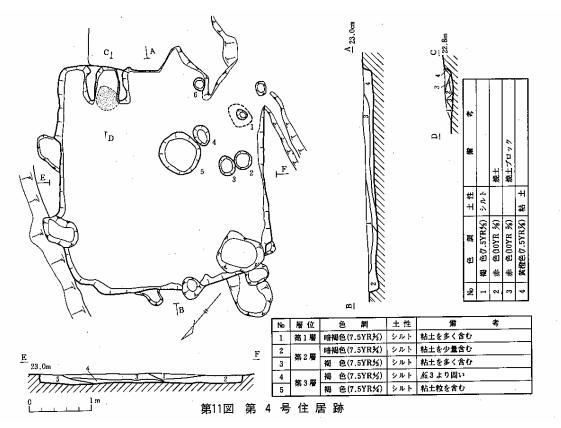
[床面] 地山を床としている。床面は細かな凹凸がある。ほぼ水平である。

〔柱穴〕 床面から6個のピットが検出されている。Pit1に柱痕跡が認められるが、他のピットは柱痕跡が検出されず、配置に規則性も認められず柱穴がどうか不明である。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6

深さ (cm) 32 49 19 16 30 22

「周溝」 検出されなかった。



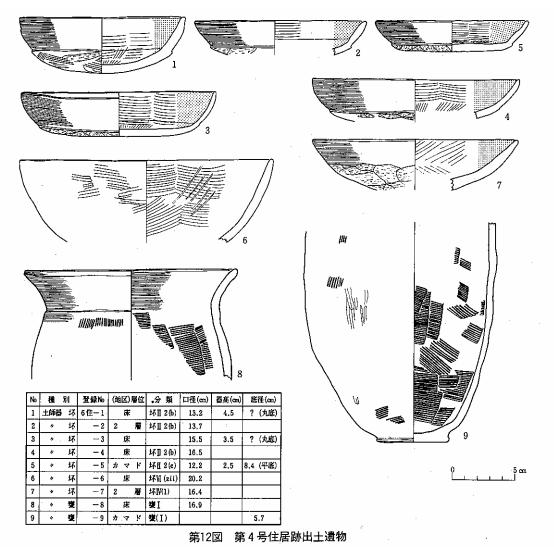
〔カマド〕 南壁の東寄りに付設され、燃焼部が残存している。燃焼部は幅75cm、奥行60cmで、側壁は粘土で構築されている。底面はわずかな凹みが見られ、40×30cmの範囲に焼け面が認められる。軸方向はS-38°-Eである。

[貯蔵穴状ピット] 検出されなかった。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド、pit1内から土師器(坏、甕)、須恵器(坏、甕)が出土している。このうち図示できたのは土師器の坏7点、甕2点である。

土師器

坏(1~7) 外面に段のつくものとつかないものとがある。前者(1~5) のうち、1~4では 段の位置が下位で、段から上は内弯気味に立ち上がり、底部は丸底である。1~3には、段に対 応する内面にかすかな稜がみとめられる。5は段が下端につき、段から上は内弯気味、底部は平 底である。調整はいずれも外面の段から上が横ナデ、段以下がヘラケズリであるが、1は段以下 にヘラケズリ後刷毛目がみられる。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。後者(6・7) は 口縁部から体部が外傾する。6は深く7は浅い。調整は6が内外面ともヘラミガキが施され、内面 は黒色処理されており、7は外面上半に横ナデ、下半にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処 理がなされている。



8は体部下半以下、9は体部上半以上を欠くが、いずれも長胴形を成すものと思

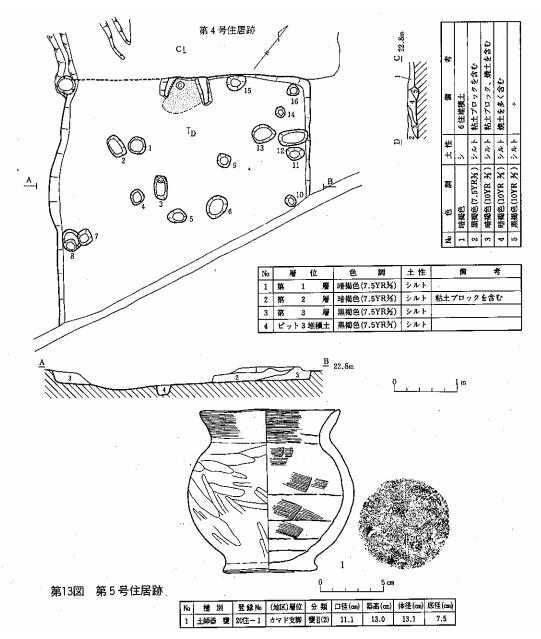
饔 (8 • 9) われる。8は口縁部が外反して端部が丸くおさまり、頚部に段がつく。体部の調整は8・9とも内 外面に刷毛目がみられるが、9は外面の一部にヘラミガキが観察される。

第5号住居跡

[位置] B・C-58~60区に位置する。

東西に走る溝、第6号住居跡によって切られている。

[平面形・規模] 南半が調査区外に延びているが、残存部からみて平面形は方形を基調とし ていると推定される。規模は北辺長が3.8mある。



〔堆積土〕 堆積層は3層確認されているが、溝1に切られて残存する範囲が狭く分布状況は把握できない。

[壁] 残存部は地山を壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり北壁で約18cmある。

[床面] 地山を床としている。床面はほぼ平坦ではあるが、中央部がわずかに凹む。

〔柱穴〕 床面でピットが16個検出された。いずれも柱痕跡は認められない。さらに、位置関係ではpit13とpit1・2のいずれかとが柱穴の可能性がある。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16

深さ (cm) 11 21 20 16 18 27 23 10 24 14 5 22 23 22 12 19 [周溝] 検出されなかった。

〔カマド〕 北壁中央部に付設され、燃焼部が残存している。幅80cm、奥行46cmで、側壁は粘土で構築され、「八」字状に開く。奥壁よりに土師器甕をすえ支脚としている。燃焼部内は壁面、底面とも焼けている。

〔貯蔵穴状ピット〕 検出されなかった。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内、ピット1内から土師器 (坏・甕) が出土している。 このうち図示できたのは土師器 (甕) 1点である。

土師器

甕(1) 体部が球形を呈する甕である。口縁部は外傾し、底部は下方に突き出し、底面に 木葉痕がみられる。体部の調整は外面にナデののちヘラミガキ、内面にヘラナデが施されてい る。

第6号住居跡

[位置] B~D−56~58区に位置する。

〔重複〕 ピットによって切られている。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は長軸3.9m、短軸3.4mある。

〔堆積土〕 3層確認された。第3層が第1次の堆積土であり、南西部壁沿いに分布している。次いで第2層はほぼ全体に分布して床面に達し、第1層は中央部にみられ皿状に堆積している。全体としては将棋倒し状を呈する。

[壁] 溝と重複する部分は溝の堆積土を、他は地山を壁としている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁で床面から約16cmあるが全般的に8~10cmで比較的低い。壁面はさほど攪乱も少なくほぼ平坦である。

〔床面〕 地山を床としている。全体的に細かな凹凸がみられ、中央部にはたたきしめられたような硬い面が確認された。

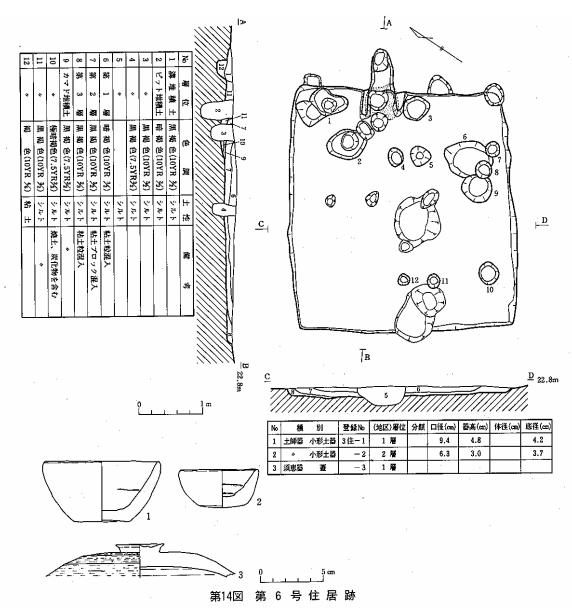
〔柱穴〕 床面で検出されたピットは、図中にピットNoを付した12個である。いずれも柱痕跡 は認められず、配置に規則性もみられないことから、柱穴は不明である。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

深さ (cm) 31 30 7 10 19 10 13 27 19 26 14 7

〔周溝〕 検出されなかった。

[カマド] 東壁の北寄りに付設されている。燃焼部、煙道部からなる。径30cm程のピットに



よって燃焼部左側壁、底面奥壁が破壊されている。燃焼部は幅70cm、奥行44cmで両側壁は粘土にによって構築されている。底面は周囲の床面より7cmほど凹み、浅い皿状を呈し焼け面が認められた。奥壁は5cmほど立ち上がり、煙道部へ続く。煙道部は幅30cm、長さ60cmで、底面は先端に向ってわずかに上がり、先端に煙出しピットがつく。軸方向はN-57°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット〕 カマド左側のピット1が相当することも考えられるが形態が整っておらず、 出土遺物もごくわずかであり、明確でない。

〔出土遺物〕 堆積土中、カマド内、ピット1、2内から土師器(坏、甕、小形土器)、須恵器

(坏、甕、蓋)が出土している。このうち図示できたのは、土師器小形土器2点、須恵器蓋1点である。

土師器小形土器 (1・2) いずれも口縁部から体部が外傾する。底部は平底である。調整は 器面が摩滅しており観察できない。内面に粘土積み上げ痕がみられる。

須恵器蓋(3) 口縁部を欠く。つまみは周縁がうすく反り、中央はくぼむ。天井部外面は回転へラケズリされている。

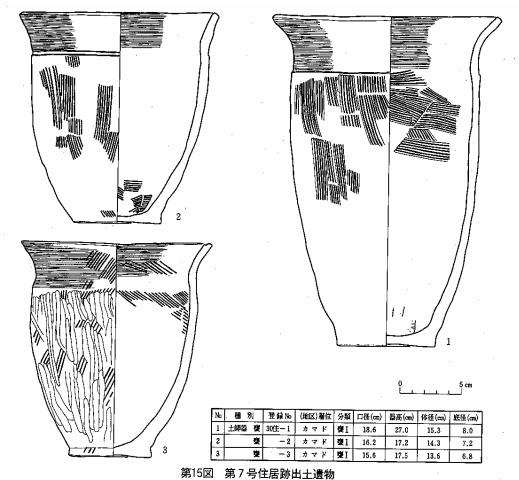
第7号住居跡

本住居跡は、その大半が路線敷外であり、調査地区内ではカマド、壁の一部を検出したにすぎない。したがってその内容は不明である。

〔出土遺物〕 カマド内から土師器 (甕) が3点出土している。

土師器

甕(1~3) 長胴形を呈する甕である。□縁部が外反して端部は角ばる。頚部に段、沈線



166

がつき、体部はわずかにふくらみをもつ。底部は下方に突き出している。体部の調整は、1・2 には内外面とも刷毛目が施され、3は外面に刷毛目ののちヘラミガキ、内面に刷毛目がみられる。

第8号住居跡

〔位置〕 D·E−55·56区に位置する。

[重複] 溝、井戸、土壙、ピットに切られている。

[平面形・規模] 平面形は正方形で、規模は4.9×4.9mである。

〔堆積土〕 4層に大別される。第4層が第1次の堆積土であり、壁際に分布し、次いで第3層が 北半の壁沿いに堆積して床面に達する。第2層は壁沿いを除いて分布し、中央部で床に達する。 第1層は中央部に皿状に堆積している。全体としては将棋倒し状を呈する。

[壁] 地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで、壁高は約25cmである。

[床面] 南壁沿いは掘り方埋め土上面を、他は地山を床としている。床面は凹凸がみられる。

〔柱穴〕 床面から7個のピットが検出されている。このうちpit1、2、3、5はほぼ対角線上の相対する位置にあり、柱穴と考えられる。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6 7

深さ (cm) 29 40 32 31 52 28 25

〔周溝〕 南、西、北辺で検出されている。壁に沿い、幅約25cm、深さ約10cmで断面形は「U」字状を呈する。

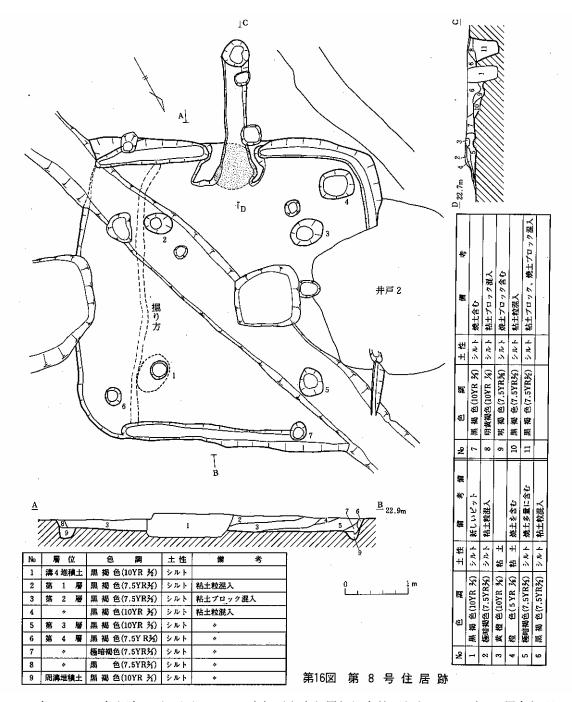
[カマド] 南壁中央部に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は幅110cm、奥行70cmで、側壁は粘土で構築されている。燃焼部内は底面、壁面とも焼け面がみられる。奥壁の立ち上がりはみられず、底面からそのまま煙道部へ移行する。煙道部は幅35cm、長さ164cmで、底面は先端に向って下る。先端には煙出しピットがある。カマドの軸方向はS-27°-Wである。

〔貯蔵穴状ピット〕 認められない。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内、ピット1、3、4内、掘り方埋め土中から土師器(坏・甕・甑)、須恵器(坏・甕)が出土している。この内、図示できたのは土師器坏3点、甕5点、甑1点である。

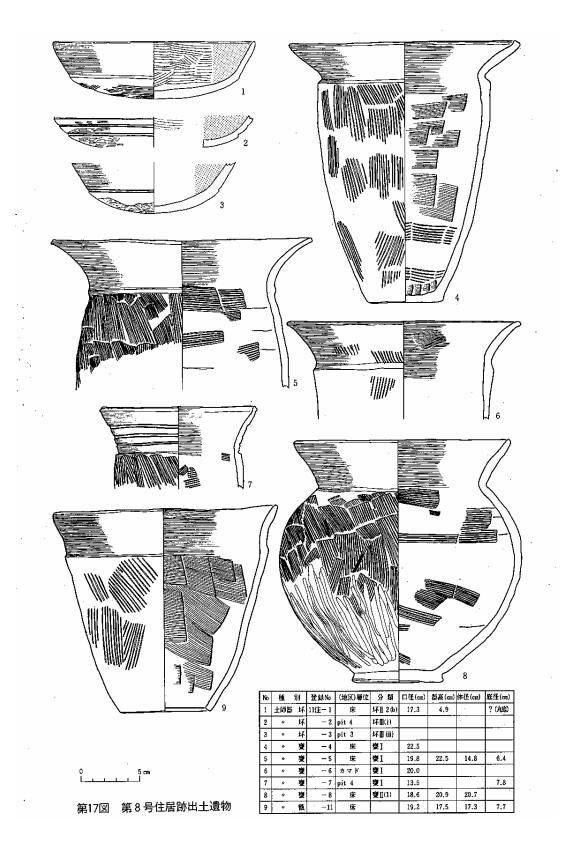
土師器

坏(1~3) 体部に段のつくものと、沈線のつくものとがある。前者(1)は段が下位につき、 段から上は直線的に外傾し、底部は丸底である。調整は外面段から上に横ナデ、段から下に刷 毛目、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。後者(2・3)は沈線の数が2で



は3条、3では1条と違いがみられる。2は底部が丸底と思われ内外面ともヘラミガキ、黒色処理 されている。3は丸底で沈線から上に横ナデ、沈線以下にヘラケズリが施され、内面はヘラミガ キがみられ、再酸化のためか黒色処理はみとめられない。

甕(4~8) 4~7は長胴形を呈するものである。口縁部は外反して端部はわずかにつま



み出されるものと丸くおさまるものとがある。頚部に段がつき、7の口縁部には、さらに三条の 沈線がめぐる。体部の調整は、外面に刷毛目、内面に刷毛目、ヘラナデが施されている。なお、 6は内面体部調整が摩滅のため不明である。8は体部が球形を呈する甕である。口縁部が直線的 に外傾して端部は丸くおさまる。頚部は「く」字状に屈曲し外面に段がつく。底部は下方に突 き出ている。体部の調整は、外面は刷毛目ののち下半にヘラミガキ、内面に刷毛目が施されて いる。

甑(9) 一鉢形を呈する無底の甑である。口縁部は外反気味で頚部に段がつき、体部は直線的に外傾する。調整は口縁部内外面に横ナデ、体部外面に刷毛目、内面にヘラナデが施されている。

第9号住居跡

〔位置〕 B-35区に位置する。

[重複] 認められない。

〔平面形・規模〕 大部分が路線敷外にのびるため、北西部を検出したにすぎない。平面形は 方形を基調とするものと考えられるが、規模は不明である。

〔堆積十〕 3層認められる。

[壁] 地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで、壁高は約10cmである。

[床面] 地山を床としている。

[柱穴] 床面よりピットは2個検出されているが、柱穴がどうか不明である。

ピットNo. 1 2

深さ (cm) 17 15

[周溝] 認められない。

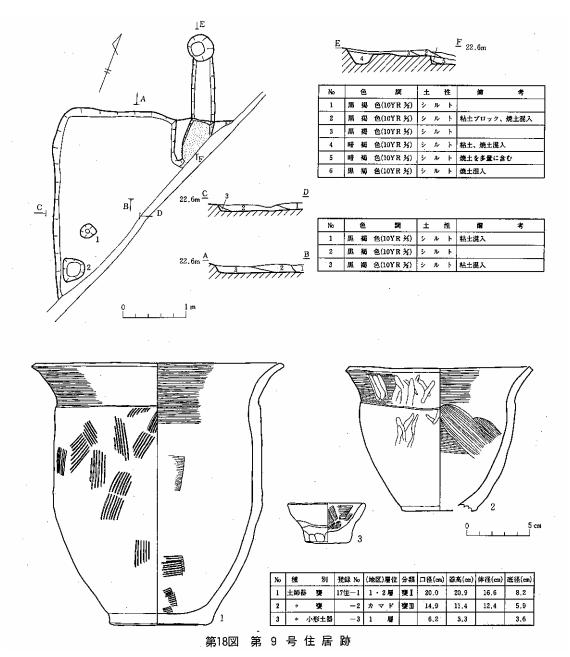
[カマド] 北壁に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は幅90cm、奥行80cmほどで、側壁は粘土で構築されている。燃焼部内は底面、壁面とも焼けている。奥壁は10cm立ち上がり、煙道部へ移行する。煙道部は幅40cm、長さ140cmで、底面は先端に向ってわずかに上り、先端には煙出しピットがある。軸方向はN-20°-Wである。

[貯蔵穴状ピット] 認められない。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内から土師器(坏・甕)、須恵器(坏・甕・蓋)が 出土している。このうち図示できたのは、土師器甕2点、小形土器1点である。

土師器

甕(1・2) 1は長胴形を呈する。口縁部が外反して端部が角ばり、頚部に段がつく。体部は わずかなふくらみをもち、底部は下方に突き出している。体部の調整は外面に刷毛目、内



面上半にヘラナデ、下半に刷毛目が施されている。底面に木葉痕がみられる2は小形の甕である。 口縁部は外反して端部が角ばる。 頚部に段がつき体部は短く丸味をもって外傾する。 体部の調整は、外面にヘラケズリののちヘラミガキ、内面にナデがみられる。

小型土器 口縁部から体部が外傾し、底部が下方に突き出る。外面におさえたような痕跡、 内面にヘラナデ、ナデが観察される(3)。

第10号住居跡

[位置] F ⋅ G − 54区に位置する。

〔重複〕 第13号住居跡を切り、第18号住居跡、土壙、竪穴に切られている。

〔平面形・規模〕 南東部は削平され、南西部は他の遺構に切られてすでに失なわれているが、 残存部からみて平面形は方形を基調とするものであり、規模は北辺が4.6m、北辺から南辺まで が5.1mである。

〔堆積土〕 3層に分かれる。第3層が第1次の堆積土であり、壁際に分布する。次いで第2層はほぼ全体に分布して床に達し、第1層は中央部に皿状に堆積している。全体として将棋倒し状を呈する。

〔壁〕 北半は地山を、南辺は第13号住居跡の堆積土と地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで、壁高は最も高い北西部で15cmにすぎない。

〔床面〕 第13号住居跡と重複する部分には貼り床をし、他は地山を床としている。全体に硬いが、浅いくぼみが所々にみられる。

〔柱穴〕 床面から9個のピットが検出されている。いずれも柱痕跡はみられず、配置に規則性 もなく柱穴がどうか不明である。

ピットNo. 1 2 3 4 5 6 7 8 9

深さ (cm) 9 20 41 36 16 5 6 6 8

〔周溝〕 認められない。

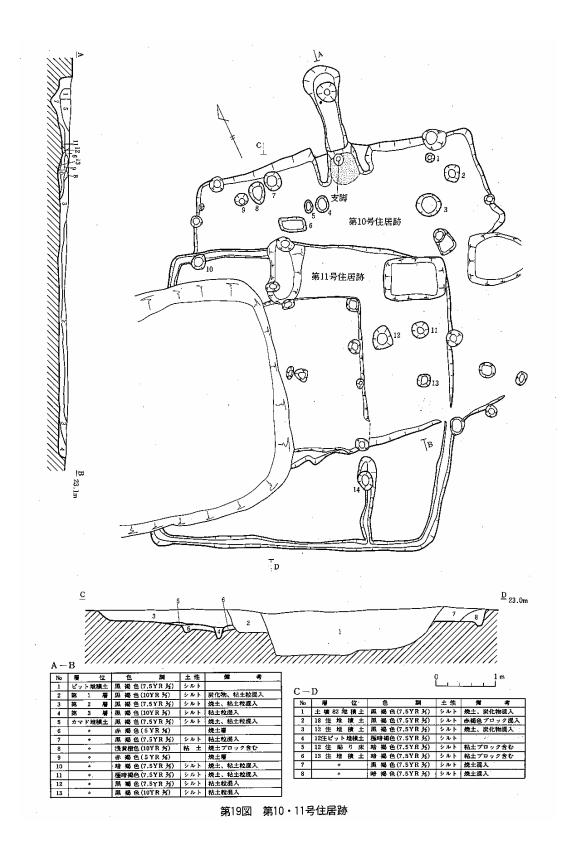
〔カマド〕 北壁中央部に付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は幅100cm、奥行60cmで、側壁は粘土で構築されている。底面奥部に土師器甕を使用した支脚がある。底面は全体に焼けている。燃焼部奥壁はなだらかに煙道部へ移行する。煙道部は幅60cm、長さ140cmで、底面は先端に向かって下り、先端に煙出しピットがつく。軸方向はN-12°-Eである。なお燃焼部には、それより大きい掘り方がみられる。

[貯蔵穴状ピット] 認められない。

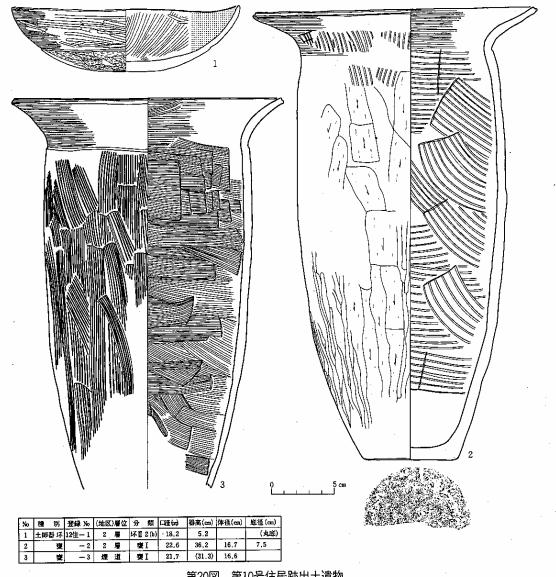
〔出土遺物〕 堆積土中、床面上、カマド内から土師器(坏・甕)、須恵器(甕・壺)が出土 している。このうち図示できたのは土師器坏1点、甕2点である。

土師器

- **坏**(1) 体部に段のつく坏である。段は下位に位置し、段から上は内弯気味に立ち上がる。 底部は丸底である。調整は外面段から上に横ナデののちヘラミガキ、段から下にヘラケズリ、 内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。
- **甕**(2・3) 長胴形を呈する。口縁部は外反して上端に沈線状のくぼみがめぐる。頚部に段がつく。体部は著しく長く、下端は変化なく底部にいたる。体部の調整は2と3で異っており



173



第20図 第10号住居跡出土遺物

2は外面に刷毛目、ヘラケズリののち下半の一部にヘラミガキがみられ、内面に刷毛目が施され ている。3は外面に刷毛目、内面にヘラナデがみられる。

第11号住居跡

〔位置〕 $F \cdot G - 52 \cdot 53$ 区に位置する。

〔重複〕 第12号住居跡、第18号住居跡、土壙、竪穴、ピットに切られている。

[平面形・規模] 西辺の大部分を欠くが、平面形はほぼ正方形と推定される。規模は北・南

辺が4.6m、東辺が4.8mである。

[堆積上] 3層認められる。将棋倒し状に堆積している。

[壁] 地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで、壁高は5~15cmである。

[床面] 地山を床としている。凹凸が多く、北側にいくぶん傾斜している。

〔柱穴〕 床面から5個のピットが検出されている (pit10~14) 。このうちピット12・14は対 角線上に位置し柱穴の可能性があるが、相対する位置は土壙によって切られているためピット の検出ができず不明である。

ピットNo. 10 11 12 13 14

深さ (cm) 10 10 16 15 24

[周溝] 北辺東半と東辺北半を除き、壁沿いに認められる。幅約15cm、深さ約5cmで断面形は「U」字状を呈する。

[カマド] 検出されていない。

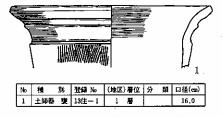
[貯蔵穴状ピット] 認められない。

〔その他の施設〕 南辺の周溝とピット14を結ぶように溝がのびている。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上から土師器 (坏・甕) が出土している。このうち図示できたのは土師器甕1点 である。

土師器

甕(1) 口縁部から体部上端までの破片である。口 縁部は外反して端部は角ばる。口縁部中位に幅の広い



第21図 第11号住居跡出土遺物

沈線状のくぼみがめぐる。頚部は段状を成し沈線が引かれている。

第12号住居跡

[位置] D · E −49 · 50区に位置する。

〔重複〕 溝、土壙、ピットに切られている。

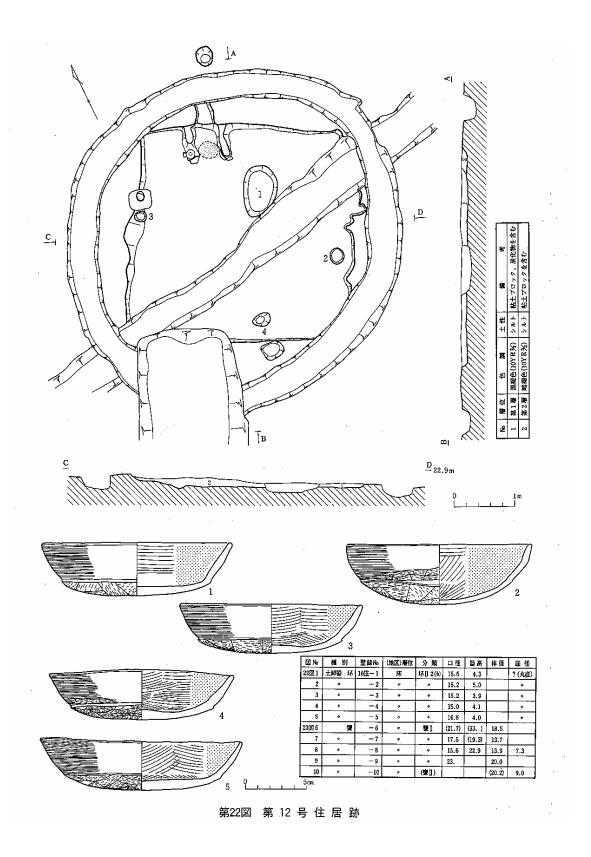
〔平面形・規模〕 平面形は正方形と推定され、長軸3.7m、短軸3.6mである。

[堆積土] 2層認められる。第2層が第1次の堆積土で北・東・南壁沿いの床面上に堆積している。次いで第1層が中央部から西側に分布し床面に達する。全体としては将棋倒し状を呈する。

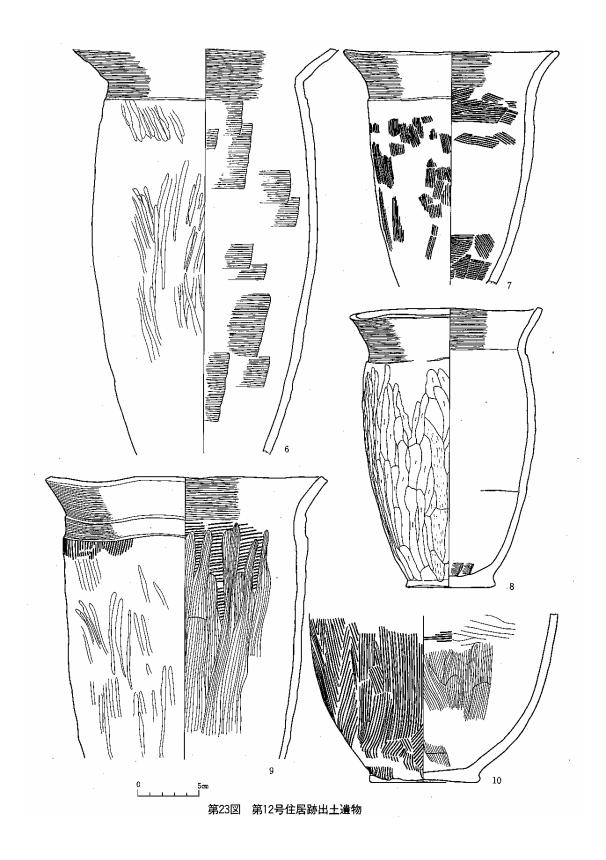
[壁] 地山を壁としている。立ち上がりはゆるやかで、壁高は約10cmである。

[床面] 全体に掘り方埋め土上面を床としている。床面は凹凸が多く、さほど硬くない。

[柱穴] 床面からピットは4個検出されているが柱痕跡は確認されておらず、配置に規則性



176



もなく、柱穴は不明である。

ピットNo. 1 2 3 4

深さ (cm) 7 20 13

〔周溝〕 検出されていない。

[カマド] 北壁西よりに付設されている。燃焼部と煙道部から成る。燃焼部は幅80cm、奥行60cmで、側壁は粘土で構築され、先端は土師器甕で補強している。底面は30×30cmの範囲が焼けている。奥壁は10cmほど立ち上り、煙道部へ続く、煙道部は幅30cm、長さ130cmで先端に煙出しピットが付いている。軸方向はN-24°-Eである。

〔貯蔵穴状ピット〕 認められない。

〔出土遺物〕 堆積土中、床面上から土師器(坏・甕)、須恵器(甕)が出土している。この うち図示できたものは土師器坏5点、甕5点である。

土師器

坏(1~5) いずれも体部に段がつく。段は下位に位置し、1~3には段に対応する内面にかすかな稜がみとめられる。段から上は内弯気味に立ち上がり、底部は丸底である。調整は外面の段から上に横ナデ、段以下にヘラケズリが施されている。内面はヘラミガキされ1・3~5はさらに黒色処理されているが、2は再酸化のためか黒色処理が観察されない。

甕(6~10) 6~9は長胴形を呈するものである。口縁部は外反し、端部が角ばるものと丸くおさまるものとがある。頚部に1・2段の段がつき、体部はわずかにふくらみをもつ。底部はやや下方に突き出すものがある。体部の調整は6・9が外面刷毛目のちヘラミガキ、内面ヘラナデ、7が内外面刷毛目、8が外面軽いケズリ、内面ナデである。10は体下部以下が残存する。体部はふくらみが強く球形を呈するものと思われる。底部はいくぶん下方に突き出す。体部外面に刷毛目、内面に刷毛目・ナデ・ヘラミガキが施され、底面に木葉痕がみとめられる。

第13号住居跡

〔位置〕 E-22・23区に位置する。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 南半を欠くが、残存部からみて平面形は方形を基調としたものと考えられ、 西辺長は2.3mである。

〔堆積土〕 1層のみ認められる。

「壁」 地山をそのまま壁としており、立ち上がりはゆるやかで、壁高は最も高い箇所でも10 cmにすぎない。

〔床面〕 地山を床としており、平坦で硬い。

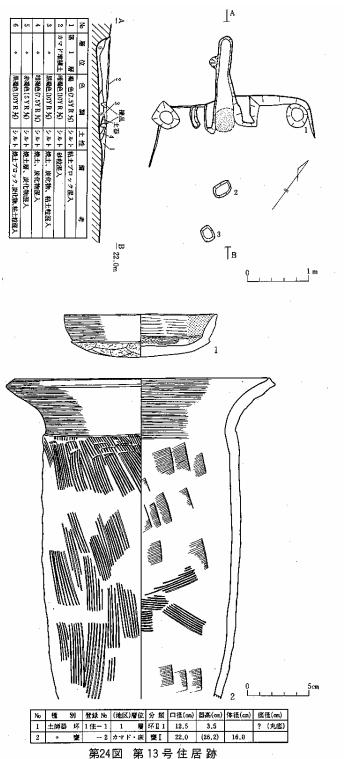
〔柱穴〕 住居内および近接してい くつかのピットが検出されている が、いずれも住居との共伴関係がわ からず、柱穴は不明である。

ピットNo. 1 深さ (cm) 27 17 21 認められない。 [周溝]

〔カマド〕 北壁中央部に付設され ている。燃焼部と煙道部から成る。 燃焼部は幅86cm、奥行50cmで側壁は 粘土で構築されており、底面には40 ×30cmの範囲に焼け面が認められ る。燃焼部底面は段差なく煙道部へ 移行する。煙道部は幅22cm、長さ1 mで、天井部が失われて溝状を呈す る。底面は先端に向ってわずかに下 る。軸方向はN-36°-Wである。 〔貯蔵穴状ピット〕 認められない。 〔出土遺物〕 堆積土中、床面、カ マド内から土師器、須恵器が出土し ている。図示できたものは土師器坏、 甕が1点ずつである。

土師器

坏(1) 外面の下位に段を有す る坏である。段は鋭く明瞭な稜線を 形成し、対応する内面にも屈曲が認 められる。底部は丸底である。調整 は外面の段以上に横ナデ、段以下に



ヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

甕(2) 長胴形を呈する甕である。口縁部は外反し端部がわずかにつまみ出される。頚部に段をもち、体部は直立して下端近くでややすぼまる。体部の器面調整は、外面に刷毛目が施され、内面はヘラナデがみられ一部刷毛目が認められる。

2. その他の遺構出土遺物

第1竪穴遺構出十遺物

十師器

高坏(1) 脚柱状部の破片である。上端に坏底部がわずかに残存しており、内面にヘラミガキ、黒色処理が観察される。脚柱状部は下方に開き、外面にヘラミガキ、内面にヘラナデ・ナデおよび黒色処理が施されている。

第3竪穴出十遺物

須恵器(11) 大甕の口縁部片である。5段に櫛歯状文様が描かれている。

第5竪穴出十遺物

須恵器(9) 円面硯の破片と思われる。外面中位に段がめぐる。

第14竪穴出十遺物

須恵器(8) 全体形は不明である。台状のもので下半に段がつく。

第15竪穴遺構出十遺物

十師器

坏(2) 底部を欠く。外面下位に段をもつ。段から上は内弯気味に外傾する。調整は外面段から上に横ナデ、段以下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。

第3井戸出十遺物

須恵器

甕(3) つまみを欠損している。天井部は丸味をもち、口縁部はわずかに屈曲して端部が下 方に折れ曲がる。天井部外面に回転ヘラケズリが加えられている。

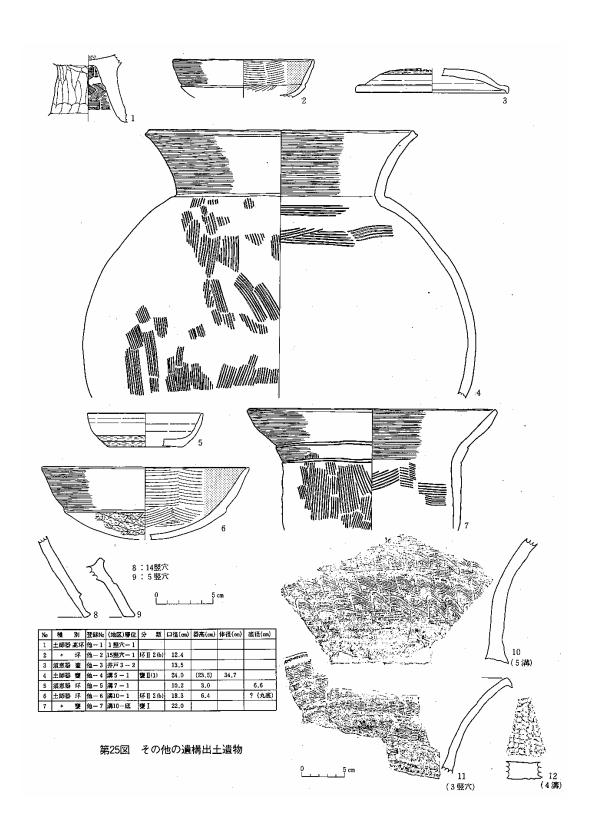
第4溝出土遺物

瓦(12) 平瓦の細片である。凸面に格子叩き目、凹面に布目がみられる。

第5溝出十遺物

十師器

甕(4) 体部が球形を呈する甕である。口縁部は外反し、上端に沈線状のくぼみがめぐる。 頚部は「く」字状に屈曲し、外面に段がつく。体部の調整は内外面に刷毛目が施されている。 須恵器(10) 大甕の口縁部片である。4段に波状文様が描かれている。



第7溝出土遺物

須恵器

坏(5) 口縁部から体部は内弯気味に外傾する。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ が加えられ、底部の切り離し技法は不明である。

第10溝出土遺物

十師器

- 坏(6) 外面下位に段がつく。段から上は内弯気味に外傾し、底部は丸底である。調整は外面段から上に横ナデ、段から下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。
- 甕(7) 長胴形を呈する甕と推定される。口縁部は外傾し端部は角ばる。頚部に2条の沈線がめぐる。体部の調整は内外面とも刷毛目がみられる。

3. 堆積層出土および層位不明の遺物

土師器・須恵器・石器・勾玉・砥石が出土している。このうち石器は時代が異なるが、数が 少いことから同章に含めて記述した。

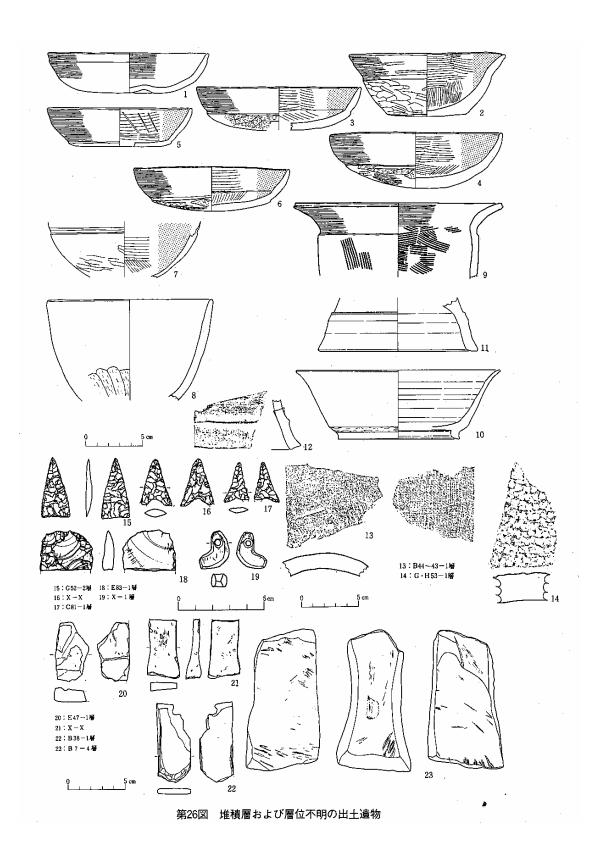
土師器

坏(1~8) 外面に稜のつくもの(1) と、段のつくもの(2~6)、沈線のつくもの(7)、 稜・段・沈線のつかないもの(8)とがある。稜のつくものは口縁部にわずかな稜がつく。底部 は丸底であるが一部がくぼむ。内外面とも上半に横ナデ、下半にナデが施されている。

段のつくものは段の位置が上位、下位、下端につくものに分かれる。2は段が上位につき、段から上は外反し、底部は平底である。調整は外面段から上に横ナデののち一部ヘラミガキ、段以下にヘラミガキ、内面にヘラミガキ、黒色処理が施されている。3・4・6は段が下位につき、段から上は内弯気味に外傾し、底部は丸底である。調整は外面の段から上に横ナデが施され、段から下はヘラケズリされているが、4は一部にヘラミガキがみられる。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。5は段が下端につく。段から上は内弯気味に外傾し、底部は平底である。調整は外面の段から上に横ナデ、底部にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。

沈線のつくものは口縁部と底部を欠く。外面にヘラミガキ、内面にヘラミガキ・黒色処理が みられる。

- **稜・段・沈線のつかないものは深く境形を呈する。内外面とも摩滅が著しいが、外面の一部** にヘラケズリの痕跡が観察される。
- **3** (9) 口縁部から体部上端までの破片である。長胴形を呈する甕と推定される。口縁部は 外反して上端に沈線上のくぼみがめぐる。頚部に段がつく。体部内外面に刷毛目が施されて



⊠ No	種	别	登録 No	(地区)層位	分	類	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)
26🗵 1	土師器	坏	堆積層-1	E84-2層	Ι¥Ι		14.2	3,5	? (丸底)
2		坏	-2	x-x	环Ⅱ:	2 (a)	13,8	5,5	6,9(平底
3		坏	-3	F61-1層	坏匠	2 (b)	14,5	3.8	?(丸底
4		坏	-4	D37一1層	坏Ⅱ2	(P)	15.2	4.9	? (丸底
5		坏	-5	x-x	坏11 2	2 (c)	12.7	3.4	9.0(平底
6		坏	-6	x-x	环Ⅱ	2 (b)	13.7	4.0	?(丸底
7		坏	-7	×-×	坏皿(H)			
8		坏	-8	×-×	坏IV(2)	14.7		
9		漤	-9	×-×	逐		18,4		
10	須恵器高	台付坏	-10	x-x			18.0	6,1	10,7
11	台	흠	-11	F51-2層				(4.7)	14,0
12	円	面砚	-12	F54 2層					

いる。

須恵器

高台付坏(10) 口縁部は外反し体部は外傾する。体部下端はヘラケズリが施されて角ばっている。底部は回転ヘラケズリが加えられ、切り離し技法は不明である。高台は短く直立する。

器形不明(11) 台部と思われるがいずれの器形を成すものか不明である。外面上部に明瞭な稜がめぐる。

円面硯(12) 台部の破片である。中位に稜線がめぐり小さな円窓がみられる。

亙(13・14) 13は丸瓦片である。凸面は一部に縄叩き目を残してすり消し、凹面に布目がみられる。14は平瓦片である。凸面に格子叩き目、凹面に布目がみられる。

石器

石鏃(15~17) いずれも無茎の石鏃である。15は基部が平坦で、側縁がわずかにふくらみをもつ。片面の一部に一次剥離面を残している。16、17は基部にえぐりが入り、凹状を呈している。側縁は17がややくぼみ、16は直線的である。一部に一次剥離面を残す。

不定形石器(18) 半欠品である。背面の縁辺にのみ荒調整が加えられている。

勾玉 (19)

「く」字状を呈し短い。孔は両側から穿たれている。製作時の擦痕がみられる。

砥石 (20~23)

20・21・22は板状を呈し、表、裏面が砥面である。砥面はごく平滑であるが、21の片面中央はわずかにくぼんで擦痕が多くみとめられる。22の側縁にはケズリに似た痕跡がみられるが、製作痕か使用痕が半全としない。21は角棒状を呈する。表・裏・片側面が砥面であるが、表、裏面が著しくくぼんでおり、主な砥面はこの2面と思われる。

B. 考 察

1. 出土土器の分類

〈十師器〉

土師器には坏、甕、甑、高坏、小形土器がある。出土量は甕が最も多い。次いで坏が多く、 甑、高坏、小形土器はごく少量である。

坏

図示できたものは32点である。稜、段、沈線の有無によって次のように分類される。

I 外面に稜をもつもの。

胎土、色調等の特徴は他の土師器と異なる点をもつが、一応土師器として分類を行った。器面調整は口縁部から体部の内外面に横ナデがみられ、底部は不明である。

- Ⅱ 外面に段をもつもの。
 - II₁ 内面にも段がつくものである。段の位置は中位(a)、下位(b)にあり、前者は口縁部が外反気味、後者は外傾する。底部はいずれも丸底である。調整は外面段から上に横ナデ段から下にヘラケズリ、内面にヘラミガキ・黒色処理が施されている。
 - II_2 内面には段がつかないものである。段の位置は上位(a)、下位(b)、下端(c)とがある。(a)は段以上が外反し、平底、(b)は段以上が内弯気味に外傾し、丸底、(c)は段以上が内弯気味で平底である。

器面調整は外面の段から上に横ナデがみられ、段から下に (a) ではヘラミガキ、

- (b)・(c)ではヘラケズリ(まれにヘラケズリ後刷毛目)が施されている。内面は ほとんどがヘラミガキ、黒色処理されているが、再酸化のためか黒色処理の観察されないものもある。
- Ⅱ 外面に沈線の巡るもの。

沈線は1条のものと、3条のものがある。いずれも口縁部や底部を欠く破片で、全体形は判明しない。底部は丸底のものがある。器面調整は外面全体にヘラミガキ・黒色処理されるもの、ヘラミガキされるもの、段から上が横ナデ、段から下がヘラケズリされるものとがある。内面はヘラミガキ・黒色処理されている。

	70 - X	Hilt AH1 42 7	7 70%	
Ⅰ. 稜あり	•			丸底
	1. 内面段あり			丸底
Ⅱ. 段あり		外面段の位置(a)上位		平底
Ⅱ. FXのり	2. 内面段なし	(b)下位		丸底
		(c)下端		平底
Ⅲ. 沈線あり			(i)外面ミガキ・黒色 (ii) ペガキ (iii) ペガキなし	(丸底)
IV. 梭・段・沈線なし	(1) 浅い (2) 深い			(平底)

第2表 土師器坏の分類

IV 稜、段、沈線のみられないもの。

口縁部、体部は外傾するが深い境形のもの、浅く皿形のものがあり、底部は丸底のものがある。口縁部は内弯気味のもの、直線的なもの、外反気味なものなどがある。器面調整は外面全体にヘラミガキ、ヘラケズリの施されるもの、上半に横ナデ、下半にヘラケズリの施されるものがあり、内面はいずれもヘラミガキ、黒色処理されている。

奪

図示できたものは38点、そのうち分類可能なものは29点である。器形の特徴から次の3類に 分かれる。

I 体部が長胴のもの。いわゆる長胴形を呈する。

口縁部は外反あるいは外傾する。端は角ばるものと丸くおさまるものがあり、上端に 沈線状のくぼみがめぐるものもある。頚部には段あるいは沈線がめぐり、それが2段・3 段につくものもある。体部は長く、わずかにふくらみをもつ。底部はいくぶん下方に突 き出すものと変化なくおさまるものとがある。体部の器面調整は、外面・内面いずれも 刷毛目の施されるものが多く、他に外面にはヘラミガキ、軽いケズリが、内面にはヘラ ナデ、ナデが観察される。

Ⅱ 体部が球形のもの。いわゆる壺形を呈する。

口縁部は外反し、端部は角ばるものと丸くおさまるものがある。頚部は「く」字状に 屈曲し、段のつくものが多い。法量で大形(1)、小形(2)の別がみられ、小形のもの は大形に比して体部の張り出しが弱く、そのため頚部の屈曲も鋭さをもたない。体部の 器面調整は、外面に刷毛目、ヘラミガキ、ヘラケズリ、ナデ、内面に刷毛目、ヘラナデ が施されている。

Ⅲ 体部が短く外傾するもの。いわゆる鉢形を呈する。

小形で器高が低く、したがって体部が短く外傾する。口縁部は外反して端部が角ばる 頸部に段がつく。底部はいくぶん下方に突き出している。体部の器面調整は外面にヘラ ミガキ、内面にナデが施されている。

觝

1 点のみ出土している。鉢形を成す無底の甑である。口縁部はわずかにくびれて外傾し、段がつく。体部は直線的に外傾し、傾きは口頚部と同程度である。

高坏

図示できたのは脚部破片が1点だけである。

小形土器

図示できたのは3点である。口縁部から体部が外傾し、平底で、調整は荒く、粘土積み上げ

痕が観察される。

〈須恵器〉

須恵器には坏、高台付坏、蓋、甕などがある。甕は図示できなかった。

坏

図示できたのは2点である。いずれも体部下端から底部にかけて回転へラケズリが加えられ切り離し技法は不明である。

高台付坏

図示できたのは1点だけである。体部下端から底部にかけて回転へラケズリが加えられ、短い 高台が付く。

蓁

図示できたのは3点である。いずれもつまみや口縁部を欠く破片で、全体形は不明である。つまみは中央のくぼむものがある。天井部は回転ヘラケズリされており、口縁端部は下方に折れ曲がるものがある。

円面硯

2点出土している。いずれも小破片である。

台部

全体の器形が判明しない台部の破片が2点ある。外面に段・稜がつく。

2. 出土土器の組み合せとその年代

土師器・須恵器は竪穴住居跡、竪穴遺構、土壙、ピット、溝、堆積層などから出土している。 そのうち共伴関係を求め得るのは竪穴住居跡出土のものであり、第3表に示したとおりである。 なお、住居跡に伴うとした土器は、カマドの構築に使用されたもの、床面上、カマド内、貯蔵 穴状ピット内、柱穴および床面で検出されたピット内から出土したものがあり、それらは住居 構築時、使用時、廃絶時のものであるが、その時間差は極めて少いと考えられ、一括して伴出 土器として取り扱った。

土師器

坏は、5類に分類された。各住居跡とも出土点数が少く、住居毎の共伴関係は一様でない。その中で出土量が最も多く、器形も特徴的な II_2 類を軸としてみれば、I 類を除くすべての類がII 2類と共伴しており、それらには関接的な共伴関係を認めることができる。

甕は長胴形のⅠ類と壺形のⅡ類とは複数の住居跡で供伴し、また坏Ⅰ類以外の各類とも伴っている。鉢形のⅢ類は単独で出土しているが、細部の器形や調整の特徴はⅠ類との類似点が多

く、Ⅰ・Ⅱ組と組み合ってさしつかえないものと考えられる。

甑は坏Ⅱ。類、甕Ⅰ・Ⅱ類と伴っている。高坏・小形土器は他との共伴関係が不明である。

須恵器

須恵器は、わずかに坏が土師器坏Ⅱ₂・IV類、甕Ⅰ・Ⅱ類と共伴しているだけで、他の高台付 坏・蓋・円面硯などは共伴関係が不明である。

このように本遺跡出土の土師器・須恵器ではその多くが一群を成しており、土師器坏 Π ・ Π ₂・Ⅲ・Ⅳ類、甕Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ類、須恵器坏が含まれる。

これら一群の土器のうち土師器は東北地方南部の土師器編年における国分寺下層式(氏家: 1967) に比定され、また須恵器も共伴関係によって同時期のものと考えられる。

なお、上記の群に含まれない土器の年代は、土師器坏I類は土師器とすることに疑問な点も ある土器であり不明、土師器高坏は内面が黒色処理されているので住社式から国分寺下層式ま でのいずれかに属するものと考えられ、土師器小形土器は類例が少なく不明である。須恵器高 台付坏、蓋は類似するものが土師器国分寺下層式、表杉ノ入式のいずれにも伴う例がある。円 面硯は小片のため時期が不明である。

					£			β	TÎ.				器			:	須. 源	ţī, ¦	딿
		环						业				高坏	饠	小形	坏	高台 付坏	蓋	台部	
		I	II.	∏₂(a)]] ₂ (c)		IV_	I	∏(1)	Ⅱ(2)		(4)~1.	ыд	土器	, 4	付坏	362	12 44
	号 住 居 跡		1		2					1	1 1		1	1					
	号住居跡								1					"					
第 3	号住居跡			1	1			1	2	1			!			1			,
第 4	号住居跡	Ì	,		3(1)	1		1(1)	2						1				
	号住居跡		ļ								1								
	号住居跡													-	(2)			(1)	
第 7	号住居跡								3		T		i						
	号住居跡				1		2		4	1				1					
	号住居跡								(1)			1			(1)				
)号住居跡				(1)			$\overline{}$	1(1)										
	号住居跡																		
	号住居跡				5				4	1		• •							i
	号住居跡		(1)						1										
	竪穴遺構		1					<u> </u>			1		1	-					<u> </u>
第15	竪穴遺構		_		1														
井	声 3										\neg					-		1	
第	5 満		\vdash							1									
第	7 溝	1			-					-						1	-		\vdash
第	10 溝				1				1		-					1			
堆	積層	 		1	3	1	-	1	-								1		1
_	150 円 住居跡出土は			<u> </u>				1 1	Τ.								1		

. 第3表 図 示 土 器 集 計 表(土師器・須恵器)

3. 出土土器の問題点

前述のように、共伴関係が成立して一群と認められた土器のうち、土師器は国分寺下層式と 考えられる。その特徴をまとめると次のようになる。

坏は内外面に段のつくもの(Ⅱ,類)、外面にのみ段のつくもの(Ⅱ。類)、沈線の巡るもの(Ⅲ 類)、

段、沈線のつかないもの(IV類)とがある。底部形態は Π_1 類が丸底、 Π_2 類は平底と丸底の両者があるが、段が下位につくものが丸底、上位・下端につくものが平底である。 Π ・IV類は底部の残存するものは少ないが、 Π 類に丸底、IV類に平底のものがある。外面の器面調整は Π_2 類のうち段が上位につくものと Π 類、IV類の一部とにヘラミガキされるものがあるほかは、いずれも横ナデ・ヘラケズリが施されている。内面はすべてヘラミガキ・黒色処理がみられる。数量は Π_2 類が大半を占め、他の類はごく少量である。丸底と平底とを較べると丸底が8割である。

甕は長胴形のもの(I類)、壺形のもの(II類)、鉢形のもの(II類)がある。長胴形・壺形のものは、法量に大小があり、それぞれに応じた用途を目的として製作されたものと考えられる。数量はI類が大半を占め、次いでII類が多く、III類はごくわずかである。

甑は量が少い。鉢形の器形をした無底のものがある。

これらの土師器に伴う須恵器はごくわずかで、回転ヘラケズリの再調整が加えられて切り離し技法の不明な坏がみられるだけである。

以上のように本遺跡出土の国分寺下層式期の土器をまとめることができる。

ところで国分寺下層式は陸奥国分寺跡出土の土師器を標識として設定され、(氏家:1967) その後の研究によって対馬式が国分寺下層式に包括されるとした見解(桑原:1976、小井川・ 高橋:1977)が示された。さらに志波姫町糠塚遺跡の報告では同式の多様な土器組成が明らか にされている。

氏家氏による国分寺下層式設定の規準は特に坏について求められ、ロクロ不使用・丸底・内 黒で外面に段がつくことであり、さらに段の位置等によってⅠ・Ⅱ・Ⅲ類の細分が試みられて いる。

本遺跡の土器群の坏には平底のもの、また内面にも屈曲(段)のみられるもの、段等のみられないものなども含まれるが、坏全体量の大半を占める類(坏Ⅱ₂類)の特徴は上記の規準にあてはまる。

また糖塚遺跡における国分寺下層式の特徴をまとめると次のようになる。

坏は丸底・平底の両者があり後者が多い。それぞれの外面に段、あるいは沈線のつくもの、 つかないものがあり後者が多い。外面にヘラミガキが施されており、内面はヘラミガキ・黒色 処理されている。

甕は長胴形が多く、壺形・鉢形もある。

他は量的に少ないが、無底式・多孔式の甑、高坏、埦、蓋がみられる。

またこれらに伴う須恵器は、坏ではヘラ切り・回転糸切り・再調整のため切り離し不明の三者があり、回転糸切り技法はその初期の段階として位置づけられている。他には高台付坏(稜境)、蓋、甕、壺、鉢がある。

本遺跡と糖塚遺跡とを比較すると、その内容は大略一致するものと考えられるが、なお異なる点を有している。

その相違点は主に坏で認められ、本遺跡の場合には①内外面に段を有するものがあること、 ②丸底で段・沈線のつかないものと、平底で沈線のつくものが存在しないこと、③外面に段の つくものが大半を占めること、④平底と丸底とでは丸底が多いこと、⑤調整は外面のヘラミガ キは少なく、横ナデ・ヘラケズリが多いことがあげられる。ほかには高坏・埦・蓋の器形がみ られないということがある。

このうち②の点と高坏・塊・蓋のないことは時期の違いや地域の違いによること、また本遺跡では土器の全体量が少ないために欠落していることなどのいずれかによるものと考えられる。 他の点については、国分寺下層式の前型式である栗囲式の内容に類似性が求められ、したがって本遺跡における土師器は、糠塚遺跡のものよりも古い要素を有していると考えられる。

また伴出する須恵器の中に、糠塚遺跡ではその導入の初期段階とされる回転糸切り技法によって切り離された坏がみられ、また須恵器の出土量が本遺跡の場合よりはるかに多いことも上記の関係を間接的に強めているといえよう。

同時期で、本遺跡の土師器に近似した土器を出土する遺跡としては、高清水町五輪C遺跡など、糠塚遺跡例に近似するものとしては金成町佐野遺跡、田尻町天狗堂遺跡などがある。

このように、本遺跡と糠塚遺跡との間に認められる土器群の相違は県内、特に県北部を中心にしてある程度普遍的になりつつあり、したがってこの関係が国分寺下層式の細分につながり得る可能性を有しているものと考えられる。

なお、土器の絶対年代に関してはそれを推定し得る遺物がなく不明であるが、国分寺下層式 期は大まかに奈良時代と考えられており、また本遺跡の土器が同式の中でも古い方に位置づけ られそうなことから、その前半期としておきたい。

4. 竪穴住居跡の年代と問題点

竪穴住居跡は13軒発見されており、その所属年代は、伴う遺物により明確なものが第1・3・4・8・12号住居跡の5軒で、国分寺下層式期である。この他の8軒のうち、第2・7・9・10・13号住居跡は土師器甕のみが伴出しているため時期を限定しにくいが、それらの甕が国分寺下層式期とすることのできる住居跡出土のものとごく類似しており、また、他に住居内から国分寺下層式以外の遺物が出土していないことを考え合わせれば、これらの住居跡も国分寺下層式期のものとしてさほど無理がないものと推定される。第5・6・11号住居跡については、その構造上の特徴から古代に属するものではあるが、伴出遺物がなく、時期は不明である。

住居跡の形態をみれば、平面形はいずれも方形を基調とし、全体形の明らかなものはすべて

正方形である。規模は一辺が2.3mから5.1mまでの幅があり、その中で大中小のまとまりをみとめることができる。大形は一辺約5mの第3・8・10・11号住居跡の4軒であり、中形は一辺3.5 m内外の第1・2・4・5・6・12号住居跡の6軒で、小形は一辺2.3mの第13号住居跡1軒である。これら規模の違いによる構造の特徴をみれば、周溝と柱穴に現われており、大形のものにはそのほとんどに形態の整った周溝と4本と考えられる柱穴がみられるのに対し、中・小形では1軒にのみ周溝はあるが柱穴は全くみとめられない。柱穴については、本遺跡で発見された住居跡においては住居に伴うピットに柱痕跡の認められたものがごく少なかったことにより、柱穴とする第1の条件を配置の規則性としており、したがって、大形の住居では規則的な配置をした柱穴(柱)を必要としている。中・小形の住居では、柱を竪穴内に立てたと想定すれば不規則なピットのいずれかを柱穴として使用したか、あるいは掘主柱ではなく、床面に直接のせる柱であったかのいずれかであると考えられ、前者の方法であれば大形の住居とに上屋構造の違いが想定されて粗雑なものであったと考えられ、後者であれば、その痕跡が検出されていないため比較することができない。

貯蔵穴状ピットは中形の住居にのみみられる。

カマドは11軒に付設されている。検出されなかった1軒は第11号住居跡で、この住居跡は第10号住居跡その他の遺構によって切られており、そのためにカマドが削平されたものと考えられる。カマドの付設場所は北・東・南辺で、その方向は北(斜面上方)を向くものが多く、南(斜面下方)向きは1軒だけである。燃焼部側壁は粘土で構築され、土器を補強に用いているものもある。

このほか住居内にみられる施設としては第1号住居跡で検出された小形の焼けた浅いピットがある。周囲から多量の鉄宰とフイゴの羽口が出土している。類似の遺構は多賀城跡(多賀城跡調査研究所:1977)、城生柵跡(中新田教委:1980)などで検出されており、小鍛治遺構とされている。多賀城跡の発見例では、ピット内の焼け面が「八」字状に開いて焼けていない部分の存在することが特徴とされており、本遺跡の場合ピット内全面が焼けていて多賀城跡例と異った点もあるが、その性格は同様であろうと推定したい。その時期については遺構が第8号住居跡の床面に構築されていることから、住居跡の時期一国分寺下層式期一と同じであるが、同住居跡は、貯蔵穴状ピットを埋めて貼り床としていることから、住居使用中に一部改造しており、それが小鍛冶遺跡の構築に伴って行われた可能性も考えられる。

住居廃絶後の堆積土は、各住居とも色調・土性が近似しており、いずれも自然流入土である。 堆積土からの出土遺物は土師器が大半を占めるが、わずかに堆積土上部から中世陶器も出土していることからみて、住居が完全に埋まり切ったのは中世頃であろうと考えられる。

次にこれらの住居跡の分布状況をみると、大・中形の第1~12号住居跡は互いに近接している

のに対し、小形の第13号住居跡だけはかなり離れて位置している。これは第13号住居跡が今回の調査範囲の外に存在するかも知れない別の住居群の一部であること、あるいは第1~12号住居跡と同一の住居群には属するが、何らかの目的で離れた場所に建てられたことの2つの理由が考えられる。そのいずれかを確定するには将来における隣接地の調査を持たなければならないが、白石市青木脇後遺跡、金成町佐野遺跡、志波姫町糖塚遺跡など奈良・平安時代の集落遺跡に同様な例がみられ、この時代における住居跡群の構成の1つのタイプとなる可能性がある。なお、離れて位置する住居はいずれの遺跡の場合でも規模が小さく、形態は整っていない。また、カマドをもつ例ともたない例とがあって火の使用という点で大きく異なっており、これらがすべて同一の性格とはいえないかも知れない。本遺跡の場合には、何らかの特殊な目的によって建てられたものとは思われるが、詳細な性格について言及できる資料がない。

近接Lて位置する12軒は、そのうち2ヶ所で2軒ずつの重複が認められており、また、ごく接近して軒が重複しそうなものもあって、それぞれに時間差が認められる。ただし、出土遺物からみれば、国分寺下層式期の中でもその前半期という限られた時期におさまる可能性が指摘でき、住居間の時間差もその中での変遷であるといえる。

第4表	観音沢遺跡竪穴住居跡一覧表
212 1 22	时 日 《 / / / / / / / / / / / / / / / / / /

İ	五學形	規模(m)	周溝	柱穴	貯蔵穴	h v F				n+	Ma		
	ПЩЛИ	AND SECURIT	101 (44)	在八	RT MAX /	付設場所	方 向	側壁素材	支 脚	煙道の傾斜	煙出しピット	時	期
1号住居跡	正方形	3.7×3.4	有、断続的		カマド左側	北壁西より	N-15*-W	粘土			有	国分寺下	層式期
2号住居跡	正方形	3.0×2.8			カマド右側	北 壁中央	N-4°-W	粘土十土器		-	有	(国分寺)	層式期?)
3号住居跡	方 形	5.0×	有	2(4本か?)		北壁	N-6*-W	粘土				国分寺下	層式期
4 号住居跡	正方形	3.5×3.2				南壁東より	S-38°-E	粘土				国分寺	· 層式期
5号住居跡	方 形	3.8				北壁中央	N-41°-W	粘土	有(土師器賽)			不	明
6号住居跡	正方形	3.8×3.4			·	東壁北より	N-57 - E	粘土		بسسب	有	不	明
7号住居跡						東 壁		粘土				(国分等下	層式期?)
8号住居跡	正方形	4.9×4,9	有 三辺	4		南壁中央	S-27°-W	粘土		-	有	国分寺下	層式期
9号住居跡	方 形					北 壁	N-20°-W	粘土 .			有	(国分寺下	層式期?)
10号住居跡	方 形	5,1×4.6				北壁中央	N-12 -E	粘土	有(土師器褒)	-	有	(国分寺下	層式期?)
11号住居跡	正方形	4.8×4.6	有一部	2 (4本か?)								不	明
12号住居跡	正方形	3.7×3.6				北壁西より	N-24°-E	粘土十土器	_		有	国分寺下	層式期
13号住居跡	方 形	2.3×				北壁中央	N-36*-W	粘土			無	(国分寺下	層式期?)

V. 中世の遺構と遺物

A. 発見された遺構と遺物

中世の遺構としては、掘立柱建物跡7棟、竪穴遺構37基、井戸跡9基、円形周溝1基、土壙110 基、そのほか溝・ピット多数などが発見された。その分布は、円形周溝が平坦面に位置するほかは、平坦面から南斜面さらに沢の部分まで調査区のほぼ全域に広がっている。遺構の確認面はすべて地山上面である。

1. 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は7棟発見された。

第1号建物跡

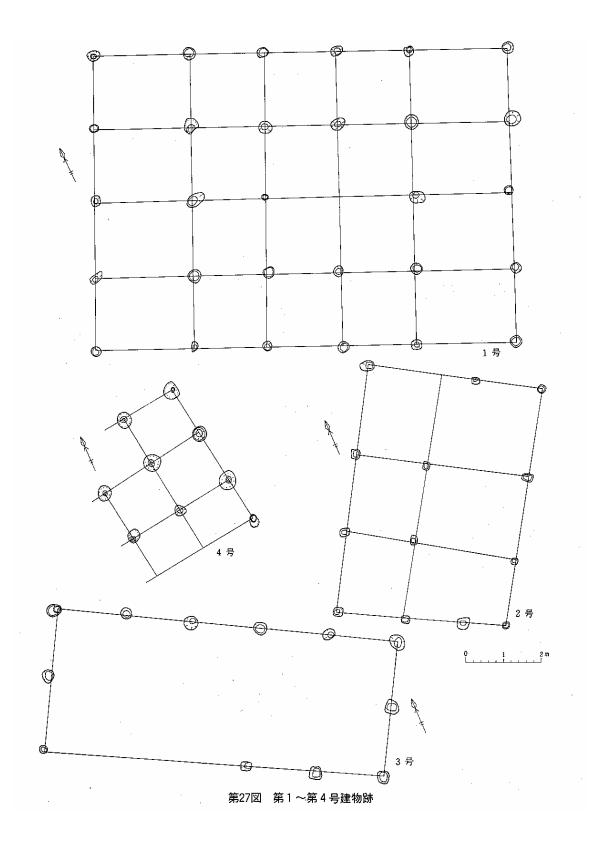
 $C \sim F - 62 \sim 65$ 区に位置する。第2号住居跡を切っている。第2・3溝ピット群とは位置的にみて重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は東西に長く桁行5間(約11.2m)、梁間4間(約7.9m)の総柱である。桁行の柱間は北列では西側から2.6・2.0・2.0・1.9・26 m、南列では西側から2.6・2.0・2.1・2.0・2.6m、梁間の柱間は西列では北側から2.0・1.9・2.0・1.9m、東列では北側から2.0・1.8・2.1・2.0m、桁行、梁間ともやや不揃いで、桁行の西、東端の柱間は広い。柱穴の掘り方は平面形が径20~40cmの円形を呈するが、なかには楕円形や不整形のものもある。深さは20~40cmである。柱痕跡の識別できたものは1個だけである。径15cmの円形を呈している。 $P_{12} \cdot P_6$ から土師器の細片が出土している。

第2号建物跡

E・F $-39\sim41$ 区に位置する。位置的にみていくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は南北に長く、規模は桁行3間(約6.6m)、梁間2間(約4.6m)の総柱である。桁行の柱間は西列で北側から2.4・2.1・2.1m、東列で北側から2.4・2.2・1.7 m、梁間の柱間は南列で西側から1.8・2.7mと不揃いである。ピットの掘り方は一辺20~25 cmの方形を呈しているものが多いが、なかには径約20cmの円形を呈しているものもある。深さは20~30cmである。柱痕跡の識別できたものはない。

第3号建物跡

B~E-27・28区に位置する。第19・20竪穴遺構やいくつかのピットと重複する位置にあるが、切り合い関係がないため、その新旧関係は不明である。平面形は東西に長く、規模は桁行5間(約9.1m)、梁間2間(約3.7m)である。桁行の柱間は北列で西側から1.9・1.8・1.8・1.9・



1.8m、南列で西側から?・?・?・1.9・1.8m、梁間の柱間は西列で北側から1.8・1.9m、東列で北側から1.8・1.9mでほぼ等間隔である。掘り方は径30~40cmの円形のものが多いが、なかには径約20cmの円形のものや、一辺約30cmの方形のものもある。深さは30cmのものもあるが、半数以上は20cm前後のものである。掘り方と柱痕跡の区別できたものは1個ある。柱痕は径約15cmの円形を呈している。

第4号建物跡

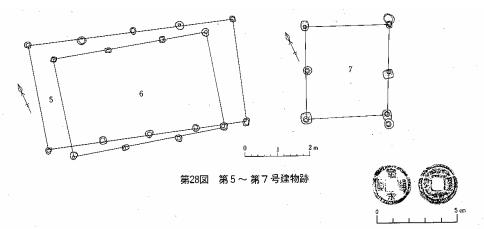
E・F-46~48区に位置する。23号土壙を切っている。22号土壙とは位置的にみて重複しているが、その新旧関係は不明である。西側が調査区外に延びているため、その規模は不明であるが、柱穴の配列状態から総柱の建物跡と思われる。柱穴は9個検出され、柱間は約1.4~1.5 mとほぼ等間隔にある。掘り方と柱痕跡の区別できたものは8個あり、柱痕は径15~20cmの円形を呈している。

第5号建物跡

 $B\sim D-(-4,-5)$ 区に位置する。第6号建物跡、第14・16溝と位置的にみて重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は東西に長く、規模は桁行4間(約6.4m)、梁間1間(約3.3m)である。桁行の柱間は北列で西側から1.7・1.6・1.4・1.6m、南列で西側から1.7・1.4・1.4・1.6m、南北梁間は西列で3.3m、東列で3.2mであり、やや不揃である。柱穴の掘り方は径約30cmの円形を呈するものが多いが、なかには一辺約25cmの方形を基調とするものもある。深さは20~30cmである。掘り方と柱痕跡の区別できたものは1個ある。柱痕は径約10cmの円形を呈している。

第6号建物跡

第5号建物跡と同位置にある。平面形は東西に長く、規模は桁行3間(約4.8m)、梁間1間(約3.1m)である。桁行の柱間は北列で西側から1.7・1.7・1.4m、南列で西側から1.6・1.7・



1.5m、南北梁間の柱間は西列で3.1m、東列で3.0mで桁行が不揃である。柱穴の掘り方は径約25cmの円形のものと、一辺約20cmの方形のものとがある。深さは9~20cmであるが、20cm前後のものが多い。掘り方と柱痕跡の区別できたものはない。

第7号建物跡

F・Gー3区に位置する。規模は桁行2間(約2.8m)、梁間2間(約2.6m)の建物跡である。 柱穴の掘り方は一辺約30cmの方形を呈するものが多く、なかには径約25cmの円形を基調としているものもある。深さは20~40cmである。掘り方と柱痕跡の区別できたものは7個ある。柱痕は径15~20cm前後のものである。ピット1の掘り方埋土から北宋銭(皇宋通宝:初鋳造年1039)が出土している。

2. 竪穴遺構

第1竪穴遺構

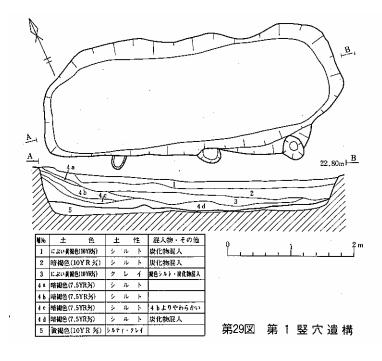
〔位置〕 B~D−56区に位置する。

〔重複〕 第8号住居跡、14 号土壙と重複しこれらを切っ ている。

〔平面形・規模〕 平面形は 隅が丸味をおびた長方形を呈 している。規模は4.8m×1.8 mである。

〔堆積土〕 堆積土は5層認め られる。

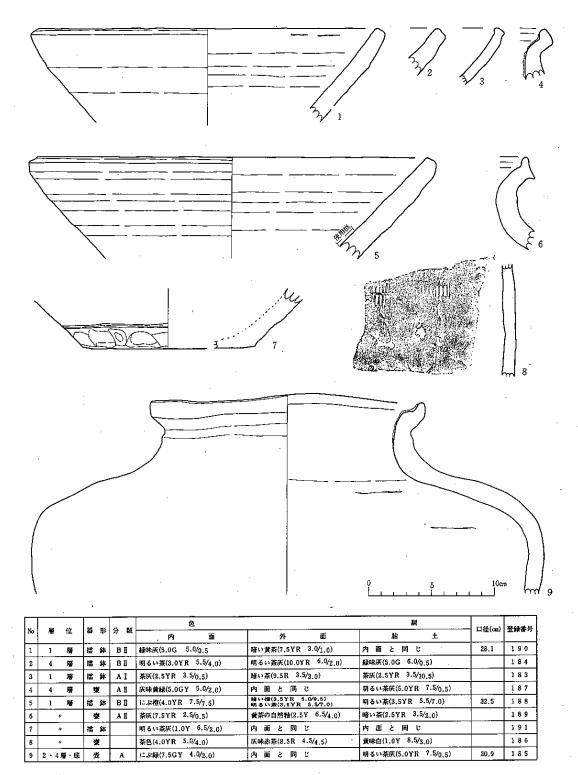
〔壁〕 地山を壁としている。 壁は下端が明瞭で急角度で立



ち上がり、壁高は最も保存の良い西壁で75cmである。壁面は凹凸がなく平坦である。

〔底面〕 掘り方に黄色粘土を貼って底面としている。面は凹凸がなく平坦であるが幾分西側が低い。

〔柱穴〕 南壁を掘り込んだ3個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は確認されなかったため、柱穴にするには問題点があるが、配列状況から壁柱穴の可能性も考えられる。 〔出土遺物〕 堆積土から土師器・須恵器・中世陶器の破片が出土している。



第30図 第1竪穴遺構出土遺物

無釉陶器

甕(4・6・8) 4・6は口縁帯をもつものである。口縁帯は幅が狭く、内面には沈線がめぐる。6は口縁帯下端が下方にするどくはり出し、上端は丸くおさまる。頚部には稜がめぐる。8は、体部外面に簾状格子目が押印されている。

壺(9) 口縁部が短く外反し、その先端が上方に折り曲げられて幅の狭い口縁帯を形成し、 内面には太い沈線がめぐる。 頚部は短かく直立気味である。 肩部はナデ肩になる。

擂鉢(1~3·5·7) 口縁部上端が平坦なもの(3)と沈線状の浅い凹みがめぐるもの(1・2·5)とがある。前者は口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がり、内外面が左右にわずかに張り出し、外面に凹みをもつ。後者は体部から口縁にかけて外傾する。

7は、底部破片である。外面体部下端に指頭状のオサエ痕が認められる。外面底部の調整は 不明である。内面は剥落している。

第2竪穴遺構

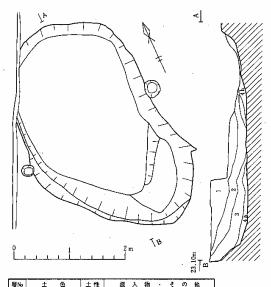
〔位置〕 F・G−55・56区に位置する。

〔重複〕 13号土壙、第8溝、ピットと重複している。13号土壙、第8溝を切っている。ピットとの新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 西側の一部が調査区外に延びて全体形は不明であるが、ゆがんだ楕円形を呈すると思われる。規模は4.3m×2.45mである。

〔堆積土〕 堆積土は4層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は 下端が不明瞭でゆるやかに立ち上が



層No	± 6	土性	混入物・その他
1	黑褐色(7.5YR%)	シルト	地山粒・木炭混入
2	黒褐色(10YR %)	シルト	地山の土をブロック状に含む。木炭混入
3	黑褐色(7.5YR%)	シルト	地山粒・木炭混入
4 a	無视色(10YR %)	シルト	地山粒・木炭混入
4 h	型場色(10YR %)	シルト	地山の土をブロック状に多骨に得入

第31図 第2竪穴遺構

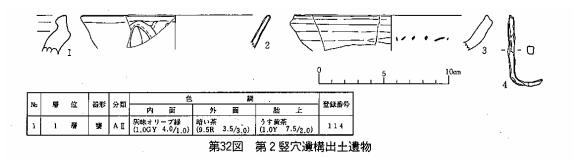
り、壁高は7.0cmである。壁面は凹凸がなく平坦である。

[底面] 地山を底面としている。底面は平坦で凹凸がない。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器、青磁、鉄製品の破片が出土している。

無釉陶器

甕(1) 口縁帯をもつものである。口縁帯の幅は狭く、内面に太い沈線がめぐり受口状を成す。



施釉陶器

おろし皿(3) 底部が欠損している破片である。体部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端の中央部が凹む。内面と外面体部下半に釉がかけられている。

中国産磁器

青磁碗(2) 体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。端部は丸味をもつ。外側には鎬 蓮弁文が彫られている。釉は緑灰色を呈し、内外面に厚くかけられている。胎土は灰白色を呈 し、黒色粒をわずかに含む。これと同一の口縁部破片がもう1点出土している。

鉄製品

釘(4) 頭部が欠損しているが、細長い棒状のもので先端に向って細くなっている。断面は方形である。

第3竪穴遺構

〔位置〕 B~D−54・55区に位置する。

〔重複〕 第7溝と重複し、それを切っている。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、規模は5.1m×3.3mである。

〔堆積十〕 堆積十は2層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度で立ち上がり、壁高は最も保存の良い 西辺で35cmである。壁面は凹凸がない。

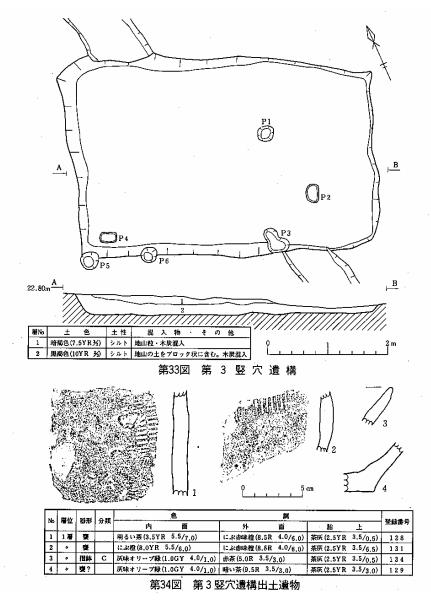
[底面] 地山を底面としている。底面には全体に小さな凹凸がみられる。

〔柱穴〕 底面に4個、南西隅に2個のピットが検出された。いずれのピットも柱痕跡は認められない。底面のピットはおのおの形状などを異にしており、さらに、配置に規則性もないため、柱穴かどうか不明である。また、南西隅の2個のピットは壁柱穴とも考えられるが、他の隅に組み合うピットがみられないため不明である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器の破片が出土している。

無釉陶器

甕 $(1 \cdot 2 \cdot 4)$ $1 \cdot 2$ は体部破片である。外面に平行タタキ目状(2)と簾状格子目(1)の押印が施されている。



4は底部破片で、外面にはザラザラしており、調整は不明である。

擂鉢(3) 口縁部が外傾し、口縁端部に近づくにつれ器壁が薄くなり、口縁端が丸くおさまる。外面の一部にヘラケズリが施されている。

第4竪穴遺構

〔位置〕 $D \cdot E - 53 \cdot 54$ 区に位置する。

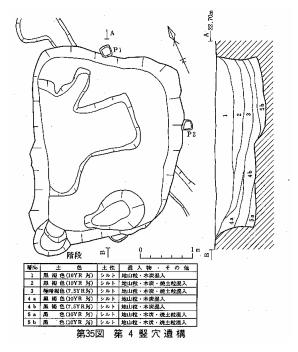
〔重複〕 第8溝、15号土壙と重複している。第8溝を切り、15号土壙に切られている。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、南東隅が丸味をもつ。規模は3.5m×2.8mである。

南西隅には半円形を呈する階段状の張り出しが付設されている。段は2段で、 段差は約25cmある。

〔堆積土〕 堆積土は5層認められる。 「壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で下半はほぼ垂直に立ち上がり、上半では外側に開く。壁高は最も保存の良い西壁で90cmであり、他の壁も70~80cmと深い。壁面はほぼ平坦である。

〔底面〕 地山を底面としている。北 西部には深さ20cmほどの不整形の落ち 込みがみられる。他の部分は所所に小 さな凹凸があるがほぼ平坦である。

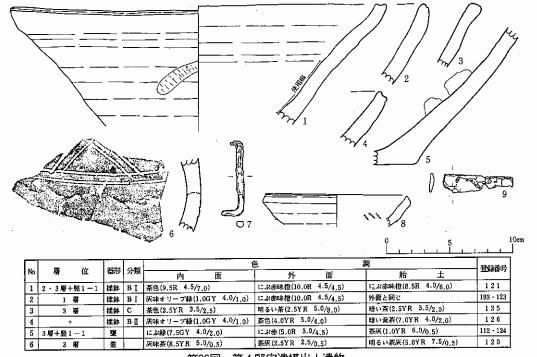


[柱穴] 壁を掘り込んだ2個のピットが認められた。壁柱穴とも考えられるが他に組み合う ピットがみられなかったため、その性格は不明である。

「出土遺物」 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器、鉄製品の破片が出土している。

無釉陶器

- **甕**(5) 第4竪穴遺構と第1竪穴遺構出土の破片が接合した資料である。底部は平底を呈し、 体部は直線的に外傾する。内面には窯壁の崩落土と思われるものが付着している。
- **壺**(6) 小破片であるが、壺の体部破片と思われる。体部外面に横走する二条の平行沈線 をひき、その直上に二条の平行沈線によって、たすきの文様を描いている。いわゆる蓮弁文壺 である。
- **擂鉢**(1~4) 口縁部上端が丸いもの(3)と沈線状の凹みがめぐるもの(1・2・4)とがある。2は片口がつく口縁部破片である。片口部の内外面にわずかにオサエ痕が認められる。1は、体部から口縁にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がる。
- 1は第1・4竪穴遺構出土の破片が接合した資料である。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に折れ曲り、屈曲部外面に稜がつく。口縁部上端には幅の広い沈線状の浅い凹みがめぐる。内面下半には使用痕がみられ、なめらかな面をしているが、部分的に凹凸がみられる。



第36回 第4竪穴遺構出土遺物

施釉陶器

おろし皿(8) 底部が欠損している破片である。体部から口縁部へ内弯気味に立ち上り、口縁部上端がわずかに凹む。内面と外面体部下半に明緑色の釉がかけられている。他に同一の破片と思われるものが1点出土している。

鉄製品

刀子(9) 刀身と茎の一部が残存している。銹化が著しく、細部の形態は不明瞭である。

釘(7) 先端部が欠損している。断面は方形である。

第5堅穴遺構

〔位置〕 G・H−52・53区に位置する。

〔重複〕 第10・11号住居跡と重複し、これらを切っている。

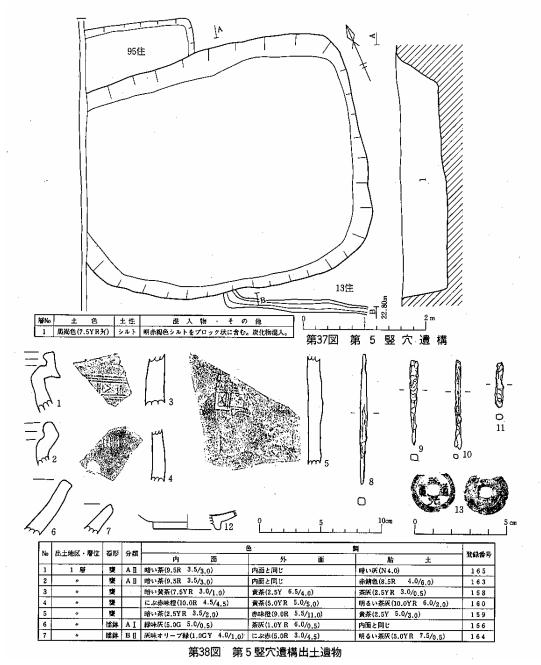
〔平面形・規模〕 西側の一部が調査区外に延びているが、平面形は方形を基調としていると 思われる。規模は上端で南北約4.1mである。

〔堆積上〕 堆積土は1層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で、急角度で立ち上がり、壁高は約80cmである。 壁面は凹凸がなく平坦である。

[底面] 地山を底面としている。底面は多少の凹凸がみられるが平坦である。

[出土遺物] 堆積土から土師器、須恵器、中世陶器、青磁、白磁の破片、古銭が出土した。



無釉陶器

甕 $(1\sim5)$ 1・2は口縁帯をもつものである。内面には太い沈線がめぐる。1は口縁帯下端が下方に張り出す。

3~5には押印がみられる。

擂鉢 (6・7) 口縁部上端が平坦なもの (6) と沈線状の凹みがめぐるもの (7) とがある。

前者は口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がる。

中国産磁器

青磁碗 口縁部・体部の破片が各1点出土しているが、図示できない。口縁部破片は外面に 鎬蓮弁文が彫られており、釉は安定した灰味黄緑色を呈している。胎土は灰白色を呈し、わず かに黒色粒を含む。また、体部破片は外面に鎬蓮弁文が彫られ、内外面に緑灰色の釉が均一に かけられている。胎土はくすんだ灰白色を呈する。

白磁碗(12) 短い高台がつくられ、端部は平坦である。内面には一条の沈線がめぐる。外面の体部下端から高台部を除いて、あわい明緑色の釉が均一にかけられている。胎土は灰白色を呈する。

鉄製品

形態不明な鉄製品(8~11) 4点出土しているが完成品はない。細長い棒状のもので、一方の先端に向うにつれ細くなる。断面は方形である。最大のものは10.5cmである。釘かもしれない。

古銭(13) 北宋銭が1枚出土している。銭貨名は至道元宝(初鋳造年995)である。

第6竪穴遺構

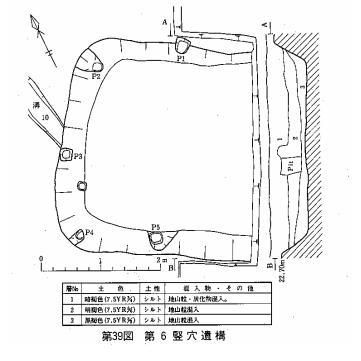
〔位置〕 B・C−51・52区に位置する。

〔重複〕 第8溝と重複し、それを 切っている。

〔平面形・規模〕 東側は調査区 外に延びているが、平面形は方形 を呈すると思われる。規模は南北 が約3.6mである。

〔堆積土〕 堆積土は3層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度で立ち上がり、壁高は最も保存の良い北壁で55cm、他の壁でも40~50cmと深い。壁面は平坦である。



[底面] 地山を底面としている。底面は所々に小さな凹凸があるが、ほぼ平坦である。

〔柱穴〕 壁を掘り込んでいるピットが5個検出された。柱痕跡は認められない。その位置は

西辺では中央に1個、両隅に1個、南北辺の中央部に1個とほぼ配置のうえで規則性がみられる ことから壁柱穴の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器、青磁の破片が出土している。

中国産磁器

青磁碗 図示できなかったが、体部から口縁部にかけて外傾する。外面には鎬蓮弁文が彫られている。釉は灰味黄緑色を呈し、内外面に厚くかけられている。胎土は灰白色を呈し、わずかに黒色粒を含む。

第7竪穴遺構

〔位置〕 E-48・49区に位置する。

〔重複〕 第12号住居跡、円形周溝、第9溝と 重複し、それらを切っている。

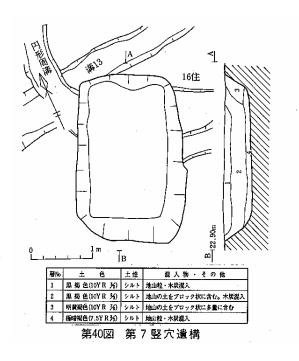
〔平面形・規模〕 平面形は長方形を呈している。規模は2.7m×1.8mである。

〔堆積土〕 堆積土は4層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は約45cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は多 少の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵器、 中世陶器の破片が出土している。図示できる ものはない。



第8竪穴遺構

[位置] E・F-44・45区に位置する。

〔重複〕 31号十墉と重複し、それを切っている。

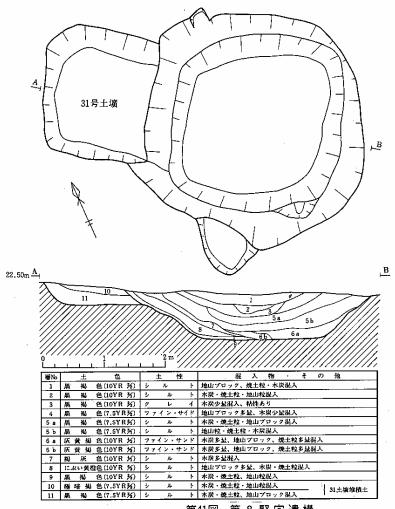
〔平面形・規模〕 平面形は円形を呈し、径約4.0mである。南側中央の壁を掘り込んだ不整形の張り出し部が認められた。

「堆積十」 堆積十は9層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で、途中に段がめぐる。壁高は70~80cmで、壁面はほぼ平坦である。

[底面] 地山を底面としている。多少の凹凸があり、中央部がいくぶん底い。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器の破片、古銭が出土している。



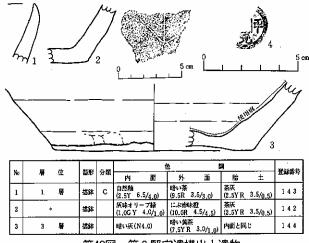
第41図 第8竪穴遺構

無釉陶器

饔(2) 底部破片で、体部内面 にヘラ書きがみられる。

擂鉢(1・3) 1は口縁端部に近 づくにつれ、そがれたように薄く なり、口縁端が尖がる。

3は平底で、体部が直線的に外傾 する。器壁は底部が体部に比して 薄い。外面底部には板目状の圧痕 があり、内面には使用痕がみられ 平滑な面をしている。



第42図 第8竪穴遺構出土遺物

古銭

北宋銭が1枚出土している。4は銭貨名は不明で ある。

第9竪穴遺構

C · D - 44 · 45区に位置する。 [位置]

[重複] 認められなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は長方形を呈している。 規模は2.9m×2.2mである。

[堆積十] 堆積十は2層認められる。

地山を壁としている。壁は下端が明瞭で [壁] 急角度に立ち上がる。壁高は30cmである。

地山を底面としている。面は凹凸がな 〔底面〕 く、平坦である。

[出十遺物] 堆積十中から十師器、中世陶器の 破片が出土している。

無釉陶器

甕(1·2) 1は口縁帯をもつものである。口縁 帯は幅が広く、内面に太い沈線がめぐり、いわゆ る受口状口縁を成す。

2は、体部外面に稜杉文が押印され ている。

第10竪穴遺構

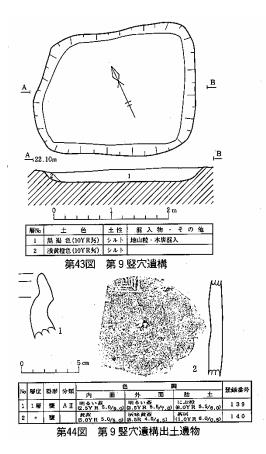
[位置] E • F −42 • 43区に位置 する。

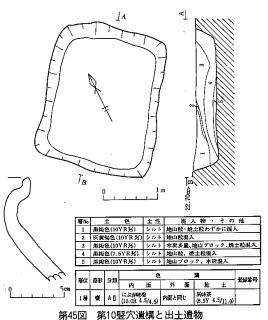
〔重複〕 確認されなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は隅の角 ばった長方形を呈している。規模は 2.6m×2.1mである。

「堆積十」 十壙内の堆積十は5層 確認された。

[壁] 地山を壁としている。壁は 下端が明瞭で急角度に立ち上が





り、壁高は最も保存の良い西壁で約50cmである。壁面は平坦である。

〔底面〕 地山を底面としている。所々に小さな凹みがあるがほぼ平坦である。南側はいく分 低い。

[柱穴] 遺構内でピットは検出されていない。

[出土遺物] 堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器の破片が出土している。

無釉陶器

甕:第45図は口縁帯をもつものである。内面には太い沈線がめぐり、いわゆる受口状口縁を 成す。

第11竪穴遺構

〔位置〕 C・D-37・38区に位置する。

〔重複〕 第12竪穴遺構、45~47号土壙と重複している。第12竪穴遺構に切られている。45~47号土壙との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は方形を基調としていると思われる。規模は南北2.8mである。

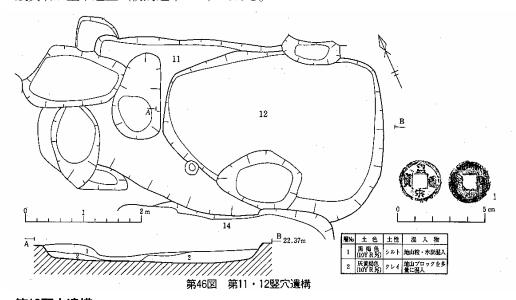
[壁] 地山を壁としている。壁高は15~20cmである。

〔底面〕 第12竪穴遺構によって大部分が破壊されているため底面の状況は不明である。

[出土遺物] 堆積土中より土師器、中世陶器の破片、古銭が出土している。

古銭 (第46図1)

銭貨名が皇宋通宝(初鋳造年1039)である。



第12竪穴遺構

〔位置〕 B・C−37・38区に位置する。

[重複] 第11・14竪穴遺構、50号土壙と重複している。50号土壙に切られ、第11竪穴遺構を

切っている。第14竪穴遺構との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は不整形である。規模は3.6m×2.8mである。

〔堆積土〕 堆積土は2層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁の立ち上がりは緩やかである。壁高は東側で20~25cmである。

[底面] 地山を底面としている。底面は平坦である。

[出土遺物] 堆積土中より土師器が出土している。

第13竪穴遺構

〔位置〕 D・E-37・38区に位置する。

〔重複〕 48・49号土壙と重複している。 48号土壙を切っており、49号土壙によって 切られている。

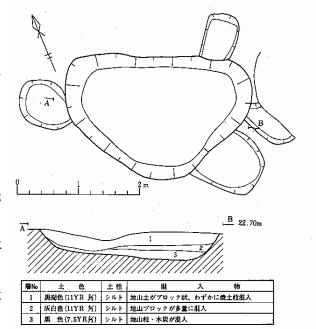
〔平面形・規模〕 平面形は不整形である。規模は3.0m×2.0mである。

〔堆積十〕 堆積十は3層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が 不明瞭で緩やかに立ち上がり、壁高は最も 保存の良いところで50cmである。壁面は平 坦である。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は 浅い皿状を呈している。

〔出土遺物〕 堆積土中から土師器、須恵



第47図 第13竪穴遺構

器、中世陶器の破片が出土したが、図示できるものはない。

第14竪穴遺構

[位置] $B \sim D - 36 \cdot 37$ 区に位置する。

[重複] 50·53号土壙によって切られている。第12竪穴遺構との新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 平面形はややゆがんでいるが長方形を呈している。規模は4.3m×3.3mである。北壁には、階段状の施設が付いている。段は3段で、段差は約20cmである。底面東側には深さ約10cmの円形の落ち込みがみられた。

〔堆積十〕 堆積十は4層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がる。壁高は最も保存の良い 東壁で約1.0m、他の壁も0.8~0.9mと深い。壁面はほぼ平坦である。

[底面] 地山を底面としている。所々に凹凸があるが、ほぼ平坦である。

[出十遺物] 堆積土中から 土師器、須恵器、中世陶器、 鉄製品の破片と古銭が出土し ている、

無釉陶器

甕(2) 体部外面に平行タ タキ目状の押印がある。

擂鉢(1) 口縁部上端が平 坦な面をなし、口縁端部外面 に凹みがある。

鉄製品

形態不明な鉄製品(3) 方の端が欠損しているが、細 長い棒状のもので断面は方形 である。釘かもしれない。

古銭 (4)

唐銭が1枚出土している。

銭貨名が開元通宝(初鋳造年621)で ある。

第15竪穴遺構

[位置] D~F-36・37区に位置 する。

〔重複〕 52号土壙と重複し、それ を切っている。

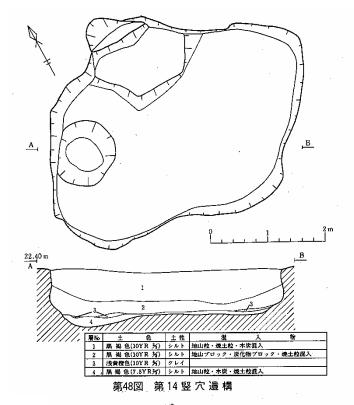
[平面形・規模] 平面形は長方形 を呈している。規模は6.2m×3.2m である。

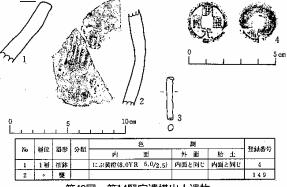
〔堆積土〕 堆積土は6層認められる。

地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は最も保存の良い 東壁で約40cmある。壁面は凹凸がない。

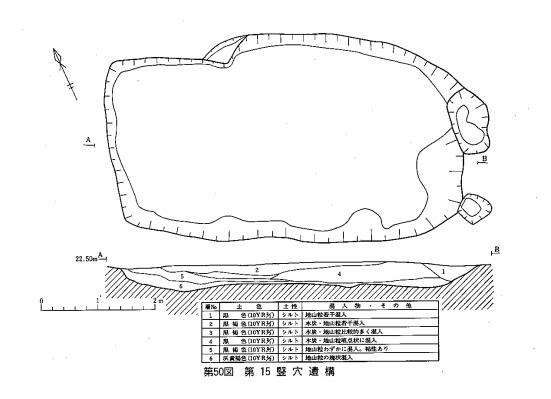
[底面] 地山を底面としている。底面は小さな凹みが認められるがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 遺構内でピットは検出されていない。





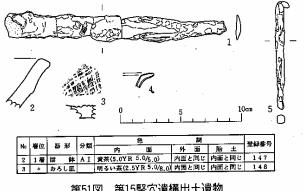
第49回 第14竪穴遺構出土遺物



[出十遺物] 堆積十中から十師器、須 恵器、中世陶器、青磁の破片が出土して いる。

無釉陶器

擂鉢(2) 口縁端部に近づくにつれ、 内弯気味にわずかに折れ曲り、屈曲部外 面に稜がめぐる。口縁部上端は平坦な面 をなしている。



第51図 第15竪穴遺構出土遺物

施釉陶器

おろし皿(3) 底部破片で、内面に格子目状の卸目が刻まれている。

中国産磁器

青磁碗 図示できなかったが、口縁部破片が出土している。体部から口縁部にかけて直線的に 外傾する。端部は丸味をおびる。外面には蓮弁文が施されている。釉は黄茶色(アメ色)を呈し、 全面に均一にかけられている。胎土は灰白色を呈する。

口縁部がほぼ水平に外側に折り曲げられている。端部は丸味をもつ。内・外面 **青磁鉢**(4) に灰味黄緑色を呈した釉が厚くかけられている。胎土は灰白色を呈し、わずかに黒色粒を含む。

鉄製品

刀子 第51図1は刀身と茎の一部が残存している。銹化が著しく、細部の形態は不明瞭である。 現存長は約18cmである。

釘 第51図5は先端が欠損している。細長い棒状のもので、先端に向って細くなっている。頭部は鋭く打れ曲っている。断面形は方形である。

第16竪穴遺構

[位置] F-33~35区に位置する。

〔重複〕 ピットによって切られている。

〔平面形・規模〕 西側は調査区外にのびているが、平面形は方形を基調としていると思われる。規模は南北約5.0mと推定される。北側には張り出しがみられる。東側には1.6m×0.9mの楕円形の落ち込みがある。

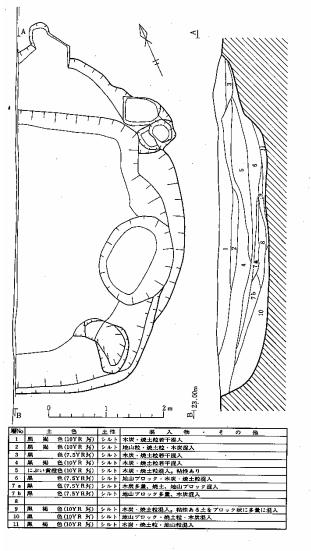
〔堆積土〕 堆積土は11層認められる。 「壁〕 地山を壁としている。壁は下端 が不明瞭で緩やかに立ち上がり、壁高は 最も保存の良いところで約90cmである。 壁面は多少凹凸がある。

[底面] 地山を底面としている。

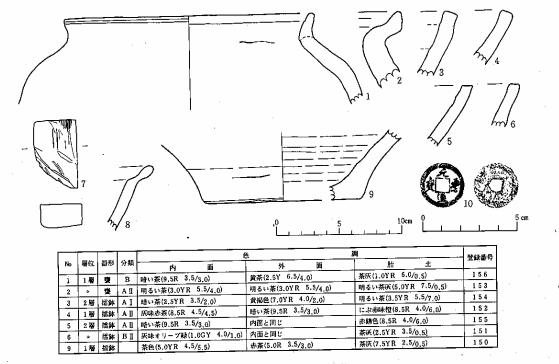
〔出土遺物〕 堆積土から土師器、須恵器、中世陶器の破片、古銭などが出土している。

無釉陶器

甕(1・2) 2は口縁帯のあるもの、1 は口縁帯のないものである。2は口縁帯 が狭く、内面には狭い沈線がめぐる。い わゆる受口状口縁を成す。1は体部上半 が球形を呈し、頚部でくびれ、口縁部が 外反する。口縁部内面に稜がめぐる。



第52図 第 16 竪 穴 遺 構



第53図 第16竪穴遺構出土遺物

擂鉢 $(3\sim6\cdot9)$ 口縁部破片には口縁部上端が平坦なもの $(3\sim5)$ と沈線状の凹みがめぐるもの (6) とがある。前者の中には口縁端部に近づくにつれ、内弯気味に折れ曲り、屈曲部に稜をもつもの (3) がある。

9は、底部が平底で、体部は外反気味に立ち上がる。外面の底部に小さな凸凹した面が認められる。内面には使用痕がみられ、なめらかな面をしている。

施釉陶器

灰釉陶器 (8) 底部が欠損しているが鉢の破片と思われる。体部から口縁部は直線的に立ち上がり、口縁部が水平気味に折れ曲る。口縁部内面に凹みがめぐる。内外面には明緑灰色の釉が施され、貫入が認められる。

石製品

砥石(7) 欠損しているが、現存長約5.5cm、幅約3.5cm、厚さ約1.9cmの長方形を呈している。 表裏、側面に砥面が認められる。

古銭 (10)

銭貨名が元豊通宝(初鋳造年1078)である。

第17竪穴遺構

〔位置〕 B · C −29 · 30区に位置する。

「重複」 第11溝と重複しているが、その新旧関係は不 明である。

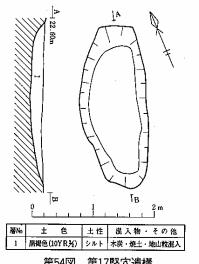
[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈し、規模は、2.7 m×1.1mである。

[堆積十] 堆積土は1層認められる。

地山を壁としている。壁は下端が不明瞭で、立 ち上がりは緩やかである。壁高は30cmで壁面には凹凸が 認められた。

〔底面〕 地山を底面としている。底面はほぼ平坦であ る。

[出十遺物] 堆積十中から十師器、須恵器の破片が出 土しているが図示できる遺物はない。



第54図 第17竪穴遺構

第18竪穴遺構

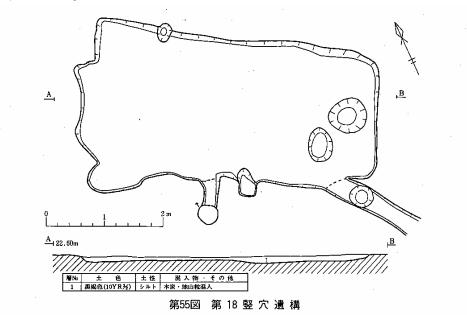
[位置] C・D-28・29区に位置する。

[重複] 溝と重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、規模は5m×2.4mである。

[堆積十] 土壙内の堆積土は1層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は約10cmで浅い。壁 面は凹凸がある。



〔底面〕 地山を底面としている。東壁際 に円形の浅い凹みが2ヶ所みられるが、他 は平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器、中世陶器の破片が出土している。

無釉陶器

甕(1·2) 1は体部外面に簾状格子目、 2は平行タタキ目状の押印が施されている。

第19竪穴遺構

〔位置〕 D·E−27区に位置する。

〔重複〕 第3号建物跡、第20竪穴遺構と重複しているが、その新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕 平面形は楕円形を呈し、規模は3.65m×1.75mである。

〔堆積土〕 堆積土は2層認められる。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は緩やかに立ち上がり、壁高は約50cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は東側が 西側より約20cmほど深くなっている。

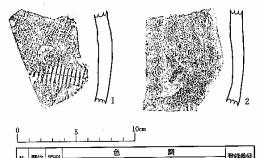
〔出山遺物〕 堆積土から土師器、中世 陶器の破片が出土しているが、図示でき るものはない。

第20竪穴遺構

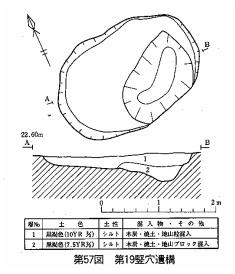
[位置] $D \cdot E - 26 \cdot 27$ 区に位置する。

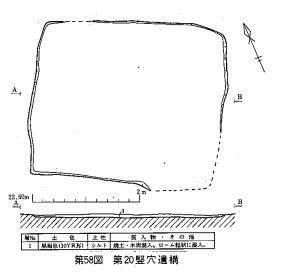
〔重複〕 第19・21竪穴遺構、第3号建 物跡と重複しているが、その新旧関係は 不明である。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈 している。規模は3.7m×2.9mである。 [堆積土] 堆積土は1層認められる。



第56図 第18竪穴遺構出土遺物





[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は最も保存の良い西壁で7cmである。

[底面] 地山を底面としている。所々に凹みが認められるがほぼ平坦である。

[柱穴] 遺構内でピットは検出されていない。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

第21竪穴遺構

[位置] B~D-26区に位置する。

〔重複〕 第20竪穴遺構と重複しているが新旧関係は不明である。

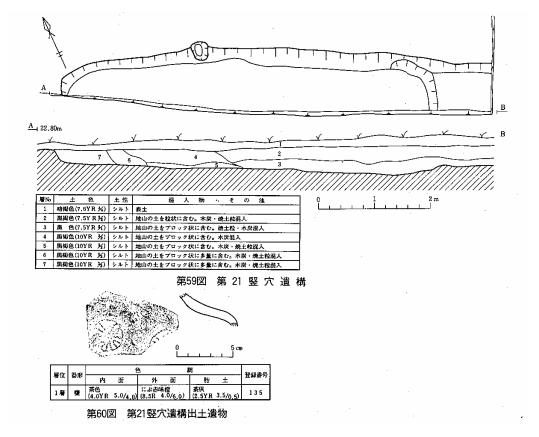
〔平面形・規模〕 北端部を検出しただけであるが、平面形は方形を基調としていると思われる。 規模は不明である。

〔堆積土〕 堆積土は6層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は約25cmである。

[底面] 地山を底面としている。底面は平坦である。

〔柱穴〕 北壁に1個のピットが掘り込まれていたが伴うかどうか不明である。



[出土遺物] 堆積土中から土師器、中世陶器の破片が出土している。

無釉陶器

第60図は器形が不明である。肩部 外面に菊花文が押印されている。

第22竪穴遺構

〔位置〕 $E \cdot F - 19 \cdot 20$ 区に位置する。

〔重複〕 いくつかのピットと重複 しているが、その新旧関係は不明で ある。

〔平面形・規模〕 平面形は不整形である。北半では円形を呈し、半円形の段が認められ、さらに、それを取り囲むような形で方形の段が認められた。規模は3.6×3.3mである。

〔堆積土〕 堆積土は4層認められる。

「壁」 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で東側ではほぼ垂直、それ以外ではゆるやかに立ち上がる。壁高は最も保存の良い東壁で80cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。 面は細かな凹凸があるがほぼ平 坦である。

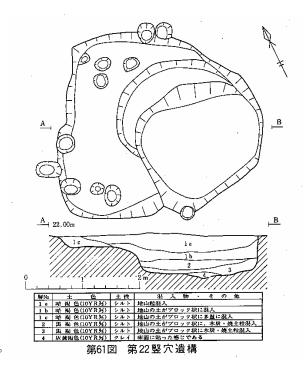
〔出土遺物〕 堆積土から、土師器、中世陶器の破片が出土しているが図示できる遺物はない。

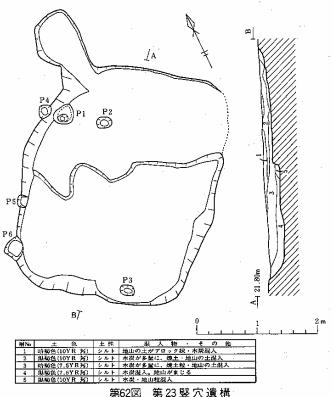
第23竪穴遺構

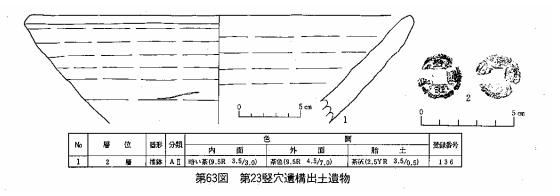
〔位置〕 D・E−19・20区に位置する。

〔重複〕 認められない。

〔平面形・規模〕 平面形は長







方形を呈している。規模は $3.9m \times 3.2m$ である。北隅には $1.1m \times 0.8m$ の楕円形を呈する張り出しが認められた。

〔堆積土〕 堆積土は5層認められた。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度で立ち上がり、壁面には凹凸がある。壁高は最も保存の良い南壁で約20cmある。

〔底面〕 地山を底面としている。北半は段を境に南半より約10cm高い。その段は出入りがあり整然としない。面は小さな凹みがあるがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 底面に3個、壁を掘り込んだ3個計6個のピットが検出された。そのうち P_1 は柱痕跡が認められたが、これに組み合うピットもないため柱穴かどうか不明である。

[出土遺物] 堆積土中から土師器、中世陶器の破片、古銭が出土している。

無釉陶器

擂鉢(1) 体部から口縁にかけて外傾し、口縁部上端が平坦である。

古銭 (2)

銭貨名は治平元宝(初鋳造年1064)である。

第24竪穴遺構

[位置] F-17・18区に位置する。

[重複] ピットと重複しているが、新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は楕円形を呈し、規模は2.8m×2.4mである。

[堆積十] 堆積土は3層認められる。

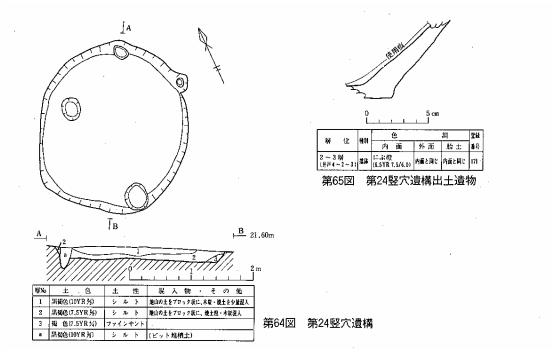
〔壁〕 地山を壁としている。

[底面] 底面は平坦である。立ち上がりはゆるやかで壁高は約20cmである。

[出土遺物] 堆積土から土師器、中世陶器の破片が出土している。

無釉陶器

擂鉢: 平底で、体部下端が直立気味に立ち上がりそれ以上は外傾する内面には使用痕がみら



れ、なめらかな面をしている。

第25竪穴遺構

[位置] B・C-14~16区に位置する。

〔重複〕 96号土壙と重複し、これに切られている。

〔平面形・規模〕 東側の一部が調査区外に延びているが、平面形は上端で楕円形・下端で方形を呈している。規模は6.2m~5.3mである。

〔堆積土〕 堆積土は14層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で、途中段が数段めぐる。壁高は0.8m~1mである。壁面はほぼ平坦である。

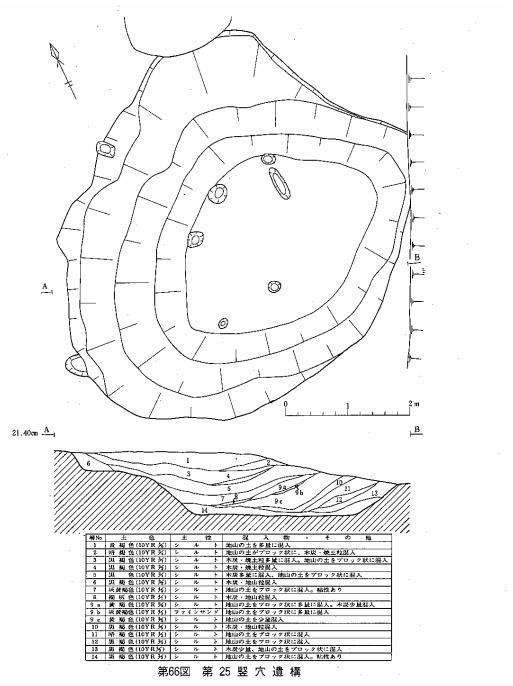
[底面] 地山を底面としている。底面は多少の凹凸があるがほぼ平坦である。

〔柱穴〕 底面で5個のピットが認められたが、いずれも柱痕跡はなく、配置の規則性もなく柱 穴かどうか不明である。

〔出土遺物〕 堆積土中より、土師器、須恵器、中世陶器、青磁、鉄製品の破片、古銭が出土している。

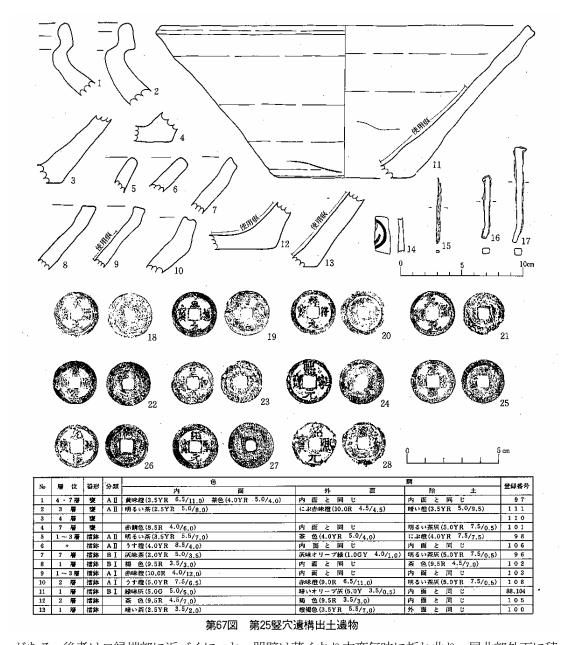
無釉陶器

- **甕**(1~4) 1・2は口縁帯をもつものである。口縁帯の幅は広く、内面に沈線が巡り、いわゆる受口状口縁を成す。
 - 3・4は底部破片である。いずれも底部は平底のものと思われる。3は外面の体・底部の境目



に底部から体部にむけてヘラナデ痕が観察される。4の底部外面には板目状圧痕が認められる。

擂鉢 $(5\sim13)$ 口縁部上端が平坦なもの $(5\cdot6\cdot9)$ と沈線状の浅い凹みがめぐるもの $(7\cdot8\cdot10\cdot11)$ とがある。前者の中には体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯 気味に折れ曲り、屈曲部外面に稜がめぐるもの (9) と単に外傾するもの $(5\cdot6)$ と



がある。後者は口縁端部に近づくにつれ、器壁は薄くなり内弯気味に折れ曲り、屈曲部外面に稜がめぐる。10は片口部にオサエ痕がわずかに認められる。9は内面に使用痕がみられ、なめらかな面をしている。11は外面底部に籾痕が付着している。内面の体部下半以下には使用痕があり、

なめらかな面をしている。

12・13は底部破片である。いずれも内面には使用痕が認められる。底部外面には調整痕は認められない。

中国産磁器

青磁梅瓶(14) 体部破片が1点出土している。外面に唐草文が施されている。外面には明緑色の釉が均一にかけられ貫入が認められる。胎土は灰白色を呈する。

鉄製品

釘(16・17) 2点出土している。いずれも先端が欠損している。細長い棒状のもので、先端 に向って細くなっている。頭部はわずかに折れ曲がっている。断面は方形を呈する。

形態不明な鉄製品(15) 1点出土している。欠損しているが細長い棒状のもので断面は方形である。釘かもしれない。

古銭 (18~28)

北宋銭10枚、南宋銭1枚、銭貨名が判読できないもの3枚計14枚出土した。

18~27は北宋銭である。18・19は至道元宝(初鋳造年995)、20は祥符元宝(同1008)、21は 天聖元宝(同1023)、22は皇宋通宝(同1039)、23は至和元宝(同1054)、24は熈寧元宝(同1068)、 25は元豊通宝(同1078)、26は元祐通宝(同1086)、27は紹聖元宝(同1094)、で9種類がある。 28は南宋銭の紹熈元宝(同1190)である。

第26竪穴遺構

〔位置〕 $D \cdot F - 6$ 区に位置する。

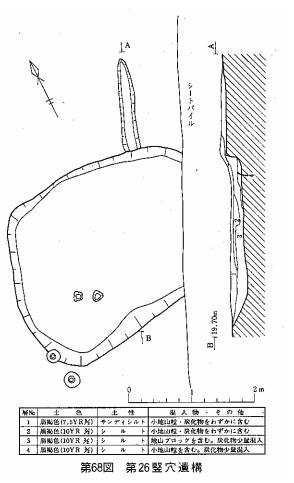
〔重複〕 いくつかのピットと重複し、それらに切られている。

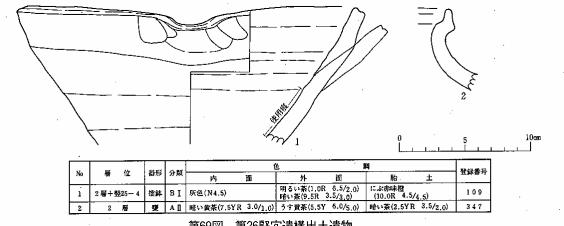
〔平面形・規模〕 平面形は長方形を呈し、 規模は南北2.8mである。

〔堆積土〕 4層認められた。下部の2層は 地山ブロックを多量に混入した土層で底 面全体をおおっており、人為的な堆積状況 を示している。

(壁) 地山を壁としている。壁の立ち上がりは北壁はほぼ垂直であるが、西壁から南壁に移るにしたがって、その傾斜はなだらかになり、特に南壁では壁と底面の境が不明瞭になってくる。壁高は最も保存の良い北壁で約25cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は 固く平坦であるが南西隅がわずかに凹む。





第26竪穴遺構出土遺物

[柱穴] 遺構内でピットは検出されていない。

堆積土から中世陶器の破片が出土している。 「出十遺物〕

無釉陶器

口縁帯を有するものである。口縁帯の幅は狭く、内面には太い沈線が巡り、いわゆ る受口状口縁を成す。

擂鉢(1) 第25・26竪穴遺構出土の破片が接合した資料である。体部から口縁部にかけて外 傾し、口縁端に近づくにつれ内弯気味に折れ曲り、屈曲部に稜がめぐる。口縁部上端には沈線状 の凹みがめぐる、口縁部に片口が1個つく。内面に筋目は施されていない。片口部には指頭によ るオサエ痕がある。内面下半には使用痕がみられ、なめらかな面をしている。外面の上半、下半 では色調に相違がみられる。

第27竪穴遺構

[位置] B~D-4~5区に位置する。

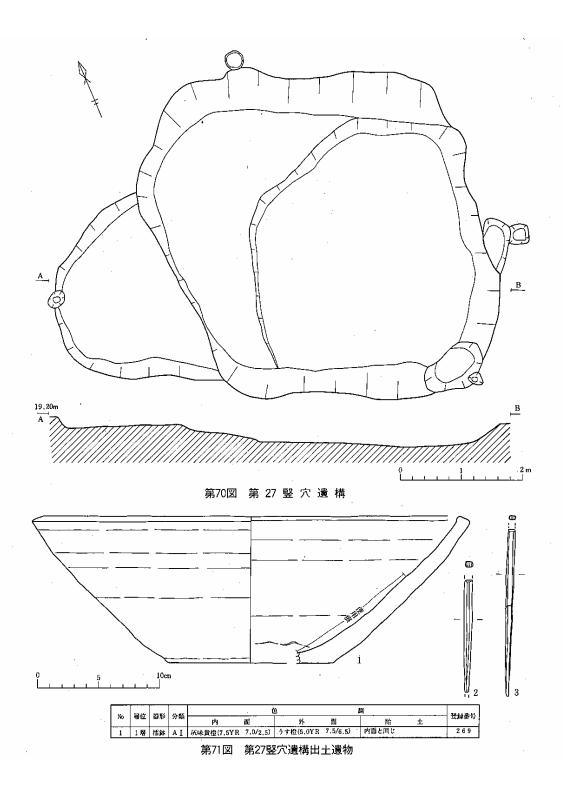
〔重複〕 いくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 平面形は方形に近く、西側に楕円形の張り出しがある。規模は5.4m×5mで ある。

地山を壁としている。西辺の壁高は10~15cmであるが、その他の壁高は30~40cmある。 [壁] 地山を底面としている。西辺をとり囲むように段が認められた。底面との比高は3~ [底面] 10cmある。底面は凹凸がある。

遺構内にピットはみられない。周辺で検出されたピットのなかで、P₁~P₂は辺の中 〔柱穴〕 央と隅に位置し、形状・堆積土も類似していることから本遺構に伴った柱穴の可能性がある。

〔出十遺物〕 底面より須恵器、中世陶器、木製品が出土している。



無釉陶器

擂鉢(1) 体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がる。 口縁部上端は平坦である。底部は平底を呈する。底部の器厚は体部と比較して薄い。体・底部の 境目には約1cm間隔で2本の粘土紐の積み上げ痕が観察される。外面の底部はざらざらしている。 内面下半には使用痕がみられ、平滑な面をしている。また、丹が付着している。

木製品

箸(2・3) いずれも欠損している。全面にタテ方向のケズリが施されている。樹種はスギである。

第28竪穴遺構

〔位置〕 $D \cdot E - 3 \cdot 4$ 区に位置する。

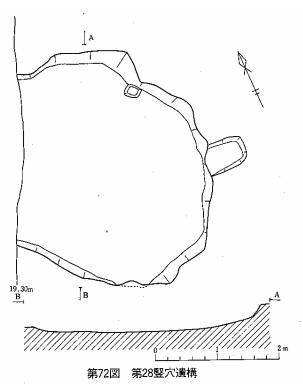
〔重複〕 第7井戸、ピットと重複している。井戸を切り、ピットに切られている。

〔平面形・規模〕 西半はシートパイルが打ち込まれているため調査できなかったが、平面形は楕円形と推定される。 規模は南北約3.8mである。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は急角度で立ち上がり、壁高は10~20cmである。

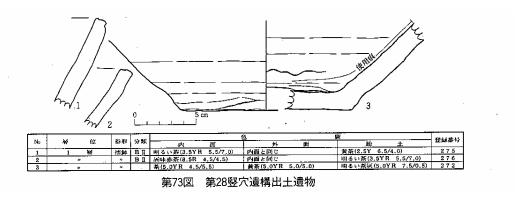
〔底面〕 地山を底面としている。底面 は凹凸が多くみられる。

〔出土遺物〕 堆積土から中世陶器の破 片が出土した。



無釉陶器

擂鉢(1~3) 1·2は口縁部上端に沈線状の凹みがめぐる。3は平底で体部



は直線的に外傾する。底部外面に板目状の圧痕が認められる。内面の体部下端には2cmの間隔で 積み上げ痕が観察される。内面下半に使用痕がみられ、平滑な面になっている。

第29竪穴遺構

[位置] C · D−1~3区に位置する。

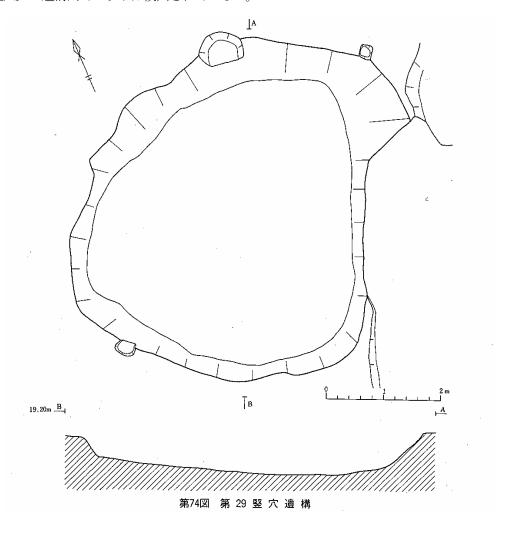
〔重複〕 第13・16溝と重複しているが、新旧関係を明らかにすることができなかった。

〔平面形・規模〕 平面形は不整形で、規模は南北最大長6mである。

[壁] 地山を壁としている。壁は急角度で立ち上がり、壁高は40~60cmである。壁面は凹凸がある。

[底面] 地山を底面としている。全体に浅い凹みが認められる。

[柱穴] 遺構内でピットは検出されていない。



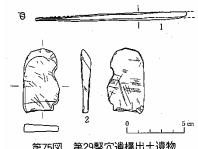
〔出土遺物〕 中世陶器、木製品などの破片が出土し ている。

木製品

箸(1) 欠損しているが、棒状のもので先端に向っ て細くなっている。樹種はヒノキである。

石製品

砥石(2) 板状の砥石である。表・裏面に砥面がみ られる。



第75図 第29竪穴遺構出土遺物

第30竪穴遺構

[位置] $\mathbf{E} \cdot \mathbf{F} - (1 \sim -1)$ に位置する。

〔重複〕 100号土壙、第31竪穴遺構、ピッ トと重複している。100号土壙、ピットを切 っている。第31竪穴遺構との新旧関係は不明 である。

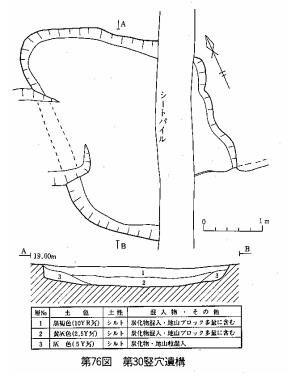
〔平面形・規模〕 平面形は方形で、規模は 3.4m×2.9mである。

〔堆積十〕 堆積十は3層認められた。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明 瞭で、急角度に立ち上がる。壁高は30~35 cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は平 坦である。

〔出十遺物〕 堆積十から須恵器が出土して いる。図示できない。



第31竪穴遺構

[位置] $D \cdot E - (1 \sim -2)$ 区に位置する。

〔重複〕 第30竪穴遺構と重複しているが、その新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 西半はシートパイルが打ち込まれているため調査できなかったが、平面形は 方形と推定される。規模は南北約3.5mである。

〔堆積土〕 堆積土は2層認められる。

[壁] 地山を壁としている。北東壁はえぐれており、南壁は急角度で立ち上がる。壁高は約 25cmである。壁面は凹凸がなく平坦である。

〔底面〕 地山を底面としている。 底面は凹凸が少なく平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土から土師器、 中世陶器の破片、木製品が出土した。

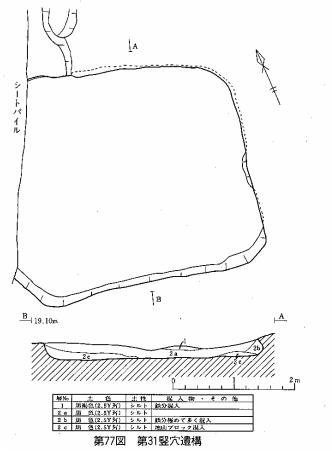
無釉陶器

甕(3) 体部破片で格子目状の押 印がある。

擂鉢(1・2) 口縁部上端が平坦な面をしている。1は体部から口縁にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に折れ曲り、屈曲部外面に稜がめぐる。内面にはいずれも使用痕がみられ、なめらかな面になっている。

木製品

曲物底板(4・5) 半欠品である が曲物底板と思われる。4は柾目板



を使用し、径約6.0cmと小形である。5は柾目板を使用し、径約12.5cmである。これらの表・裏面は腐食が著じるしく、加工の痕跡は不明瞭である。

箸(6~13) 8点出土しているが、6を除いていずれも欠損している。6は棒状のもので、長さ23.9cmである。中央部がふくらみ両端に向うにしたがい細くなる。全面にタテ方向のケズリが施されている。

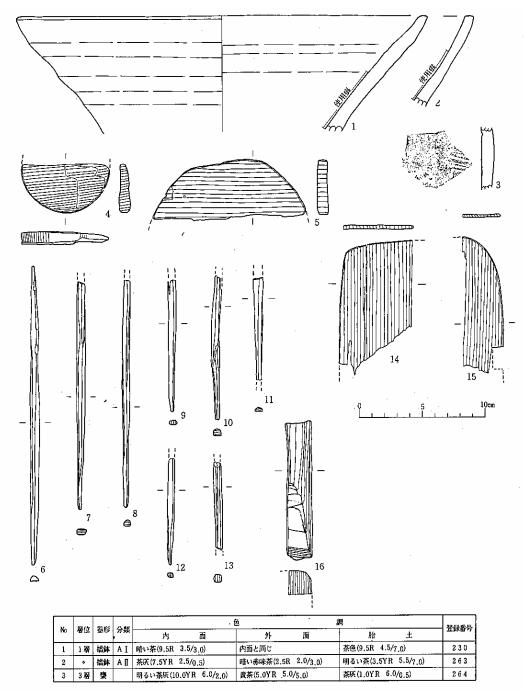
形態不明な木製品(14~16) いずれも欠損している。14・15は薄い柾目板を使用しており、15は側縁に方形のえぐりがわずかに認められる。これらは形態的な特徴から草覆状木製品と思われる。16は2面にケズリが施されている。樹種はいずれもスギである。

第32竪穴遺構

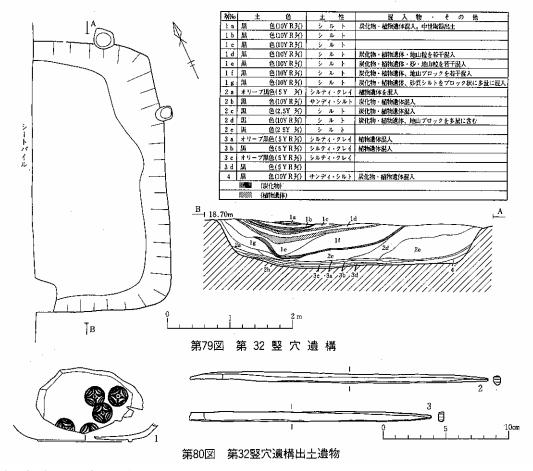
〔位置〕 $F \cdot G - (-5 \cdot -6)$ 区に位置する。

〔重複〕 ピット15を切っている。

〔平面形・規模〕 西側は調査区外に延びているが、平面形は方形と推定される。規模は南北約 4.3mである。



第78図 第31竪穴遺構出土遺物



〔堆積十〕 堆積十は4層認められた。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は約70cmである。壁面はほぼ平坦である。

[底面] 地山を底面とし、平坦である。

[出土遺物] 堆積土中から中世陶器の破片、木製品が出土している。

木製品

箸状木製品(2・3) 2点出土している。2は棒状のもので中央部がふくらみ、両先端に向って細くなっている。全面にタテ方向のケズリが施されている。長さは23.5cm、最大幅は0.7cmである。3は欠損している。2・3とも樹種はスギである。

漆器碗(1) 欠損している。短い高台がつくられており、全面に黒漆がぬられ、内面には赤漆で文様をつけている。樹種はケヤキである。

第33竪穴遺構

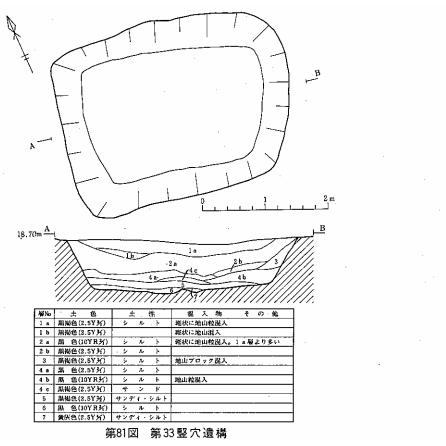
[位置] $C \cdot D - (-9 \cdot -10)$ 区に位置する。

〔重複〕 認められなかった。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈し、東側が弓なりになる。規模は3.7m×2.9mである。 [堆積土] 堆積土は7層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、壁高は最も保存の良い西壁で約80cmある。壁面は凹凸がある。

[底面] 地山を底面としている。浅い凹みがいくつか認められる。

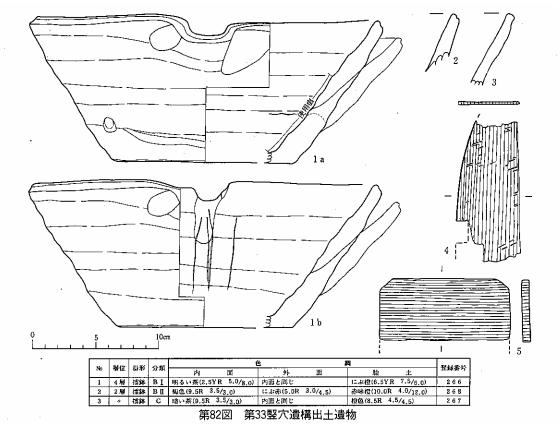


[出土遺物] 堆積土中から中世陶器の破片、木製品が出土している。

無釉陶器

擂鉢 $(1\sim3)$ 口縁部破片には口縁部上端がまるいもの (3) と幅の狭い沈線状の凹みがあるもの $(1\cdot2)$ とがある。前者は口縁端部外面に凹みをもつ。

1は体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ屈曲し、薄くなる。口縁部に片口がつく。内面には4条・2条1単位とした焼成後の筋目が体部下端から口縁に縦方向に彫



られている。底部外面はワラ状の圧痕がみられる。内面下半には使用痕がみられ、なめらかな面 をしている。口縁部から底面にはスス状の炭化物が付着している。

木製品

草履状木製品(4) 欠損しているが薄い柾目板を使用し、側縁には方形のえぐりがわずかに 認められる。樹種はスギである。

形態不明な木製品 第82図5は欠損しているが、厚い方形の柾目板を使用し、隅は切り取られている。樹種はスギである。

第34竪穴遺構

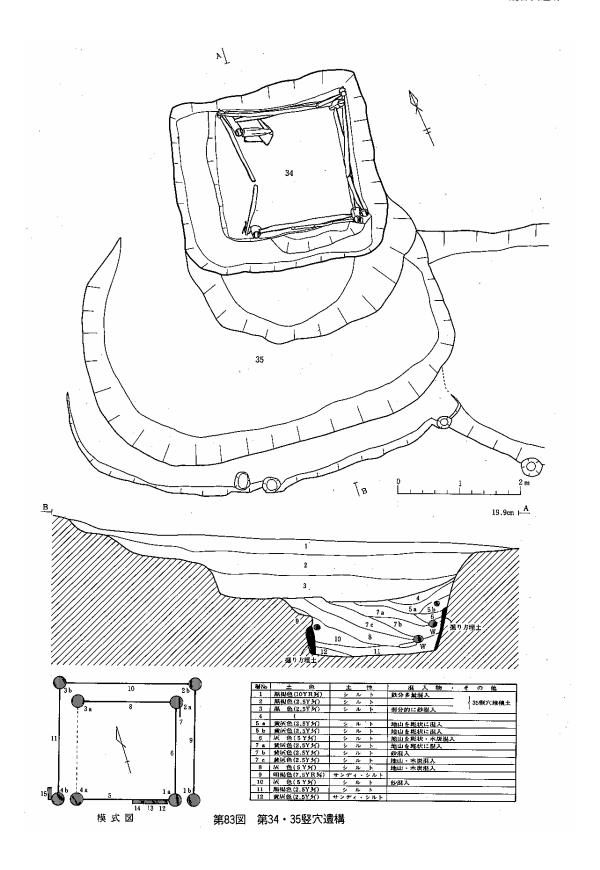
〔位置〕 C~E- (13~14) 区に位置する。

〔重複〕 第35竪穴遺構に切られている。

〔平面形・規模〕 平面形は正方形を呈し、規模は上端で3.3m×2.9mである。南辺に段が2段認められた。

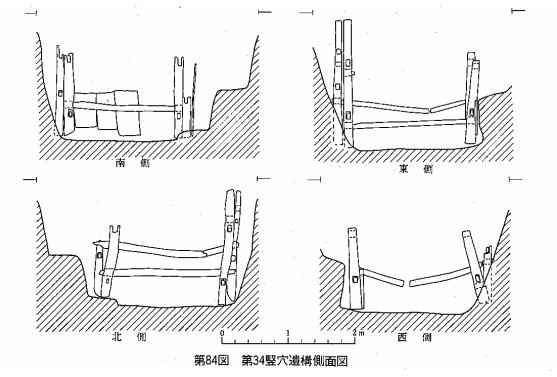
〔堆積土〕 堆積土は15層認められた。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は下端が明瞭でほぼ垂直に立ち上がり、壁面は平坦である。壁高は約1.8mである。



[底面] 地山を底面としている。底面は非常に固く、平坦である。

竪穴の四隅には丸木柱が2本づつ計8本立っており、底面に直接のせている。北壁両隅の柱は対角線上、南壁両隅の柱は壁に沿って並列する。これらの柱には現存部上端と中ほどに柄孔が穿れており、横木(ぬき)で連結させ、固定されている。柄孔と遺存する横木からみると、横木は南辺では内側の柱下部に1本、東・西・北辺では内側と外側の柱に上・下2本づつ段違いに渡されていたと推定される。南辺では横木の外側に3枚の厚い壁板が立てられ、横木で支えられている。壁板の上面は南壁の段より上方にはのびていない。また、南西隅の柱の西外側には長い壁板が立っている。壁板は裏込され固定されている。



丸木隅柱(第85図1~4) 径11~15cmの丸木材を使用している。丸木隅柱は長いもので約173 cm、短いもので約62cmであるが、いずれも先端が欠損しているため全長は不明である。下端は平 坦なものと、やや尖っているものがある。柄孔はいずれも貫通しており、大きいもので7×13cm、小さいもので6×7cmのものがある。下端、表面には比較的大きくけずられて、面取りされている。

壁板(第86図12~15) 12~14は最大幅で約30cm前後、厚さは3.5~4.0cmとほぼ均一であるが、 長さは長いもので約70cm、短いもので55cmと、やや長さに違いがみられる。15は全体に腐食が 激しく全体形は不明である。長さ110cm、最大幅20cm前後、厚さ2.0~2.5cmである。壁板は全て表裏面ともケズリで仕上げられている。上記の建築材の樹種は全てクリである。

〔出土遺物〕

無釉陶器

擂鉢(第87図1) 体部から口縁にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ器壁は薄くなり内 弯気味に折れ曲り、屈曲部外面に稜をもつ。口縁上端には幅の狭い沈線状の浅い凹みがめぐる。 片口部の内外面にわずかに指頭状のオサエ痕が認められるが図化できない。内面、断面に炭化物 が付着している。

木製品

曲物底板(第87図3) 欠損しているが、曲物の底板と思われる。炭化が著じるしく、全体の 特徴は不明である。樹種はスギである。

形態不明な木製品(第87図4~6) 6は長方形の厚い柾目板を使用して、先端に向うにしたがい細くなる。後端には中央に径約0.6cmほどの円形を呈した棒状のものが取りつくようであるが、 欠損しているため不明である。樹種はスギである。

4・5は欠損しているが、棒状を呈し全面にケズリが施されている。樹種はクヌギである。

鉄製品

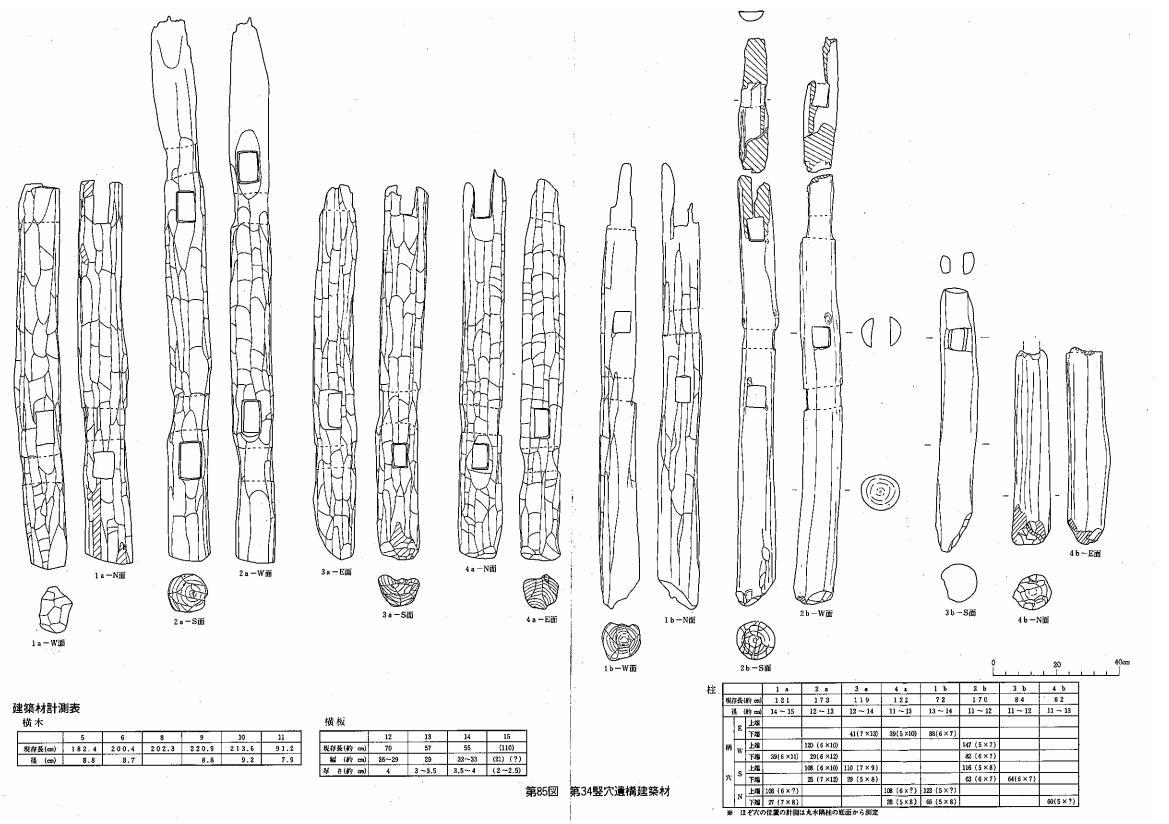
釘(第87図2) 先端の一部が欠損しているが、細長い棒状のもので先端に向って細くなっている。頭部は平坦な面となっている。断面は方形である。

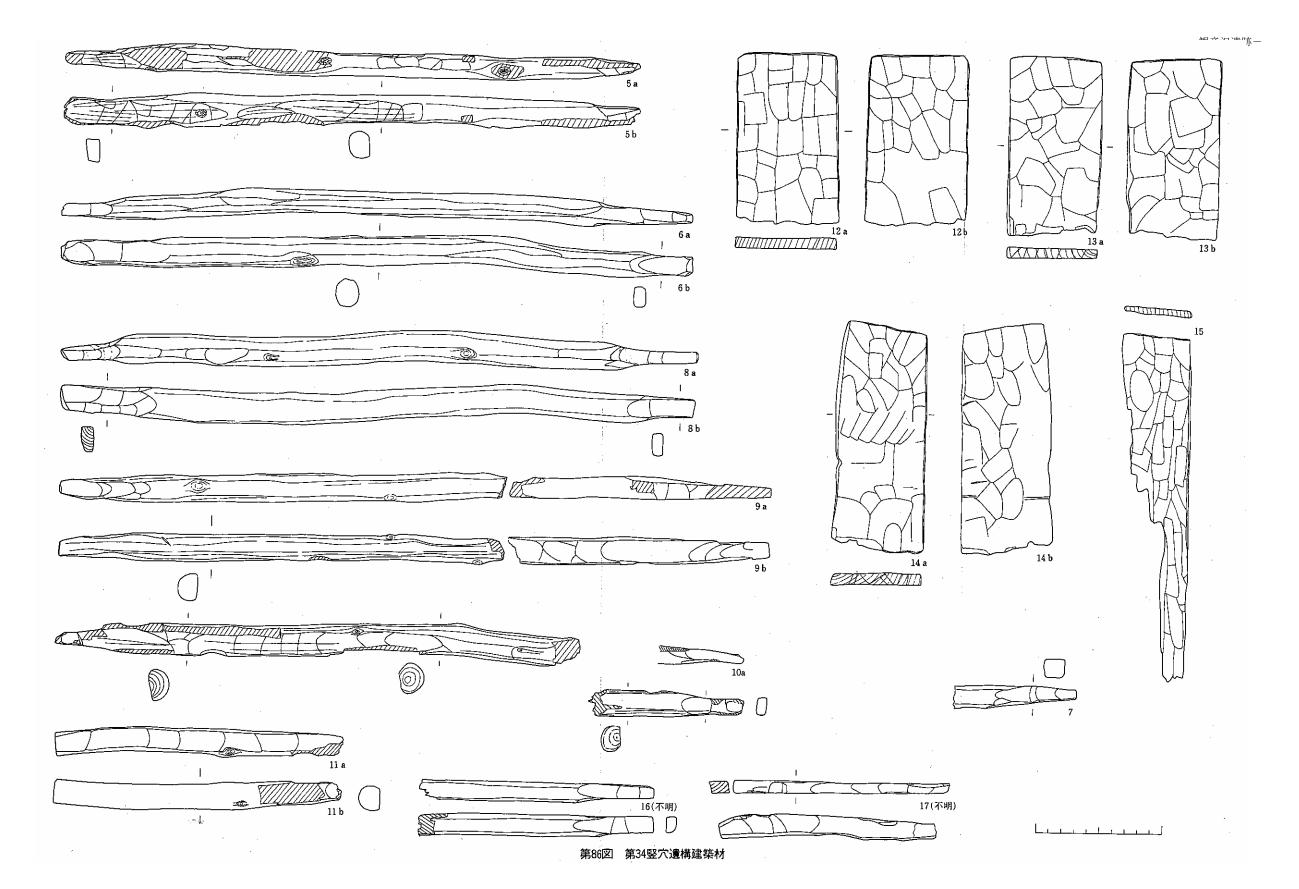
石製品

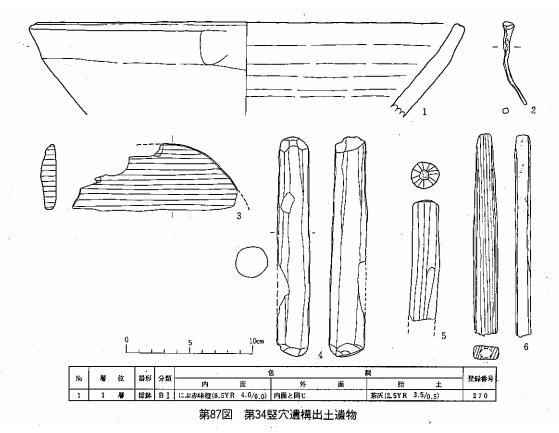
腰刀

全長34.2cmである。鞘は、全長23cm、幅4cmで鞘口(鯉口)の側面は半円状にくりぬき、把縁が喰い込むような形になっている。いわゆる呑み口式の鞘である。鞘木は4枚の薄板を張り合せて造っている。真中の2枚の鞘木は鞘尻寄りにある方形の木釘で留められ、さらに全体の鞘木は鞘尻にある円形の木釘で留められている。鞘の表面には黒漆が塗られている。特に刀身のあたる部分の内面の鞘は棟側が深く、切先に向うにしたがい浅くなっており、刀身が納まるように作られている。鞘には刀身が3口納まるようになっていたが真中の鞘には刀身が残存していなかった。鞘口寄りには4.5×2.5cmの銅製の笄櫃があり、竹製の笄が挿入されていた。笄櫃には銅の刳形と返角を取り付け鞘にはめこんでいる。表面に黒漆が塗られていた。刳形と返角との間隔は2.3 cmと狭い。

刳形はリング状になっており、沈線状の刻みが数個彫られている。返角は鋭利な形をしており、 先端が斜上方に突出している。あたかも、刳形はしの竹、返角は筍を型どっているかのようであ る。







把はいづれも把縁の側面が半円状で倒卵形になる。把は2つに割った把木を張り合せて造っており、その表面には桜の皮がまかれている。特に茎のあたる部分の内面の把は棟方が深く、 刃方の部分が浅く造られている。把縁寄りには目釘孔が1個認められる。さらに木製の目釘も残存していた。

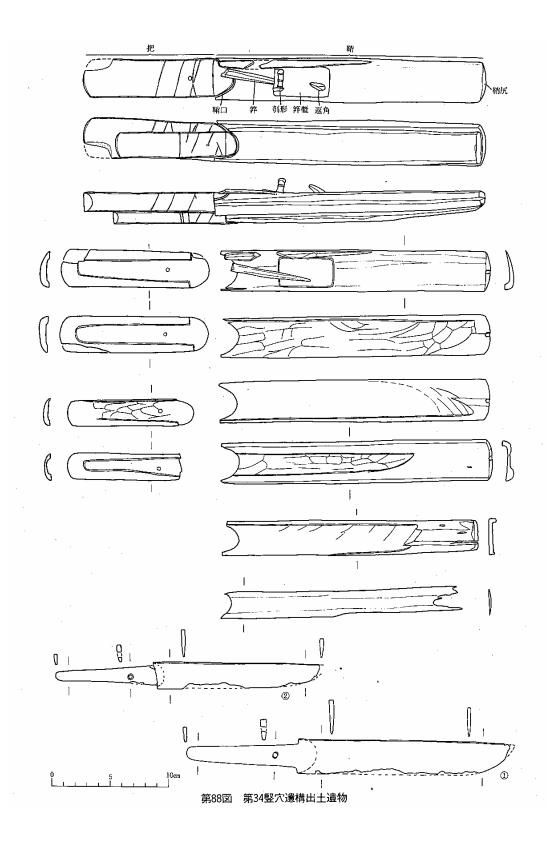
①の把長は12.9cm、把幅3.2cm、②は把長10.4cm、把幅2.2cmある。

刀はいずれも刀身に反りがなく平造りのもので、切先はフクラがつく。棟は平棟である。茎は茎尻に向うにしたがい細くなりまるくおさまる栗尻である。関の部分は刃部と棟がほぼ直角に切り込まれて刃関と棟関が明瞭である関寄りに目釘孔が1個ある。

①は切先の一部と刃先が欠損している。現存全長27.8cm、現存刃長18.2cm、茎長9.6cm、関寄りでの身幅2.9cm、重ね4mm、切先近くで身幅2.5cm、重ね2.5mm、関寄りの茎幅1.7cm、重ね4mm、茎先近くで茎幅1.2cm、重ね3mmである。

②は切先と刃先の一部が欠損している。現存全長22.6cm、現存刃長14.6cm、茎長8.0cm、関寄りでの身幅2.3cm、重ね3mm、切先近くで身幅1.6cm、重ね2mm、関寄りの茎幅1.3cm、重ね3mm、茎先近くで茎幅8mm、重ね2mmである。

笄は2本ある。1本は笄櫃に挿入されていたが、他の1本は笄櫃に近接した鞘に付着してい



た。いずれも竹製品である。

笄櫃に挿入された笄は、胴部以下のものである。鞘に付着した笄は全長12.1cmで胴部の一部が欠損している。耳掻はなく、肩は丸くおさまり、胴部から穂先に向うにしたがい細くなり、穂先は尖がる。

第35竪穴遺構

[位置] C~E-(-13~-15) 区に位置する。

[重複] 第34・36竪穴遺構、焼土遺構と重複し、それを切っている。

〔平面形・規模〕 北側が削平されていて全体形は不明ではあるが、平面形は方形と思われる。 規模は5.9mと推定される。南側には全体を取り囲むように3つの段が認められる。

〔堆積土〕 堆積土は3層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は急角度で立ち上がる。壁高は1.2mである。

[底面] 南側では地山、北側では第34竪穴遺構堆積土を底面としている。

[出土遺物] 遺物は出土していない。

第36竪穴遺構

[位置] B・C-(-14~-15)区に位置する。

〔重複〕 第35竪穴遺構と重複し、これに 切られている。

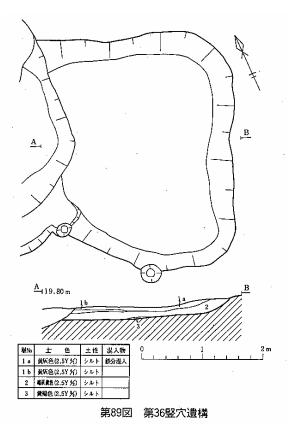
〔平面形・規模〕 西側が破壊されており、 全体形は不明ではあるが、平面形は方形を 呈している。規模は南北約3.8mである。

〔堆積土〕 堆積土は3層認められた。

〔壁〕 地山を壁としている。壁は急角度で立ち上がり、壁高は東側で約30cmである。

〔底面〕 地山を底面としている。底面は 凹凸がなく平坦である。

〔出土遺物〕 堆積土中から中世陶器の破 片が出土したが図示できない。



第37竪穴遺構

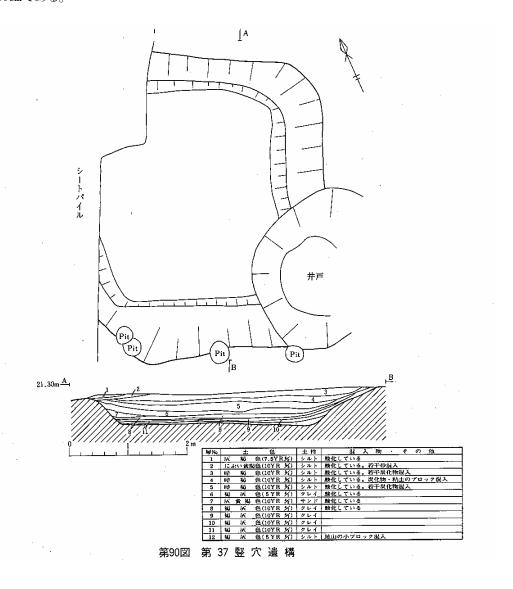
[位置] F・G-(-32~-25) 区に位置する。

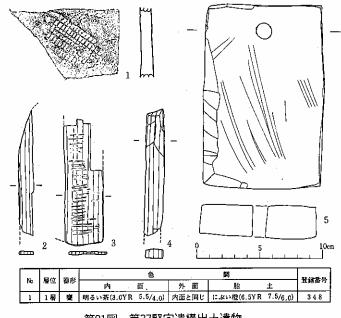
〔重複〕 第8・9井戸、110号土壙と重複し、第8井戸を切り、第9井戸に切られている。100号 土壙との新旧関係は不明である。

[平面形・規模] 西側が調査区外に延びているが平面形は方形を基調としている。規模は南 北5.0mである。

〔堆積土〕 堆積土は12層認められる。

[壁] 地山を壁としている。壁は下端が明瞭で急角度に立ち上がり、段が認められる。壁高は約60cmである。





第91回 第37竪穴遺構出土遺物

地山を底面としている。底面は所々に小さな凹凸が あるがほぼ平坦である。

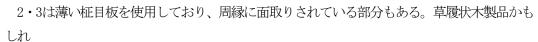
[出十遺物] 堆積十から中世陶器の破片、木製品、石製品が 出土している。

無納陶器

甕(1) 体部破片で外面に格子目の押印がある。

木製品

形態不明な木製品(2~4) いずれも欠損している。4は長方 形の厚い柾目板を使用している。先端には全面にケズリが施さ れている。樹種はスギである。

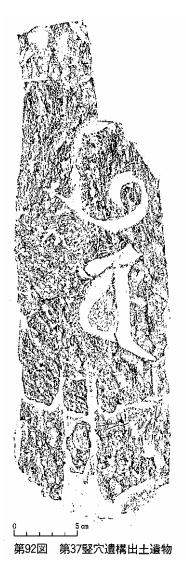


ない。樹種はスギである。

石製品

種類不明な石製品(5) 長さ約14.6cm、幅約9.5cm、厚さ約2.5cmの長方形を呈している。 上端中央より1.5cm下に径約1.2cmの穴がある。表裏面はなめらかな面となっている。

板碑(第92図) 欠損しているため、全体の形状は不明である。 バンの梵字が掘られてある。



3. 井戸跡

調査区の丘陵平坦部、緩斜面、沢の部分で計9基の井戸跡が確認されている。すべて素掘りの井戸である。

第1井戸跡

E-61区に位置する。第4溝と重複し、それを切っている。平面形は円形で、径約2.2m、深さは約3.5mである。下端がわずかにえぐれているが、断面形は逆台形を呈している。底面は平坦である。堆積土は2層認められ、中世陶器、須恵器が少量出土している。図示できる遺物はない。

第2井戸跡

E・F-55・56区に位置する。第8号住居跡、12号土壙と重複し、これらを切っている。平面形は円形で、径約2.8m、深さは約5mである。壁は比較的出入りがあるが直立気味に立ち上がり、上端付近で大きく外側に開く。底面は平坦である。堆積土は4層認められ、第3層中から土師器・中世陶器・曲物が出土している。

第3井戸跡

C・D-42区に位置する。平面形は円形で、径約2.4mである。完掘していない。堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器の破片などが少量出土している。

第4井戸跡

 $F-29 \cdot 30$ 区に位置する。第10溝と重複し、その新旧関係は不明である。西半が調査区外に延びているが、調査部分では平面形が円形で、径約2.1mである。深さ約1.6mまで調査したが、完掘していない。遺物は出土していない。

第5井戸跡

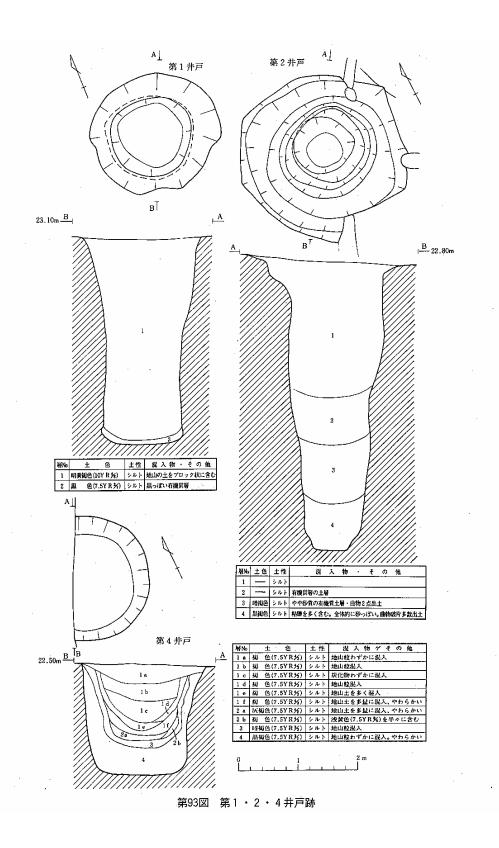
C・D-17区に位置する。平面形は円形で、径約1.3mである。深さ約1.8mまで調査したが、 完掘していない。堆積土中から中世陶器、土師器の破片が少量出土している。図示できる遺物 はない。

第6井戸跡

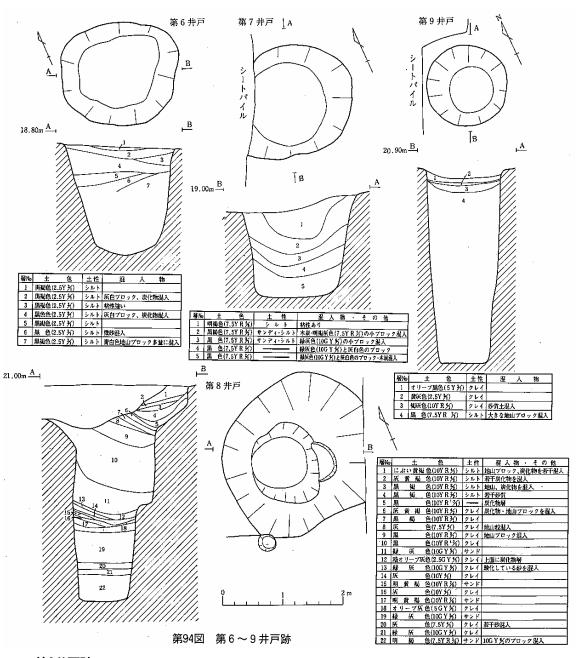
D・E-(-3) 区に位置する。平面形は円形で、径約1.9m、深さ約1.8mである。堆積土中から木製の櫛が出土している。

第7井戸跡

E-3・4区に位置し、第28竪穴遺構の底面で確認された。調査区西側にシートパイルが打ち込まれており、全体を調査できなかった。平面形は円形で、径約2m、深さ約1.6mである。堆積土中から草履状、曲物、漆器椀などの木製品が出土している。



247



第8井戸跡

F-(-24)区に位置し、東半では地面、西半では第37竪穴遺構の底面で確認された。調査区東側にシートパイルが打ち込まれており、全体を調査できなかった。平面形は円形で、径約2.6m、深さ約2.6mである。堆積土中から木製品(曲物、箸、草履状)や中世陶器の破片が出土している。

第9井戸跡

G-(-24)区に位置し、第37竪穴遺構の底面で確認された。平面形は円形で、径約1.3m、深さ約3.2mである。断面形は上端がわずかに開くがほぼ円筒形を呈している。底面から曲物が出土している。

[井戸跡出十遺物]

第2井戸跡出十遺物

無釉陶器

擂鉢(第96図4・5) 4は体部から口縁にかけて外傾し、口縁部上端は平坦である。内面の下半には使用痕がみられ、平滑な面になっている。5は底部破片である。

中国産磁器

青磁碗 図示できなかったが体部破片が1点出土している。外面には鎬蓮弁文が彫られている。釉は緑灰色を呈し、全面に均一にかけられている。胎土は灰白色を呈し、わずかに黒色粒を含み気泡もなく精良である。

木製品

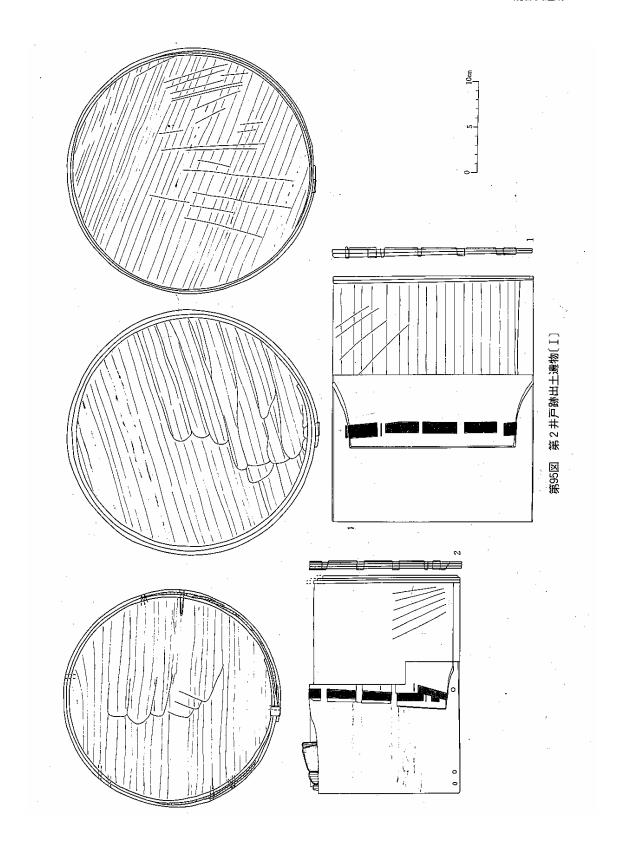
曲物(第95図1・2) 2点出土している。1は、径約27cm、高さ約22cmで、厚さ2~4nmの柾目の1枚板を使用して内側に木目に直交、斜行する方向に1.0~2.5cmの間隔でケビキを入れ2重に丸めている。また、部分的には間に他の板を詰めている。両端は8cmほどを重ね、外側に出る方の先端から、1.4cmのところで幅約1.2cmの桜の皮を使用し縦にぬい合せている。とじ方は外側が長く、内側は短かくし、端を折り返して板の内側におさめている。底板は径約25.1cm、厚さ1.5~1.7cmの柾目板で側板の内側にはめ込み、固定させている。また、底面の外面に鋭利な線状の傷が数条ついている。

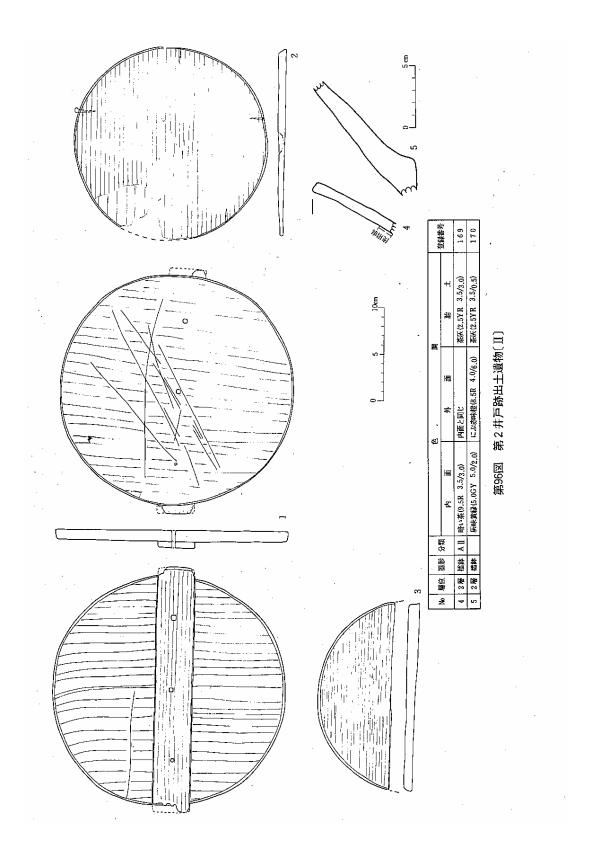
2は、径経24cm、高さ約16.5cmで、厚さ0.2~0.3cmの板目の1枚板を使用し、内側に木目と斜行する方向に1.0cmの間隔のケビキを入れ2重に丸めている。半分ほど間に他の板を詰めて3重にしているところもある。両端は8cmほどを重ね、外側に出る方の先端から約0.7cmのところで幅約0.8cmの桜の皮を使用して縦にぬい合せている。とじ方は外側に長く、内側に短くし、両端を折り返して、側板の内側におさめている。底板は径約22.3cm、厚さ約0.8cmの柾目板で側板の内側にはめ込み、8本の竹釘によって側板に固定させている。

曲物底板(第96図2・3) 2は、径約20.9cm、厚さ約0.8cmの柾目板を使用している。周縁には4個の釘穴が認められたが、配置から推定すると5個あったと思われる。全体に腐食しているため製作痕は不明である。

3は、径約21cm、厚さ約1.0cmの柾目板を使用した曲物底板と思われる。

曲物蓋板(第96図1) 径約25cm、厚さ約1.3cmの柾目板を使用している。中央部に、26.4 ×4.1cmの長方形の柾目板をあて、3本の木釘によって蓋板に固定させている。蓋板の内面には、





鋭利な線状の傷が数条ついている。

第3井戸跡出十遺物

無釉陶器

擂鉢(1~3) 口縁上部端が平坦なもの(1)と沈線状の浅い凹みが巡るもの(2)とがある。 両者は口縁部に近づくにつれ、器壁は薄くなり内弯気味に折れ曲る。3は底部が平底で、体部 は直線的に外傾する。外面の底部周縁はなめらかで、中央部に近づくにつれ、ざらざらした面 をしている。内面には使用痕があるが体・底部の境目は他の面と比較して著じるしくなめらか な面をしている。底部内面にスス状の炭化物が付着している。

鉄製品

形態不明な鉄製品(4) 1点出土している。両端が欠損しているが細長い棒状のものである。 断面は円形である。

土製品

勾玉(5) 1点出土している。土製のもので、「コ」の字形を呈している。穴は両面から穿たれているが、貫通していない。長さ約3.9cmである。

第6井戸跡出十遺物

木製品

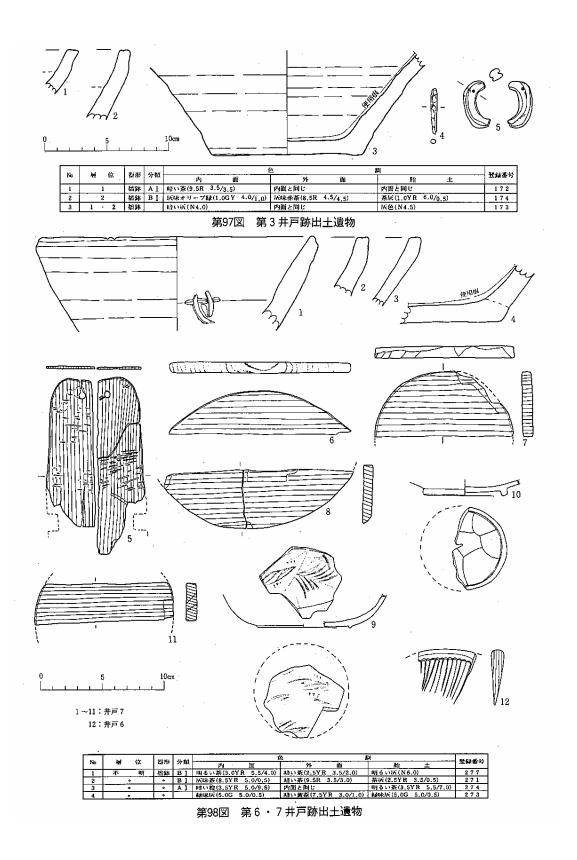
櫛(12) 肩部は丸味をおび、歯は0.3~0.4cmの間隔で比較的粗い。歯の密度は3cmあたり9 枚である。現存幅約4.7cm、最大厚約1.0cm、ムネの高さは約0.8cmである。材質はクスノキである。

第7井戸跡出十遺物

無釉陶器

擂鉢(1~4) 口縁部破片は口縁部上端が平坦なもの(3)と沈線状の浅い凹みがめぐるもの(1・2)とがある。いずれも体部から口縁にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に屈曲する。2・3は屈曲部の外面に稜がめぐる。1はピット出土の破片と接合した資料である。端部内面はやや上方に張り出し、その先端に3条の刻目が彫られてある。浅い凹みは一定した幅をもたないため、その区別が明瞭でない部分もある。体部内面には「せ」と判読できる文字が焼成前にヘラ書きされている。2は片口部にオサエ痕が認められる。3は内外面に炭化物が付着している。

4は底部が平底で、体部は下端が直立気味で、それ以上は外傾する。内面には使用痕がある部分とない部分がある。使用痕がある部分は胎土と同様な色調をしており、平滑な面を形成している。使用痕のおよんでいない部分は粘土積み上げ痕が明瞭に観察される。



253

木製品

草履状木製品(5) 1点出土している。欠損しているが薄い柾目板を2枚使用し、左右対称に整形して中央で合わせている。前端部には2個の小孔が穿たれている。

曲物底板(6~8・11) 4点出土しているがいずれも欠損している。いずれも厚い柾目板を 使用している。8は炭化した状態になっている。樹種はスギである。

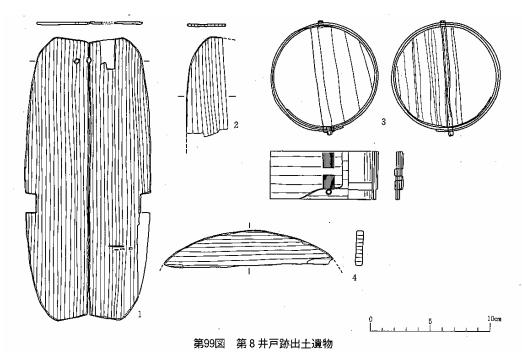
漆器椀(9・10) 2点出土している。短い高台がついている。9は内外面に黒漆が塗られ体 部両面に赤漆で文様をつけている。10は高台部の一部に漆が付着している。樹種はケヤキであ る。

第8井戸跡出十遺物

木製品

草履状木製品(1・2) 2点出土している。1は長楕円形の薄い柾目板を2枚使用して、左右対称に整形し中央で合わせている。両側縁には方形のえぐりを入れ、前端部には2個の小孔が穿たれている。表裏面にワラ状の織物痕が付着している。左右2枚の板およびワラ状織物を接着する方法を示すような痕跡はみとめられない。長さは約23.6cm、幅は10.4cm、厚さは0.2cmである。材質はスギである。2は欠損しているが先端部には切り取った面がみとめられた。

曲物(3) 1点出土している。径約9.1cm、高さ約4.0cmで、厚さ0.2cmの柾目の1枚板を使用し、それを2重に丸めている。両端は5.3cmほどを重ぬ、外側に出る方の先端から約0.8cmのところを、幅1cmほどの桜の皮を使用して縦にぬい合わせている。とじ方は外側に長く、内側は



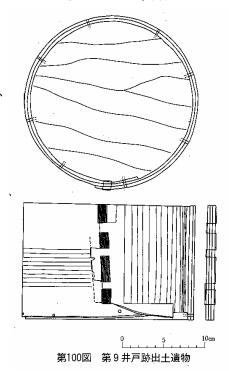
短くし、端を一度折り返して板の内側におさめている。底板は径約9.5cm、厚さ約0.6cmの柾目板で、側板下端より約0.8cm上の内側にはめ込み、棒状のものでささえている。

曲物底板(4) 1点出土している。欠損しているが曲物底板と思われる。樹種はスギである。

第9井戸跡出土遺物

木製品

曲物 1点出土している。径約20.8cm、高さ約14.1cmで、厚さ約3cmの柾目の1枚板を使用し、内側に木目と直交する方向に0.6~0.8cm間隔にケビキを入れ2重に丸めている。両端は5.2cmほどを重ね、外側に出る方の先端から約1.0cmのところで、幅1.0cmほどの桜の皮を使用し、縦にぬい合せている。とじ方は外側に長く、内側に短くし、端を折り込して板の内側におさめている。底板は径約19.6cm、厚さ約0.9cmの柾目板で、側板の内側にはめ込み、8本の木釘によって側板に固定させている。樹種はスギである。



4. 円形周溝

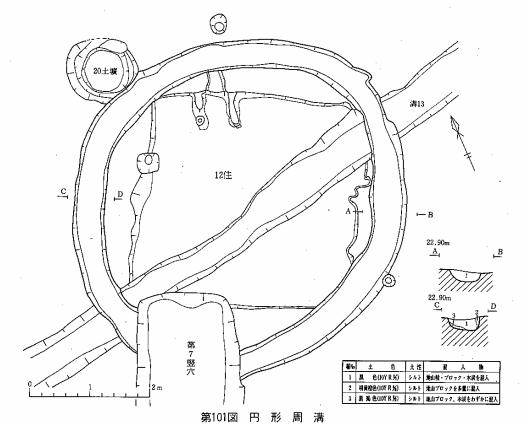
D~F-48~50区に位置する。

第12号住居跡を切っており、7号土壙、第9溝によって切られている。さらに、20号土壙と重複するがその新旧関係は不明である。平面形は径約5.6mの円形に溝がめぐる。溝は幅40~60 cm、深さは約20cmである。

溝内堆積土は1層だけで地山の粒子・ブロックや木炭を含む黒色シルト層である。また、壁の崩壊土と思われる明黄橙色シルト層が混入されているところもある。

壁は急角度で立ち上がる。

底面は平坦で凹凸がない。溝により区画された内側には関連する遺構は検出されなかった。 堆積土中や底面から土師器、須恵器、中世陶器などの遺物が出土している。



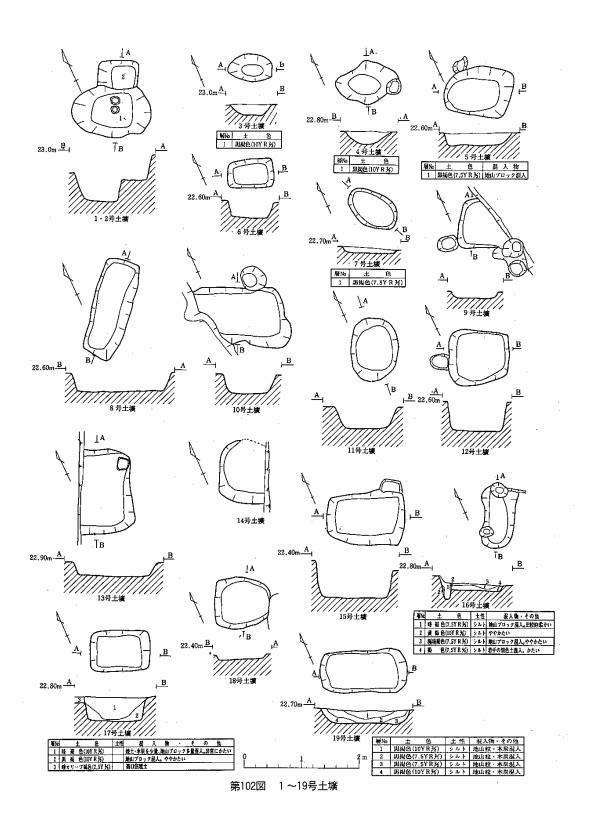
5. 土壙

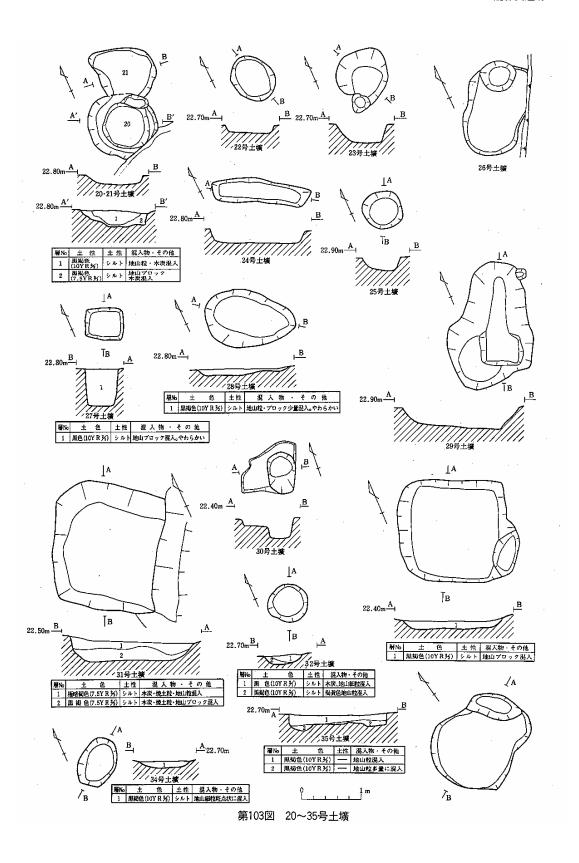
第1~3次調査で110基の土壙が確認された。各々の土壙は丘陵平坦部、南斜面、沢の部分に 分布し、その分布に偏りは認められなかった。検出された土壙は、土壙相互が切り合っている もの、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、竪穴遺構などと切り合っているものもある。

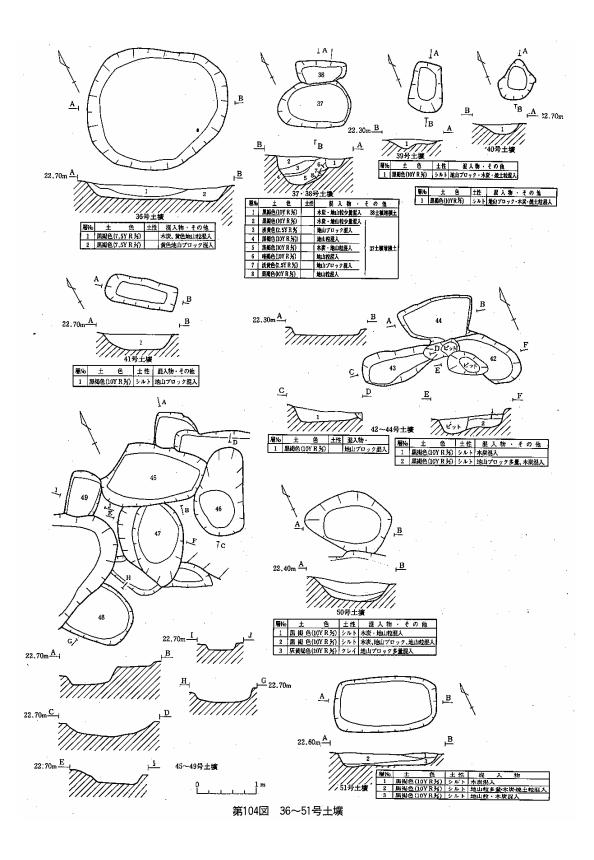
本項では、これらをまとめて平面形・壁・底面・堆積土などについて記述する。

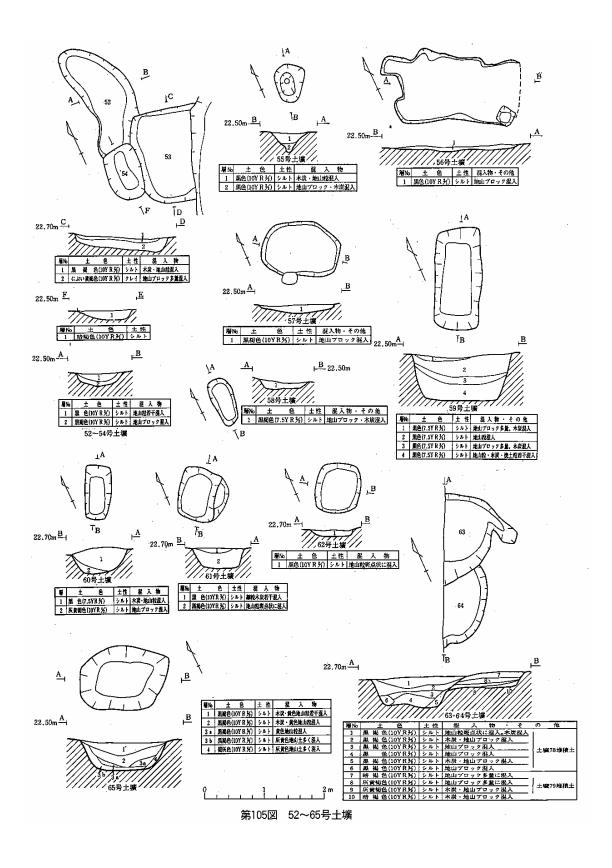
〔平面形〕 各々の土壙跡の平面形を検討すると、方形を基調とするもの、円形を基調とするもの、不整形のもの、重複や調査区外に平面形の一部が延びているため不明なものとがある。 方形を基調とするものは、長方形を呈するものと正方形を呈するものとがある。 円形を基調とするものは、楕円形を呈するものと円形を呈するものとがある。 これをまとめると第110図のようになる。 なお、個々の土壙についてはその内容を一覧表にまとめて示している。

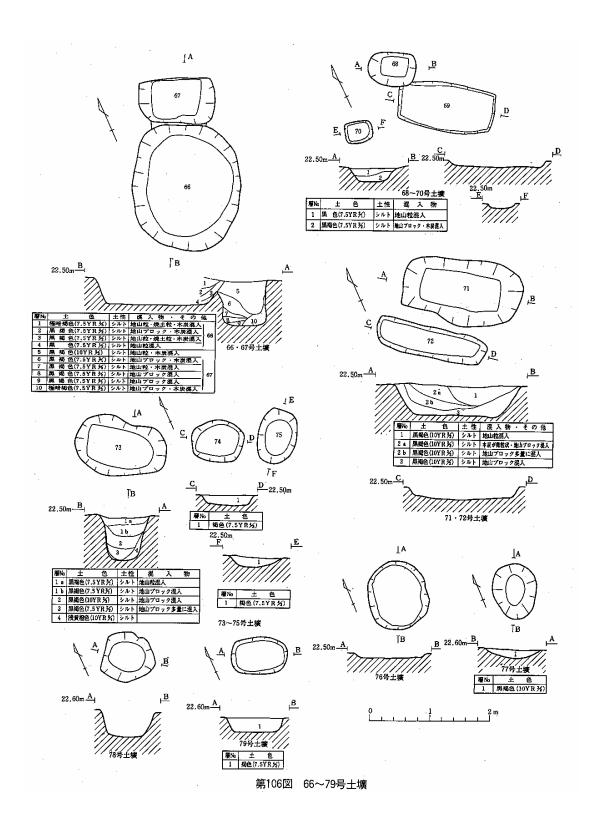
長方形 I -5、6、8、15、17、19、24、27、39、41、45、49、50、51、54、59、60、61、65、67、69、71、72、79、86、89、90、92
正方形 II -12、33、70、84
(不明) III -2、9、10、13、14、31、43、53、56、82、88、103、109

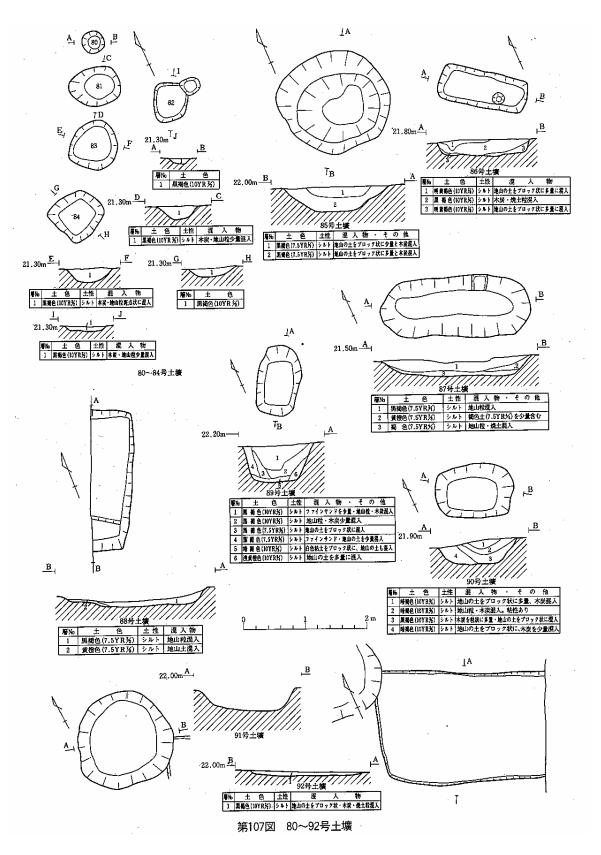


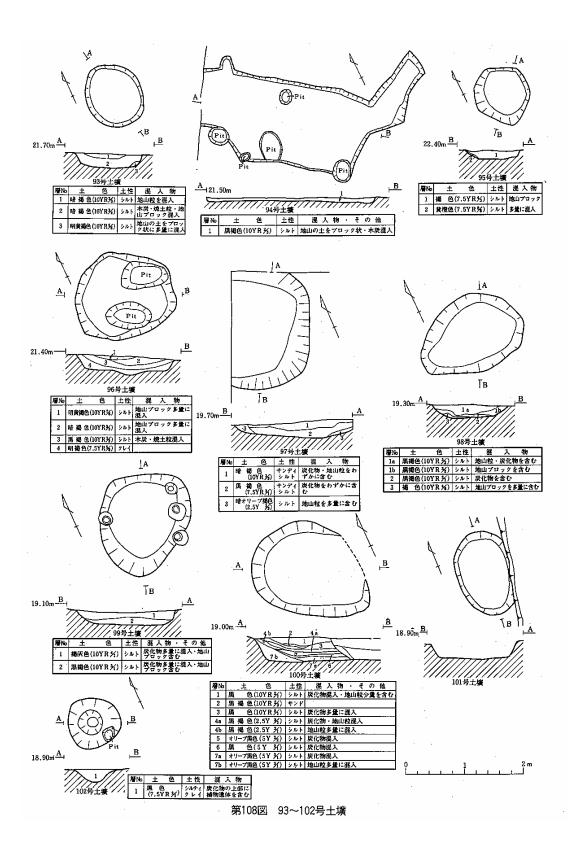




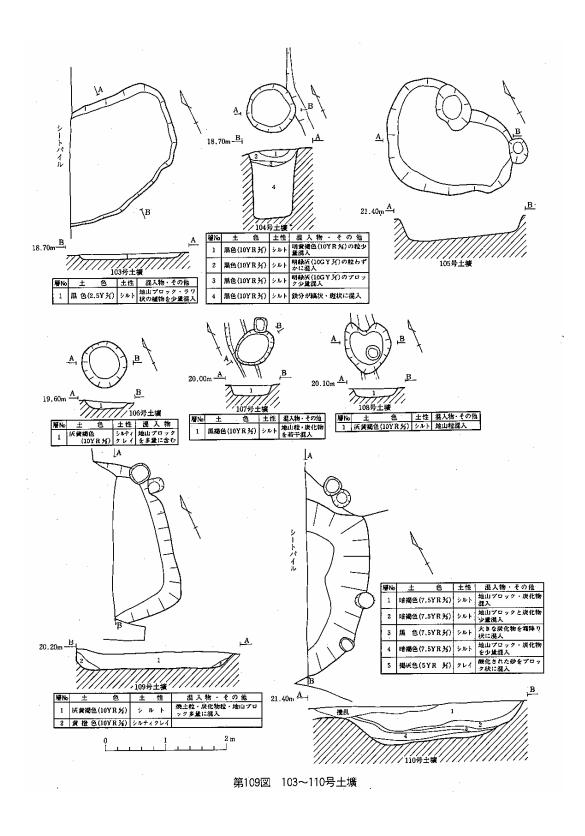






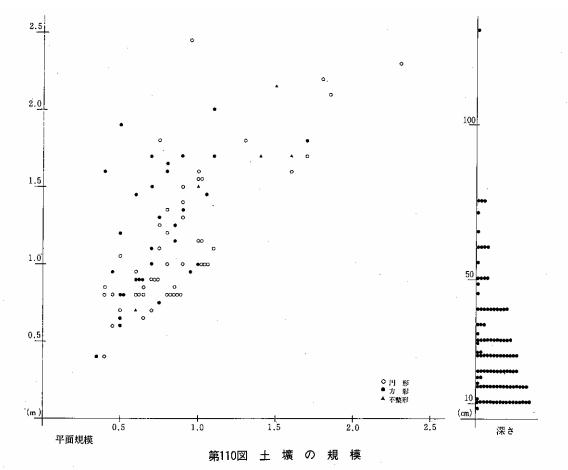


263



第5表 土壙一覧表

第	5 表 土	壙一覧																	$\overline{}$
基			大きさ	深	底面の	壁の	状 况	111 1 381 441	毒	(4- 50	गर नद्ध ४४	大きさ	深さ	底面	iの	壁の		# +	遺物
土壤的	位置	平面形	()	(cm)	状 沥	下 端	沈 ち	出土遺物	療行	位 置	平面形	(cm)	(cn)	伏	況	下 端	立 上がり	114 .1.	~= **
-	F 60	MATTERS	-	(cui)	丸底			上師器・須恵 器・中世陶器	56	D~E-35	長方形	南北 110	10	平	坦	明瞭	ゆるやか	な	l
1	E-60	楕円形 カ形と思				-	急角度	土飾器	57	C~D-34	楕円形	130× 90	15	平	坦	明瞭	ゆるやか	Ť.	i
2	E-00	11 to		-	平 坦		_		-			80× 40	15	丸	底	不明瞭	ゆるやか	な	- L
3	E-64	格円形	80× 45	20	る丸底	7 不明瞭	急角度	な し 上が御・中世	58	B ~ C −33	長楕円形								师 器
4	E-F-60	格円形	110× 75	32	丸质	不明瞭	急角度	土師器・中世 陶器	59	C-32~33	長方形	165× 80	75	平	坦	明瞭	急角度		
5	E-59~60	長方形	115× 85	26	平生	不明瞭	急角度	<u>な</u> し	60	F-32~33	長方形	95× 45	40	丸	底	明瞭	直立気味	な・	_ ,i
6	E-59~60	及方形	80× 50	28	平 坦	明瞭	急角度	なし	61	E-32	長方形	90× 60	35	平	坦	明瞭	直立気味	な	<u>\</u>
7	F-59	楕円形	95× 60	10	平 坦	明瞭	急角度	なし	62	E -31-32	梅円形	85× ?	10	平	坦	不明瞭	ゆるやか	な	L
8	E-59	長方形	170× 70	60	平世	明瞭	直立気味	上師器・須惠器・中世陶器	63	F-31~32	不 明	不明	50	平	坦	明瞭	急角度	上師為 傷傷	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
9	F-57~58	ガ形	90×?	10	平坦	不明瞭	急角度	なし	64	F-31	不 明	不明	26	平	坦	明瞭	ゆるやか	な	L
10	E-57	長方形		15	平坦	_	急角度	な し	65	C~D-31~32	長方形	145×105	50	平	坦	明瞭	急角度	土角	独 器
_		格円形		30	平世	-	急角度	土 師 器	66	D-31	楕円形	210×185	40	平	坦	明瞭	急角度	土角	師 器
11	D-57~58			\rightarrow	平坦	+	急角度	なし	67	D-32	長方形	130× 75	75	平	坦	明瞭	直立気味	上面影	· 通惠 世陶器
12	D-56	方 形		55				なし	68	B~C-32	楕円形	80× 60	20	平	担	明瞭		72	L
13	G-55	われる		30	平坦	+		<u> </u>				160× 80	10	平	坦	明瞭		2	L
14	B-56	力形と思 われる	南北 115	_	平坦			なし	69	C-31	技方形		_	平	坦	不明瞭		な	- i
15	E-53	長方形	135× 90	60	平坦	明瞭	ゆるやか	<u>د</u> ا	70	C -31	方 形	40× 35	10				1	_	
16	G-53	楕円形	105× 50	10	平均	明瞭	急角度	なし	71	E-F-30	長ガ形	200×110	50	平	坦	明瞭		\$	L
17	F-53	長方形	100× 70	50	平均	明瞭	急角度	なし	72	E~F-30	長方形	190× 50	20	丸	底	明瞭		\$	ا د س
18	F-53	円形	100× 90	18	平坦	1 不明瞭	ゆるやか	なし	73	E-F-29	格円形	155×100	75	平	坦	明瞭	-	-	が 器
19	C-53	長方形	150× 70	25	平均	明:瞭	直立気味	なし	74	E-29	楕円形	90× 70	18	平	坦_	明瞭	ゆるやか	な	. L
20	E~F-50	円形	110×110	30	平坦	1 HJ HQ	ゆるやか	なし	75	E-29-30	楕円形	90× 70	25	丸	應	不明瞭	ゆるやか	な	L
21	E-F-50	直んだ。円・形	100×100	15	丸龙	不明瞭	ゆるやか	上がは・河の	76	D-30~31	楕円形	115×100	8	平	坦	不明瞭	ゆるやか	な	l
22	G-47	円 形 楕円形	_	12	平均	+	急角度	須惠器・中世 協器	77	B~C-28~29	格円形	90× 70	15	丸	底	不明瞭	急角度	土!	師 登
23	G-47	円形	100×100	30	丸原		+	1.62.00 1.61.00	78	F-28	円形	80× 80	40	丸	底	不明瞭	急角度	中世	陶器
1—	 			20	平井	+	急角度	<u>а</u>	79	F-28	長方形	90× 60	20	平	坦	明瞭	直立気味	上的智	3・中世
24	C-47	長方形	160× 40			1			80	F-24	円形	40× 40	+	丸	悠	不明瞭		な	L
25	C-47	円形	70× 70	-	平 #	-		-	1	F-24	格円形	85× 65	20	丸	庭	不明瞭		な	,L
26	B-48	楕円形	160×100	-	平均			なし	81	<u> </u>		60× 50	-	平	坦	明瞭	急角度	な	- i
27	D-48	技力形	65× 50	60	平均	_	 	上 師 器	82	E-24	方 形		┼			-	+	 -	- L
28	C~D-48	楕円形	155×100	10	平士	1 不明瞭	ゆるやか	陶器・青磁銃	83	F-23~24	円形	80× 80	┼	丸	底	不明瞭		2	
29	D-48	不整形	215×150	40	平 t	1 明 時	急角度	上師器·須惠 器	84	F-23	正方形	75× 75	-	丸	屹	不明瞭		な 上(62	し 3・中Ut
30	C-43	楕円形	120× 80	25	丸质	不明瞭	ゆるやか		85	C-D-23	円形	180×180	_	丸	底	不明瞭	-	1: (v6 2 (34 2.)	
31	F-44~45	が形と思 われる	220×130	40	平力	見明 瞭	急角度	土(時間・中世) 関数	86	B-24	長方形	145× 60	30	平	坦	明瞭		3	
32	B-40	円形	65× 65	15	丸息	5 不明瞭	ゆるやか	なし	87	B~C-23	楕円形	245× 95	40	丸	jį.	不明瞭	+	4	L
33	B-43	正方形	180×170	15	平力	19月10月	急角度	土 師 器	88	F-22	方 形	南北 225	30	平	坦	明瞭	急角度	な	L
34		格円形	80× 60	10	丸儿	5 不明期	しゅるやか	中世陶器	89	F-21	長方形	110× 70	65	平	坦	明瞭	直立気味	な	L
35		不整形	170×140	30	坪 j	且 不明期	ゆるやか	上M型·須惠	90	D-21	長方形	125× 85	45	平	坦	明瞭	急角度	な	لا
36	 	円形	230×230	-	平力			上加恕·组织	91	C-21~22	円形	160×160	40	不	明	不 明	不 明	\$	J
\vdash		権円形	125× 75	\vdash	丸り			上9623 中世 海路	92	B-C-21	長方形	175× ?	10	平	坦	明瞭	急角度	土	師 器
37	C-39			-	_	-	+:	土 師 器	93	B-1921	円形	115×100	25	平	坦	明瞭	直立気味	2	L
38	+	楕円形	85× 40	-	_	5 不明時		エ押台	94	F~G-16~17	+	140× ?	10	平		明瞭	-	-	師 器
39		及方形	80× 50	-		※ 不明的	+	なし	95	F-16	円形	100×100	<u> </u>	丸	悠	不明瞭	-		は・中世
40		不整形	70× 60	1		美明 既	+	+	1 ⊢ −		円形	170×170	+-	平	坦	不明瞭	+		L
4		長方形	120× 50		_	旦 明 1			96	C-16~17	+		+	丸	底	不明瞭		+	
4	B-38	格円形	60× ?	35		不明明	+	な し	97	F~G-7	不明	不明	30	-				1	師器
4:		楕円形	50× ?	25	<u> </u>	1 不明期		+	98	F-4~5	権円形				坦	不明瞭	! ゆるやか . 斯側 2角1	<u> </u>	神命
	B~C-38~39									F~G-2~3	小整形	170×160	25	平	坦	明 明	上侧 3角的 南侧 3分分) + t	· PU fif
4	C~D-38	方 形	170×110	15	平	且 不明期	ま ゆるやか		╌	F~G-1		南北 160	1						
4	C - 38	格円形	150× 90	25	丸し	※ 不明的	けゆるやか	なし	101	C-1	格円形	140× 90	-	+-			急角度		_ L
\vdash	D-37~38	楕円形	85× ?	15	平:	虹 不明	もゆるやか	なし	102	F-(-4)	円 形						ゆるやか		ì
4	-		南北 100	-					103	E-(-4)	ガ 形	南北 160	10	平	坦	明瞭	急角度	2	L
4		長方形		-		旦明即			104	D-(-3)	丹形	80× 80	130	平	坦	明殿	直立気味	4	L
_	B~C-37		+	-		ぎ 不明節				C- (-12~13)		220×180	20	平	坦	明的	急角度	3	L
\vdash	+				-			土師器	7 F	F-(-14)			-		_		急角度	_	L
_				+				土師器		F-(-15)			-	+	坦		急角度	4	L
-	D-36~37		180× 75	_	╄-					F (-15)			-		坦	_	急角度		i
5			南北 160	-	_				11.00	F-G- (-16~-17)	力 形		25			_	(急角度	-	L
5		長方形		_		_	(ゆるや/	-	11:05	(-16~-17)	(1) 150		+	_		<u> </u>	急角度		
5	5 C−35	楕円形	60× 45	30	丸	底 不明		: c し	7 [110	G - (-2526)	円形	1 1 明	/1	1 4,	- 195	1. 19	11007138		-



作円形 I -1、3、4、7、11、16、22、26、28、30、34、35、37、38、42、46、55、57、58、66、68、73、74、75、76、77、81、87、98、101、105、107

(B) 円形基調 円 形Ⅱ-18、20、21、23、25、32、36、62、63、78、80、83、85、91、 93、95、96、99、102、102、106、108、 (不明) Ⅲ-47、48、52、97、100、110

- (C) 不整形——29、40、44、94
- (D) ((不 明)——64

[壁の状況] 地山を壁としている。壁はゆるやかに立ち上がるもの、直立気味に立ち上がるもの、急角度で立ち上がるものとがあるが、急角度で立ち上がるものが多い。深さは最も深いもので約75 cm、浅いもので約10 cmのものがあるが、30 cm以下のものが多い。

[底面の状況] 掘り方底面の地山面をそのまま利用している。底面は平坦なものと、丸底状を呈するものがあるが平坦なものが多い。

[堆積土] 各々の土壙跡の遺存状態によっても違いがある。堆積土は2~3層の認められたものもあるが、ほとんどは1層だけのものである。これらの堆積土を観察すれば地山ブロック、地山粒、木炭、焼土粒が混入されている黒褐色あるいは暗褐色土層である。堆積状況は自然堆積である。なかには、分層されずに1度に埋ったと推定されるものがあるが、土色、土性、混入物などが自然堆積のものと類似しているため、人為的か自然堆積かは判断できない。

〔土壙出土遺物〕

4号十塘出十遺物

無釉陶器 甕(4) 体部外面に押印がある。

22号十塘出十遺物

無釉陶器 甕(2) 口縁帯をもつものである。口縁帯の幅は狭く、内面には沈線が巡り、 受口状口縁を成す。

28号十塘出十遺物

青磁碗 図示できなかったが体部破片が出土している。外面には蓮弁文が施されている。釉は灰味黄緑色を呈し内外面に厚くかけられ貫入が見られる。胎土は灰白色を呈する。

29号十塘出十遺物

形態不明な鉄製品(8) 欠損している。棒状のもので断面は円形である。

37号十塘出十遺物

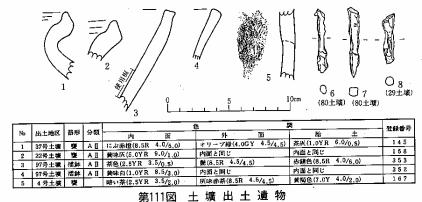
無釉陶器 甕(1) 口縁帯をもつものである。口縁帯の幅は狭く、内面に沈線が巡り、いわゆる受口状口縁を成す。

80号土壙出土遺物

形態不明な鉄製品(6・7) 棒状を成す。断面形は6が円形、7が四角形である。

97号十塘出十遺物

無釉陶器 擂鉢(3・4) 口縁部上端が平坦なものである。体部から口縁にかけて外傾する。 3は端部外面に凹みがめぐる。4は片口部中央の口縁端に2条の刻目が刻み込まれている。3は内面下半に使用痕があり、平滑な面を形成している。



•

6. 溝

調査区全域で20数本の溝が検出された。ほとんどの溝は調査区外に延びており、その長さ、 性格等は不明なものが多い。

溝は東西・南北方向に走るものや弧状を呈するもの、幅の大きいもの、小さいもの、また、 浅いために途中で途切れてしまうものなどさまざまである。以下主なものを記述する。

第1溝

調査区北側の丘陵平坦部、E~G-65・66区に位置する。西端でピットを切っている。東-西方向に長さ約4m確認され、さらに、調査区北、西側に延びる。幅は約50cmである。深さは5~10cmと浅い。底面は凹凸がある。堆積土は極暗褐色シルト層の1層だけである。遺物は出土していない。

第2溝

調査区北側の丘陵平坦部、D~G-64・65区に位置する。第1号住居跡を切っている。また、1号掘立柱建物跡、いくつかのピットとは重複しているが、その新旧関係は不明である。第1溝と平行しており、長さは東西約10mである。さらに調査区西側に延びる。幅は最も広い部分で約1m、深さは4~10cmと浅く、底面は凹凸がある。堆積土中から土師器、中世陶器の破片が出土している。

第3溝

調査区北側の丘陵平坦部、D・E-63・64区に位置する。第1号掘立柱建物跡によって切られている。また、いくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。平面形は弧状を呈している。幅は最も広い部分で約40cm、深さは4~10cmで浅い。底面は凹凸がある。

第4溝

調査区北側の丘陵平坦部、B~G-60・61区に位置する。第3号住居跡、第5溝を切り、1井戸によって切られている。4号住居跡との新旧関係は不明である。6溝とほぼ平行して東西方向に約16m検出され、さらにその輪郭は調査区外に延びる。幅は約1.2m、深さは30~45cmで底面は西から東に傾斜している。堆積土中から土師器、須恵器、中世陶器の破片が出土している。

第5溝

調査区北側の丘陵平坦部、 $F\sim G-60\sim 62$ 区に位置する。第4溝によって切られている。また、ピットや5溝と重複するが、その新旧関係は不明である。幅は $2\sim 2.2 m$ 、深さは15 cmである。

第6溝

調査区北側の丘陵平坦部、B~G-59・60区に位置する。第4・5号住居跡、4~6号土壙を切っている。また、8号土壙やいくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は不明で

ある。東西に約16m確認されたが、さらに、調査区外に延びる。西半は平面形に出入りがあり、一定しない。幅は最も広い部分で約2.4~2.6m、狭い部分で約0.8~1.0mである。深さは30~40cmである。堆積土から土師器、中世陶器が出土した。

第7溝

調査区北側の丘陵平坦部、B~G-53~59区に位置する。第8号住居跡を切っており、第3竪 穴遺構、ピットに切られている。また、いくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は 不明である。8溝と平行、南北方向に約22m確認され、さらに調査区に延びる。幅は最も広い 部分で約1m、深さは30cmである。堆積土は2層認められいずれの層にも地山ブロックを含んで いる。堆積土中から須恵器坏が出土している。

第8溝

第7溝の3m南側、 $C\sim G-52\sim 57$ 区に位置する。第 $2\cdot 4\cdot 6$ 竪穴遺構、19号土壙によって切られている。南北方向約18m確認され、さらに調査区外に延びる。幅は約60cm、深さは $10\sim 15$ cmで浅い。遺物は出土していない。

第9溝

調査区中央部の丘陵平坦部、B~G-48~50区に位置する。第12号住居跡、円形周溝、第7 竪穴遺構を切っている。発掘部分では「L」字状に折れ曲り調査区外に延びる。幅は約90cm、深さは6~10cmで浅い。遺物は出土していない。

第10溝

調査区中央の丘陵平坦部、 $F-28 \cdot 31$ 区に位置する。第3井戸、78号土壙と重複しているが、その新旧関係は不明である。南北方向に約10.5m確認された。幅は最も広い部分で約90cm、深さは $10\sim20$ cmで断面形は「V」字形を呈している。遺物は出土していない。

第11溝

調査区中央の丘陵平坦部、F-28・31区に位置する。第17竪穴遺構、75号土壙、ピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。東西方向に約10m確認された。さらに調査区東側に延びる。幅は最も広い部分で約1m、深さは6~10cmと浅い。遺物は出土していない。

第12溝

調査区南側の丘陵緩斜面、F・G-4区に位置する。18号土壙を切っている。東西に約2.1m確認された。幅は20~30cm、深さは確認面から3~10cmで浅い。堆積土は黒褐色ジルト層の1層だけである。遺物は出土していない。

第13溝

調査区南側の沢、E~G-2区に位置する。第29竪穴遺構と重複しているが、その新旧関係は不明である。東西に約7m確認したが、さらに調査区西側に延びる。幅は80~120cm、深さは

2~10cmで浅い。堆積土中から中世陶器の体部破片や草履状木製品、形態不明な木製品が少量 出土している。

第14溝

調査区南側の沢、D・E-1区に位置する。第15溝によって切られ、さらに、30竪穴遺構と 重複関係にあるが、その新旧関係は不明である。幅は50~60cm、深さは8~10cmで浅い。遺物 は出土していない。

第15溝

調査区南側の沢、 $B\sim D-1\sim(-9)$ 区に位置する。第14溝を切っている。さらに、104号 土壙、 $1\cdot 2$ 号建物跡と重複しているが、その新旧関係は不明である。一部途切れるが、第16溝 とほぼ平行して南北に約28.5m確認された。幅は80 \sim 100cm、深さは約15cmである。堆積土は 黒色シルト層の1層だけである。遺物は出土していない。

第16溝

調査区南側の沢、B・C-(2~-6)区に位置する。第29竪穴遺構、101号土壙、第1・2号建物跡と重複しているが、その新旧関係は不明である。途切れる部分もあるが南北約20m確認された。幅は80~90cm、深さは約20cmである。堆積土は黒色シルト層の1層だけである。遺物は出土していない。

第17溝

調査区南側の沢、B~E - $(-11 \cdot -12)$ 区に位置する。重複関係は認められなかった。東西に約11m確認した。さらに、調査区外に延びている。幅は2.5~2.7m、深さは70~80cmである。壁の立ち上がりは比較的急角度である。底面はやや東側に傾斜し、下刻浸蝕をうけた痕跡があり、この部分に多量の砂や小礫が堆積していた。堆積土中、底面から多量の中世陶器、古銭、木製品などが出土しているが、なかでも下刻浸蝕をうけた部分に砂や小礫といっしょにそれらの遺物が混在していた。

第18溝

調査区南側の沢、F・G-(-13~-16)区に位置する。107・108号土壙に切られ、さらに、第19溝やいくつかのピットと重複しているが、その新旧関係は不明である。幅は40~60cm、深さは9~15cmである。堆積土は黒褐色シルト層の1層だけである。遺物は出土していない。

第19溝

調査区南側の沢、F-(-13)区に位置する。第18溝と重複しているが、その新旧関係は不明である。幅は20~25cm、深さは4~5cmである。堆積土は褐灰色シルト層の1層だけである。 遺物は出土していない。

第20溝

調査区南端の丘陵緩斜面、 $B\sim E-(-17)$ 区に位置する。東西に約24m確認され、さらに、調査区外(東西)に延びる。幅は $4\sim 5$ m、深さは $20\sim 30$ cmである。遺物は出土していない。

第21溝

第22溝

調査区南端の丘陵緩斜面、 $B\sim D-(-23)$ 区に位置する。第21溝と重複しているが、その新旧関係は不明である。東西に約8m確認された。さらに東側に延びる。幅は1.7 \sim 1.8m、深さは約10 \sim 20cmである。遺物は出土していない。

[溝出十遺物]

第6溝出土遺物

無釉陶器

- **甕**(2) 体部破片である。外面には3重に区画された中にたすきがけした押印が施されている。
 - **壺**(1·3) 口縁帯をもつものである。内面には沈線が巡る。いわゆる受口状口縁である。
- **擂鉢**(4) 口縁部破片と思われる。体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁端はまるくおさまる。

中国産磁器

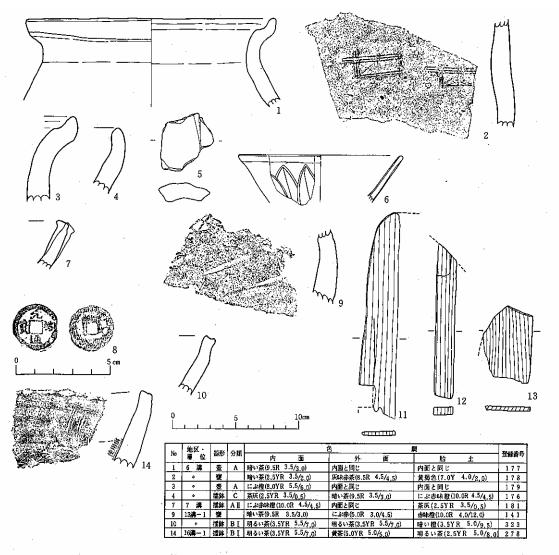
青磁碗(6) 体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する。 端部は丸味をもつ。外面には鎬蓮弁文が施されている。釉は明緑灰色を呈し、内外面に均一に かけられている。胎土は灰白色を呈し、黒色粒を多く含む。

他に図示できなかったが、白磁碗の体部破片が1点出土している。外面には鎬蓮弁文が施されている。釉はあわい明緑色を呈し、内外面に均一にかけられている。胎土はにぶい灰白色を呈し、黒色粒を含む。

第7溝出土遺物

無釉陶器

擂鉢(7) 口縁部上端が平坦で、端部が左右にわずかに張り出し、外面に凹みをもつ。片口がつく。片口部の外面両脇、内面に指頭によるオサエ痕がみられる。



第112図 第6・7・12・13・16溝出土遺物

第12溝出土遺物

古銭 (8)

北宋銭が1枚出土している。銭貨名が元祐通宝(初鋳造年1086)である。

第13溝出土遺物

無釉陶器

甕(9) 体部外面に格子目の押印がある。

擂鉢(10) 体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ器壁は薄くなり内弯気 味に折れ曲がる。口縁部上端は、幅の広い沈線状の凹みがめぐる。屈曲部の外面には稜がつき、 稜より上は幅の広い凹みとなる。

木製品

草履状木製品(11) 欠損しているが薄い柾目板を使用し、側縁に方形のえぐりがわずかに認められる。

形態不明な木製品(12・13) いずれも欠損している。12は薄い柾目板、13は比較的厚い柾目板を使用している。いずれも側縁部が面取りされている。

第16溝出土遺物

無釉陶器

擂鉢(14) 体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ器壁は薄くなり内弯気味に立ち上がる。口縁部上端は平坦で幅の狭い沈線状の浅い凹みがめぐる。内面には単位不明の浅い筋目がみられる。また、弧状文が施されている。体部下半には使用痕がみられ、なめらかな面を形成している。

第17溝出十遺物

無釉陶器

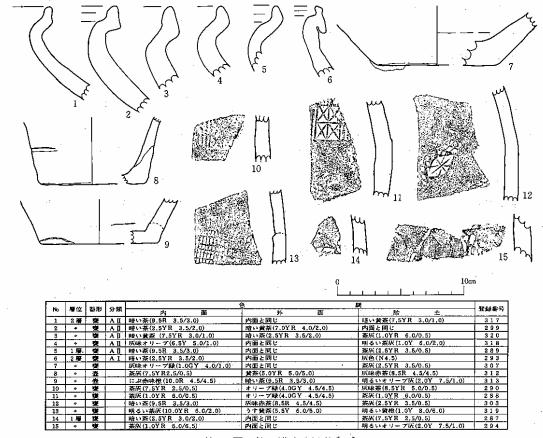
甕(第113図1~7・10~15) 1~6は口縁帯をもつものである。N字状を呈するもの(6)とN字状でないもの(1~5)がある。いずれも口縁帯を形成し、内面には沈線がめぐるが、沈線の明瞭でないものもある。6は口縁部が頚部に密着気味である。7は底部破片で外面には調整痕が認められない。10~15は体部破片である。外面に押印がみられる。

壺(第113図8・9) 底部破片である。外面に調整痕は認められない。

擂鉢(第114図・第115図1~8) 口縁部破片は口縁部上端が平坦なもの(第114図1~6)とまるいもの(第114図7・9)と沈線状の凹みがめぐるもの(第114図8・10~14)とがある。口縁部上端が平坦なものの中にはするどく下方にそがれた様なもの(2)がある。6は片口がつく。9は内面に「南」(?)と判読できる文字が焼成前にヘラ書きされている。8・13・14は口縁端部外面に凹みをもつ。11・12は内面に使用痕がみられ、なめらかな面をしている。

体部破片の中で、第115図7・8は内面に8条1単位とした溝の浅い筋目が施されている。また、 使用痕があり、なめらかな面をしている。

底部破片の中には体部下端が直立気味で、それ以上が外傾するもの第115図 (1・2・4) と体部が直線的に外傾するもの (第115図2・5・6) とがある。2は底部の器壁は体部と比して非常に薄い。1は内面に8条1単位とした筋目が認められるが、使用痕により筋目の溝が浅く、わずかにその痕跡を残す。底部外面には板目状の圧痕のあるもの (1) とワラ状の圧痕 (4) とがあり、それ以外はざらざらした凹凸が認められる。内面には全ての破片に使用痕があり、なめらかな面をしている。



第113図 第17溝出土遺物[]]

施釉陶器

瓶子(第115図9) 肩部の破片である。外面に印花文(梅花文?)が施されている。釉は光沢のある緑灰色を呈し、外面に均一にかけられている。

中国産磁器

青磁碗 図示できなかったが体部破片が1点出土している。釉は黄茶色(アメ色)を呈し内外面に均一にかけられ貫入がみられる。胎土は灰白色を呈する。

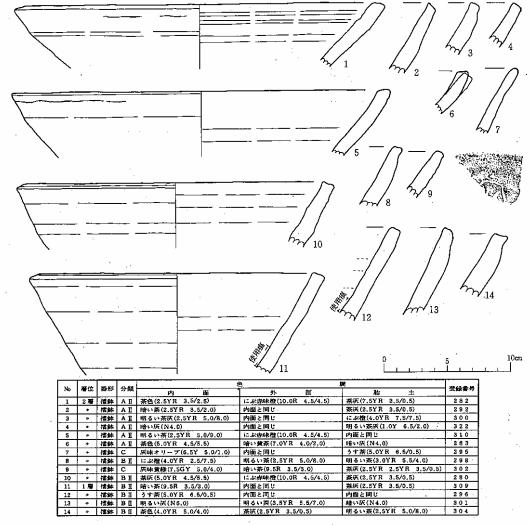
土製品

フイゴの羽口(第115図10~12) 欠損しているが3点出土している。10にはスサ状のものが混入している。

木製品

曲物蓋板(第116図1) 周縁に3個の穴が並んでいる。径約25cmである。

草履状木製品(第116図3・4) 2点出土しているが、いずれも欠損している。3は薄い柾目板を使用しており側縁には方形のえぐりがわずかに認められる。4は薄い柾目板を使用して



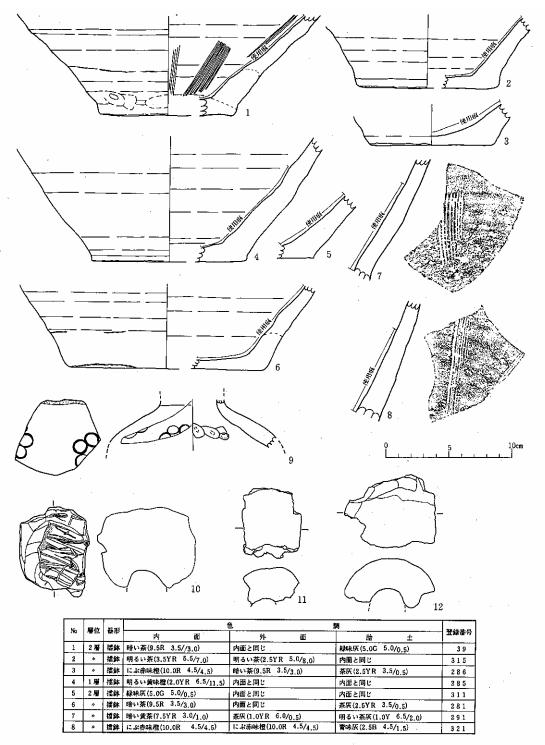
第114図 第17溝出土遺物〔Ⅱ〕

おり、先端部を切り取っている。

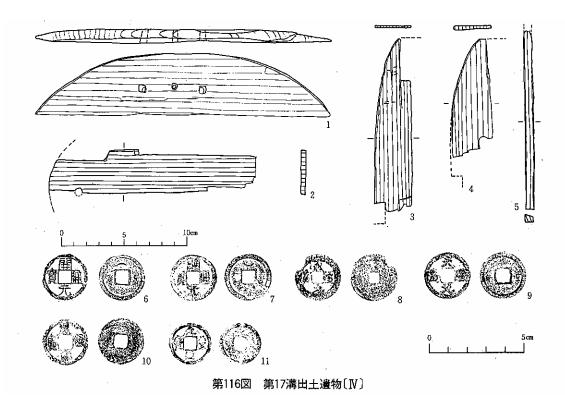
形態不明な木製品(第116図2・5) いずれも欠損している。2は円形の薄い柾目板を使用しており、周縁部に小穴?がわずかに認められる。5は細い角棒を使用しており、ケズリが施されている。

古銭 (第116図 6 ~11)

唐銭2枚、北宋銭4枚、銭貨名の不明なもの2枚計8枚出土している。6・7は唐銭で銭貨名は開元 通宝(初鋳造年621)である。8~11は北宋銭である。8は至道元宝(同995)、9は天聖元宝(同 1023)、10は皇宋通宝(同1039)、11は元豊通宝(同1078)で4種類がある。



第115図 第17溝出土遺物〔Ⅲ〕



7. ピット列

B・C-48~50区に位置する。

第13溝を切っており、14土壙とは新旧関係が不明である。7個のピットが連続したものである。 7個のピットは堆積土が近似しており、切り合い関係は不明である。

平面形は径0.8~1mの円形のものと、1辺約0.7~1.1mの方形のものがある。深さは深いもので確認面から約30cm、浅いもので約10cmである。

遺物は出土していない。

8. ピット

丘陵平坦部から南側の沢にかけて多数のピットが検出された。これらのピットは地山面で確認されたものが多い。住居跡・土壙・建物跡・ピットなどの遺構と重複しているが、埋土相互の色調が黒色、黒褐色を呈しているため切り合い関係の不明なものが多い。径20~30cmの円形のものが多く、また、一辺20~30cmの方形のものや楕円形、不整形を呈しているものもある。深さは深いもので20~30cm、浅いもので5~10cmあり、様々である。掘り方と柱痕跡の区別できたものもある。また、南側の沢の部分から丘陵緩斜面で検出されたピットの中には礎板が確認されたものもある。柱痕跡の確認されたピットの径は約10~15cmのものが多い。柱痕跡や礎

板のあるピットは柱穴と考えられるが、規則的な配置は認められなかった。

ピットの掘り方埋土から中世陶器、土師器などの遺物が出土しているものもある。

〔ピット出十遺物〕

ピット9出十遺物

無釉陶器

甕(2) 体部外面に平行タタキ目状の押印がある。

ピット12出十遺物

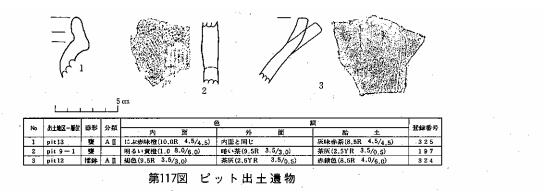
無釉陶器

擂鉢(3) 片口部の破片が1点出土している。口縁部上端は平坦な面をしている。片口の外面 両脇、内面には指頭によるオサエ痕がみられる。内面には8条1単位とした筋目が刻み込まれてい る。

ピット13出土遺物

無釉陶器

甕(1) 口縁帯をもつものである。口縁帯の幅は広く、内面に浅い沈線が巡り受口状口縁を成す。



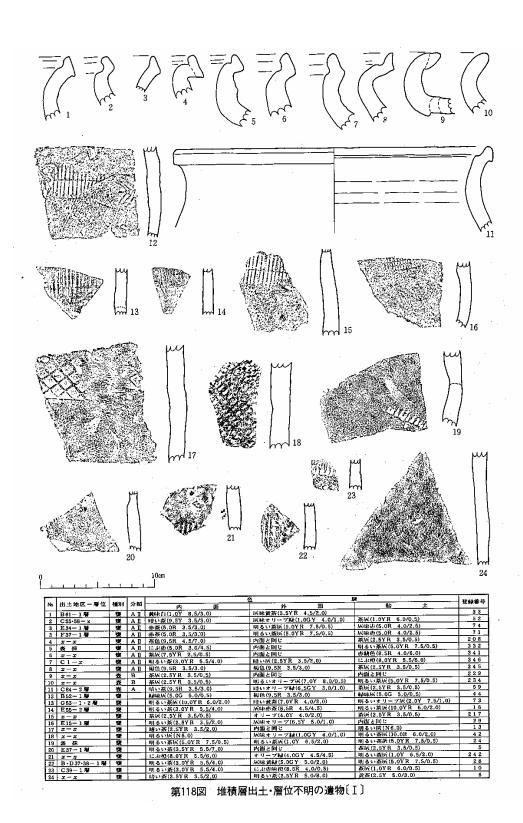
9. 堆積層出土および層位不明の遺物

無釉陶器

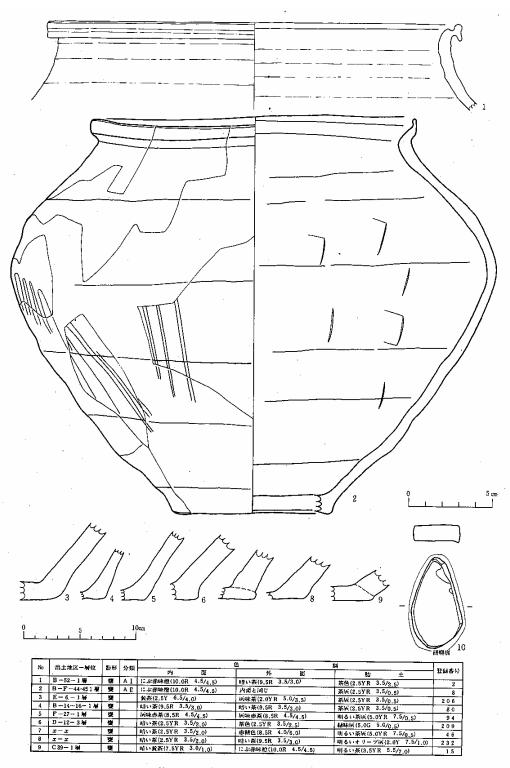
甕 口縁部はいずれも口縁帯を有し、N字状を成すもの(第119図1)と、そうでないもの(第118図1~8、第119図2)とがある。

前者は頚部が「八」字状に開き、口縁帯は上下に引き出されてN字状を呈する。

後者は内面に沈線が巡り受口状を呈する。口縁帯の幅は広いものと狭いものとがある。第119 図2は口縁部から体部まで接合できた個体である。頚部は「八」字状に開き、頚部から体部へゆるやかに移行し、体部上半に最大径がくる。これ以下は底部に向かってしだいに細くなる。体部上半・下半にはそれぞれ粘土紐の積み上げ痕が観察される。口縁部から体部上半にかけて



279



第119図 堆積層出土・層位不明の遺物[Ⅱ]

自然釉が流下している。

第118図12~24は押印のある体部破片である。12は簾状格手目と稜杉文の組み合せのもの、13~15は簾状格子目、16~18は格手目、19~23は平行、24は小格子目である。

第119図1~9は底部破片である。

第119図10は体部破片で、周縁が磨かれている。

壺(第118図9~11) 口縁帯のあるもの(11)と口縁帯のないもの(9・10)がある。前者は頚部が直立気味で、上半が外反する。口縁部は短かく直立し、先端は丸くおさまる。口縁外側に口縁帯を形成し、内面に沈線が巡る。後者は頚部が直立し、口縁部は長く外反し、先端がまるくおさまるもの(10)と頚部は直立し、口縁部は短かく外反し、端部に接近するにつれ細く、まるくおさまるもの(9)とがある。9は口縁端部内面に浅い沈線状の凹みが巡る。10は口頚部外面に積み上げ痕と思われる痕跡が認められる。9は口頚部外面、肩部内面にそれぞれ積み上げ痕が認められる。いずれも口縁部外面から頚部内面には、口縁に平行な刷毛塗り痕が認められる。

擂鉢 第120図から第123図5までは口縁部破片である。a 口縁部上端が平坦なもの(第120図) と、b 沈線状の凹みが巡るもの(第121図、第122図) と、c 丸いもの(第123図1~5) とがある。

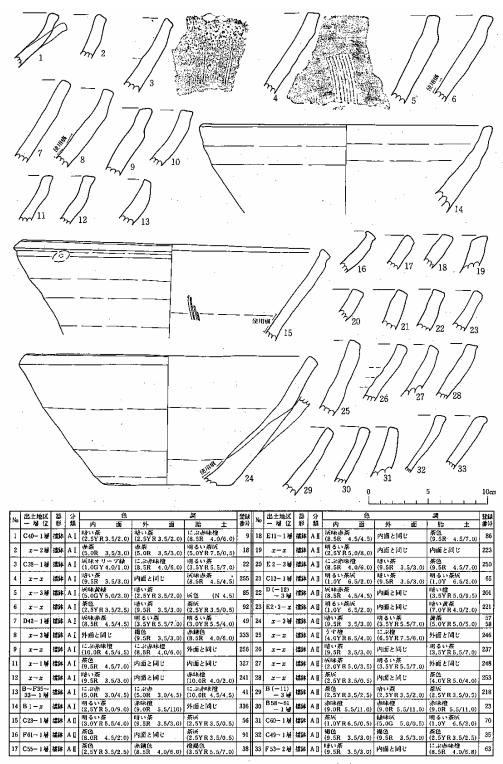
a:口縁部上端が平坦なものには口縁部が内弯気味に折れ曲り屈曲部外面に稜の巡るもの(1~14)と、外傾するもの(15~33)がある。後者の $15 \cdot 16$ は口縁端部が左右に張り出し、その直下が凹む。1、2、7、8、10、24、33は片口が付く。2、7、8、10は片口の外面にオサエ痕がわずかに認められる。4、5、15には筋目が施されている。4の筋目は7条1単位としている。

b:口縁部上端に沈線状の凹みが巡るものには、口縁部が内弯気味に折れ曲り屈曲部外面に稜のつくもの(第121図)と、外傾するもの(第122図)とがある。内面には使用痕があり、なめらかな面をしている。2、3、4、12、16は片口が付く。4、5、19には筋目が施されている。

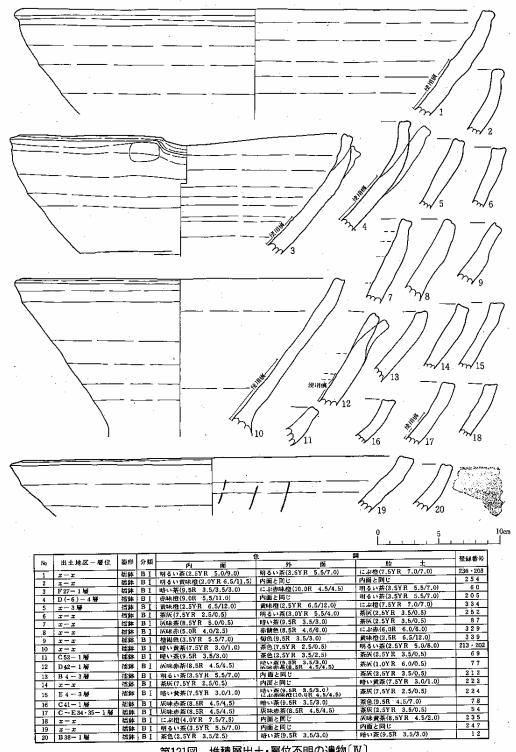
4は7条1単位とした放射状、19は間隔のある3条1単位の筋目が認められる。第122図1の外面には 月(?)と判読できる文字が焼成後にヘラ書きされている。さらに、内面には丹が付着してい る。第122図9は外面体部下端にヘラケズリが施されている。

c:口縁部上端の丸いものでは、5の口縁部に片口が付く。1は7条1単位とした筋目が施されている。

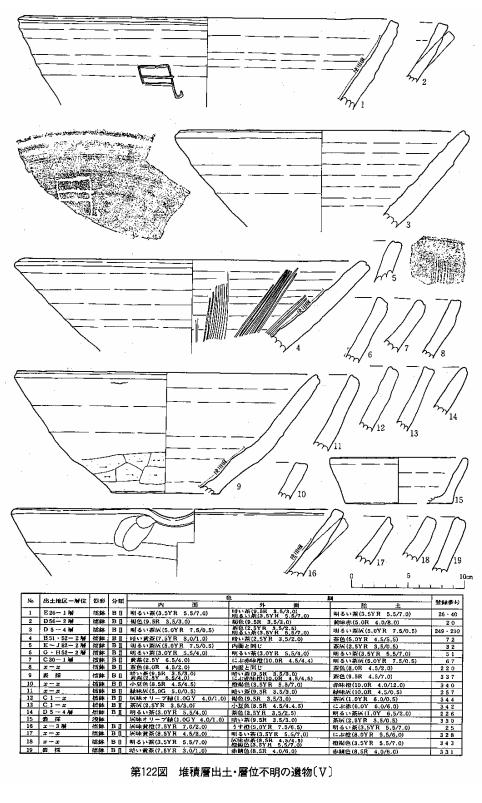
第123図6、7、13は体部破片で、内面に筋目が施されている。6、7は7条単位の筋目が認められる。6の筋目は放射状に彫られてあるが使用痕によって大半の溝は浅くなり、筋目の痕跡だけが認められる部分もある。



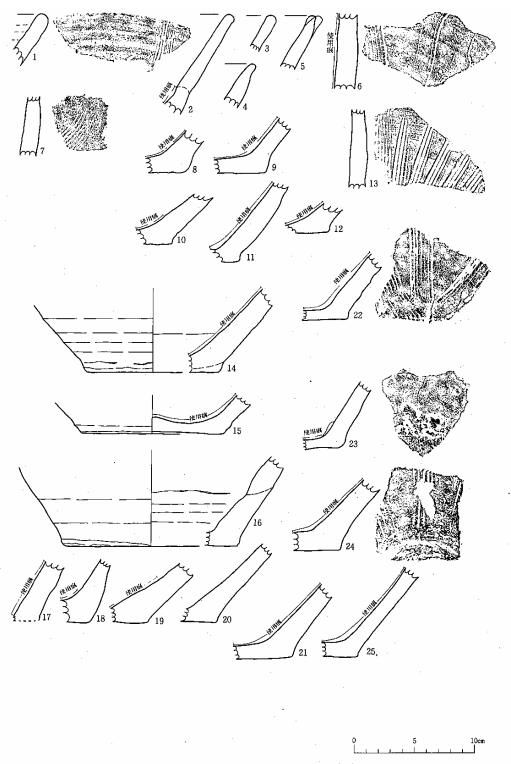
第120図 堆積層出土・層位不明の遺物〔Ⅲ〕



第121図 堆積層出土・層位不明の遺物〔Ⅳ〕



第122図 堆積層出土・層位不明の遺物[V]



第123図 堆積層出土・層位不明の遺物[VI]

第123図8~12、14~25は底部破片である。14・18は底部外面にはワラ状の圧痕がある。22~24は内面に筋目が施されている。22・24は7条1単位とした放射状、23は格子状の細かい筋目が認められる。使用痕が認められ平滑な面をしているものもある。

施釉陶器

灰釉陶器 第124図7は体部下半が欠損しているが鉢の破片と思われる。体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部が水平気味に折れ曲る。口縁部内面に凹みがめぐる。釉は明緑灰色を呈し内面と外面上半にかけられ、貫入が認められる。

中国産磁器

青磁碗 第124図1は体部から口縁部にかけて内弯し、口縁端がわずかに外反する。高台部は ほぼ直立し、端部は幅の狭い平坦な面をなす。内面の見込みと高台部を除いて明緑色を呈する 釉がかけられ、底部付近は厚い。外面の釉は流下気味である。胎土は灰白色を呈する。

第124図2は体部から口縁にかけて内弯気味に立ち上がり、口縁部が外反する。外面には鎬蓮 弁文が彫られている。釉は灰味黄緑色を呈し、貫入が認められる。胎土は灰白色を呈する。

第124図3は高台部破片である。見込み部と外面体部下端を除いて、淡い明緑色の釉がかけられている。胎土は灰白色を呈し良好である。

図示できなかったが体部外面に鎬蓮弁文を施した破片がある。釉は緑灰色を呈し厚くかけられている。胎土はくすんだ灰白色を呈する。

青磁鉢(第124図4) 口縁部破片が1点出土している。口縁部が水平に外側に折り曲がり、 さらにその先端が上方に折れ曲っている。釉は明緑色を呈し貫入が認められる。胎土は灰白色 を呈する。

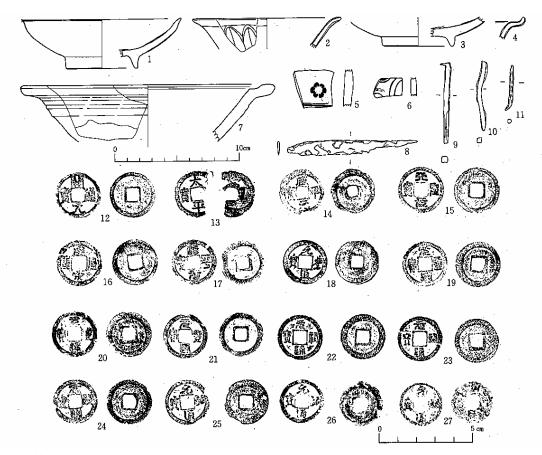
不明の青磁(第124図6) 体部外面に唐草文が施されている。釉は明緑色を呈し、内外面にかけられている。胎土は灰白色を呈する。細片のため不明であるが梅瓶かもしれない。

朝鮮産磁器(第124図5) 象嵌のある三島手の破片と思われる。内面には印花文があり、この中に白泥を入れたと思われる。

鉄製品

刀子(第124図8) 銹化が著じるしい。刃部の断面は鋭く、背は平坦である、関の部分は不明である。

釘(第124図9~11) 9は先端、10・11は頭部が欠損している。いずれも細長い棒状のもので先端に向って細くなっている。断面は方形である。



古銭 (第124図12~27)

唐・北宋銭が16枚出土している。銭貨名は12が開元通宝 (初鋳造年621)、13は太平通宝(同976)、14は成平元宝 (同998)、15は天聖元宝(同1023)、16は皇宋通宝(同

1	23	図	の表

	******		7.50		色 .	Ħ	登録書号
No	出土地区一層位	출왕	分類	内面	外 面	_ k ±	正体骨巧
1	E95-1場	描鉢	C	茶灰(1.0YR 6.0/0.5)	明るい茶灰(10.0YR 6.0/0.5)	明るい茶灰(10.0YR 6.0/2.0)	1
2	B14~16-1層	描鉢	C	接味灰(5,0G 5,0/0.5)	程味床(5,0G 5.0/0.5)	粉味灰(5,0G 5.0/0.5)	5 0
3	r-r	描鉢	Ç	によ黄緑(6.5GY 6.5/3.0)	内面と同じ	茶灰(1.0YB 6.5/0.5)	5 5
4	F29-1階	描鉢	¢	にお赤味程(8.5R 4.0/6.0)	内面と同じ	暗い世(3.5YR 5.0/9.5)	8 9
- 5	D(-11)-4層	推鉢	C	暗い茶(9.5R 3.5/3.0)	内面と同じ	明るい茶(3,5YR 5.5/7.0)	214
6	x-r	描辞		明るい沢(N6.0)	頭い後(3,5YR 5.0/9.5)	にぶ権(6.5YR 7.5/6.0)	245
7	x-x	描鉢		暗い茶(2.5YR 3.5/2.0)	黄茶(5.0YR 5.0/5.0)	茶灰(2.5YR 3.5/0.5)	239
8	F38-1層	推集		乐味去茶(8,5R 4.5/4.5)	灰味赤茶(8.5R 4.5/4.5)	茶灰(2.5YR 3.5/ .5)	79
9	E26-1層	禮牌		によ黄檀(B.OYR 6.0/2.5)	にぶ役(7.5YR 7.0/7.0)	明るい茶灰(10.0YR 6.0/2.0)	4.8
10	エー2番	媒件		茶色(5.0YR 4.5/5.5)	明るい茶(3.5YR 5.5/7.0)	明るい茶(3.5YR 5.5/7.0)	14
11	x-x	媒体		茶色(4.0YR 5.0/4.0)	明るい茶(3.5YR 5.5/7.0)	明るい茶(2.5YR 5.0/8.0)	225
12	x-x	信件	Г	緑味灰(5.0G 5.9/0.5)	茶色(2.5YR 3.5/2.5)	内面と同じ	219
13	D111層	指鋒		暗い茶(2.5YR 3.5/2.0)	獨色(9.5R 3.5/3.0)	茶灰(1.0YR 6.0/0.5)	31
14	x-x	指鉢		赤味橙(9.0R 6.5/11.0)	内面と同じ	赤峰橙(9.0R 5.5/11.0)	335
15	x-x	指鉢		茶灰(2.5YR 3.5/0.5)	茶色(9.5R 4.5/7.0)	内面と同じ	354
16	D3-4-1階	蹇;		暗い茶(2.5YR 3,5/2.0)	暗い茶(9.5YR 3.5/3.0)		2.7
17	C~E34·35-1₩	措体		暗い茶(9.5R 3.5/3.0)	明るい茶(2.5YR 5.0/8.0)	明るい茶(2,5YR 5.0/8.0)	19
18	F40-1 W	指除		暗い茶(9.5R 3,5/3,0)	暗い茶(9.5R 3.5/3.0)	茶灰(2.5YR 3.5/0.5)	7.6
19	B21-2 W	推体		によ赤(5.0R 3.0/4.5)	にぶ赤(5.0R 3.0/4.5)	赤味橙(9.5R 5.5/11.0)	4 3
20	x-x	擂鉾		によ赤味橙(10.0R 4.5/4.5)	茶妖(2.5YR 3,5/0.5)	内面と同じ	198
21	x-x	描鉢		禄味氏(10.0G 4.5/0.5)	明るい茶(2.5YR 5.0/8.0)	略い版(N4.0)	215
22	x-x	擋鉢		赤鯖色(8.5R 4.0/6.0)	小豆色(8.5R 4.5/4.5)	晴い黄茶(7.5YR 3.0/1.0)	238
23	x-x	描鉢		妖味オリーブ録(1.0GY 4.0/1.0)	沃味黄茶(8.5YR 4.5/2.0)	赤錆色(8.5R 4.0/6.6)	326
24	x-x	提件		暗い茶(3.5YR 5.0/9.5)	明るい茶(2.5YR 5.0/8.0)	明るい茶(3.5YR 5.5/7.0)	228
25	F27-1層	描件		明るい茶(3.5YR 5,5/7.0)	橙褐色(3.5YR 5.5 5.5/7.0)	担制色(3.5YR 5.5/7.0)	47



第124図 堆積層出土・層位不明の遺物[VII]

1039)、17は治平元宝(同1064)、18~21は元豊通宝(同1078)、22~27は元祐通宝(同1086)で8種類がある。17の周辺に小孔が1個穿たれている。

板碑 (第124図28)

梵字の部分が残存している破片である。梵字はバンである。

B. 考 察

1. 出土遺物

(1) 陶磁器

陶磁器の出土状況は前項でも述べた通り土師器・古銭・木製品などと混在している。大部分の陶磁器は遺構以外の堆積土および表土から発見されているが、わずかに各遺構からも出土している。遺構内出土遺物であっても堆積土上半から出土しているものが多く、直接遺構とは結びつかないものである。完形品はなく、それに近い状態で出土したものは1点のみで、これ以外は小破片で形態を把握できないものが多い。

イ. 無釉陶器

無釉陶器は本遺跡出土の遺物の中で土師器に次いで多量に出土している。器種には甕・壺・擂鉢などがある。これらの陶器のうち、擂鉢が全体の80%を占めており、甕がこれに次いで出土している。壺はごく少い。

《甕》

完形品はなく、実測できたものは6点で口縁から底部まで図化できたものはわずか1点、断面 図だけのもの37点、拓影図を示したもの36点である。これら陶片の中には同一個体と思われる 破片でも接合できなかったものもある。上記のものを除いた破片数は合計875点である。

これらの甕を検討するために器形、成形、色調、胎土、器面調整、押印等について観察を行ない、さらに器形によって分類する。

〈観察〉

観察の結果については、分類の基準とした器形を除く他の項目について述べる。

押印

押印には、簾状格子目、格子目、平行、簾状格子目と稜杉文の組み合せ、稜杉文、菊花文などの種類があるが、これらの押印と直接接合できる資料がないため、どの部分に何個施されるかは不明である。

外面の色調

外面の色調は表に示めしたように多くの種類が認められた。

第6表 甕の色調

胎土

6 ₹	色相	明度	彩度	色	8	色相	明度	彩度	1	4	ž,	色相	明度	杉皮	色名	色相	明度	彩度
明るい茶	2,5YR	3.5	12.0	庆	色	N4,5	/	/	茶		14	1.0YR	6.0	0.5	にぶい複	6.5YR	7.5	6.0
*	3.5YR	5,5	7.0	战	茶	2.5Y	5.0	3.0				2,5YR	3,5	0.5	暗い茶	2.5YR	3.5	2,5
明るい茶妖	1.0Y	6.0	2.0	黄味	位	3.5YR	6.5	1,0		*		2.5YR	3.5	6.5	*	2,5YR	3.5	2.0
*	1,0Y	6.5	2.0	明るい	黄檀	1.0Y	8.0	6.0				7,5YR	2,5	0.5	雌 い 橙	3.5YR	5.0	9,5
,	5.0YR	7,5	1.5	黄斑	色	7,0Y	4.0	2,0	赤	3#	色	8.5R	4.0	6.0	塘 い 庆	N4.0	/	/
٠	5.0YR	7.5	0.5	黄味	沃	5.0YR	9.0	1.0	IÆ	Пķ	赤	5.0R	4.0	2.5	暗い黄茶	7,5YR	3,0	1.0
٠	10.0YR	6.0	2.0	黄味	白	1.0Y	8.5	3.0	M	味 赤	茶	8,5R	4,5	4.5	うす黄茶	1.0Y	7,5	2.0
明るいオリープ灰	2.0Y	7,5	1,0	(C)%	10	8.0YR	5.5	6.0	庆	味	茶	8.5YR	5.0	0.5	韓 味 妖	5.0G	5.0	0.5

外面

色	8	\perp	色相	明度	彩度	6	8	色相	明搜	彩度	色名	色相	明度	釈度	色名	色相	明度 4	彩度
茶	. 1	6	2.5YR	3.5	2.5	K a	装 茶	8.5YR	5,0	0,5	におい根	6.5YR	7.5	6.0	暗い茶	9.5R	3.5	3.0
	*		5.0YR	4.5	5.5	沃	色	N4.5	1	/	明るい茶	3,5YR	5,5	7.0	暗山橙	3.5YR	5.0	9,5
茶	1	ĸ	1.0YR	6.0	0.5	黉	茶	2,5Y	5,0	3.0	明るい茶尻	1.0Y	6.5	2.0	暗い黄茶	7.5YR	3.0	1.0
	*	\perp	1.0YR	6.0	4.5	黄电	* 橙	3.5YR	6.5	1.0	*	5.0YR	7.5	0.5	時い展	N4.0	/	7
	٠		2.5YR	3.5	0,5	货料	4 色	7,0Y	4.0	2.0	*	10.0YR	6.0	2.0	うす政策	1.0Y	7.5	2.0
	*		7.5YR	2.5	0.5	液 电	k K	5.0YR	9.0	1.0	明るいオリーブ状	2.0Y	7.5	1.0	う す 位	5,0YR	7.5	6.5
	*		2.5YR	3,0	0.5	黄阜	k (3	1,0Y	8.5	3.0	明るい黄橙	1.0Y	8,0	6,0	静脉状	5.0G	5.0	0.5
庆	味;	f.	5.0R	4.0	2.5	にぶる	兵脉 橙	8.5YR	4.0	6.0	明るい状	N6.0	/	7	赤味橙	9,0R	5.5 1	11.0
冰	* 涤:	ić.	8,5R	4,5	4.5	にぶ	い根	8.0YR	5.5	6.0	暗い茶	2,5YR	3,5	2.0				

胎土

色調・混入物等について観察を行なった。その結果、色調については表に示めしたように多くの種類が認められた。混入物については砂粒や小礫を含むものが多い。

器面調整

口縁部内外面は横ナデ調整されているものがあるが自然釉がかかっているため不明なものもある。

体部外面は下方から上方にヘラナデされているものや、器面調整かどうか不明であるが、粘土をよせたと思われるものもある。内面にはオサエ痕が観察されるものもある。

底部外面は板目状の圧痕らしきものも認められるが、ほとんどは特徴ある痕跡は認められない。

成形

口縁部、頸部、体部上半、体部と底部の境目に粘土紐の積み上げ痕が観察されるものがある。その他

外面に丹が付着しているものや、他の陶片が付着しているものなどがある。

〈分類〉

口縁部形態の違いにより、A. 口縁帯をもつもの、B. 口縁帯をもたないものに分かれ、前者はさらにI. N字を呈するもの、II. N字でないものに細分される。

AI類

2点の破片がある。口縁部がN字状に上下に折り返えされているものである。いわゆるN字 状口縁である。口縁帯下部が頸部からやや離れるものと密着気味のものがある。

器面調整は、口頸部が横ナデ調整されている。

胎土は砂粒・小礫をふくみ、灰色、茶色を呈し、硬く焼成されている。

AⅡ類

30点ある。口縁帯をもつもので、N字を成さないものである。口縁帯の幅は広いものと狭い ものがある。一方には下端がわずかに張り出すものもある。内面の沈線は太いものと沈線かど うか区別できないものがあり、前者が多い。

器面調整は、口縁部内外面に横ナデ調整や体部内面にナデ調整されているものがあるが、自然釉がかかっているため不明なものもある。

内外面の色調は明るい茶灰や暗い茶、褐色を呈したものがある。内面の口縁部から外面にかけて自然釉がかかっているのがほとんどであるため外面の調整は不明である。

胎土は茶灰色、暗い黄茶色、明るい茶灰色、暗い茶色を呈したものがあり、小礫や砂粒をふくみ非常に硬く焼成されている。

B類

1点だけである。口縁部は外反する。内外面に横ナデ調整が施されている。内面の口縁部から外面の体部にかけて自然釉がかかっている。

胎士は茶灰色を呈し、砂粒をふくみ硬く焼成されている。

《壶》

口縁部破片が4点出土している。完形品はなく実測図の作成できたもの5点である。底部、体部の破片は明瞭に甕と区別できないため、甕の中に含まれた可能性がある。

壺の口縁部破片を検討するため器形、成形、色調、胎土等について観察を行ない分類する。 〈観察〉

(14)4)

胎士

色調、混入物について観察を行なった。色調は暗い茶色、明るい茶灰色を呈したものがある。混入物については暗い茶色したものには砂粒、小礫が比較的多くふくまれる。

第7表 壺の色調

	胎土				外面			
	色名	色相	明度	彩度	色 名	色相	明度	彩度
	明るい茶紙	5.0YR	7.5	0.5	明るい茶灰	1,0Y.	6,5	2.0
:	にぶ程	8.0YR	5.5	6,0	»·	5.0YR	7.5	0.5
	暗い茶	9,5R	3.5	3.0	明るいオリーブ灰	2,0Y	7.5	1.0
			٠.		茶 灰	2.5YR	3.5	0.5
					暗い茶	9.5R	3,5	3.0
					灰 味 赤 茶	8 5R	4.5	4.5

器面調整

口縁部内外面は横ナデ調整されており、さらに横ナデ調整された後で釉が刷毛塗りされているものもある。

成形

口頸部、肩部の境目に粘土紐の積み上げ痕が観察されるものがある。

〈分類〉

口縁部形態の違いにより、A. 口縁帯をもつもの、B. 口縁帯をもたないものに分類することができる。

A類

口縁帯をもつものである。口縁部が直立し先端がまるくおきまるいわゆる受口状口縁である。 頸部は直立気味に立ち上がる。なかには肩部がまるくなるものもある。

器面調整は内外面横ナデ調整されている。また、釉がかかっているため調整痕が不明なもの もある。

胎士は砂粒をふくみ暗い茶色を呈し硬く焼成されている。

B類

口縁帯をもたないものである。頸部は直立気味に立ち上がり、口縁部が外反し、先端がまる くおさまる。なかには口縁端部内面に凹みが認められるものもある。

器面調整は、口縁部内外面とも横ナデ調整され、さらに、刷毛塗りが施されている。内外面の色調は明るい茶色を呈している。胎土は内外面と同様な色調を呈し、砂粒をあまりふくまず、 非常に硬く焼成されている。

《擂鉢》

擂鉢で図示できたものは口縁部から底部まで接合できたもの5点、口縁部片135点、体部片5点、底部片34点である。

〈観察〉

底部の形態

底部の形態は高台がなく全て平底を呈する。

片口

擂鉢は口縁部に片口が取り付くのが普通であるが、完形品がないためどのように配置され、 何個取りつくのかは明らかにすることができなかった。

成形

底部と体部の境目や体部、口縁部に粘土紐の積み上げ痕が観察されるものが少量ある。その中には底部と体部の境目に2~3cmの間隔で粘土紐の積み上げ痕が観察されるものもある。

片口部の成形は片口の外面両脇を指てオサエ、内面から外側に押し出して形をつくっている。 器面調整

口縁部から体部にかけて、内外面とも口縁に平行する横ナデが施されている。ヘラケズリの加えられているものが1点ある。また、自然釉がかかっているため調整痕が不明なものもある。 底部外面には、板目状、ワラ状の圧痕が観察されるものがあるが、大半は特徴のある痕跡や調整痕が認められない。

第8表 擂鉢の色調

胎土

*** *** * * ** * ** * ** * ** * ** * ** * ** * ** * ** * ** * ** *	7234																	
************************************			明度	彩度			明度	彩度		\Box	色相	明度	彩度	色			明度	
*** *** *** *** *** *** *** *** *** **	明るい茶灰				赤味									赤	昧			
明 る い 茶 2.5YR 5.0 9.0 灰 味 赤 茶 8.5R 4.5 4.5 小 6.5YR 7.5 6.0 小 2.5YR 3.5 0.5	,	5.0YR	7.5	0,5		10.0R	4.0	12.0	12 JK	赤	6.0Y	6.0	5.0		4	9.5R	4:5	7.0
*** *** ** ** ** *		10.0YR	6.0	2.0	赤 錆 1	色 8.5R	4.0	6.0	14 44	橙	4.0YR	7,5	7.5	茶	1	€ 1.0YR	6,5	0.5
*** *** * * ** * *	明るい茶	2.5YR	5.0	9,0	灰 味 赤		4.5	4.5				7.5	6.0		,		3.5	0.5
************************************	+		5.0	8.0) † 1	母 4.0YR	8.5	4.0	*			7.0	7.0	200	*	2.5YR		10.5
明 る い 灰 N6.0 / / 。 。 10.0R 4.5 0.5 暗 い 茶 2.5YR 3.5 2.0 灰 色 N4.5 / / 推 穏 色 3.5YR 5.5 7.0 灰 映 資 8.5YR 4.5 2.0 。 。 9.5R 3.5 3.0 炭 茶 2.5YR 5.5 4.0 可るい美味控 2.0YR 6.5 11.5 灰 映 資 2.5YR 7.0 2.5 暗 い 兼 茶 7.0YR 4.0 2.0 。	*		5.5	4.0	緑味!		5.0	0.5				5.5	6.0		4			0,5
程 掲 色 3.5YR 5.5 7.0 灰 味 黄 茶 8.5YR 4.5 2.0 -> 9.5R 3.5 3.0 炭 ボ 2.5YR 5.0 4.0 明るい黄味噌 2.0YR 6.5 11.5 灰 味 黄 橙 7.5YR 7.0 2.5 昨 い 黄 茶 7.0YR 4.0 2.0 -> 5.0YR 5.0 5.0 11.6 灰 味 黄 松 7.5YR 7.0 2.5 昨 い 黄 茶 7.5YR 8.0 1.0 ☆ 赤 5.0R 4.0 8.0 -> 5.0YR 5.0 8.0 □ ☆ ★ 5.0R 4.0 8.0 -> 5.0YR 4.5 5.5 〒 い 黄 茶 7.5YR 7.0 2.5 〒 い 黄 7.5YR 7.0 2.5 □ い 黄 7.5YR 7.5 □ い 黄 7.5YR 7.5 □ い 黄 7.5YR 7.0 2.5 □ い 黄 7.5YR 7.5 *	3,5YR	5.5	7,0	*	5,0G	5,0	5,0	う す	茶		6.5	3.5		4	7.5YR	2.5	0.5	
明るい黄味橙 2.0YR 6.5 11.5 灰 味 黄 橙 7.5YR 7.0 2.5 暗 い 黄 茶 7.0YR 4.0 2.0 。	明るい疾	N 6,0	/		٠	10.0R	4.5	0.5	唯 い	茶	2.5YR	3.5	2.0	沃			1	/
Indicate	橙 褐 色	3.5YR	5.5	7.0	灰 味 黄		4.5	2.0			9.5R	3.5	3.0	黄	- 1	茶 2,5Y	6.5	4.0
C 米赤 味檀 8.5R 4.0 6.8 * 4.0 YR 5.0 4.0	明るい黄味橙	2.0Y R	6.5	11.5	灰味黄疸	登 7.5YR	7,0	2.5	暗い黄	茶	7.0YR	4.0	2.0		4	5.0YR	5.0	5.0
************************************	にお黄橙	8.0YR	6,0	2,5	茶 1			2.5		\Box		3.0	1.0					
株 株 橙 9.0R 5.5 11.0 青 株 K 2.5B 4.5 1.5	にお赤味橙	8.5R	4.0	6.8	,			4.0				/	/				6.5	12.0
色 名 色相 明度 後度 色 名 色相 明度 形成 形成 形成 形成 形成 形成 形成 形	*	8.5R	4.0	6.0	*	5.0YR	4.5	5.5				5.0	9.5	黄			8.5	3.0
● 名 色相 明度 彩度 色 名 色相 明度 彩度 の 名 の 本 の の の の の の の の の の の の の の の の	M TT								赤味	控	9.0R	5.5	11.0	青	崃 .	€ 2.5B	4.5	1.5
明るい来来 1.0Y 6.5 2.0 に お 他 6.5YR 7.5 6.0 赤 味 相 9.0R 5.5 11.0 茶 色 4.0YR 5.0 4.0 - 5.0YR 7.5 0.5 。 7.5YR 7.0 7.0 7.0 。 9.0R 6.5 11.0 本 色 4.0YR 5.5 5.5 - 10.0YR 6.0 2.0 。 8.0 に お 最 最 6.5GY 6.5 3.0) [H														- 1			
- 5.0YR 7.5 0.5			明度	彩度	色 名	色相	明度	彩度	色名		色相	明度	彩度	色	名		明度	彩度
*** *** *** ** ** ** ** ** ** ** ** **	明るい茶灰		6.5	2.0	[사	登 6.5YR	7.5	6.0	赤味	橙	9.0R	5.5	11,0	茶	1		5,0	4.0
明 る い 茶 2.5YR 5.0 8.0 に 水 黄 縁 6.5GY 6.5 3.0 K 味 ホ 茶 8.5R 4.5 4.5 。 8.0R 4.5 2.0 か 3.5YR 5.5 4.0 暗 い 来 2.5YR 3.5 2.0 う す 橙 4.0YR 8.5 4.0 。 9.5R 4.5 7.0 ゅ 9.5R 4.5 7.0 ゅ 9.5R 3.5 3.0 。 5.0YR 6.5 0.5 茶 K 1.0YR 6.0 0.5 に よ 黄 橙 8.0YR 6.5 1.5 時 い 黄 茶 7.5YR 3.0 1.0 縁 味 水 5.0YR 6.5 0.5 ★ K 2.5YR 3.5 0.5 に よ 黄 橙 8.0YR 6.0 2.5 時 い 黄 茶 7.5YR 3.0 1.0 縁 味 水 5.0G 5.0 0.5 黄 本 2.5YR 3.5 0.5 に よ 素 日 8.0YR 6.0 8.0 日 8.0YR 6.0	*	5.0YR	7.5	0.5	*	7.5YR	7.0	7.0	4		9.0R	6.5	11.0		4	5.0YR	4.5	5.5
*** 3.0YR 5.5 4.0 暗 い 茶 2.5YR 3.5 2.0 う す 相 4.0YR 8.5 4.0 *** 9.5R 4.5 7.0 *** 9.5R 4.5 7.0 *** 9.5R 5.5 7.0 *** 9.5R 6.5 9.5 7.0 7.0 9.5 8.0 9.5 8.0 9.5 8.0 9.5 8.0 9.5 8.0 9.5 8.0 9.5 9.5 8.0 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5 9.5	4	10.0YR	5.0	2.0	. 9	8.0YR	5,5	6.0	*			4.0	12.0		٠	7.5YR	2.5	0.5
*** ** ** * * *	明るい茶	2.5YR	5.0	8.0	にぶ黄木	6.5GY	6.5	3.0	厌 味 赤	茶	8.5R	4.5	4.5		4	8.0R	4.5	2.0
明るい黄味橙 2.0YR 6.5 11.5 暗いオリーブ灰 5.0Y 3.5 0.5 。 5.0Y 7.5 6.5 。 2.5YR 3.5 0.5 に よ 黄 橙 8.0YR 6.0 2.5 暗 い 黄 素 7.5YR 3.0 1.0 綾 味 灰 5.0G 5.0 0.5 黄 素 2.5Y 5.0 4.0 に ボ赤味橙 8.5R 4.0 6.0 唯 い 灰 N4.0 ~ / 灰味オリーブ緑 1.0GY 4.0 。 5.0YR 7.5 6.5 を 2.5Y 6.5 0.5 り 10.0R 4.5 4.5 暗 い 橙 3.5YR 5.0 9.5 灰 味 菜 2.5YR 5.0 3.5 黄 褐 色 7.0YR 4.0 2.0 に よ 赤 5.0R 3.0 4.5 時 い 赤味菜 2.5R 2.0 3.0 灰 味 黄 茶 8.5YR 4.5 2.0 黄 味 橙 2.5YR 6.5 12.0	*	3.0YR	5.5	4.0	暗いる	₹ 2.5YR	3.5	2.0	うす	橙	4.0YR	8,5	4.0		*	9.5R	4.5	7.0
15 点 養 檀 8.0YR 6.0 2.5 暗 い 黄 茶 7.5YR 3.0 1.0 縁 味 灰 5.0G 5.0 0.5 黄 茶 2.5Y 5.5 4.0 に ぶ赤味橙 8.5R 4.0 6.0 暗 い 灰 N4.0 / / / / / / / / / / / / / / / / / / /	,	3.5YR	5,5	7.0	,	9,5R	3.5	3.0	٠		5.0YR	6.5	0,5	茶	, l	1.0YR	6.0	0.5
に お 赤 味 橙 3.5 R 4.0 6.0 暗 い 灰 N4.0 / / 灰味 サリーブ縁 1.0 G Y 4.0 1.0 。 5.0 Y R 5.0 5.0 • 10.0 R 4.5 4.5 暗 い 橙 3.5 Y R 5.0 9.5 灰 味 茶 2.0 Y R 5.0 3.5 黄 福 色 7.0 Y R 4.0 2.0 に よ 赤 5.0 R 3.0 4.5 暗 い 赤 味 2.5 R 2.0 3.0 灰 味 黄 茶 8.5 Y R 4.5 2.0 黄 味 橙 2.5 Y R 6.5 12.0	明るい黄味橙	·2.0YR	6.5	11.5	暗いオリーブ	₹ 5.0Y	3.5	0.5	*		5.0YR	7.5	6.5		-		3.5	0.5
0 10.0R 4.5 4.5 暗 い 橙 3.5YR 5.0 9.5 K 味 茶 2.0YR 5.0 3.5 黄 梅 色 7.0YR 4.0 2.0 に よ 赤 5.0R 3.0 4.5 暗い赤味茶 2.5R 2.0 3.0 K 味 黄 茶 3.5YR 4.5 2.0 黄 味 橙 2.5YR 6.5 12.0		8.0YR	6.0	2.5			3.0	1.0				5.0	0.5	黄	3		6,5	4.0
に 永 赤 5.0R 3.0 4.5 暗い赤味茶 2.5R 2.0 3.0 灰味 黄茶 8.5YR 4.5 2.0 黄味 橙 2.5YR 6.5 12.0	にお赤味橙	8,5R	4,0	6,0	暗いが			/		H		4.0	1.0					5.0
	,	10.0R	4.5	4.5	暗い	2 3.5YR	5.0	9.5			-,	5.0	3.5	黄			4.0	2,0
に ぶ 樫 4.0YR 7.5 7.5 赤 茶 5.0R 3.5 3.0 茶 色 2.5YR 3.5 2.5 ッ 3.5YR 6.5 11.0	にお赤	5.0R	3.0	4.5	暗い赤味る		2,0	3.0	灰味黄	茶			2.0	黄	味		6.5	12.0
黄 味 白 1.0YR 8.5 3.0	に ぶ 橙	4.0YR	7.5	7.5	赤	₹ 5.0R	3.5	3.0	茶 1	ê.	2,5YR	3,5	2,5				$\overline{}$	_

色調

外面の色調は第8表のように多くの種類が認められた。このうち。暗赤褐色、極暗赤褐色、明赤褐色、暗褐色系のものが大部分で、器面に1mmほどの黒色の斑点状のものがふきだしているものが多い。さらに、同一個体でも上半、下半では色調に相違がみられる。内面の色調はほぼ外面と同様なものが多く、内面や外面に自然釉が付着しているものもある。

胎十·焼成

胎土の色調は第8表に示した種類が認められた。外面と同様な色調を呈するものが多い。全体的に砂粒、小礫を含むが、中にはスサ状のものが混入しているものがある。外面の色調が暗赤褐色や極暗赤褐色、暗褐色を呈するものの中には灰色を呈し、黒い斑点のものが含まれるものや黒灰色したものもある。前者は、砂粒をわずかに含み均質で焼き締りもよく、非常に堅緻である。浅黄橙色を呈したものは、砂粒、小礫を含み焼き締りが良好とはいえない。これ以外は比較的胎土も均質で焼き締りも良好である。

筋目

内面に筋目が施されているものと施されていないものがある。施されているものは焼成前の ものと焼成後のものがある。筋目は放射状のものと、放射状でないものがある。筋目の単位は3 条・4条・7条・8条、単位不明なものとがある。

使用痕

内面に磨滅した面が認められ、使用痕が観察されるものが多い。使用痕が認められる破片を

みると胎土と同様な色調を呈し、器厚も周辺の器壁と比較するとうすくなる。さらに、底部破 片の中には体・底部の境目から底部周辺が著しく薄くなっているものもある。

その他

内面、外面および口縁端に文字、キザミ、弧状文を施したものがある。また、丹、スス状炭 化物、籾痕が付着している破片もある。

〈分類〉

分類を行なうにあたって器形を中心として分類を行なうと大きく4類に分類できる。さらに、 器形ごとに筋目、片口、色調などの項目について若干の説明を加えてみたい。

A類

器形:口縁部上端が平坦なものである。体部から口縁部にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がるものをAI類、体部から口縁にかけて直線的に外傾するものをAI類とする。

筋目のつくものは4点あり、AI・AⅡ類とも筋目は施されているものを含む。筋目の単位は7条と8条のものがある。

その他: 片口部中央の口縁端に2個のキザミが施されであるものが1点ある。また、内面に丹が付着しているものがある。

調整:内外面とも横ナデ調整されている。

B類

器形:口縁部上端に沈線状の凹みが巡るものである。体部から口縁にかけて外傾し、口縁端部に近づくにつれ内弯気味に立ち上がるものをBⅠ類、体部から口縁にかけて直線的に外傾するものをBⅡ類とする。

筋目:BI、BⅡ類とも筋目の施されるものが含まれている。

その他: B II 類には内面に「せ」の文字と口縁端にキザミがあるものと、外面に「月」の文字があり、内面に丹が付着しているものがある。 B I 類には内外面にスス状の炭化物が付着しているものがある。

調整:内外面横ナデ調整されているものが大半であるが、外面体部下端にヘラケズリされているものが1点ある。

C類

器形:口縁部上端が丸いもので、体部から口縁部まで直線的に外傾する。

筋目:焼成前に7条1単位とした筋目の施されているものが1点ある。

その他:口縁部内面に「南」と判読できる文字がヘラ書きされているものが1点ある。

調整:内外面とも横ナデ調整されているが、口縁部外面にヘラケズリの施されてあるのもが

1点ある。

D類

器形:口縁端が尖るものである。

《無釉陶器の年代》

近年、県内においては、いくつかの陶器窯が確認されるようになってきた。現在までに地元窯として白石古窯跡、三本木古窯跡、伊豆沼古窯跡が発見され、70数基の陶器窯が確認されている(藤沼:1978)。このような陶器窯は楢崎彰一氏によって瓷器系陶器の中でA4類(平安時代に灰釉陶器の伝統をもたない地方で、瀬戸・常滑の影響をうけて中世窯に転化したもの)に編入されている(楢崎:1975)。

上記の古窯跡の中で、昭和51・52年に多高田窯跡(三本木古窯)、熊狩窯跡(伊豆沼古窯)が発掘調査され、陶器組成や年代的位置づけがなされ、徐々にではあるがその姿が明らかになってきている。熊狩窯は鎌倉中期頃あるいは、後期のものと考えられている。その他の地元窯も同様な年代が与えられている。

しかし、窯跡調査も少なく体系的な研究が充分には成されておらず、いまだに編年作業が確立していないのが現状である。

従って、この項では編年作業が確立している東海地方の常滑、渥美、瀬戸窯跡などを参考に し、さらに、地元窯とも比較して年代を推定してみたい。

甕の年代: 年代を推定するにあたって最もその特徴が現われる口縁部形態を対象に行なって みたい

AI類は、現在のところ地元窯からは発見されていない。N字状を呈した口縁部形態の特徴は常滑窯にもとめることができ、天神第4号窯に近似している。楢崎氏の編年では第5段階、赤羽一郎氏の編年では、第4段階に比定でき、実年代は両氏とも南北朝後半から室町前期に位置づけている。

本類は、天神第4号窯に類似していることから、同様な年代を考えている。なお、口縁部が 頸部に密着気味のものは、本類の中でも新しい要素を呈している。

AⅡ類は、常滑窯の多屋窯山第2号窯、高坂大窯跡出土のものに近似している。また、県内 窯跡出土のものは、すべて本類に含まれる。

常滑窯の編年表に照し合わせてみれば、楢崎氏の編年では甕の頸部が不明確になる第3~4段階(鎌倉中期~南北朝)に比定でき、N字状口縁が出現する第5段階よりも古いものである。

地元窯の熊狩窯跡は、窯体構造や出土陶器の特徴から鎌倉中期頃あるいは後期に位置づけられているが、本類の中の口縁帯の狭いものは、熊狩窯や多高田窯の甕ときわめて類似している。 なお、口縁帯がやや広いものは熊狩窯には類例がなく不明な点も多いが、これよりも新しくな る要素を呈していると思われる。

したがってAⅡ類は、鎌倉中期から南北朝を含めた時期に年代を推定してみたい。

B類の器形は、地元窯や東海地方の窯跡から出土したものに類例がないため不明ではあるが、 胎土や器面調整などがAⅡ類の甕と近似しており、ほぼ同様な年代を推定してみたい。

壺の年代: A類は、口縁部形態が地元窯の壺に強い類似性が認められる点などから甕AⅡ類と同様な年代を考えている。

B類は、刷毛塗りが施されている特徴から渥美窯に類例がみられる。口縁部形態は、大沢下第1号窯に近似しており、小野田勝一氏の編年の第1段階末から第2段階に位置づけることができ、鎌倉時代初頭あるいは中葉、すなわち、13世紀初頭~後葉頃のものとして年代を推定することができる。

また、蓮弁文を描いた体部破片はその特徴から渥美窯に類例がみられる。常滑窯に着ける三 筋壺と同様に特殊品として経筒外容器、蔵骨器などに使用することを目的とした宗教的な需要 にこたえて生産され、その生産開始の時期は鎌倉前期で、鎌倉末を待たずに廃絶したと考えら れている(小野田: 1977)ことから、蓮弁文壺は鎌倉前期~中期に生産されたと推定される。

擂鉢の年代:擂鉢の編年は確立していないのが現状である。さらに、本遺跡では甕、壺との 共伴関係が認められなかったために年代を想定することが困難な状況であるが、A~D類は地 元窯から出土した口縁部形態に強い類似性が認められる。

A~C類は、筋目が施されているものが含まれているが、D類は1点だけのため不明である。 地元窯では、東北、品ノ浦、山塚沢窯跡からは、筋目の施されている擂鉢が発見されている。 県外では、筋目のつくものは越前窯の編年表によれば第2段階後半(鎌倉中期以降)から出 現しているが、常滑窯のものは全時期を通じて筋目は施されていない。

次に高台についてみれば、県内の窯では高台の付くものは全く発見されていない。本遺跡の ものには、高台のあるものは1点もなく、地元窯と同様な特徴を示している。常滑窯では、多屋 窯山第2号窯(楢崎氏の第3段階)にも高台のつくものとつかないものがみられるが、赤羽氏の 第4段階、楢崎氏の第5段階以降になると完全に高台が省略されている。

これらをまとめてみると、鎌倉中期から室町後半と言う年代観が考えられるが、擂鉢は器形のうえから特徴ある変遷過程をおうことができない。

以上のことを考え合わせてみれば、年代を決定するのに充分な資料もなく、編年的位置づけを行なうには困難な状態であると考えられ、問題点だけをあげておくにとどめたい。

口. 施釉陶器

施釉陶器には瓶子の肩部(1点)、おろし皿の口縁部(3点)、鉢の口縁部(2点)、壺の体

部破片が出土している。いずれも小破片であるが、瀬戸窯で生産されたものであろうと考えられる。なお、おろし皿は3点とも接合できなかったが器形、胎土、釉等から同一破片と思われる。 また、鉢も同様なことがいえる。これらの陶器の年代は中世と考えられるが、詳細な年代は不明である。

ハ. 中国産磁器

本遺跡では土壙、住居跡、溝などの堆積土中から青磁の碗・鉢・梅瓶の破片、白磁碗が出土 し、総点数は18点である。青磁碗は口縁部9点、体部5点、高台部2点計16点ある。口縁部、釉、 貫入の有無などに違いが認められた。鉢は口縁部が2点、梅瓶は体部が2点あり、口縁部や釉に 違いがみられた。白磁碗は体部2点ある。この中で、青磁・白磁の碗・鉢は、口縁部形態・鎬蓮 弁文の特徴から13~14 C 項のものと思われる。梅瓶は、唐草文の特徴から13~14 C 項のものと 思われる。内面に釉が施されているものは小破片で不明な点もあるが、唐草文の特徴から同様 年代を考えたい。

二. 陶器の生産地について

本遺跡では、土倉跡、竪穴遺構、土壙跡、溝跡などの遺構から陶器が出土している。大半は 無釉の陶器で、数は少ないが施釉されたものもある。口縁部形態だけを取り上げてみても数種 類に分けることができる。ここではこれらの陶器の製作地について若干の検討を加えてみたい。

無釉陶器の中で、甕のN字状口縁を呈したものは常滑窯、壺の口縁部に刷毛塗り、体部に印刻文のあるものは渥美窯、施釉陶器では印花文瓶子、オロシ皿は瀬戸窯などに類例がみられることから、東海地方で生産された製品も数は少ないが搬入されている。

これ以外の陶器は地元窯が現在70数基発見されていることから、地元産の可態性が考えられる。地元産の製品とすれば、どの窯跡から供給されていたものだろうか。県内の窯跡から出土する陶器の口縁部形態はいずれも類似しているが、色調や胎土に違いがあり、さらに1つの窯体内でもそれぞれに違いが認められる。発掘調査も少なく、口縁部形態、色調、胎土等では、どの窯跡から生産されたものかは不明な点が多い。

しかし、斜格子状の押印は熊狩A1・2号窯跡から出土した甕の体部被片にうりふたつのものがある。さらに、陶片の中には他の破片が癒着しているものもあるため、これらの破片が比較的近い窯跡から供給された可能性を示しているものもある。

現時点では県内の窯跡の時期は、鎌倉中期頃あるいは後期とされているが、本遺跡の場合は 室町前期まで降ると考えられる製品もあるため、この時期の窯跡が発見される可能性もある。

本遺跡の陶器は、以上のように東海地方や地元窯の1つである熊狩窯跡からの製品もあるが、

それ以外の地元窯で生産された製品も多く混在していると考えられる。今後は窯跡調査の増加 をまって生産地を同定することが望ましいと考え、今回は資料の提示にとどめておきたい。

(2) 腰刀

腰刀は一般には鎌倉時代後半から桃山時代に使用されていたと言われている。 (注:日本刀 講座)

外装上、呑口式の鞘は平安時代末から南北朝以降にその形状が認められる。さらには、刳形と返角は鎌倉時代以降に形が現われ、室町時代以前の腰刀ではその間隔が狭いと言われている。 (末永雅雄他:1973) それにしたがえば、本遺跡出土の腰刀も刳形と返角の間隔が狭いことから、鎌倉時代以降、室町時代以前と考えている。

(3) 古銭

古銭は第1~3次の発掘調査で、竪穴遺構、土壙跡、溝、堆積層等から第9表に示したように、合計47枚出土している。これらの古銭のうち、唐の開元通宝が4枚、南宋の紹熈天宝が1枚、判読できないもの6枚あるが、大部分は北宋銭で太平通宝から紹聖元宝まで12種類36枚出土しており、全体の77%を占めている。北宋銭の中では元祐通宝8枚、元豊通宝7枚、皇宋通宝5枚、元道元宝4枚、天聖元宝3枚、治平元宝2枚、その他は各13枚出土している。これらの古銭の中で、治平元宝の周縁に小孔を穿った加工銭も1点ある。出土状態をみると第25竪穴遺構では北宋銭が14枚出土している。

以上のように、古銭の構成は唐、北、南、宋銭のいわゆる中国銭で日本銭出土は皆無である。

第9表 古銭	一覧表								_					
	for Odrada (14 (1)		竪	穴		遺	構		Ä	ķ	堆		Ì₹	計
銭 貨 名	初鋳造年代	5	8	11	14	16	23	25	12	17	_ I		Ш	н.
開 元 通 宝	唐 621				1					2		1		4
太平通宝	北宋 976										1			1
至道元宝	% 995	1						2		1				4
成平元宝											1			1
祥 符 元 宝	* 1008							1						1
天聖元宝	4 1023							1		_1	1		<u> </u>	3
皇 宋 通 宝	* 1039			1				1		1	2			5
至 和 元 宝	* 1054							1					_	1
治 平 元 宝	1064						_1				1			2
熈 寧 元 宝	√ 1068							1						1
元 豊 通 宝	1078					1		1		1	3	1		7
元 祐 通 宝	7 1086							1	1		. 4 _	<u> </u>	2	8
紹聖元宝	* 1094					ļ		1					<u> </u>	1
紹熈元宝	南宋 1290			_		L		1					<u> </u>	1
不	明		1					3		2	1	<u> </u>	1	7
15-		1	1	1	1	1	1 1	14	1	8	14	2	2	47

(4) 木製品

土倉跡・竪穴遺構・井戸跡などから、曲物・曲物蓋・櫛・草履・箸・漆器椀などの木製品が 多く出土している。これらの木製品は上記の遺構の時期とさほどかけ離れた時期のものでない と考えられることから、その年代は中世頃と推定される。

2. 遺構

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は7棟検出された。規模の判明したものは桁行2間×梁間2間、3間×1間、3間×2間、4間×1間、5間×2間、5間×4間でありそれぞれ異っている。さらに柱間隔は必ずしも一定しておらず均一性に乏しい。

建物跡相互は重複するものが2棟あるが、他は30~45mの間隔をもって位置している。重複 関係にあるのは第5・6号建物跡で、時間差が相定されるが、規模・構造・建物の方向等が近似 していることからごく近い時期のものと考えられる。

また丘陵平坦部に位置する第1号建物跡は5間×4間と規模が他より大きく、総柱であることから床張りの可能性が考えられる。

これら7棟の建物跡の年代については、第7号建物跡の柱穴掘り方埋め土中から皇宋通宝が 出土し1039年以降と推定され、また、他では土師器の細片が出土しているものもあるが、いず れも年代を限定し得るものではない。しかし、建物跡の規模、構造上の特徴からみて古代のも のとは考えにくく、大まかに中世頃のものとしておきたい。

(2) 竪穴遺構

年代

竪穴遺構から出土した遺物には土師器、須恵器、陶磁器などがある。いずれも堆積土中からの出土であり、また多くの遺構ではそれらの遺物が混在している。このことから遺構の年代を出土遺物によって限定することは難しいが、陶磁器はすべて中世のものであり、また近世以降の遺物は全く出土していないことからみてその年代は中世と考えられる。

なお竪穴遺構のなかには土師器しか出土していないものや、全く遺物の出土していないもの があるが、それらも陶磁器が出土している遺構と堆積土の特徴がごく近似している点からみて ほぼ同年代としてさしつかえないものと思われる。

分類とその性格

竪穴遺構は37基検出された。これらは丘陵北斜面を除き調査区全域で検出され、その分布に 偏りは認められなかった。竪穴住居跡、溝などと重複しているものもある。これらの竪穴遺構 について、その形態的特徴、堆積土等について検討してみたい。

[平面形] 各々の竪穴遺構の平面形を検討すると、方形を基調としているもの、円形を基調 としているもの、不整形のものがある。これらをまとめると下記のようになる。

不整形(C)———13

以上のように、平面形について検討した。数的には方形基調のものが圧倒的に多く、なかで も長方形のものが多い。

各々の竪穴遺構の長軸・短軸、長径・短径の長さをグラフにすると第125図のようになる。 それによると、長さが2.7mから6mを越えるものまであるが、数的には3.0~4.0m前後のものがもっとも多い。

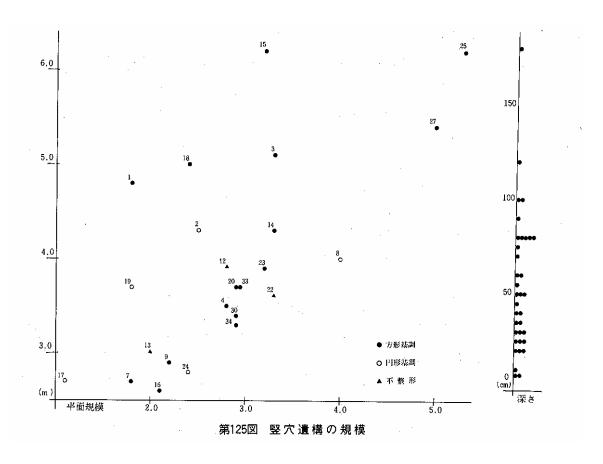
〔深さ〕 各々の竪穴遺構の遺存状態や立地によっても相違が認められるが、平面形のほぼ明らかな35基について、その深さを検討してみると20cm前後の浅いものから1.8mの深いものもある。数量的には50cmを越えないものが最も多いが、1mを越えないものも比較的多い。

[壁の状況] 壁は急角度で立ち上がるものが多く、なかにはゆるやかに立ち上がるものもある。壁は底面との境が明瞭なものと不明瞭なものがあり、前者が多い。壁面はほとんどが凹凸がない。

〔底面の状況〕 掘り方底面の地山面を底面としているものがほとんどであるが、なかには、 貼り床(?)としているものがある。底面は平坦なものや、丸底状のものがあるが、ほとんど 底面が平坦なものである。

〔柱穴〕 柱穴が壁沿いにあるものは一基確認された。平面形は方形を基調としており、その一部が調査区外に延びるため全体の柱穴の配置は不明確であるが、調査区内では各壁沿いに3個のピットが配置され南北壁沿いのピットは向いあって対になる。

柱穴の不明なものの中には、壁沿いに数個のピットがほぼ同間隔で配置されて柱穴かと考えられるものもあるが、これらのピットには柱痕跡も認められず、また、対応する位置ピットがないため不明である。



[その他の施設]

- a. 竪穴遺構の四隅に丸木隅柱が配置されているものが一基検出された。丸木隅柱は各隅に2本づつ計8本立っている。北辺の両隅の丸木隅柱は対角線上に配置され、南辺の両隅の丸木隅柱は辺に沿って並列に据えられていた。これらの丸木隅柱には柄孔があり、横木で連結されていた。東西・北辺の横木は内外、側の丸木隅柱に2本づつ段違いに2重、南辺の横木は1本で内側の丸木隅柱に連結されていた。南辺の東側に3枚の厚い壁板があり横木でささえられていた。
- b. これらの竪穴遺構には階段状の出入口があるものとないものがある。

[堆積土] 遺構の残存状態によっても違いが認められるが、12枚の堆積土が観察されるものもある。堆積土は丘陵平担部では黒褐色ないし、暗褐色土層で地山ブロックや木炭、焼土粒が混入している。中には、黒褐色土層の下部に地山ブロックが厚く堆積しているものもみとめられる。堆積状況はほとんどが自然堆積であるが、中には層中に地山ブロックを多量に含み、硬く、人為的堆積層と考えるものもある。さらに、分層されずに一度に埋められたような人為的な堆積状況を示しているものもあるが土色や混入物などが自然堆積のものと近似しているため、

その区別ができないものもある。沢の部分では、黒褐色ないし暗褐色土層に地山ブロックや焼土粒、植物遺体(ワラ)などが混入している。このように、竪穴遺構の堆積土は土色、土性が類似しており、比較的短時間に埋ったと思われるものが多い。

[竪穴遺構の分類] 以上のように竪穴遺構の形態的特徴や、堆積土遺物の出土状況などについて検討してきた。次に、これらの竪穴遺構の平面形と階段状の出入口の有無によって、その形態を分類すると次のような3タイプに分けることができる。さらに、規模、深さ、柱穴等についてものべてみたい。

I a タイプ: 平面形が方形を基調とし、階段状の出入口があるもの。

平面形は長方形のもの(4、14、34)と正方形(8)のものとがある。規模は一辺の長さが3.0~4.0m前後である。深さは、最も深いもので1.8mで、浅いものでも0.8~1.0mで、他の竪穴遺構と比較しても非常に深い。また、特異な施設として竪穴遺構内の四隅に柄穴が穿れ、横木で連結されていた丸木隅柱が遺存していたものが含まれる。

Ibタイプ: 平面形は方形を基調とし、階段状の出入口がないもの。

平面形は長方形のもの(1、3、7、9、10、14、15、18、20、23、25、33)と正方形(27)とがある。規模は一辺の長さが2.5mから6mを越えるものまであり様々である。深さは最も深いもので、約80cm、浅いもので約10cmであるが50cm以下のものが多い。掘り方底面を地山としているものがほとんどであるが、中には、底面に粘土を貼ったと思われるものもある。柱穴については不明なものが多いが、中には、壁に沿ってならんでいるものがあり、柱穴かとも考えられるが、対になるものがないため不明である。

なお、平面形は方形を基調としているが重複や、調査区外にのびるため全体形が明らかでないため、階段状の出入口があるかどうか不明をもの(5、5、16、21、31、32、36、37)がある。規模は現存長で2.5mから6mを越えるものまであり様々である。深さは最も深いもので約80cm、浅いもので約10cmである。柱穴について不明なものが多いが、中には壁沿いに柱穴がならんでいるものもある。

Ⅱタイプ: 平面形は円形を基調とし、階段状の出入口がないもの。 (2、19、24、25、28、29) 平面形は楕円形のもの (2、17、19、24) がある。規模は1辺の長さが2.5~4.0m前後である。 深さは最も深いもので50cm、浅いもので30cmである。 柱穴は不明である。

なお、平面形は円形を基調としているが重複や調査区外にのびるため全体形が明らかでない ため、階段状の出入口があるかどうか不明なもの(28、29)がある。

Ⅲタイプ: 平面形は不整形のもので階段状の出入口がないものである。 (12、13、22) 規模や深さ等もさまざまである。 柱穴についても不明である。

このように竪穴遺構は平面形、階段状の出入口の有無によって3つのタイプにわけられた。

I a タイプはカマド、柱穴、底面上に生活に必要な土器等がないことから住居跡にするには問題点が残る。

このような、形態的特徴を有する遺構の類例が少ないため、多くは言えないが、県内では中世館跡である大和町御所館に類例がみられ土倉跡とされている。また、県外では、青森県浪岡城跡に類例が認められ貯蔵を意図した季節的な倉庫跡ではないかと考えられている。また、千葉県松戸市の大谷口堀のものは地下式土倉とし、ある種の貯蔵庫としての倉の性格をあたえている。本タイプの性格はこれにしたがえば、なんらかの貯蔵の機能を有する倉跡ではないかと考えられる。土倉跡としたならばその深さからみて半地下式の土倉ではないかと推定される。

I b タイプのうち深いものは、階段状の出入口がないが上記の I a タイプと同様な土倉跡ではないかと考えられる。

Ⅱ、Ⅲタイプについてはその性格は不明である。

(3) 井戸跡

井戸跡は9基検出された。いずれも素掘りの井戸跡である。これらの井戸跡から前述の通り中世陶器、木製品、土師器、須恵器等が混在して出土している。

出土遺物は全て堆積土からのものであるため、使用時期については直接決め手に欠けるが、 これらの遺物は、井戸の使用時期とさほどかけはなれた時期でないと思われ、堆積土から遺物 が出土している井戸跡については、埋った時期を推定することができる。

第1、3、5、8井戸跡からは、土師器、須恵器、中世陶器、木製品等が出土しているが、近世 以降の遺物が含まれていないことから中世に埋ったことを示している。

2、6、7、9井戸跡からは、土師器、木製品などが出土している。木製品は中世陶器と一緒に出土している井戸跡のものと特徴が類似しており、中世のころと思われる。

4号井戸跡は、遺物が出土しておらず時期は不明であるが、以上の井戸跡の形態と類似しており、中世のころのものと思われる。

(4) 土壙

各々の土壙跡は、平面形、規模等もさまぎまである。これらの土壙内からの遺物の出土状況 は次のとおりである。

- a. 土師器・須恵器の出土する土壙-2、11、21、23、27、29、33、35、36、38、41、48、51、52、53、59、65、66、73、77、92、94、98、 (23基)
- b. 中世陶器の出土する土壙-1、4、8、22、28、31、34、37、63、67、78、79、85、95、97、 99、100、(17基)

c. 出山遺物のない土壙一3、5、6、7、9、10、12、13、14、15、16、17、18、19、20、24、25、26、30、32、39、40、42、43、44、45、46、47、49、50、54、55、56、57、58、60、61、62、64、68、69、70、71、72、74、75、76、80、81、82、83、84、86、87、88、89、90、91、93、96、101、102、103、104、105、106、107、108、109、110、(70基)

このように出土遺物からみれば a の土壙は古代に、b の土壙は中世に埋まり、また、C の土壙は不明と考えられる。しかし、堆積土の状況は a は b とごく近似し、また c も同様である。したがって b だけでなく、a、c も遺構が埋まり切った時代が中世である可能性が強い。

また、平面形、規模、壁、底面の状況等についてこれまで検討してきたことを要約してみると、

- ① 土壙跡の平面形は、方形基調のものと円形基調のもの、不整形のものがあるが、円形基調のものが多い。
- ② 規模は方形基調、円形基調をとわず、0.5~2.4mのものまであるが1.0m前後のものが比較的多い。
- ③ 壁、底面の状況、堆積土、出土遺物については方形基調や円形基調のものに共通して認められるため、その特性をみいださなかった。

土壙跡については、以上のようにまとめることができる。しかし、これらの特徴は直接土壙跡の特性を示すものとは考えられず、その意味からして土壙跡の性格を判断することは困難である。

(5) 溝

溝は20数本検出された。いずれの溝も調査区外に延びているため、全体形を把握できなかった。これらの溝跡から土師器・須恵器・中世陶器等が出土しているものもあり、年代を推定することができる。

第2、4、6、13、17溝から出土している遺物で、最も新しいものは中世陶器であり、中世頃のものと思われる。

第7溝は、須恵器が出土しているが、形状・堆積土は中世陶器の出土した溝と近似しており同様な年代の遺構である可能性がある。

1、3、8、9、10、11、12、14、15、16、18、19、20、21、22溝は遺物が出土しておらず時期は不明である。

(6) 円形周溝

1基検出された。中世以降の遺物が出土していないことから中世のものと考えられる。

3. 中世遺構の構成

中世遺構としては掘立柱建物跡、井戸跡、竪穴遺構(土倉と推定されたものを含む)、土壙跡などがあり、ほぼ調査区全域で検出されたが、限定された範囲の調査であったため、遺跡全体の遺構の姿を明確にするような成果は得られなかった。しかし、ここでは調査範囲内での、これら中世遺構の関係について検討してみたい。

- a. 掘立柱建物跡:7棟検出された。それぞれ規模、柱間隔は異っており、内1棟は床張りの可能性が考えられた。これらの建物跡は2棟が重複するほかは相互にかなりの間隔をもって分布している。
- b. 井戸跡:日常生活に使用した井戸跡が9墓検出された。すべて円形を基調とした素掘りの井戸である。井戸跡相互、建物跡との重複がなく同時期の可能性が考えられる。これらの井戸跡は各々の掘立柱建物跡に近接しているものが多い。
- c. 竪穴遺構(土倉など): 竪穴遺構は掘立柱建物跡と井戸跡から間隔をもって検出されたものが大部分である。これらの遺構相互の中には重複しているものがわずかにあるが、間隔をもって分布しているものが多い。
- d. 土壙:土壙跡は土倉跡や竪穴遺構の周辺に多数検出された。
- e. 遺物としては中世陶器が多数出土しており、わずかに中国製陶磁器なども出土している。 中世陶器は地元や東海地方で生産された甕・壺・擂鉢などの日常雑器があり、その中で大半が 擂鉢である。

以上のように中世遺構について検討してきた。これらをまとめてみると掘立柱建物跡と井戸 跡がセットになって分布しており、それは5ヶ所で確認された(1号建物と1井戸、2号建物と3井 戸、3号建物と4井戸、5・6号建物と5井戸、7号建物と7井戸)。各々のセットは比較的間隔をも って位置し、その間には土倉跡、竪穴遺構が数基分布する。さらに、その周辺に多くの土壙が 配置されている。

その中で、床張りの可能性のある1号建物跡は規模も大きく、位置的には高所にあり、他の建物跡と様相をことにしている。これは第1号建物跡がセット間の中心的な位置を占めているものか、あるいは調査区外にも建物跡が存在して、そのセットの中で中心的な位置を占めていたかは不明である。

以上のように中世遺構についてみてきた。県内においては、本遺跡と同様な遺構は現在確認されていないため不明であるが、県外では、鎌倉時代初期の集落跡とされている大阪府高槻市富田遺跡(高槻市:1976)があり、溝・柵に区画された中に数棟の掘立柱建物跡と井戸跡がセットになって分布している。

富田遺跡と比較してみれば、本遺跡は溝・柵などによる区画は認められず、また、建物跡と

井戸跡の周辺に土倉、竪穴、土壙が存在している点で富田遺跡とは遺構の配置に違いが認められる。掘立柱建物跡と井戸跡とのセット関係が認められる点などが、富田遺跡と類似しており、 集落跡とするのが妥当であろうと思われる。

地形的にみるならば遺跡は、標高20m前後のなだらかな丘陵平坦面やそれを取り囲むような 形の小さな沢に立地しており、遺構は南北400m、東西16mの調査区内に広く分布し、さらに調 査区外にまで延びている。

さらに、地理的にみれば、奥羽街道沿いに位置している。今回の調査は限られた調査ではあるが、遺構は分布状況から調査区外にまで広がる様相を呈している。今回の調査部分では計画化された遺構の配置が認められなかったことから街道に面した場所ではなく、街道筋の集落の一部とみるのが妥当と思われる。さらに、本遺跡周辺には善光寺、極楽寺印を出土した折木山寺跡、福現寺の供養碑、覚満寺の逆修供養碑、新庄館などの中世の遺跡がみられ、街道沿いには大きな集落が構成されていたと考えられる。

VI. ま と め

1. 古代

遺構は国分寺下層式期に属する竪穴住居跡10軒、伴出遺物がなく時期不明なものが3軒発見された。時期不明のものは、形態・構造からみれば古代のものであり、また出土遺物に古代の他の時期と判断されるものがないことからみると他の住居とほぼ同時代に属する可能性がある。

住居跡の規模・構造でみれば、規模は大・中・小があって、大形の住居跡にはそのほとんど に形態の整った周溝と柱穴(推定4本)がみられ、中・小形といくぶん異っている。またカマド は共通してみられ、貯蔵穴は少い。

このほか1軒の住居跡には小鍛治遺構と考えられる施設がみられ、集落内での生業を知る上で 興味深い資料である。

住居跡の分布をみると、小形の1軒だけが他よりはるかに離れて位置しており、同一集落内の 住居とすれば他とは異った目的をもって建てられたものと考えられる。

出土遺物は土師器、須恵器、フイゴの羽口、砥石などがある。土師器は国分寺下層式に比定され、また他遺跡との比較によって同式の中でも古い方に位置づけられる可能性がある。

2. 中世

① 中世の遺構としては掘立柱建物跡、井戸跡、土倉跡、竪穴遺構、土壙跡等がある。これらの遺構は北斜面を除き、調査区全域にわたって検出された。その配置をみると、掘立柱建物跡と井戸跡がセットになって分布しており、各々のセット間は比較的間隔をもち、その空間に竪穴遺構・土壙跡が広がっている。

これらの遺構はその分布状況や立地条件等から路線敷外に延びることが明らかで、この丘陵 一帯に中世遺構が埋没していることが予想される。

② これまで性格の明らかになった遺構には、掘立柱建物跡、井戸跡、土倉跡がある。掘立柱建物跡は、規模が不明なものを除いて、それぞれ規模も異なっており、柱間の間隔も規則性に乏しいが柱の軸方向がほぼ一致しているものもある。

井戸跡はいずれも素掘りのもので平面形か円形を基調としているが、規模・深さなどはさまざまである。

土倉跡はいずれも竪穴式で、地山を深く掘りこんでおり、階段状の出入口が取り付いている。 これらの土倉跡の中には竪穴内の四隅に柄孔が穿だれ横木で連結されている丸木隅柱が遺存し ているものもみられ、当時の土倉跡の構造を考えるうえで興味深いものがある。 ③ 上記の遺構や堆積層中から、多量の中世陶器をはじめ、中国産磁器、古銭、木製品、腰刀等が発見された。

陶器はほとんどのものが無釉の陶器で、わずかに施釉された陶器も出土している。

無釉陶器は、甕・壺・擂鉢・鉢の日常雑器で大半が擂鉢である。擂鉢の中には筋目があるもの、筋目がないものがあり、ほとんどの擂鉢には使用痕が観察され、「スリコギ」のようなもので擂ったようすが容易に推察できる。また、擂鉢の破片の中には丹が付着しているものがあり、遺跡のあり方を示す資料かもしれないが、断面にまで丹が付着していることから不明な点も多い。碗や鉢などの器種がほとんどといってよいほど出土していないが、これらを補う意味で木製の椀を使用していたことも考えられる。施釉陶器では壺・オロシ皿がある。

中国銭(唐銭4枚、北宋銭36枚、南宋銭1枚、不明なもの6枚)が発見されている。どのような 経路で本遺跡に般入されたかは不明であるが、当時人々の間で貨幣の流通があり、ある程度の 交易がおこなわれたことがうかがわれる。

また、このような交易を通じて中国製の陶磁器が、本遺跡に般入されたものであろう。

木製品には曲物・箸・漆器椀・草履状木製品・クシなどがある。

これらの遺物は絵巻物などに、わずかにみられるほか、ほとんど考古学的な資料のうらずけがなかった。このような遺物から本遺跡内での、生活内容を物語る資料が発見されたことは大変興味深いものである。

④ 国内で生産された陶器の中には、わずかに常滑・渥美・瀬戸窯跡から般入されたものもあるが、ほとんどのものは器形・口縁部形態などにおいて、県内窯跡から出土したものに類似している。押印が施されているもののうち、格子状押印が施されてあるものは、熊狩窯跡から供給されたものである。また、陶片の中には他の破片がゆ着しているものもみられることから、本遺跡の陶器は比較的近い窯跡から供給された可能性を示している。

陶器の中に文字が陰刻されているものがあり、その意味するものは不明であったが、興味ある資料を提示してくれる。

⑤ 遺跡の性格については、立地や、遺構の分布状況からみて、集落跡とするのが妥当であろうと思われる。集落跡とすればどのような性格の集落かは、直接それを指摘できるようなものがないため不明であった。

遺跡の年代は出土した陶器から鎌倉時代後半から室町前期頃に位置づけることができる。

〈引用・参考文献〉

赤羽一郎 (1977):「常滑-知多半島古窯跡群·附表」 世界陶磁全集3

阿部義平 (1974):「東国の土師器と須恵器-多賀城外の出土土器をめぐってー 帝塚山考古学№1

伊東信雄 (1957): 「古代史」 宮城県史 I

氏家和典 (1957):「東北土師器の型式分類とその編年」 歴史第14輯

(1961):「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』 所収、伊東信雄編

(1967) : 「陸奥国倉寺跡出土の丸底坏をめぐってー奈良・平安期土師器の諸問題-」 柏倉亮吉教

授還暦記念論文集

岡田茂弘・桑原茲郎 (1974) : 「多賀城周辺における古代坏形土器の変遷」 宮城県多賀城跡調査研究所研究

紀要I

小野寺祥一郎 (1979) : 「五輪C遺跡」 宮城県文化財調査報告書第61集

小野田勝一 (1977): 「渥美」 日本陶磁全集

加島 進 (1971): 「日本の美術9刃装具」 至文堂

桑原滋郎 (1976):「東北北部および北海道の所謂第Ⅰ型式の土師器について」 考古学雑誌第61巻4号

工藤雅樹・藤沼邦彦他(1979): 「伊豆沼古窯・熊狩A窯跡発掘調査報告」 東北歴史資料館資料集 Ⅰ

小井川和夫 (1976):「糠塚遺跡」 宮城県文化財調査報告書第53集・宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年

度分)

小井川和夫・高橋守克 (1977):「宮城県対馬遺跡出土の十器」 宮城史学5号

佐藤好一・手塚均 (1978):「天狗堂遺跡」 田尻町文化財調査報告書第1集

白鳥良一・加藤道男 (1974): 「岩切鴻ノ巣遺跡-東北新幹線関係遺跡調査報告書」 宮城県文化財調査報告

書35

末永雅雄他(1973):「新版日本刀講座8、外装編」 雄山閣

高槻市史編さん委員会 (1973):「高槻市史6」

多賀城跡調査研究所 (1977):「多賀城跡―昭和51年度発掘調査概報―」 宮城県多賀城跡調査研究所年報1976

長勝寺遺跡発掘調査団 (1978):「長勝寺遺跡-中世鎌倉の民衆生活を探る」

東北学院大学考古学研究部(1979):「栗遺跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第14集

東京国立博物館編 (1979):「日本出土の中国陶磁」 東京美術

中島 直 (1980):「城生遺跡」 中新田町文化財調査報告書第3集

楢崎彰一 (1975):「瀬戸、常滑、渥美」 日本の陶磁-古代中世編2

浪岡町教育委員会 (1979):「史跡浪岡城跡」 昭和54年度発掘調査現地説明会資料

平沢英二郎・手塚均 (1980):「佐野遺跡」 宮城県文化財調査報告書第63集・東北自動車道遺跡調査報告書

 Π

藤沼邦彦 (1976): 「宮城県地方の中世陶器窯跡」 東北歴史資料館研究紀要2

(1977) : 「東北」 世界陶磁全集3

(1977): 「宮城県出土の中世陶器について」 東北歴史資料館研究紀要3

(1978) : 「中世陶器の紹介」 東北歴史資料館研究紀要4

藤沼邦彦・佐々木安彦・高橋守克他 (1978) : 「多高田窯跡調査報告」 三本木町文化財調査報告書4

松戸市教育委員会 (1972):「大谷口・松戸市大谷口小金城跡発掘調査報告」 松戸市文化財調査報告2

水野九右衛門 (1977):「越前・附表」 世界陶磁全集3

宮城県教育委員会 (1975):「宮城県文化財発掘調査略報(昭和48・49年度分)」 宮城県文化財調査報告書

第40集

(1978) : 「宮城県文化財発掘調査略報(昭和51年度分)」 宮城県文化財調査報告書第48

集

(1979) : 「宮城県文化財発掘調査略報(昭和52年度分)」 宮城県文化財調査報告書第53

隹

第10表 土師器・須恵器破片集計表	一概音沢遺跡一

祖 郡 市 毘 前 雅 朱	1 住 2 住 3 住	4 住 5 住 6 住 7 住 8 住 床 ピ 1 2 床 カ ピ 1 カ ピ ピ 1 2 床 カ 棚 ピ ピ ビ 髪 1 2	9 住 10 住 11 住 12 住 13 住 塚 か 毎 3 2 床 か 毎 3 2 床 か 毎 3 2 床 1 2 床 3 2 床 3 2 床 3 2 床 3 2 2 2 2 2 3 3 2 3 3 3 3	1 原 原 原 原 原 原 原 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第 第	京 京 京 京 京 京 京 京 京 京			보 보 보 보 2 4 5 6 7 8 9 10 17 維 機 때
别 形 位 外 面 一 内 面	6 ドトト ドト	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7	7 db 7 F 7	立		「 戸 丁 坡 塘 装 装 装 装 接 接 填 填 填 读 读 壊 摸		7 7 7 7 1 1 2 3 4 X 8t
3 3 7 7 - 3 11 4 3 3 7 7 - 3 11 3 3 7 7 - 3 17		西 I 原 周 面 内 I 原 物 I 2 原 原 面 内 2 度 原 面 内 2 度 原 面 内 2 度 原 面 内 2 度 原 面 内 2 度 I 3 4 方 原 原 原 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2 2		終 報 編 編 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋 橋	標構構構構構構構構構構構構構	2 3 2 4 8 11 21 22 23 27 28 29 31 33 35 36 37 3 2 2 1 1 1 1 1	B 41 48 51 52 53 59 65 66 77 77 79 85 92 88 98 1 2 3 5	6 7 8 11 津 海 海 海 海 海 海 海 海 海 海 河 河 河 河 河 河 河 河 河
# 7 7 7 4 # # # # # # # # # # # # # # #			2					1 2 3 6
8 X N - 2 N + X N - 2 N + X N - 2 N + X N - 2 N + X N - X N		2 4		2 1 1 2				
3 3 7 7 3 1 4 3 3 7 7 3 1 4 3 3 7 7 6 2 1 4 4		1 1 2 2 1 1 1 3		2 1 1 3 4 1 2 2				1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
*		2 2 1	1 1	1 2 2 5 1 2	5 3 1	3		1 1 1 13
本 ク プ 一 木 	1 1 1 1 4	2 4 5 1 1	3 2	3 3 2 5 9 3 2 1 1 1 3 6	7 1 1 1 1	3 2		2 3 1 1 1 6 3 4 23 4 23 1 2 13 1 1 2 18 7 28 91
±		2		3 3 3 3 3 3 3				2 3 3 2 3 5 4 11
1	(B) 3 3 1 1 2 5 2 4 7 7 1 1	1 4 5 1 1 10 1 1 1 2 1 18 23	4 1 5 2 1 5	1 2 9 3 24 13 1 1 4 2 5 16	15 7 1 4 4	2 1 1		2 6 9 16 1 5 4 89 29 46 195
# ケズリーミガキー ミ ガ キケズ リーネ サーネ 明 - 木 明 - 木 明			2 1	3 1 2 2 1 4 1	1 1			1 1 2 18
ス 明 - 不	7 1 1 2 7 4 4 1 5 1	6 4 1 8 6 1 1 3 4 2 4 3 1 9	2 1 1 7 1 2 2 6 1 7 3 5 1	2 3 8 15 17 8 1 3 1 4 1 4 62	56 4 3 1	9 2 1 1 1 1 1 1 4 1		1 3 16 17 12 1 6 4 105 29 3 68 609
3 # 4 - 9 2 + 3 # 4 - 8 # 5 # 1 - 9 2 + 5 # 1 - 0 2 +	7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7							12 2 13 7 11 7\$ 1 1 7
# 1 - 3 - 7 # 2 - 7 # 3 - 7	7 1 2 2			3 1 2 1 1				1 1 3 2 3 12
# # # # # # # # # # # # # # # # # # #	7							1 4 1 11 3 15 61
# # - \(\frac{1}{2} \)	7 1 2 1 2 3 7 1 1 1 1 1 7	3 2 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 1	5 5 3 3 3 3 1 1 1 1 1 2 2 4 5 10	14 3 14 5 1 1 1 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			7 9 2 2 1 28 8 17 154 1 9 1 2 51 10 18 128 2 11 9 3 2 3
# # # # # # # # # # # # # # # # # # #		2	1 2 3 1	1 1 1 4 1 2 3 1 6 1 6	2 2 6 3			1 1 1 10 4 3 62 1 1 1 2 10 3 1 60
ナ デーナ ナ デーへ ラナ ナ デー服 モ ナ デーイ	7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1			1 2 5 3	1 2			.2 2 7 2 11 5 3 55 3 55 1 12
7 X - 1 H Y X 1 - 2 T Y X Y - 2 T X	* 3 1 1 3 7 7 1 1 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 6 1 7 2	1 2 1 1	3 7 5 17 19 3 4 1 1 3 1 13 5 1 1 1 1 2 2	2 1 2 9 2 1	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		1 1 8 4 4 2 46 17 30 261 1 2 8 1 3 261
7 2 1 - X - 2 1 - 2 7 - 3 1 - 3 7	# 1 1 2 4 1 1 4 6 9 1		3 2 1 1 1 1	1 1 6 6 2 1 2 3 3 1 7	1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	5 1 1 2 1 1 4		1 3 3 3 9 6 9 79 1 3 7 2 2 1 24 2 1 M 160
# = - · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	7 2 1 1 6 3	1 2 2 5 1 1	1 2 1 3 1 4 4 1 7 13 1	4 4 13 9 9 4 1 2 1 1 4 27 5 3 12 12 16 2 5 6 4 2 4 27 3 6 13 9 4 3 3 4 9 6 20	9 10 1 1 1 1 3 14 12 1 2 3			46 17 14 1 4 66 16 11 51 460 2 3 3 10 3 13 56 1 3 21 20 8 5 3 58 22 48 556
# 付 タ タ キ - 不 男 - シ ガ 本 男 - シ カ テ カ テ カ ラ ナ	5 + - - - - - - - - - - - - - - - - - -	1 1 6 6 1 6 1 2 21 6	2 2 2 3 1 9 9	4 7 10 10 12 3 5 2 2 2 1 3	5 2 7 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	5 1 3 1		2 1 7 40 5 2 3 66 24 64 428
	1 2 5 1 3 1 7 1 3 20 1 42 45 15 3 3 53 2 2 74 17 1	2 2 2 3 1 1 3 14 8 12 1 29 24 30 6 33 8 8 2 3 1 4 4 6 2 3 80 90 90	1 1 3 7 5 6 5 4 2 6 1 1 12 5 5 2 64 8 23 5 17 23 23 6	1 6 3 9 17 2 2 2 1 5 3 12 22 74 77 161 124 59 13 13 9 27 1 9 22	15 6 2 1 1 8 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1 2 1	1 1 1 1 1 1 3 2 1 1 1 3 5 17 16 20 1 1 1 3 5 17 16 1 1 1 1 3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	2 2 1 2 2 2 1 1 3 6 12 2	2 2 1 7 10 18 2 5 5 2 4 1 38 0 2 2 2 2 5 33 11 114 178 86 4 48 14 1 1600 162 409 3, 561
ま 第一前 モ	3			2 1				1 1 1 1 1 3 8 1 3 19
ナ デーネ ケ ズ リーナ ケ ズ リーカ ミ ガ キー朝 老	対 デ 明 目	2		12				2 1 1 4 5 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7 7
新 <u> </u>	7			1 2				1 1 6 2 3 1 2 2 3
本 明 章		2 2 1 1 1 3 1	1 1	1 1 3 1				1 4 3 22 7 9 69
「	95 d		2					9 1 4 1 19
市 一	D d			T				1 3 1 1 7
平行タクキー は 平行タクキー ロ 本行タクキー 日 本行タクキー 市 平行タクキー 不	± 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1	6 1 2 5		1 6 11 1 1 1 4 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1		2		1 2 1 3 4 2 1 3 16 19 137
数子タタキーロ ク ケ ズ リーロ ク ケ ズ リー胃 海 ロ ク ローロ ク	g			3 1 4 1 4 1		2 1		1 4 1 10 1 4 10 3 5 11
#								1 3 21 6 3 66 1 3 56 1 3 1 3 1 5
	0 0							\$\frac{5}{5}\$\frac{11}{1}\$\frac{9}{7}\$\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\\
# 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0								3 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

第11表 中世陶器破片集計表

.	部	器	面	調	整		住月	舌 跋	f				竪				穴				進				ß.	<u>,</u>					土					擴			井 戸	i		ì	——— 溝	•	р) E	- - "	١	堆	積		罾	表	\neg
						[;	3 4	6 1	10 1	2	3 4	4 5	6 7	8	9 10	11 13	3 15	16 18	19	21 2	2 23	24 2	5 26	27 2	3 29	31 32	33	34 36	37 년	上土	土土	:上	土土	<u>+</u>	上上	土土	土	土并	井	井 溝	溝	黄 溝	溝	聲	溝上	٤	ピピ	ピ-			1=[-	=[=	1	.16
	位	外	面	i-内	. 1	面	主住	住(住樫	竪	竪雪	圣竪	竪竪	竪島	圣竪	竪 竪	竪	竪 竪	竪	竪圓	圣竪	竪 3	芝 竪	竪壁	竪	竪竪	竪	竪竪	竪4	斯 第 8	塘 塘 28 31	1 32	擴 45 63	坡 67 7	廣 壙 '8 95	墙 97 98	· 場 3 99	擴 100 1	月3	戸 5 2	4 !	5 6	7 1	3 16	17 1	ارد 1 5	ッ ト り 10	ッ ト 14 月	大 次 1 2 層 層	次 3 層 層	欠 2	欠 次 3 層	採	計
Ε	縁部	ナ	デ	 ナ	4	デ	1			1		П		1				1	П		\top	_ _					\prod					\prod		Ħ					\Box	\top		+	H			11		 			+		Ħ	2
		自	然 釉	一自	然	軸				Ħ	4						П	2.	\prod	\top					\Box	1	1			1	<u> </u>	1		Ħ					Ħ	\top		1	1		1				3 5	\top	†	1	8	37
		Ė	然 釉		ታ :	7				1	\top	$\dagger \dagger$			Ħ	1	\dagger	╅	П	\top		1	11	1	$\dagger \dagger$	\top	\sqcap			+		1		\Box	$\dagger \dagger$			-	$\dagger \dagger$					+		+	_	+		+	+	+	H	
	体	自;	大 釉	・・ナ			Į.	2		4	₁	3	Ť	1		1	2	2 1	$\dagger \dagger$	2 1		5	1				Ħ	1	3		1	H	1			1	1	+	1	1 1		1	3 3		3 2	+	+	5	6 7	2 1	+	2	36	155
		自;	 宏 釉	1-不	E	明	\dagger	\Box		H	+	$\dagger \dagger$	_		$\dagger \dagger$			- -	 	+	+	Ť	+	_	H	+	\forall	+	_		-	+	+		+	_	+-	-				┿		+	+	++	+	Η.	#	-	++	+-	-	100
		ヘラ	ナデ	—————————————————————————————————————		+	\dagger	\vdash		\vdash	-	+		H	$\dagger \dagger$		+	╁	\vdash	+	-	+	++	-	${}^{+}$	+	++		\pm			H	+-	\vdash	+	+	+		╁┯┼	+	1	+	Н	+	+	+		Η;	-	+	++	-	1	
		-					+		+	H	+	++			+	+	+	-	\vdash	+	+	\pm			+	+		-		+		H	+	┼╌┼╴	+	+	+		\vdash		+-	+	\vdash	++	+	+				+	++	+	1	
						-	+	\forall	+	\vdash	+	+	1		+		+	1	\vdash	\dashv	+	+	+	-	+	╁	+	+		+		H		Н,	1	+	+	\dashv	╁┼		+	╫	Н	╫	-	\vdash	+		2 1	+	++	-	-	17
						-	+	1	+	╁┼	3	+	+		+	+	1	+	H	+	+	+	+		+	+	H	+	1 1	+		H	+	Н,	+	+	+-	- 1	\vdash	+	1	+		-	, ,	H	+				\vdash	-	-	17
	軟	_				-	1	1 9	2 6	6	2 15	110	2 1	2 1	1		14	- o	1	+.	-	4 00	, -	1 0	1	1	$\frac{1}{1}$	_			\vdash		+	┼╌┼	++	+	+	. 1		-	-	_	-	+	1 1	1.	+	-	+	1 0	+	. _		44
	PP		-			-	+	1 4	2 0		9 110	10	<u>د</u> ا	3 1	1		1	5 12	-	┤╌	- -	4 28	<u>'</u>	1 2	1	-	4	4 4	5 1	1		++	++	\vdash	+	4	+	1	1	LZ	.3	17	32 3		31	1	1 1	\vdash	+	1 2	2 4	1 1	-	402
		_	-			-	+	-		1.	+	++	+	\vdash	+	+	┼┼	+	\vdash	+	Н	+	╁┼	+	┼┼		\vdash	+		+-		++	+		╁╢			+	\vdash	+		+		1	+		_	2	-	+	┿┿		11	15
-							+		+	*	_	++	-		+		┯┤	+	\vdash	+	+-	+	+	+-	\vdash	+	\vdash	+	_		-	1	+			_	\sqcup	-	\vdash	-	+	+	\sqcup	$\perp \perp$	_		_	'		4	44	_	1	4
ļ	_						-		+	-	+	++	+	_	+			+	\sqcup	\perp	+	+	1. 1		\vdash	+	$\vdash \vdash$	+	-	-			+	<u> </u>		_	\perp	\perp	₽.	4	_	\perp	Ш	$\perp \! \! \perp$			\perp	-	\perp	 		1		1
	1,55				-	+		⊢∤-	+	H	+-	++					+ +		\vdash		\perp	_	+		-	+	\sqcup	+	-	-		44	_	\sqcup	-	_		1	1	<u> </u>		\perp	<u> </u>	\perp	_		_		$\perp \downarrow$	_	Ш			2
						+	-		+	+	+	+	+		-		Н	\bot	Н	+	\sqcup	-	\dashv		Н	1	₩						\perp	<u> </u>	$\bot \bot$	_	\sqcup	_				<u> </u>						<u> </u>	$\perp \perp$		\sqcup		1	1
	하					+			-	╀┼	_	++	+				Ш	-	Н	1	\perp	_	ļļ.				Ш	\perp	_ _	-			-							Ш								Ц.			\sqcup			1
_							+		\bot	Н		+		_	\perp	-	.	_	<u> </u>	-	\sqcup	1	\sqcup	\perp	\sqcup	\bot	-		_	_					1				Щ					Ш		$\downarrow \downarrow$				1				_1
		-					\downarrow			Ш	_		\perp	1			\sqcup		- -		<u> </u>	_ _				ļ.		11		<u> </u>		\sqcup			$\perp \downarrow$	1	11			Ш	1	1	Ш								1	1		4
'	体					-	-		• 7		_	2	4		$\perp \downarrow$	_	2	_	Ш	_			1		Ш	1	Ш	1				Ш											\vdash	\rightarrow		Ш			\rightarrow		2	1	29	85
	ļ	ナ				+	Ш	1	l 5	1	1 3	Ш	1	1	H			1	Ш	2		8	Ш		Ш	2 1	1	1	_ -	_						1			1		1	2	11		11 1			1	3 3	1 1	1	l .	6	83
		ナ	テ	一不		月			_	Ц	\perp	Ш					1		.						Щ																											1	1	3
		ケ :	ベーリ	一使	用堰	Q						Ш																																Π				1					П	1
Ì	部	ケズ	ナデ	- 使用	痕+ナラ	ř*								Ĺ		1								-								.}																						1
L		不	明	ーナ	7	7			1	lì										1																	П		П	П		Т		П		П								1
1	底	無言	整	一使用:	度+ナラ	ř†																									1					ŀ						П									П			1
1	部	無言	部 整	一使	用值	夏									\prod																					1	П				\top	П	1 1	\prod	1	\sqcap			11	1	\Box		$ \uparrow $	5
		計				2	4	3 3	3 19	14	7 23	15	3 2	6 2	1	1 2	21 1	1 3	2	2 5	2	4 44	2	1 2	1	5 1	6	5 6	9 2	2	1 1	1	2 1	1 1	1	6 1	1	1 1.	4 4	3	7 1	12	57 7	1 8	56 4	1	1 1	1 21	734	6 7	3 9	6	171	875
		位量体部。成部体部	位縁 体 部 底部 体 大自自自自へケケナナナ不自自ケ不不ナナナナケケ不無無	引 位 本 本 お 部 底 部 本 本 本 部 底 部 本 本 本 本 力 力 大 工 力 <td>引 位 本 上 内 ナ 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 上 上 <td< td=""><td> 位 内 力 力<td>位 本 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 自 会 か ナ カナ /td><td> A A A A A A A A A A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> 位 中で 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日</td><td> 位 か で で で で で で で で で</td><td> Table A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> (位 外 面一内 面 住住住住住 住 住 を を を を を を</td><td> (位 外 面 - 内 面 (4 c c c c c c c c c </td><td> か</td><td> か</td><td>## から</td><td>## A</td><td>が 面一内 面 住住住住 登 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受</td><td>## 付</td><td>##</td><td>が 高一内 面 住住住住壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗ります。 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 13 13 15 16 18 19 21 22 23 24 25 26 27 27 2</td><td>が 面一内 面 住住住住窓 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪</td><td> 放</td><td> 放布一内 高一内 信信性性性を整要を整要を整要を整要を整めています。 おおも自然相は、サデーサードでは、対象を表現を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を</td><td> M</td><td> The color</td><td>## The part of t</td><td> (本) 一面一内 面面 住住住住室を整整を整置を整めるを変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を</td><td>## A</td><td> か 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面</td><td>位 分</td><td> 佐 </td><td> 位 か 面 内 直 名 名 6 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 31 15 16 18 19 21 22 20 24 57 28 27 28 28 31 32 33 34 38 7 上土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土</td><td> 数</td><td> The part</td><td> Y</td><td> 佐井田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田</td><td> Y</td><td> The control of th</td><td>位 が</td><td>性性性性が悪い</td><td> 密</td><td> The property of the proper</td><td> 数字</td><td> ()</td><td> The part of the</td><td> ************************************</td><td> 「</td><td> 一</td><td> 一</td></td></td<></td>	引 位 本 上 内 ナ 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 点 上 上 上 <td< td=""><td> 位 内 力 力<td>位 本 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 自 会 か ナ カナ /td><td> A A A A A A A A A A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> 位 中で 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日</td><td> 位 か で で で で で で で で で</td><td> Table A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> (位 外 面一内 面 住住住住住 住 住 を を を を を を</td><td> (位 外 面 - 内 面 (4 c c c c c c c c c </td><td> か</td><td> か</td><td>## から</td><td>## A</td><td>が 面一内 面 住住住住 登 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受</td><td>## 付</td><td>##</td><td>が 高一内 面 住住住住壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗ります。 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 13 13 15 16 18 19 21 22 23 24 25 26 27 27 2</td><td>が 面一内 面 住住住住窓 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪</td><td> 放</td><td> 放布一内 高一内 信信性性性を整要を整要を整要を整要を整めています。 おおも自然相は、サデーサードでは、対象を表現を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を</td><td> M</td><td> The color</td><td>## The part of t</td><td> (本) 一面一内 面面 住住住住室を整整を整置を整めるを変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を</td><td>## A</td><td> か 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面</td><td>位 分</td><td> 佐 </td><td> 位 か 面 内 直 名 名 6 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 31 15 16 18 19 21 22 20 24 57 28 27 28 28 31 32 33 34 38 7 上土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土</td><td> 数</td><td> The part</td><td> Y</td><td> 佐井田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田</td><td> Y</td><td> The control of th</td><td>位 が</td><td>性性性性が悪い</td><td> 密</td><td> The property of the proper</td><td> 数字</td><td> ()</td><td> The part of the</td><td> ************************************</td><td> 「</td><td> 一</td><td> 一</td></td></td<>	 位 内 力 力<td>位 本 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 自 会 か ナ カナ /td><td> A A A A A A A A A A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> 位 中で 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日</td><td> 位 か で で で で で で で で で</td><td> Table A</td><td> Table A</td><td> A</td><td> (位 外 面一内 面 住住住住住 住 住 を を を を を を</td><td> (位 外 面 - 内 面 (4 c c c c c c c c c </td><td> か</td><td> か</td><td>## から</td><td>## A</td><td>が 面一内 面 住住住住 登 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受</td><td>## 付</td><td>##</td><td>が 高一内 面 住住住住壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗ります。 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 13 13 15 16 18 19 21 22 23 24 25 26 27 27 2</td><td>が 面一内 面 住住住住窓 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪</td><td> 放</td><td> 放布一内 高一内 信信性性性を整要を整要を整要を整要を整めています。 おおも自然相は、サデーサードでは、対象を表現を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を</td><td> M</td><td> The color</td><td>## The part of t</td><td> (本) 一面一内 面面 住住住住室を整整を整置を整めるを変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を</td><td>## A</td><td> か 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面</td><td>位 分</td><td> 佐 </td><td> 位 か 面 内 直 名 名 6 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 31 15 16 18 19 21 22 20 24 57 28 27 28 28 31 32 33 34 38 7 上土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土</td><td> 数</td><td> The part</td><td> Y</td><td> 佐井田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田</td><td> Y</td><td> The control of th</td><td>位 が</td><td>性性性性が悪い</td><td> 密</td><td> The property of the proper</td><td> 数字</td><td> ()</td><td> The part of the</td><td> ************************************</td><td> 「</td><td> 一</td><td> 一</td>	位 本 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 会 か ナ 自 自 自 会 か ナ カナ	A A A A A A A A A A	Table A	A	位 中で 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日本 日	位 か で で で で で で で で で	Table A	Table A	A	(位 外 面一内 面 住住住住住 住 住 を を を を を を	(位 外 面 - 内 面 (4 c c c c c c c c c	か	か	## から	## A	が 面一内 面 住住住住 登 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受 受	## 付	##	が 高一内 面 住住住住壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪壁を竪りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗りを乗ります。 1 1 2 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 13 13 15 16 18 19 21 22 23 24 25 26 27 27 2	が 面一内 面 住住住住窓 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪 竪	放	 放布一内 高一内 信信性性性を整要を整要を整要を整要を整めています。 おおも自然相は、サデーサードでは、対象を表現を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を変更を	M	The color	## The part of t	 (本) 一面一内 面面 住住住住室を整整を整置を整めるを変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を変換を	## A	 か 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面 内 面	位 分	佐	 位 か 面 内 直 名 名 6 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 31 15 16 18 19 21 22 20 24 57 28 27 28 28 31 32 33 34 38 7 上土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土土	数	The part	Y	 佐井田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田	Y	The control of th	位 が	性性性性が悪い	 密	The property of the proper	数字	 ()	The part of the	************************************	「	一	一